萬里閣喜房版

新選組始末記

3379

1733

5

MADE IN JAPAN

書評好房書閣里萬

後藤朝太郎著

支那行脚

文學博士

鳥居龍藏著

龍

藏

著

滿蒙の

法學博士

信夫惇平著

社東

伊東忠太著

後藤朝太郎著 阿

工學博士

黑 潮

恒敏

友郎

裝著

森生

田方

編聞

秘明

戊木

話治

片|C

阿後

片

集く室 笑査

物

二大外交の眞相

(第一卷) 現代金權史現代富豪論

太

山路愛山選集(第二卷) 豊

總布木版八度刷

四六版四七二頁箱入

總布表紙上 製

四六版五八〇頁箱入

定價 二九。

送料 四

定價 三･五0

送料 一六

烏冫 子 木 版 八度刷

四六版六四〇頁箱入

烏冫 子 木 版 八度刷

四六版四九六頁箱入

定價 二･九〇

涂料 一四

定價 二•五O

送料

四

定價 二八

送料 四

四六版六〇六頁箱入

鳥ノ子 木版 九度刷

四六版五八〇頁箱入

鳥丿子 版 書 #刷

四六版三五七頁箱入

定價 三〇0

送料 四

定價 二〇〇0

送料

111

總クロース金文字入

四六版五二八頁箱入

背皮夕口丨ヌ 金文字入

定價 二〇〇0

送料

111

定價各册

111.00

四六版 七三〇 箱入

(第三卷) 孔 子 論 *那思想史

送料 二〇

1-73

HO

和

111

入

月

五

日

年八

月

日

昭和三年八月五*

日再版

丘頭

新選組始末記 附

定價

11

版 不

權 許:

所 復
有製
房書閣里萬
發行所
發行者
印刷所
市日本橋區元大工町十二
者
小
子
每
小
澤
東京市外大森新井宿子母澤一016
博
振替座東京七乜if cmT 萬里
竹
眞 堂 印
閣

房

刷

即

書

製本所 龍 野守

1

所

1

圓

一九4

購决。

記末始俎選新

433

いたばし

こんどういきみ ひぢかたとしぞうのはか

めいち

ぐわつにち

なが

板橋の碑は、近藤勇、土方歳三之墓となつてゐるが、これは明治九年五月一日、永

新ん

こととうじ あらた

こんどう

かんけいふか まつもとじゅんし

こう もと

こんりふ

事當時改めて杉村義衛翁 近藤とは關係深い松本順氏の揮毫を求めて建立したも

ので、右側に戦死者の氏名四十名、左側に病死、腹、繊死、法令違濺でされた者六

めい

十四名の名が刻んである。

*

とうけふふか みなみだま つりなゝうむらあざたかはた たかはたさんこんごうじ

けいだい

こんどういさみ ひぢかたとしぞう

更らに東京府下南多摩郡七生村字高幡、高幡山金剛寺の境内に、近藤勇、土方歳三、

「耐雄節之碑」がある。明治九年四月の建立。松平舊會津の額で、日野の佐藤彦

じっていかすや うにゆん こんどうゆう らう

しよし

ほね

に

五郎、土方の實弟粕谷良循,近藤勇五郎(勇次郎とある)の諸氏が骨を折って建てたもの

である。

I

完

で明治九年四月に出来たものである。

この境内に近藤土方殉節の碑がある。松平容保の篆額、松本順の書

殉節兩雄之碑 玉南電車の高幡で降りるとすぐ前が高幡山金剛寺。

龍寺提善の原石上鄉故はつ一眞寫のごろあに橋板はつーるおつ二は墓の勇 墓の方土 藤近

月五年九治明が八新倉永の志同ばれこ ろあで方の鄉故はのろゐてつま埋の屍のもろおに寺源

に共と三藏方土に地の死刑てめ求を亳揮の (男) 氏順本松監總醫軍のらか係はと勇日

源龍ろゐてつなと 「昌宜」に對反かけわたしうどがのな 「宜昌」勇藤近ろあでのもたて建で味意の

ろあでのもなかや、さく極たてたでん忍を間世頃のそは墓の寺

六六勇

の

墓

こんどういさみ ほか

しょ

かみいしはら

りゅうけんじ

近藤勇の墓は三ヶ所にある。一つは上石原の龍源寺、これは屍を埋めたところ。一つ

とうふしぐわいたき がほじゆとくじ かんり

いたばしえきうら

どうよ

せきひ

さいしょ いきみかばね う

は東京市外瀧の川壽徳寺管理の板橋裏の一丈餘の石碑、これは最初に男の屍を埋めた

はしょ

もの

かね う

すなわ くびき

あひづわかまつ あたご やま ちうふく

したい

ところ、即ち首斬りの場所、一つは會津若松の愛宕山の中腹にある。これは屍その物と

は豫故はない筈で、土方歳三が流山から津軍に加はつてゐたから、俺かそのあたりの事

ぼひ

じよう た

情で建てたものであらう。墓碑に

「貫天院殿純義誠忠大居士

名の上には丸に三ッ卵の定が刻んである、津にてつけた名である。

記末始粗選新

431

み

脱走方戦死するもの五十三名、深手選手に到っては蛇を知らない。官軍も赤た二百名

せんぱつしや いだ

かいやうまる

ひ

もうしゃ こう がた

からう

まあひ のが

餘の戦没者を出したが、開陽丸は遂に猛射に抗し難くなつて、辛じて沖合に逃れ出た。

甲板に血は漂び、威うづ高く、飛散してその惨状筆紙に霊くし難いものがあつた。

430

既末始粗選新

ひんひま

ま

ので舷々相摩すを待つて

しんせんぐみのむらり

らう はんの

『新選組野村利三郎一番乗り」

こゑ

と、大きな降で名乗りを上げて、鐵艦へ飛込んだのは、瀧山で、近藤とれたの小

姓の一人であつた。

ゆうきたいし

にん とびこ

きりあひ

こうてつ かいやう

けん

ま

ついて遊撃隊士六人も飛込み、熟しい斬合をしてゐる中に、甲と開陽が三十間ば

かり離れて終った。土方は機闘士をまして、近せよと云ふが、艦はなか思

ふやうに行かない。野村は斬り立て斬り立てい働きであったが、邃に天井から槍

うちに

うち

かんぐん

ふれ ようや じょうき

突かれ、他の六士と共に悲壮なる討死をして果てた。

その中に、官軍の艦も漸く蒸氣が起きたので、逆に開陽丸を取團んで、四方八方から

猛城をはじめ、彼我地位を転じ、甲賀提督はに蟻の巣の如くに射ち焚かれて戦死した。

ぎやくかいやうまる

とりかこ

ふ

末始組選新

うち

せいろい

めい

せんぱつ

かいやうまる のりく

ほか

かく

いづ

めいぼんりゆう

の中から精鋭六百名を選抜してこれを開陽丸に乗組ませ、外に各二百名宛四百名を幡龍

そう

ははんしゅつしん けっぶっこうが けんこ

ていとく

けつし

かくこ

もつ はこだて

はっぺう

藩出身の傑物甲賀源吾を提督として決死の覺悟を以て函館を抜錨

した。

ち ふつふ

だいぼうふうう

そう

ふきなが

がた かいよう

1日の拂から大暴風雨。この二艘は三方に吹流されたが、 廿四日の明け方に開陽

丸は土方の戦によるメリケンの旗を揚げたまい、自然に宮古湾へ流れ込むやうな事

になった。

こうてつせん

ぐんかん

まも

どうぐ

はつけん

ひぢかた

て

甲鐵艦が、十三艘の軍艦に守られて堂々としてゐるのを発見して、土方は手を打つて

よろこ

きか

じょうき

しゃ

ຝ

もうしん

うち こうてつかん

喜び、盛んに蒸気を焚かせて、遮二無二猛進し、あれよくといふ中に甲鐵艦の六七間

まちか

せうとつ

たちま

の眞近まで進んで、あはや衝突といふ瞬間、忽ちメリケンの旗を下ろし、日の丸の焼

を掲げると同時に、廿六の砲門を一部に開いて不意撃を喰はせた。

し

こうてつかん

こと ゆめ

かんじん

ぜうき

甲鐵艦をはじめ、そんな事は夢にも知らなかったので、肝心の蒸氣が焚いてない。そ

れっといつて騒いだが間に合はない。 開陽丸は甲艦よりは、七八八ばかり艦が高い

名艦はめじはてゐてつなにうやの詞名有間がれそてつ従 艦甲の艘一だたに本日時當 艦鐵甲

方にめたいた得を艘一のこがたし出乗を川品はに手戰待日りなと艦東に後 たつかなは

たじ演を戰血大の灣古宮部南てけか出らか舘画ざわざわが三

428

末始組選新

しかし、歳三は、その死に先立つて、わが海賊史上、

前後にないだらうと云はれ

なんぶ みやこわん

ゆきせん

かんぐん

ぐわつかふらんす

かいい

ゆんめい

ふん

ねん

る、南部宮古灣の激戦なるものを演じた、官軍が四年四月二日佛蘭西から買入れた原名

こう こうてつかん せう

ことはなはだ

せんとう

ストンウォール號、甲鐵艦と稱して恐れる事甚しいものがあつたが、これを先頭とし

そう ぐんかん

はこだて

ふうへうしき

なんぶ みやこ わんまでお

めいち

十三艘の軍艦を以て、函館を襲の風評頻りで、南部の宮古灣押して来たのが明治

ねん

ぐわつ

の

あづまかん

につしんせんそう とき

しながのりだ おづき

二年の三月。ストンウォールは後ろに東艦となつて、日清戦争の時には、「品川乗出す東

うた

艦」と歌にまでなった當時唯一の精鋭で、これを手に入れると、だれないので、海賊の

恕は、戦ばずして解ると云はれてゐた位だ。

*

はこだてどん

ちどう せきぜう

のつと

りきせつ

ぐわつ

にち ゆうこく はこだてだつそうへい

土方は函館全軍大評定の席上、この乗取りを力説し、四月廿一日の夕刻、函館脱走兵

末始粗選新

427

六五宮

宮

迎

いさみ

得ない」

五歳三は、男の捕へられると共に、霧がに心を脱し、津に走り、更らに函館

へ行って、榎本武揚の幕下に参じ、陸軍奉行となったが、武揚の人となりを察し、

には官軍と和する事を豫知して極度に悲観し、合戦の度に、自から危地に比して死を

希ふ風であつたが、暁治二年五月十一日の激戦で馬上に賞つて戦死した。年卅五、

としした

つね どうれう かた

勇より一つの年下である。 常に同僚に語って

「我が輩は死遅くれた、若し魏軍官邸と和する事あれば、地下に近藤と相見ゆるを

といつてゐたといふ。

たいま

だいじ

りゆうけんじ

たかむらおさわ

こんどういきみのはか

すなは

只今、菩提寺の龍源寺三鷹村大澤にあります「近藤勇之墓」といふ小さな石碑が即ち

しかばね うへ

はか

その屍の上へ建てた墓でございます(近藤勇五郎翁談)

いきみ くび

たちとり

をかたはんずい

けんきやく

しはんやく

よこくらき そうじ

ひと

いふ人であつた。

勇の首を落した太刀取は、岡田藩随一の剣客で、藩の師範役をしてゐた横倉喜惣次と

首はそのまとして京都へり、三條にした上、更に大阪千日前にも戦し

たが、後ち粟田口の邢場に埋めた。男の年卅五。その首を晒した時は、忙しろ京の街々

では鳴らした人物であり、見知りのパも多いので、日々黒山のやうなんだかりであ

つた。

末始組新

425

つやくかい

あひな

401

ぶんけ

にぐるま

わたし

+

それが濟むと「なが御厄介に相成った」といふ聲がはつきり聞えました。刀を持

つて後ろに立つてゐる首斬りの武士は、少し痩せぎしな四十一二歳位の人で、父が、

もとりを自分でこう前のだへもち上げると、やがてひかりとしたやうに思ひまし

までみ

もくさん

たが私はこ」見て、一目散に駆け出しました。

それから五里餘りの道を飛ぶやうにして上石原へ戻って、一局アき悲しんだので

もの

しがい

すが、親の者などもやって来て、さて死骸をあのま」あんなところへ埋めて置

くのは可認そうだ、こりゃ何んとかして手に入れて、こちらの方へりたいといろい

かめ

[illegible]

わたし

けんじ

ろ相談の結果、それから三日目の夜に、私をはじめとして、兄の源次郎(昔五郎の子)

みやかはや

こくぶんじ

しるこやなぎなほう えもん

にん ち

分家の宮川彌七(新選組討死者宮川信吉の兄) 國分寺の親類小柳直右衛門の三人で父の死

かじん てらすじらう

かた

を貰ひに行つたのです。これは田安家の家臣で寺尾安郎といふ方の取做しです。

番人に金を五十両程やりまして漸ぐ首のない男の魔を堀りだし、これを榴羅に入れ、

うち もど

荷車で夜の中に戻って来ました。

かたなも

421

末始粗選新

し

ちょくかん

私は、はア父がやられるなと直感しまして、あの姿をうろくしてみますと丁度整

頃に山麓が一つ出て来ました。驚の前後を卅名許りの鐵砲隊が厳重に守って、隊長ら

しいのが一人騎馬でついてみます。腕をどきさせて麓のをよく見ると、正しく

父の男に相違ない。ひけが少し延びて、いくらかいになつてゐますが、思った

よりは元氣で、黒の統你歳に麟ののあたりに紙の目のやうに艦がか」つて

ゐたやうに思ひます。

こうしんづか

くぬぎはやしよこ

ばら

その麓にどんついて行くと、庚申縁のある林の横の原っぱのところで、もうち

やんと穴がつてあって新しい嘘が敷いてありました。こ」で驚が止まつて父はか

に下りましたが、遊の上に突立つて、瀧のところへ手をやつて、しばらく江戸の空を

見てみました。どうしたか素足だったことをよく鍛えてみます。

にか二言三言傍の武士に話してみましたが、少しすると大急ぎでが人足らしいが

道具箱を下げて飛んで来て、共首の敵のところで、父は月代からひげを剃らせました

てうど ひる

末始粗選新

423

六四最後の

けいおう

ねん

慶應四年四月廿五日。當時十八歳の勇五郎は、男の爽つねに云ひつけられて、松橋へ

の安否をたづねに行つた。その前にも三四行つては見たのだが、どうも眼屋場にゐ

ている

こと

らしいといふ程度の事よりわからなかった。

この日は、夜中遊が降りた後の晴れ上がりで、歩くとすぐ飛が出る位に

暖かい日であつた。霞い空が何度迄もつじいて、武蔵野らしい草の香が流れてゐたとい

ふ。問屋場へ行くと

はたちと

「今日は本が斬られる」

といふ嘘を耳にした。

422

末始粗選新

一片丹衷能殉節、

孤軍援絕作浮四、 顧念君恩涙更流、

睢陽千古是吾儔、

齬他今日復何言、

快受靈光三尺劍、

取義捨生吾所尊、

只將一死報君恩、

四月四

日

こんどううじ

こゑ

めいち

て、「珍らしや近藤氏』 と聲をかけた。

ねん ぐわつ

にちかのふみもひろおう

明治卅四年四月十三日加納通廣翁(道之助雕雄)遺談

だん

こんどう

きふう

く下見をしてから行けと云って障子の穴から見ると近藤である、それから双刀を取

らうおよびれうにん

上げて置くからってくれといふ事で、座敷へ調役平田九十郎及兩人(加納氏及び武

こゑか

じんぶつ

そのざしき ・しらべやくひらた

ちい

おほくぼやまと

あらた

こんどう いさみ

こんどう

じつ

川氏) 立入り、大久保大和、改めて近藤勇と、懸けますと、近藤は實にエライ人物

でありましたが、時の色は今に目に叩く様で、恐怖の姿でありました。

めしと

けふと

こと

せんぎかは

いたばし

さようずみ

それで召捕つて京都へ送る事になりましたが、詮議りて板橋に於て御用濟となりま

した。

ぐわつか

じせい

れうし

かいちう

月四日、辭世の二時を賦し、これを料紙に認めて懐中した。

近藤勇はやがて橋の問屋場へ入れられた。すでに悟はしてある、捕へられた翌四

鄙末始齟纓新

いたし

煙草、茶湯などを驚かれた。「大久保氏は参謀が御目にかいる筈ぢやが只今橋

の本にゐるによつて今から御をひたい、當よりは上田橋なる者1名と

してずにより御用の折は遠慮なく観申付願びたい」昨夜の情けなく、御

情深い絆”を受けて入る」そういつて、だが、時計、などを差したが、

小だけは上町が残り、他は自由にし、壁の本管から間道を通って板橋の本管に送ら

どうはん

ちち まさはる さんぽう

せた。板橋には同藩の伊知地正治が参謀として控へてゐる

ひか

だい

らう

小二郎といふのは、相馬芸計(肇ともいふ、御府内浪人) 野村利三郎(大阪浪人)

*

いたばし

ほんえい

とりしら

さい

こんどう あくまでほくば やまと

あぶらこちじ

板橋の本での取調べに際し、近藤は飽迄大久保大和である旨を辯じたが、油小路事

糀の時に、九死に一生を得て免れた加納道之助雑が、恰度この手の官軍に加はつて

記末始粗選新

であつた。

どひきこ

近藤の本庫へ行くと「これは」と驚いて出て来たのは、白を振ってやつ

てた壮士で、間もなく近藤が「いやこれはどうも」といつてのつこり出て来た。今

官軍に降伏するといふやうなせつぱ詰まった場合なのに悠然として少しもに氣も

なく落つきを見せてゐる。

こんど

また一度引込んで今度はちゃんと統で威儀を正しうして示を二人つれて出て来

いた

「お待たせ致しました」と者に一しながら、小畑へ記念の爲めピストル・

書籍などを分け興へた。その小姓が醸造御供をしたいといふのを近藤は「いや成ら

ぬ」といつたが拙者が許して、近藤も馬、者も馬でその次に従って本を出た。

姪は両方から近藤の馬の轡をとつてゐる。璧へついたのは何んでも夜の十二時前後

こんどう

翌朝、眼をさますと、本唇の前に縄張りの駕籠が一匹。これは香川の仕事だが、「近藤

ぐん たいせう

し

みち

せつしや

つな の

は一軍の大将だ、士を遇する道を知らんな」といつて、拙者は腹を立て網を除かせ、

うち

そうし

はくじん

ふりまわ

とこい

始したが、その中に二人の壮士が白刃をくるくると振廻して、一人の男を護衛しなが

せつしや はつほう めい

めんぜんまでく

かにな きや

れいぎたと

らやつて来る。拙者は強砲を命せずに置くと、面前迄来ると、刀を鞘に収めて禮儀正

なにもの

おほくぼやまと

なふだ

に

しく進んで来た「何者だ」と問ひかけると大久保大和とかいった名札を出した、これ

こんとういきみ

こんてふら

やけき

まち

かんぐん

わか

せつしや

はじ

近藤勇だ「今朝來射撃を交へましたが菊の御旗を見て始めて官軍と分りました、恐

おうぐんりつ

たど

あひな

かすかべまでどうこう

れ入りました」とこういつた「就ては一軍律によつて乳さねば相成らぬ粕壁迄同行

されたい」それで彼は二つ事で承諾し、始末をつけてひするといふ約束にな

つての二人の壮士をつれて戻って行った。その格好が少しもあはてた様子がな

さすが

りつは

く流石に立派なものであつた。

ゆうがたじろ

ほう

もん

そうじょう

てう

と。

こんどう

ところが夕方四時頃になつて砲三門と小銃三百挺(ミニンヘル銃)が届いたが近藤はや

つて来ない。御旗(参謀でも何んでもない)をやつてゐる香川三がやいやい云ふの

あしがる さかもと

おばん へいたい めい

で拙者は止むを得んから足輕の坂本十郎と忍藩の兵隊五名をつれたきりで、 流山へ乗

ながれやまのり

込んで行った、もう日暮れであつた。

ひちかた は

こ えいせうでんながれやま

それでも土方に励まされ孤影悄然流山へ行つた男には相當の覺悟もあつたが、落目に

きふとう

かくさ

おち

だめ

かんぐん

はちく いまひ

こうづけしもつけ しょはん したが

ぶしうくまがや

なればもう駄目である。官軍は破竹の勢を以て、上野下野の諸藩をへ、武州熊谷か

いたし

4

ぐわつ

にち

せんほうたい こし

f

しもふさ

はい

板橋へ出て来たのは三月の十三日。更らに先鋒隊は越ヶ谷千住から下線へ入らうとし

七

さくらまつきか

てゐる。江戸は櫻が眞盛りである。

ぐわつはい

きつばん ありまとうた

ひこね

かすかべ

しん

ながれやまで

四月に入ると、薩藩の有馬藤太(東海道總督府副参謀)が彦根の兵三百をつれて粕壁に進

戦し、てんで一泊。四月三日の狒麗、午前四時といふのに、こから道を折って、突然

いさみ いぜんおほくぼ やまと

そう

へいしんでん とむろ

流山へ出て来た。男は依然大久保大和と稱して、五平新田に屯してゐる。

たいせう

ねん おりますみ

だん

大正十二年、有馬純雄翁(七)談(當時の有馬藤太)

こん

やまゃんらく

ほう

てき

じゃま

兵を悉く散開して、 流山村落をぐるりと包圍してゐると、敵はパチと射擊を開

守谷らか面正ろことたへ控を澤賴神に前 東の山尾柏は陣本の勇藤近尾柏州甲場戰奮の後最

たつかめ攻が百五兵の州因州土隊一の (城干) 部

416

末始粗選

*三 下 總流山

まつた

ぐわかい

ぐわつ

さいきよ

しもふさながれやまで

新選組も全くばらくに正解した。三月になつて再擧を期して、下総流山へ出かけ、

ふらう

し

めいはか

あつ

とんえい

ちからたの もの ひじかた ほか

こと

ゆきろん

とき

浮浪の士百二十名許りを集めて營した時には、もう力と頼む者は土方の外になくなつ

いさみ た

しんめい こうもう

おまだ そうじ

あさくさいま

まんけいだい まつもと

てゐた。男の爲めには身命を鴻毛のに比した沖田司は、浅草今戸八幡境内の松本

良”の私邸で、持病の臓病で死んだし、副長助勤の原田左之助も甲州戦の鐵砲傷が化

殿して、本所猿江町神保伯耆守邸内で死んだ。永倉新八も和泉橋の醫學所で、管津行の

こんどう

きみがた どう せつしゃ かしん

あいづ

まい

事で激論の上、近藤が「貴下方一同が拙者の家臣となるならば會津へ參つてもよろしい」

といつたのに慨し「同志ではあるが家ではない、二君に出へる位ならばこの苦労は

いた

ものわか

しま

致さぬ」と、そのまゝ物別れになつて終った。

肥末始粗選新

415

三 百 兩 卄騎相渡

同同同

同

近藤の家族に対する手常である、はじめ牛込甘崎町に住んでゐたので俗に自宅の事を

自宅の事な

時々々といつてゐた

五拾兩

宮川神前

三拾五

兩 沖田渡

兩 忠助妻

さいご

もうすけ

つま

ちうすけ こんどういきみはてい

はまぐりご もん

ふしみとは

いくさ

最後に忠助の妻とあるその忠助は近藤勇の馬丁で、

蛤御門の樹から伏見鳥羽の戰な

せんどう おうらい

つね

うすけ くつわ

はだが

とも ぐんもう は

今は ありさま

戦場の往来には常に忠助が轡をとつた。眞ッ裸の

馬と共に軍中を馳け廻る有様は、

てきみかだ

をどろ

けふとうま

いきみしさ

ひちかたとしぞう はてい

敵味方の目を驚かしたものである。京都生れであるが、死後は、土方歳三の馬丁とな

縁に函館迄ついて行つた。

この金銭入帳は、言はずして多くの物語を示してくれる。近藤が横濱出張に際し

て五拾雨を取出したが、昨日、その使ひ残り参拾八兩を會計方へ返納したところなど、

けつべき

おもしろ

の一種の潔癖が忍ばれて面白いものがある。

つか

414

末始粗選新

同同同

同同同同

五五

兩

諸拂、土方渡

五兩一分二朱

硯、小物、潮物

廿七日 三 百 廿兩

廿八日 五 拾兩

橫濱在留之者相渡、同志十六人、局長付六人、人夫四人

先生橫濱行持參

(内三十八兩歸5)

二 月 十三日 五拾兩

先生出

百六拾四兩壹分

一同手宛相渡

十五日 六 拾 四兩 病院詰

十四 兩 一同手當

(大阪からつて砲傷などのため横濱等の病院へ入院してゐる隊士があつた)

廿六日 七 兩 二分

馬代

+

兩

馬代

廿八日 五百九十五兩

四十九人、廿一人、甲州手宛

記末始粗選新

413

大阪にて

五百四

拾拾

四拾 五兩

兩兩兩兩

山崎蒸

山崎、吉村伏見行動相

先生下阪付山崎二相

十二月廿八日 百八拾五兩 伏見仁一同被下

正 月 十八日 五百八拾五兩

品川宿二分局中一同被下卅九入

同同

二百四拾兩

局長付廿四人被下

十五日 百

横濱病人手當、島田預夕置候

品川にて

中

同

同

同

兩兩兩兩兩

十八日 貳 拾 五兩

廿二日 三 拾 五兩

廿三日 廿 五 兩

大工仙藏渡候

土方買物拂

土方戎屋拂

大工仙藏相渡

大工仙藏への支拂は何のためであるかわからない)

412

記未始粗選新

同同同

日

十二月八 日 四

11

千

兩兩

江月1

會my受取

大阪山中組合十家my受取

(帳簿付落を發見し、後に書いたものやうである)

二 月 三日 111 百 兩 御城二ㄕ設樂殿...

廿七日 二千三百九十四兩一朱 御城ニ受取

廿九日 千 二 百兩 より

三 千 兩 松本順より

(廿七日以降の金は甲州行の準備金で松本よりのものは幕府の支出である

出 之 部

十二月二 日 一兩 二分 土方劍術小手一

日

拾

兩 吉村貫一郎着込分

未始粗選新

411

同同

同

十一日 六 百

兵衛の何人であるかは判明しない)

十二月五 日 千

右同人

日 四百兩

同

同

同

同同

兩兩兩兩

會、大竹田y受取

my受取

小堀數馬受取

宮川紀州ヨy

正月七

#

十三日 二 千兩

(小堀氏會津藩公用人)

(宮川信吉が三浦久太郎を守護して死んだために葬料と思はる)

兩 會日先生見舞

墨染で原等に戦砲でやられた時の近藤への食津よりの見舞金・

日

五

兩 大阪城受取

百二百

四千二百兩

組方my受取

二 百 兩 大阪二先生受取

410

末始粗選新

*二 金錢出入帳

鄭七三十一月十四日以来、江戸へ揚げて甲州へ比する三月迄の新選組の主なる

きんせん

でいりちよう

老

いけいかに

きろく

おも

同同

金錢の出入帳がある。恐らくは會計方の記録と思はれる。(宮川隆司氏所蔵)

入の部

十一月十四日 - 六十三兩二分 十一月分一同借財

十九日 二 十兩 會明、四人葬式手當受取

(油小路で暗殺した伊東甲子太郎一味四名の葬式代を會津侯から受取つたもの)

廿三日 三

111

1)

兩 東一件持合之入

百 兩 杢兵衛受取

のち わたし

かんぐん のりこ

まい

わたしこ みやびら

その爲めに後に私のところなどにも官軍が乘込んで參りました。私は小宮村へ逃げ

とら

やま なか

にしたま

ほく

て、壊れか」つた山の中の家にかくれてゐましたが邃々捕へられて、西多摩の大久

やなせ

ほんじん

いたがきたいすけ たいせう

の柳瀬屋といふ本陣で調べられました。板垣退助が大将だつたそうですが、ど

しら

やくにん

どこ

にんけん

ことは

とうぺん

うもその調べる役人といふのが、何處の人間かひどいわからない言葉で、 この答辯

かめ

くび

ゆる

かたな とりあ

には困りました。三日目に首も斬られずに許されましたが、持つてゐた刀は取上げ

られて終ひました。

ITO

こと

ひだかたとしぞう 者

あやすつぐ

後でこの事を土方歳三が聞いて、私に刀を届けてくれました、 それは青江康次で二

しゃくすん

ひらかた わたしども

しんるる

とこぶ

た。(日野宿、佐藤俊宜翁談)

こうしうゆき

尺二寸あります。 土方は私共とは親類であります。 なかなかい」男振りでしたがど

うも少し構式ばったところがあつて、考え深い爲めか、繰り笑顔もしなかつたので

たちよ

さい

どうもん もんてい

いんしょう

こんどう

甲州行に立寄った際も、同門の門弟などの印象は、近藤のやうには行きませんでし

へん

けんじつ

そこへ、この邊(多摩地方)で剣術を教はつた若い者達、みんな百姓ですが、どん

ものたち

そう

やって来て、墓所の土間に五六十一ぱいになつて「是非先生のお顔を押したい」

こんどう ひどう よろこ

こゑ お

ました。

といふのです。これを告げると、近藤は非常に喜んで、十七八になる若いに

しょくん

どうぶ

せつこう

を持たせて出て来て『やア、諸君もお丈夫で結構です。どうぞおからだを大切にし

て下さい』と、江戸にゐた時とは少しもらぬ調子で話したので、門弟達は喜んで、

な

聲を上げて泣きました。

もん

はいりよう

おも

近藤の織の彼は、小さな三つ楽器で五ところでした。拝領のものと思ひました。

門弟達がみんなお供をしたいと云ひましたが、近藤は承知しませんで「まだ~

諸君のする事は外に澤山あります、お""はうれしいが僕は許されません」と云ひ

それでもなか眠れませんので私の父が春日線といふのをこしらべまして、左

めい

よう

おほつきまでい

へうりようかた

様三十名ばかりのものです。 大月迄行つてこ」で兵糧方をやりました。

たいせつ

未始粗選新

497

男が甲州へ行く時に、獣人であり義兄である日野宿の佐藤彦五郎を訪れた。

じぶん

どうよう

まぐ

からうま

へると男は、駕籠から降りて、自分の前に乗用とする馬具をおいた窓馬一頭、後ろに

は駕を釣られ、白緒の草履をはき、黒の丸が織(朧織ではなかつた)をきて々として

歩いて来る。今の佐藤俊宣翁が、父の彦五郎と共に、玄闘式まで出迎へてゐると、

み

ひどう

まし

どうぶ

いさみ

せんさう

ようす

勇はいつものやうに、いま戦争に行くといふやうな様子も見せず、非常ににこくして

実践を見せながら門を入ってて、一番先きに使宣鏡(當時十九才)へ

こえ

「やア、お丈夫ですな」

どうき けん

と聲をかけ、上機嫌で奥へ入った。

日野宿へは泊りませんでしたが、すぐにお酒になつて、京都の勇ましい話がはじま

いけだ や

つか

こてつ かたな

は

りました。池田屋で使った虎の刀が、殆んどはこほれて低くなくなったが、そ

のま~すらりとへだつた、麗にいいだったといつて褒めてみました。

へいたい

その上、夜會津の兵が来るといつたのも嘘としたものだから、兵隊は怒る、

しぶくれうじうぶん

たつそう

こぼとけとう はふ

しま

か

せつふく

食糧も充分に行かない、どん(脱走して小佛峠の方へ行つて終ふ、いくら説服しても

耳も借さない。

おまけに、いざ戦争となると、恋から味方の方へひどい風が吹いて、一寸先きが嘘の

爲めに見えないといふ有様。等々木、机尾、鶴背、平石の各地の戦い”悉く疲れ、子

歳で一蹴しやうとしたがそれも駄目で、四日に脇沼について、一時おいて六郎、ち

りばらになって江戸へ逃げた。

せんきうちう こんどう

しろはま

A/

くさりかたびらき

しやくすんむねさだ かたかき

ま

戰争中、近藤は、白鉢巻に鎖帷子を着て、二尺八寸宗貞の刀で斬り捲くつた。

記末始粗選新

405

かた

方は馬を飛ばせて、神奈川方面にある旗本の一隊茶葉隊なるものを郯へに行った。これ

たいし ことごと あをいろ

あだな

はたもとたい

は隊士悉く青色の羽織を着てゐるのでこの名がついたが堂々たる旗本隊である。 う

ぬいく

けつきよく

まく行けば千六百名來るが、これも結局うまくは行かなかつた。

その夜は、二戦を高纂に構え、農民を集めてを愛し、盛んに山の中腹や街道

などに積み上げて焚き、かぐり火として盛んに献に示威運動を行ったが駄目。

＊

よくじつ

て

こうしうぜう

はい

いくらともみきょう

ししゃ

いだ

ふくふ

こうしう

翌日は手をへて、すでに甲州城へ入つてゐる岩倉具視卿へ使者を出し、「幕府の甲州

ちんぶ たいちようおはくぼ やまと ごう

きんせつ うへまうし

ましい

かんぐん

鎮撫隊長大久保大和剛である。御面接の上申上げたい儀が御座る」と申入れたが、官軍

ごあいさつ

てっぽう

いた

へんじ

あひて

ごろ

いきみ とくがはけ

こうしん

は『御挨拶は鐵砲で致す』と返事をして相手にもしない。その頃、勇は徳川家の功臣に

な

おほくぼやまと

そう

ひだか

ないとうはいと

なぞらへ名を大久保大和と稱し、土方もまた内藤隼人といつてゐた
。

404

末始組選新

鎮撫隊第1日の涙りは新宿の遊女屋全部を切った。穴の日から甲州街道をほつ

進む。男の比生地上石願も、七の石田村も街道館である。云は、多摩の壮士が大名に

かんけいまにかんけい と

の

とま

かつぬま

なつたのだから、歡迎又歡迎、泊まつては飲み飲んでは泊り、四日目に勝沼の宿へ先鋒

うすう きはたい

の少の騎馬隊がついて見ると、さ、東海、北陸の三道からの御を把

うしほごと

かんぐん

た

てんこ

立て、ドンドンピーヤラピーと潮の如くに進んで来てゐる、だんぶくろ官軍、東山道

先鋒枝隊三千名は、土佐の乾(板垣退助につれられて、一足違びに、三日夜すでに明

しかた

いさみ たいし

けつそく

州城へだつてゐる。あはてたところでもう仕方がない。男は隊士の結束を説いて、一

めい

とうさんどう

おう

だっそうまただつそう そうみんわづ

呼をしてみると、いつの間にか脱走又脱走、総員僅かに百廿一名に減つてゐた。

さすが

いさみ へいこう

ながくら

はらだ

ふく

あひづぐん

えんきようまでゑんへい

流石の勇も閉口して、永倉と原田へ旨を含め「會津軍が三百名、もう猿橋迄援兵とし

うきうてう

はづ

でたらめ

たいないせんでん

はふひち

てやつて来た、明早朝には着く筈だから』と頻りに出駄目な對内宣傳をやり、一方土

こんどうゆう

らうおう

だんさえもん たんめんくわい

たど、後ちに近藤勇五郎翁が、 圏左衛門と度々面したが、團左衛門は大笑して、

こんどうせんせい てんか

もら やくそく

『近藤先生が天下をとったら那須野ヶ原を貰う約束でしたがなァ」

こと

きみこうぎてあて ほかじよう

だんざえもん

きんす

といつてゐたとの事である。男は公議手當の外自用として團左衛門から金子千両を借り

しゅつぽつ

て出發した。(勇五郎翁談)

こうしろゆ

ぜんじつ

くみ そうくわい ひら

だんざえもん たいせ

かって

せきぜうこんどう ぜうきげん

じつ

しょうぐんけ さない

この甲州行きの前日に、組の總會を開いたが席上近藤は上機嫌で「實は将軍家の御内

「意であるが」といつて、もし甲州城を希望通り手に入れたら、甲州百萬石はわれ

の

勝手に出来る、先づ拙者が十萬石、土方は五萬石、沖田永倉原田等の助勤は三萬石、大

でき

せつしや

まんさく

ひらかた

まんごく おきだ ながくらはらだ とう ぢよきん

まんさく

いとうしらべやくまんごく ごちょうきふ

ごく

ひらどうしかく

さく ゆめ

はなし

石等調役一萬石、伍長級五千石、平同士各一千石と夢のやうな話をした。

末始粗選新

こう

よめい

合の夢のみ二百餘名を引いた。

あさくさしんち だんざえもんあらた やしまないき

てした だいぶぶん

この鳥舍の中には、有名な浅草新町の團左衛門改め矢島内記の手下が大部分を占めて

ゐた。この既左衛門の一言は、直ちに全國+のバ々を動かし得たので、薩摩がこれに

はや

ぶし

とりた

ふうぶん

てんいのかみまつもりようじゅん

みづ

目をつけ、早くも武士に取立てやうとしてゐる風聞を耳にし、典醫頭松本良順

自

だんざえもん ぺうきちう しゅつちよう

かく とりあつか

かんきふ

うへ

20

から圏左衛門の病気治療に出張し、その破格の取扱ひに感泣せしめた上、御目見得以

どう

めしいだ

ごしょいんはん

だんぎもん きんす

まんれう

上に召され、御書院番に列せられる手続きをとつたので、團左衛門は金子登萬兩を献

ていた

めい さしいだ

ふらんすしき きようれんう

こうりうちんぶたい

上、手下二百名を差出して佛蘭西式の教練を受けさせ、これが甲州鎮撫隊に加はつ

たのである。(永倉翁遺談)

だんざえもん けん

こんどういきみかんけい

じ すん

もの

けんしぜう

たいせつ

けんきゅ

このさい

うさい

かた

さ

こと

權史上にも大切な研究であるが、此際はその詳細を語るを避ける事とする。

この團左衛門一件に端なくも近藤勇が關係し、しかもこの事件その物は、わが國の民

・記末始組選新

401

*1 甲州鎮撫

新選組が名を改めて甲州鎮撫隊となり、甲州城乘取りのために江戸をしたのが、

けいおう ねん ぐわつにち こんどう わかとしよりかく ひぢかた

ち慶應四年三月一日。近藤は若年寄格、土方は寄席といふ素らしい身の上になつ

おも

いく

たがひぶしうたまごうり

もう せがれ ごうし

たいたうごめん

てゐる。思へば互に武州多摩郡の百姓の件。郷士でもなければ帶刀御免の家でもない。

おせ

けんどう

まわ

ころ

はいやく

ふう お

こち

汗まみれになつて剣道をへて廻つてゐた頃や、薬の行商を思へば、夢のやうな心地

がしたであらう。

お手許鉉五千附、太態二戦、バ銭五百をはり、近藤は大名に、長引戸の駕籠

の

ひか

いうく ばばう

えど

どうし

めい うち はや

だっそう

ちの

に乗り、土方は悠々と馬上した。江戸へ着いた同志四十四名の中、早くも脱走した者も

てんか

ちきさん

を

うらまんわぬ

ちんぶさ

したが

あつて、天下の直参として、靑だ」き裏金輪抜けの陣笠をかぶつてこれに従つたのは、

おきだそうし

なが

ん

はらだ きのすけ さいとうはじめがにしゅんらうらきんく めいた

あと まつに う

沖田總司、永倉新八、原田左之助、齋藤一、尾形俊太郎等僅々廿名足らず。後は全く鳥

400

末始粗選新

しまのかみ ぶよう

馬守 (武揚)にむかつて

67

「私は京へ上る時もう妻子のの見納めだと思つて出かけましたが、こうして逢う事が

出来るとまたうれしいものです。家に際してこんな心になるのはお恥しい

です』

ぶよう

といつた。武揚は

ほんとう にんじょう

ぶんぶ

にんじよう

もの きんぢう

な

『それが本當の人情です、文武に富んでも人情のない者は禽獣と同じです」

し

といつたといふ。(これは江戸へ来る富士山中の話であつたともいふ)

*

おほきわ

くらしん

だしぶりで江戸へ蹴った新選識の隊士は管によく遊んだ。その頃、糖の宅といつ

今の洲崎遊願の品といふ家などには、毎夜士のか登して、者を揚げて

大騒ぎをやつてゐたものである。かしく、紅などい美人がゐた。こいで

にん

ぶし

ひて

倉新八が三人の武士を相手に喧嘩をして、二人を斬ってた事件などが持ち上つた。

とき さすが

がくら ひぢかた み

この時は流石の永倉も土方に呼びつけられて

からだ

じちゃう

「軽るい身體ではござらん、自重さつしやい」

しか

とひどく叱られた。

*

男は多忙の中にあつてもだしぶりで、妻子とゆるくる機館も得た。一日、榎本對

先生拾七日御歸宿有之候得共、十八日七ッ時鍛冶橋(所)より使者参り御戻り

御成候。甲州参り西國勢を相防積りの御様子に御座候。

などふたよりが来てゐる。

いさみ きづ ようやなほ

*

勇の傷も漸く癒った。

慶喜公が、江戸城を出て上野寛永寺の寺院大慈院へ移つたのが、二月十二日、午前五時

うち

しんせんぐみ

いさみみづ

たい

でまだ夜の明けない中である。新選組は、雰自から指揮をして、わざと隊をなさず、

ひそ

み

の

5

えんどう

せうぎたい

沿道ところぐに潜んで、見えかくれに護衛した。後ちに上野の花と散つた彰義隊は、

ころようやだい かい いうし

くわいごうざふし

ぬうがや

ひら

うごう

ものづ

その頃漸く第一回の有志の會合を雑司ヶ谷の茗荷屋で開いて、集合する者僅かに十七名

じょうたいとき

といふ状態の時であつた。

八郎、梅戸勝之進 沼尻小文吾、 加賀爪勝太郎、佐久間健助、荒木信太郎 小

幡三郎、三品二郎

以上

四十四名

男の娘たま子の婿と定まつてゐる養子の勇五郎が、勇の歸京を知つたので、小石川

てふ

07

いさみ

ぺうちうかご

とどう

ことくる

たっ

ゆう ろう

たほどたづ

どうばう

町の道場へ逢ひに行つたが、男はこ」にはみず、た老中のところから

「病中駕にて登城する事苦しからず」

といふ達しが来てゐた。勇五郎は三度程訪ねたが、いつも道場にはゐず、何處にゐるの

どうぜう

どこ

かさへ解からなかつた。

餘り逢へないので、道場の留守番に頼んで、消息を知らせて貰うやうにした。

江戸城西丸大手 慶應二年九月に

撮影した。即ち今の二重橋で奥の方の橋が

漆が高いため二重のに組んであった(上)

江戸城大手門内 正面が二之丸松倉矢倉。左手が多門。右すぐ

下が下勘定所で、その前が百人番所。前にある橋は内大手の

下乗橋である。慶應二年頃の撮影である(中)

昔は木冠央中 ろあが場示掲書定に左年二應慶 門御藏半城戸江

(下)。 ろあがのもいしだ甚りよともはうやり愛の圓周がいなら愛も今も

末始粗選新

かほいろ

青な顔色をしてみた。

はつか

どう

まる うちだいめうこうぢとりゐたんこつかみや

しゅくしゃ あ

隊

廿日になつて一同は、丸の内大名小路鳥居丹後守役宅を宿舎に宛てられ、これへ引移

いさみな

ひらかたとしぞう あらた

じんみん

けんさ

しんめいぼ

さくせい

つた。勇の名によつて、土方歳三が改めて人員の検査をやり、新名簿を作製した。

長 近藤 勇

副 長 土方歳三

副長助勤 沖田總司、永倉新八、原田左之助、尾形俊太郎、齋藤一

浪士調役 大石鍬次郎、川村隼人

伍會

會計方

長方

平同士

岸島芳太郎、矢内賢之助、中村玄道、大谷勇雄、安富才輔、神崎一二三

島田魁、林信太郎、小原幸造、近藤芳祐、志村武藏、久米部正親、尾關政一郎、

前野五郎、中村小三郎

西岡萬助、野村利三郎、相馬主計 蟻通勘吾、田村一郎、富永政之助、 山野八

十八、 玉置伊之助、土方幸太郎、岩崎一郎、 松原新太郎、松本喜三郎、中常

ひきうつ

末始粗選新

六〇 江戸へ歸る

しょうぐんざぜう かいようまる あと

ち おっきか はつ

ふじさんまる

こんどういきみ

將軍座乘の開陽丸の後を追って、十二日に大阪をした富士山丸。 これには近藤勇を

しんせんぐみいきっこ

ぶこつ

めい

いさみ

まと

せんしつ

しま

終つた。

はじめ新選組生残りの武骨四十名が乘つてゐた。勇はまだ傷がよくない、殆んど船室に

こうかい

寝たきりの航海をした。

ちみ

しながはおき

しんせんぐみ

しながは かまや

ちい

りよゃん

十五日未明に品川沖へかり、新選組だけは、品川の釜屋といふ小さな旅館へ落つい

せきしょもん で

おうらい とりしら けんぞう

た。この家の前には、新たに開所が出来て、往来の取調べ厳重を極めてゐる。艦の

中では伏見で重傷を負った除士三名が、可そうに充分な鶴手賞も受けられずに死んで

ふてんのかみ

男はその場から小瓶をつて、瀧田和泉橋の所に入り、幕府典 頭 松本良順

(後の松本順男爵)の手賞を受ける事となった。勿論まだ肩をすつかり繃帯で包んで、舅

じつ

2

らう

しな らう

くわいけいかた あをやまきたいふ

たいし

よめい

和田十郎、三品二郎、それに會計方の靑柳牧太夫など生抜きの隊士だけでも卅餘名、

微の者を加へて、無残にも出陣三分の二を失って仕舞った。槍や剣で、鐵砲に向ふ事は、

こと

しみんかん

實に不利益である事を、 はじめて々感じたものである。

新ん

の

どじょうたい

こんどう とも とじよう

ひじかた

さくらはんしよだがくかいおう

ふしみと

後ちに、江戸城内で、近藤と共に登城した土方が、佐倉藩士依田學海翁に伏見鳥羽の

こと

やり

せんよう

せんきう

戦争の事をきかれ

『もう槍や剣では戦争といふものは出来ません』

でき

こと

おう ちよしよ たんかい

なかみ

といつた事が、翁の著書「譚海」の中に見えてる。

はらい かきうゑいじ

どうし

このいくおい

きつぐん

きんか

なかむらはん!

ぞく

篠原以下舊衛士の同志は此戰に於ては、すべて薩軍に參加し、中村半次郎の手に屬し

いくせ

て、御香宮から、伏見の明を砲撃した。親日記には『八名ノ者戦

ジ

ヲ携エテ三日夕六ッ頃ョリ薩藩中村半次郎隊=加入』『賊ノ死骸ハ山ヲナシタリ、依テ

かゆふ

きつはんなかむらはんじらうたい かにう

じん

がい やま

ざんぞく

たんさく

あるひ

りおるひ

にん せんぽく

もの うちと

はな

ひきあけ

残賊ヲ探索シ、或パ二人或パ三人ト潜伏セシ者フ討取り、陣所々々火フシ引揚タリ」

などある。

も。パ々々乗りを上げたり、敵を止めると、その前をつて焼へいくつもく

うち

ぽつ

しまつ

ぶら下げる、それがまごくしてゐる中にたつた一般でやられるといふ始末で、幕軍は

しんせんぐみ

たぐい

かきふぎよう

はん

お話にならないものであつた。新選組もその類で、四日早暁八ッ牛(三時)には、伏

はくぐん

ぐち

まも

かくぐん

ふしはかどう おほきか きうたいきやく

口の守りをしてみた各軍が、伏街道を大阪へ總退却をせざるを得なくなつた。

*

六日、新選組は海堤の千本松に陣を張り、三百の兵をつれた鬼艦載の佐々木三郎が

とはぐち

ふせ

なに

あひづ

たいせうはやしごんすけ

つ だんがん

う

うちに

鳥羽口を防いたが、何しろ會津の大林權助 (七十餘歳)が、八の弾丸を受けて討死を

けません ちょうしうへい ついけき じつ もうれつ

するといふ激戰、長州兵の追撃は實に猛烈を極めた。

たま

らう

せんし

しんせんぐみ

佐々木只三郎も戦死(橋本の戦で重傷、紀州和歌浦迄落ちて絶命した)をしたが、新選組で

も男の養子時代をはじめ副長助勤の井上源三郎、探索の名人と云はれた棒の使い手、同

山崎蒸伍長伊藤鐵五郎町小太郎、小三郎、小三郎、今井三郎 水戸市松

うーみづぐちいちまつ

この“戦”で新選組は、管としてゐる奉行所へ、御香宮の山の上から、さんざん

たいよう

たいちやう こんどう

づてあて

おさか

軍の大砲を浴びせられた。隊長の近藤は、傷手賞をして大阪にゐるので、土方歳三は、

ほん

たいし

かくご

かいし

よ

ひろには あつ

けっし

鳥うせん

たいほう

夜の六ツ(七時) 過ぎから、隊士を廣庭に集め、決死の覚悟で應戦を開始した。大砲

きつ

がたった一戦、これをこの低地から山の方へ向かつてどん射つたが到底も手答へが

ひくながくらん

はんだい

たい

てきちん

きりこ

けつかう

ない、遂々永倉新八の二番隊が決死隊として、敵陣への斬込みを決行した。

しまだかい

ってつ らう

きたう

ぶし

ひきつ

たびへい あは

てき きくせんこうめう

島田魁、伊藤鐵五郎など一騎當千の武士を引連れて、三度兵を合せが、敵の策戰巧妙

で近寄る事も出来なくなる。蛎断して奉行所へ蹴って来たが、赤倉の武装が重かつたの

で土塀を登る事が出来ない。これを島が上から鉄砲をのべて、軽々と引揚げたといつ

かいりき

ちんちう だいへうほん

てその怪力が陣中の大評判になった。(永倉新八翁遺談)

ようふく てっぽう きつちょうへい

きうしき

かつちう じんはそり

何しろ洋服に鐵砲の薩長兵へ、式な甲冑に陣羽織、槍をもつて突かる幕兵、しか

つき

泣くへい

記末始粗選新

391

五九 伏 見 鳥羽

鳥

危機を孕んでその年は明け、ここに廊四年の正月。三日から火が切れら

ふしみ

たかひ

はくどん

じつ きんたん

はいほく

しやうぐんけ

ほさか

ふんば

た鳥羽伏見の戦幕軍は實に惨憺たる敗北である。 しかし將軍家は大阪城で一路張り

おきかじやう けんちる

うね

こと

たうぼくは

するだらう、そうなったら大阪城の堅壘、容易ならぬ事になると討幕派を背負つてゐる

薩摩の西郷、長州の木戸がりに心配してゐるが、四、五日と幕軍総崩れ。

み

*

かよとじゃう はくん

はに に

しやうぐんひそ

おほさかてんざんおき

六日淀城の幕軍が八幡へ逃けて来るのを見て、將軍窃かに大阪天保山沖から軍艦開陽

まる

えど

ひき

たいせつ きんせん うまじるしわす

Õ༽

らうばい

丸に投じ、さつきと江戸へ引揚げる、大切な金属の馬印を忘れる程の、狼狽ぶりであ

か

いきついたう だいこうれい で

A

くわんかちだつれうち ぽつしう

こと

た。翌七日には慶喜追討の大號令が出る。十日には官位機奪、領地浸牧といふ事になる。

390

記末始選新

にん

らうと やまや へ ゑ

とうか

り。一人の阿部十郎富山彌兵衛ノ刀下伏ス」とある。

てつほう

う

とき

ゆうこく

につしや うすくら

じ

鐵砲を撃ちかけた時は、もう夕刻の七ツ (四時) 冬の日射で薄暗くなつた。篠原一

こんどう かぼくひさきち

たいし いしゐ せいの しんりやうめい

しょ

しのはら

に斬られて死んだのは、近藤の下僕人吉と、隊士石井清之進兩名である。場所は伏見御

やりぐみ

わか

はさみうち さくせん

遺墨で、二瓶に脇れた一味は藤ノ森臓の南北に鐵砲組と槍組に分れて撃

戦を

したものである。

篠原一味は、伏見の薩邸に入るのは少し危険と思つたので、故意と山に潜伏し、翼

夜中になって、今の薩邸へ入った。

ちくまで

*

近藤の砲腸は左の扉、相當の深手であった。あの傷でよく落馬をしなかったと、

きやうたん

々後々迄も驚嘆した。

ひと

人

て居るが、銃蓟の音を聞くと、バラ逃げていた。｢私はを捨て、い

て掛りました。

さはらだらう

もの

A

ところ こんどう うま

2

を

佐原太郎といふ者もいきなり斬つて掛りました。所が近藤は馬に乗って居りまして、

かた

くらつま つか

かたな うま

にん

うま

ま

肩を撃たれたけれども、鞍壺に摑まつて、三人ばかりが、馬の脇で、刀で馬を叩きま

きはらたらう

あし

こんどう

あし

すから、馬がドン避けます。佐原太郎が、一足といふところで、近藤の足を切

くに

らうといふところで、馬のために到頭逃げられました。

0

にんまりさ

こんどう

に

二三人軒下げましたけれども、近藤には逃げられました」(部阿隆明(十郎) 遺談)史談

速記-

しのはらたいのしん しゅき

しやうじ

かげ

てつねう

じぶん

こんどう かたうちつらぬい

篠原泰之進の手記では、障子の蔭にかくれて鐵砲を射つたのは自分で「近藤の肩を打貫

クリ、糀濱トシテル、チ意トセス、上がセテ逃去レリ。肝臓職チ

あひたとか

にんあと お

うちむか

よつ よひとり

つきふ

かふとびきた

うちとり

相戰フ二人跡在ッテ打向フ。依テ余一人槍ニテ突伏スレパ加納飛來ッテ討取タ

388

末始祖新

郎、内海二郎と二人を連れて居りました。

こんどう ほんかいだう ふしみ

かへ

とほ

(‛

ふしみ

きつはんてい

近藤は本街道を伏見に飾ります。我々は間道を通り越しまして伏見の薩藩邸へ参りま

して同志の者を連れ、待伏せして撃ちますりで、伏見に尾州屋敷がありまして、

その

ところやうやは

くつきょく いた

脇へ参りますと、街道が屈曲を致して、曲ります所へ漸くせ付きまして、鐵砲二挺

を

もと

そのじぶん

てつはう

われく てつはう お

つて居りましたけれども、固より其時分のことでございますから、我々は鐵砲を営

てには致しませんで、鐵砲を撃ちましたら、定めて、煙を望んで斬込んで来るだらう

かんがへ

のばらた

しん かなふみちのすけりやうにん やり

といふ考でそれから、篠原泰之進と加納道之助兩人に槍を持たせまして、途中萬一

近藤が逃げたら槍で突けといつて脇に伏せました。

わたくし とやまや べ

りやうにん そこ

あきや

私と富山彌兵衛と雨人で其處に空家があつたから、それへつてはふと云ふく

富山が「来た、来た」といふ間に、一撃つて終つた。其鐵砲が近藤の肩と腕の間に

それゆえきうしよ

たす

當りました。 夫故急所をはづれた爲め助かりました。

とちうまん

てつほう う

b

のぞ

きりこ

おも

ところ

にん

それで鐵砲を撃ちましたら、煙を望んで斬込んで来ると思ひました所が、廿人ばかり

末始粗選新

387

しまだ かい いしゐせいのしん

りきりよう

島田魁石井清之進など力量あるものを加へてゐた。馬のは下僕の久吉がとつてゐる。

*

うま くつわ しもべ

ひさきち

とほ

舊御陵衛士の阿部十郎が、寺町で小手と鉢巻を買つてゐると、裁を許らずも近藤が

つた。

ふと

ごろ じやうせうたく きうそく

どう

はんごろ

らう

はらたらう

うつみ

歸途八ッ頃七條妾宅に休息ス、同八ツ半頃、阿部十郎、佐原太郎(篠崎愼八郎) 内海

らう こんどう よつ そうか

ふろころ ところ もはやみなくたちかへ あと

みち

とこころ と

二郎、近藤ヲ追テ妾家=踏込シ處、最早皆々立歸ル跡ナリ、下婢ニ道ノ經ル所ヲ問

ふしみ かいださ

フ=伏見街道ヨリスト

トムフ (林親日記)

質は阿部等は午後二時頃から煽りに近藤をつてゐたのである。

うま の

ほう

にん

まる

きうくこ

『馬に乗つて(近藤の事)四方に二十人ばかり警護を連れて参りました。それから早々小

だいか

ほら

そのこてはちまき ひっかつ

てばちまき

おひか

そのじぶん

さはらた

手鉢巻の代償を拂つて其小手鉢巻を引きまして追掛けました。共時分には、佐原太

五八 墨 墨染の難

京がら伏見にかけ、二條城の留守兵と、新選組は、火蓋を切らんと待構へてゐる薩長

しょぼん

へい たいじ

がいだう きつきつね

たがひきつしやう ひんびん

諸藩の兵として、街道は殺氣常に張り、互に殺傷が頻々とある。

いさみ

じゃうぐながる けんばかみ

ぐんぎ

まね

しゅつせき

たけだがい

男が、二條城の永井玄蕃頭から、軍議についての招きを受け、それに出席して竹田

どう

もど

お

ぐわっ

すこ

す

ひま

まんが

たいし

道を戻って来たのは十二月十八日、八ツ(午後二時) 少し過ぎである。肥馬に跨って隊士

ふしみ

ぎってい

名を率いてゐる。男にしても、伊東一味の生残り篠原泰之進以下が、

れてあるのは知つてゐるし、討幕派が自分の命を欲しがつてゐる事もよく承知である。

たいしさだけはん

はやしかうのすけ

ちの

しのはら

み

それに隊士佐竹藩の小林幸之助 (啓之助ともある)といふ者が、篠原の一味で勇の行動

を一々通牒してゐた事が解かつて、去る十六日に、これを斬りて終つた(一説に除中の動

じうぶんゆだん

とも なか

恐れかに絞殺したとも云ふ)ばかりであるから、充分油断なく、供の中にも、

いきみかうどう

末始粗選新

385

たちま

たいろん

にんよ

およ

ので忽ちに隊員百五十人餘に及んだ。

おほさか

おひづはん

太郎、沼尻小文吾、林小三郎、岡島品三郎、加賀爪勝太郎、三品一郎、三品二郎

西岡萬助、石井清之進、勘吾、田村一郎、山野八十八、玉置伊之助、梅戸滕

之進、鈴木直人、 今井祐三郎、 水口一松、佐久間健助、荒木信太郎、小林幸之助

木下殿、宮川數馬、松本喜三郎、中條常八郎、小幡三郎、眞田腎之助、和田十郎

古川小二郎、上坂幸太郎、小林峰三郎

たいし

くは

ほうて

しかし、大阪では會津藩から應援の隊士をも加へしめ更らに八方手を盡くして急募した

きうぼ

永井玄蕃頭なか新知識であつた。勘

定奉行をやったり、外國奉行をやったり、

軍艦頭取から京都の町奉行をやったり、

慶應元年には大目付となった。近藤勇、

伊東甲子太郎など、廣島へ行ったこ

とがある。旗本の出で、後には函館の

戦争に行った佐幕家だけに、新選組と

はいろくな關係があった。名は尚志。明

治廿四年七十六歳迄存命した。この寫眞は明

治八年元老院權大書記官時代と思はる。(下)

榎本武揚 函館當時の武揚で當時知

られたハイカラである。(上)

384

記末始組選新

*

しんせんぐみ ほんぢん

ふしみ ぶぎゃうしよ きだ

てこも

新選組の本陣は、伏見奉行所と定まつて、いよ~ここへ立籠る事となつた。十二月十

しんせんぐみ たいしがふけい

めい

二日調、新選組估隊士合計六十六名(永倉新八翁同志連名)

長近 藤

副 長 土方 歳 三

勇

ぐわつ

副長助勤

浪士調役

沖田總司、原田左之助、尾形俊太郎、山崎蒸、永倉新八、井上源三郎、齋藤一

吉村貫一郎、大石鍬次郎、川村隼人

會計方

岸島芳太郎、中村玄道、安富才輔、神崎三之、青柳收太夫、矢田賢之助、大谷勇雄

島田魁、林信太郎、尾關政一郎、前野五郎、小原幸造、伊東鐵五郎、近藤芳祐、

久米部正親、中村小三郎、池田小三郎、志村武

平同士

竹内文三郎、鈴村利三郎、相馬主計、田村大三郎、富永政之助、森平入、舟津釻

きやう しゅごしにくしょしだいまちにさやうしょとう しやうぐんおほさかい

となる。 京の守護職所司代町奉行所等は將軍大阪入りと共に撥止となった。

ぐわんぢ

住みれたの本陣も、或は今日を限りとなるかも知れない、文久三年以来、元

はいし

めい

といつた。

はやしんすけ ひき

慶應をへて五年間、思へば感慨無量の京の町々であつた。ば、総士に命じて

しゅつじん

『天下の形勢は御承知の通りである、出陣の覚悟をして愛されたい
」

くもゆき

ゆうかた

その日は、夜の明け切らぬ中から、局中は大混雑。 七方面には、薩長の兵が一ぱい

ぬ中から、局中は大混雑。七條方面には、艦長の兵が一ぱい

に入り込んで、どうもいつ戦争になるかも知れないやうな雲行である。夕方になつて蹴

士は黙と死を直し、艦々として大阪へ向った。

大阪では一時、北野天満宮へ溶着いたが、近藤が、全隊到着のを津へ届出ると

いおよ りくどんぶ

けなかたんごのかみおよ まつだひらぶんごのかみ ふらんす でんしふたい

「林権助のゆる三百名及び陸軍奉行並竹中丹後守及び松平豊後守の佛蘭西傅習隊五百

と共に伏見を警備すべし」との命令であった。近藤の膜では、直ちに大阪城に入って、

親しく將軍を守らうとの”であつたが、その事は成らなかつた。

*

後

するさつ .

紫郎がその蹴しを見せたかどうかは詳にしないが、両士の闘係がこれによつて略ほ、

推察し得られる。

たいせいに わんご

しょち

じけんごと

しっぱいまたしっぱい たうは

しんい

つま

大政奉還後の幕府の處置は一事件毎に失敗又失敗。討幕を眞意とする薩摩のいろ(

なんだい

ちゃうはん れんがふ

とき

く

いこう

あひづ

くわな

な難題、それに長藩が聯合する、土佐ももとよりそれに加はる。對抗して會津や桑名が、

こんど

ちゃうしう

つばんう

さけ

しゃうぐんわうじやうち

あるひ りうけつ きんじ

ぽつぽつ

おそ

今度は長州ではなく薩藩討つべしを叫ぶ。将軍は王城の地に、或は流血の惨事の勃發す

れ、十二月十二日、京の二條城を出て、厳かに大阪城へ移った。

二條城の留守は、水戸家がするが永井玄蕃頭もここに止まる事となり、新選組は十一

日會津公用麓からの達しで伏見鉱撫を命じられ津桑名の両藩と共に、大阪へ出向くこ

たいせ

こと

さくどう

おこな

とき

ごとう

したひらいたらう

もちづきせいへいりやうし

いきみ ぐうぞよ

大政奉還の策動が行はれてゐる時、後藤は下村銈太郎、望月清平兩名を勇の寓居に遣

りゅうかい う

さら

いきみ

ごとう

ぼうくんけんはくしょないけん

はして、諒解を得るところがあつた。更らに勇から後藤に對し、奉還建白書の内見を求

ごとうみず

いきみ ぐうきよ ほうもん

した

めた事がある。後藤自からもまた勇の寓居を訪問する約があつたことも認められてある。

去朔日は弊寓に御光來相成候筈之處、御用務御輻輳に付御斷及殘懷此事御座

候。依而遠路之處、下村望月兩君御出、彼是御高話、感建之至、いつれ其中御差繰御

寸隙も有之候はば寛々御高話相窺度、將亦、此程時勢柄御健白御差出之旨傳承致、就

而者、右御一書之寫, 世上御差支も無之候はば拜見被仰付度、小生、一終身區區豚胸

相開き候基本と相成可申併忽然と右樣申入候段、實以て失敬恐懼之至、 先者右願申迄

亂筆御海恕被下度、匆々不備

濱田中君にも宜敷御序之節御傳聲願入候

つか

近

藤

330

末始粗選新

*

五七京を

去る

まのうちとき こう くわんこく したが

はくたう

いだ

たいせ

くわん

十五代将軍慶喜が山内土佐侯の勧告に従って大政奉還をしたのは、すでにこの年の十

月十四日であつた。その頃の近藤勇の活躍は、單純なる市中取締としてはなく、隠然佐

せいりよく

ようどうこう ふところがにな

さとうしやうじらう

しちうとりしまり

とき

幕業の一勢力として、容堂侯の懐力たる後藤象次郎 (通稱象二郎)なども、時に勇の膝

だんぶふ

あらかじ

へう

やっかいもと

はおひ

おほ

を抱いて談合し、豫め敬意を表して諒解を求めるやうな場合が多かった。

とし

象次郎と男とは、時に若年寄御役中の赤井玄頭(志)の紹介によつて配送し、麓に

一瞬の相通ずるところあってか、自然男は士に向って佐の後藤には無職をするな」

と命じてあつた。

いさみ ひざ

末始粗選新

379

しんんくぎに

るぞく お

の神前供御として、その遺族へ送った (金銭出入帳、慶應四年二月廿一日控)

*

上州勢揚げの時、中井庄五郎の前だけは器して一旦外へ出たが、窓を持つて

逃げ切れず、これを天満屋の井戸の中へ投げ込んで行った。四五日後にこれを愛して、

きつそくまちぶやうしよ

しら

けつくわ くび

なるしやう

よしたか

たい

めい

かな

早速町奉行所で調べた結果、首のない屍體が「中井庄五郎義高」と銘のある刀をさして

やうや とうしゅ

なか

こと

ひがしやまむせま

ゐたところから、漸く胴首を異にしたのは中井なるものである事がわかり、東山の無籍

まいぼっしょ ほうむ

埋沒所へ葬った。

きりこみ なか

がは まへをかりきを

めいち

ねんしやうぐわつ さんよ よこせうなん

あんさつ

くわゆきじんぶつ

を暗殺した過激人物である。

この時斬込の中にゐた十津川の前岡力雄は、明治二年正月、參與横井小楠(平四郎)

やん動運還奉政大に侯内山りまつ前以ろなに政參の佐土 二象藤後

しに髮は時た出に議會前御の所御小都京ろあで眞寫の前程餘ろせら

たゐてつ持を意好な種特はけだに人此も勇藤近ろあで事ふぃとため
て

きりこみかた

なか

らう めい たけなかよ

ひだりてくび きりおと

うへと しうがは

斬込方の討死、中井庄五郎一名、竹中興一は左の手着を斬落された、その上土州側は

殆んど手を貸ひ、味方の中井のをそのまいその場だりして去って行った。

うちに

ひきお

新選鍼は、夜いつになく対して、殆んどぐでん」になつてゐた。宮川は、討死

・めとかつうのしん

し、棚戸勝之進が、後ろから抱きつかれて倒され、他の人に斬られて重傷を負った。

がふうちに めい

あと

ふかで

い て おひ ほか

合討死一 深手一名。手負は外になかつた。

駕報によつて、永倉新八、原田左之助などが本から駆けつけた時にはもう土州側は

引揚けた後であつた。

どうがは きろく

てき

めいたを

めいきづつ

ながくらしん

土州側の記録によれは、敵十九名斃れ、八名傷などあり、永倉新八翁の遺談には

齋藤一が二三人受けたが得意の突きでバタ(片づけたなど」あるがれも信じを避

こと

できない

く事は出来ない。

のち

みやかはしんまち

江戸へ蹴った新選は、この時の功により隊名をして金子五拾雨を宮川信吉

記末始粗選新

それに十津川の郷士厳力雄と、の居合の達人中井庄五郎 (三)が加はつて都合十六

ねん

ぐわつかよる

こく

とつによ

てっぽう

てんまんや

しうゆき

三年十二月七日夜ノ刻(十時)突如として鐵砲をもつて天満屋を襲撃した。

ちやうど

わた

恰度、雪が綿のやうに降つてゐた夜である。

はん

うら かたわら

しゆゑん

は

しんせんぐみ さいとう

おいしくわじ らう

この晩、三浦の傍にゐて酒宴を張ってゐたのは、新選組の齋藤一、大石鍬次郎,

むらこじらう ちうじやうつ

うめどかつのしん ありみちかんさ

ふなつかまた らう まへの

らう

いちむらだい

9

村小次郎、中條常八郎、梅戸勝之進、蟻通勘吾、船津鎌太郎、前野五郎、市村大三郎

近藤勇の一家(宮川家分家)で、武州多摩から行つてゐる宮川信も加はつて十名。そ

しう はんし

しょた

とう

ほか

の外に紀州の藩士もゐた。

もの

暴れ者の中井が、一番乗りをやつて初太刀をつけたが、肝心の三浦は頬を薄くかすつ

たのみで、身をかはし、屋根から逃げた。狭い室内のしかも行燈が消えて暗な中で観

んかん

けつまつ

闘となつたが、瞬間にして結末はついた。

まわ

もの

せつ

きうたう

たか

紀州のし者にやられたといふが相常に高かつた。

*

紀州の藩の公用人三浦久太郎 (後に貴族院議員三浦安)はその頃藩中麓の物とは

れ、上下を切ってしてゐたが、先づこの人物が第一に坂本業からはれた。伊

まつだひらさきやうだいふ けらい やする そくすん

もんじん

ぬき

ほんまき しうけ

松平左京太夫の家來で安井息軒の門人であるが拔んぜられて本藩紀州家に入り外交役と

りよしゆく

きゆう あぶらこち はなやまちくだ てんまんやそうべ る しうる

なつたものである。その旅宿としてゐた京の油小路花屋町下る天満屋惣兵衛の周圍に怪

もの ほいくわい

うら ほんぐわんじない こうせいじ

りよくわん

いきやう

しい者が徘徊するといふのですぐに三浦は本願寺内の興正寺を旅館として滯京してゐる

ぐわいかうやく

あや

しうこう

まし

ひづひごのかみ だん つう

こんどういさみ

うら

紀州侯へ申上げ、 會津肥後守に談を通じて、 近藤勇に三浦の護衛を依頼した。

あん ごと

どうはん むつけんじ らう

へきとう

いばむらせい

らう

案の如く、 土州藩の陸奥源二郎(後の剃刀外相陸奥宗光伯)を辟頭に、岩村誠一郎、山脇

たらう

*

もとがはやすた らう まつしまわすけ ふぢきはじゅんのすけ たけのとらた

さいはらち

らう せきゆう

太郎、山崎喜都真、 本川安太郎、松島和助、藤澤潤之助、竹野虎太、齊原治一郎、關雄

のすけ

とよながかん らう

なふそう

だけなかよ

みやちはう

之助、豊永貫一郎、 加納宗七、竹中興一、宮地某 (田中光顕伯にもその人の本名記憶なし)

末始粗選新

五六 天 滿 屋騷動

ゆうま たんたらう

あんさつ

うじ

おい

しゅにん

とも

たいな

龍馬愼太郎の暗殺は、當時に於て、下手人がはつきりしなかつたと共に、一體何んの

こと

てらだ や どうしん しゃきつ

もんぜき

ためにやったのかといふ事も紛々の噂があつた。 寺田屋で同心を射殺した間貴の意味だ

かけ

いと

ふうぐんけ

たいせいほうくわん

ともひ、後藤次郎のに糸を引いて将軍家に大政奉還をさせたため佐幕派に恨を買

けいいう ねん ぐわつ

にちご

80

はんかいえんた

つたのだとも云ひ、も一つは慶應三年四月廿三日午後十一時

一つは慶應三年四月廿三日午後十一時土佐藩海援隊の汽船伊呂波

ん

きせんめうくわうじまる びんご

とも つおき

うむ

しやうとついろはまる ちんぽつ

丸と紀州藩の汽船明光寺丸が備後の鞆の津沖で濃霧のため衝突し伊呂波丸が沈没した事

艦を沈むる(沈めたその償ひは

代で、紀州は坂本のため八萬三千雨を賠償させられた上に、

つぐな

とほ

と

くに

金を取らずに國を取る

などいふ歌迄流行らせられたので、紀州藩士の憤慨は、一通りなものではない、それ

うらみか

ろは

374

犯末始粗選新

遭難の室にあつた掛闘に血の々たるものは何れも、後嗣坂本彌太郎氏が所蔵してゐる。)

しんせんぐみ

りうま

さいご

しょつ くわんけい

こんな語で新選組は、龍馬の最後には事質關係しなかつたが、(原田のものだと云はれた

けいおう ねんしやうぐわつ

鞘の件や瓢亭の下駄の件は最後迄取調べる事が出来なつため判明しない) 慶應二年正月廿三

にちよ

しみ

ふなやどてらだ や

うま

ちゃうほん

よししんぞう

とま

しうゆす

ふき

日夜、伏見の船宿寺田屋に、龍馬が長藩の三吉慎藏と泊つてゐるところへ襲撃した時に

たいし

いくぶん

く

しゆ

みまわりぐみ

は、隊士の幾分はそれに加はつてゐたやうである。これも主として出かけたのは見廻組

たんづ

よし やり おうせん

さかもと

ぶぎやうしよ どうしん

ぬい

うま

であつた。龍馬は短筒、三吉は槍で應戰し、坂本は拇指を斬られたが、奉行所の同心二

を射殺して危ない生命をかつて、伏見の薩摩屋敷に逃れた。

この頃にあつて、この日も捕手の來た事を湯からぬけ出て裸のま」で二階の

坂本に知らせた裟の龍子は、龍馬暗殺の後は、三吉の邸に脂取られてゐたが、更らに高

姉の龍馬の娍のところへ行き、それからこの家を出て諸方に流し、哪治十八戦横須賀

ねん ぐわつ

たち とし

びやうぽつ

はか うらがまち しんらくじ

へ来て、卅九年一月十五日、年六十六で病没した、墓は浦賀町の信樂寺といふにある。

肥末始粗選新

373

こうち

としてい

かけ

きう ほう

小路から、土州邸へ駈つけて急を報じた。

なかおか

にちぞんめい しゅつけつたりやう

に多

どぎごろ

しづ

せつめい

中岡は一日存命。出血多量のため、十七日八ッ時頃(午後一時から二時)静かに絶命し

た。この急報により陸援本部から駆けつけた今の田中光編が、邨臓の頭にあつて、

かた

なが ちゃうめん ひつき

かたなてもと

ふかく

その語るところを長い帳面に筆記したが(同伯所)刀を手許に置かないのは不覺であつ

はや

はんたい

さかもと

じぶんまでとつき

あひだやう

た、早くやらぬと勸王倒幕)反對にやられるぞ、坂本といひ自分迄咄嗟の間に斯樣にやら

ぞく よほど

いんじゅんけんじゅのし

まくし ちう

れたところを見れば、賊は餘程の武者のやうである、循怯と嘲った幕士中にもこ

おも

こと だんかう

せきやく

ちうい

だんぺんて

かた

んな思ひ切つた事を断行する刺客がある、注意しなくてはいけないなどと、断片的に語

つた。

たなかほく

ちから おと

なか

هور

田中伯は(當時穎助) 中岡の耳に口を寄せ

「長州の井上聞多(後の侯爵)はあんなに全身の娟く斬られても助かりました。先生

力を落してはいけません」

なかか みづ

しき

と

といつたが、中間は自から死期を悟るもの如くであつたといふ。(當時の龍馬の刀及び

こんねん ざんねん

『残念、残念」

と

言ひ、中をふりって、

しんだ しんた

なかなか

「愼太太、どうした、手が利くか」

中岡が

『手が利かぬ』

りゅうま

なが あんどん

つぎ

ちょう

といふと、龍馬はよろめき乍ら行燈をさげて、夫の六疊(斬られた室は二階入壘二室六疊二

てす

した

室の中一番奥の八屋)へ出て、手罹りのところから、大きな聲で階下にむかつて、

しんすけ

いしや

『新助、醫者を呼べ」

と命じ

ぼく

「嵐太、僕は脳をやられたから、とても駄目だ」

といふ言葉が最後であつた。新芽はこの宿の主人で、な人物であった。この事を

知り、妻子には蒲をかぶせてくし、自分は裏手から裏寺町を走って、近くの蛸薬師

記末始組選新

371

りゆうま

ぼくしん たうりゆうかいでん

よ

くつ

せきやく たちむか

かになぬ

しかし龍馬とて北辰一刀流は皆傳に及んでゐる、屈せず刺客に立向つたが、刀を抜くに

暇無く、三の太刀を朝のまんで止めた。の鋭い太刀は、龍馬の太指から六ばか

さやこ

たうしん

ずんよ

はちまき

りのところを、越しに刀身三十餘を鉛のやうにつて、勢は溢れて深く龍馬の前

しま

を鉢巻なりに薙いで終つた。

いしかは いしかは かたな

『石川、石川、刀はないか」

なかなか

へんぬい

と、悲痛のをあげて

いふもなく石川は中間の愛名(石川清之助とい

れたのである。

さかもと きいたにうめたらう

ときゆうま かたな こぢり

ふう

つてゐた) 坂本も才谷梅太郎といつてゐた。この時龍馬の刀の鐺が京都風に低くなつて

てんぜう つきやぶ

きうれ

ある天井を突破つたところから見て如何にその烈なものであつたかわかる。

なかなか かたな うぶ

うしろを

たんたう たちむか

ぜんしん

しょ たかでおさで

中岡も刀は屏風の後に置いたので、短刀で立向つたが、全身に十一ヶ所の深手淺手。

客は「もう澄い、もう宣い」と、大きな器を断してひら去った。

のち

りゅうま

なか そせい

あんどん

かたなぬ

その後に、龍馬も中岡も蘇生し、龍馬は行燈のところににぢり寄つて刀を抜いてこれ

を照らし

りゆうま

いろくないきさつで「俺が龍馬を斬つた」といふ人物も(今井信郎大石鍬次郎)これ

じんぶつ

までたくさんで

しんせんぐみ こんどういさみ

もの

おやま

澤山出たし「新選組の近藤勇だ」(石坂周造翁など) といつた者もあるが、その誤りで

こと

わか

かい

い

わたなべ たかはし かつら うちふたり

りゆうまなかをか

ひとり

ある事だけは解る。二階へ押入つた渡邉、高橋、桂の中二人が龍馬中岡を斬り、一人は

しもべ

とうきち たま

けふと みまわりくみ

し

わざ

下僕藤吉をしたもので、要するに、京都見廻組の仕業である。

しもべ とうまち

とぼなかをか はな

りゆうま

刺客ははじめ僕の藤吉を斬った。この時中岡と話してゐた龍馬は「ホタエナ」 (土佐の

方言で、騒ぐなの意)と、何にかふざけてゐるのだらうと思つてこれを叱りつけ、その言

おは

せきやく

ふたり

ひとり

なかなか こうとうぶ

きりつ

の終るやらぬに、二人の刺客か、一人は「コナクソ」と叫び、中岡の後頭部に付

ひとり

ゆうま ぜんぶくぶ

ひとたち はら

のうし

なが

ほど ふかで

うま

け、一人は龍馬の前額部を深く一太刀拂つた。腦漿が流れ出る程の深手である。 龍馬は

み

もりぞ

かたな

١٢

とこ

を

身を退いて床の間に置いてあった刀(西郷吉之助より贈られたもので吉行二尺二寸二分)を取

うしろむ

ふたたちふ

かた

ひだり ね

か

おぼけさ

らうとして、後向きになり二太刀深く右肩から左の脊骨に掛け、大裟裂を浴びせられた。

末始粗選新

369

二階上リロへ立候處、吉太郎 安次郎、準之助下リ來リ、

龍馬其外兩人合宿 之者手餘リ候 付龍馬討留外二人之者切付爲負候

得共生死不見留候

旨申聞候付、左候得致方無之付、引取候様、唯三郎差圖付立出、銘々

旅宿へ引取、其後之始末ハ一切不存

くちがき

ぜんぶ

この書は全部をこの儘信用出来るかどうかは別として、今のところは先づこれに擦ら

どうめいち

ねん ぐわつ

いまのぶら

うぶだ

ざるを得ないであらう。これによつて、同明治三年九月二十日、今井信郎は刑部大輔

とく くわんてん もつ きんこ

まうしつけ

しづかはん

ひきた

(佐々木高行)から特に寛典を以て禁錮を申付られ、静岡藩(七十萬石徳川家達)に引渡され

た。

مداد

御差圖有之−付、一同召連出 張 可 致、 尤 龍馬儀旅宿二階二罷 在 、同宿/者毛有

之 候 由二付、渡邉吉太郎,高橋安次郎、桂準之助〈二階〈踏込、私並 土肥仲藏、

櫻井大三郎八台所 邊見張,助 力⺅夕 候 者有之 候〻℃、差圖二應》可相 防旨

二元、手筈相定x、同日晝八少時比,一同龍馬旅宿丶 立越 候 節、桂準之助儀、唯

二三郎my申付齡、一下足先、立越僞言7以 在宅有無相探y 候 處 留守之 趣二村、

1同東 山邊逍遙氵 、同夜五岁時比,再E罷越、佐々木唯三郎先、立入、松代藩下劈、

認 僞名之手札差出、

先生面會 相願 度

旨申 入 侯 處,執次丿者二階二上y 候、臻ay引砬、较亏2手含2艏y、波沙吉太

櫻井大三郎八其邊二見張居

候

處、奧之間－罷

在

候、家内之者騷立－付取鎮x、右

郎、高橋安次郎,桂準之助付入、佐々木唯三郎八二階上y口罷在,私 並土肥仲藏、

記末始粗選新

ㄐく

金谷の村長をしてみた事がある。 姑のすらりとした人物で、腕はなかか冴えてゐた。

刑部省口

元京都見廻組

今

井廻

信

年

三十歳

十月中比、與頭佐々木唯三郎 (只) 旅宿<呼寄 候 二付、私 並 見廻組渡邊吉太郎

高瀬安次郎、桂準之助、土肥仲藏、櫻井大三郎、六人罷 越 候 處、唯三郎申 聞 候

土州藩坂本龍馬儀不審丿筋有之、先年於伏見捕縛丿節、短筒放氵 、捕手2内伏見

奉行組同心二人打倒、其機二乘逃去 候 處.當節、河原町三條下元町土州邸向

町家二旅宿 罷 在 候 ―付、此度、不取逃様捕縛可致、萬一手二餘候得者、討取

末始租選新

のすけ

くる

にん

めいら

坂本暗殺にはは新選組は直接係しなかつた。たゞ、暗殺者が坂本へ斬りつけた瞬

こくことは

つか

けんどう のこ

ろういろ かたな さや

「コナクソ」といふ四國言葉を使った事と、現場に残された蠟色の刀の鞘が、原田左

んてい

ひと

之助(松山藩)のものだと断定した人が(富山彌兵衛、篠原泰之進、阿部十郎等衛士達の言)あ

ぜんじつしんせんぐみ

やまちぽんとちようひきごてい やきいん

り、おまけに前日新選組に貸した木屋町先斗町瓢亭の焼印を捺した下駄があつたといふ

しんせんぐみ

うたが

めいっ

まで

どんとう

じゅんもん

ので、ひどく新選組が疑ばれ、ずつと明治になる迄その残がある度びに問された

けっきよく

かんけい

おいしくわじらう ごと

わたし

が、結局は、關係はないのであつた。大石鍬次郎の如き、一度は「私がやりました」 と

じはく

こと

苦し紛れの自白をした事さへある。

50

ねん ぐっつ

ぐわついた

いぶしょうおよ けいぶしよう いまみ のぶを

明治三年二月から九月に到る、兵部省及び刑部省の今井信郎口書判決によれば、下手

A きたい

らう わたなべきちたらう たかはしやすちらう かつらじゅんのすけどひなかぞう さくらだい らう

人は、佐々木唯三郎、渡邊吉太郎、高橋安次郎、桂準之助、土肥仲藏、櫻井大三郎、

はらだ き

しゅ

ろ

しんらう

めい

いまだ

けふみまはりぐみ

にんふち

またもと

とうかいどう

井信郎の七名となつてゐる。今井は京都見廻組七十俵六人扶持の旗下で、後ちに東海道

五五龍馬暗殺

したらう

のんさつ

かまへ すなはけいおう ねん

ぐわつ

にち 26

伊東甲子太郎(三五)が、暗殺される日前、即ち慶應三年十一月十五日の夜の八時半

ごろ

と

さかもとりゆうま

なかしんたらう

りようめい

いま しもけふくしほや まち

頃(五ッ下り)、土佐の坂本龍馬(三三、中岡愼太郎(三O) 兩名が、今の下京區鹽屋町三

・ぱんち

じぶん か はらまちどほ たこやくしきが

しょうゆや おみや しんすけかた

かい

きやうと

一一番地、その時分の河原町通り蛸薬師下るところの醤油屋近江屋新助方の二階で京都

みまりぐみお くみよがしらさ

きた

らういか

ぬい あんさつ

見廻組御組與頭佐々木只三郎以下七名に暗殺された。

この更らに二日前、伊東は藤堂平助をつれて、わざ坂本を訪問し

きんらいましょ

ねら もの

きけん

80

はんてい

うつ

『近來貴所を狙ふ者がある、危險であるから、すぐに土佐の藩邸へお移りなさい」

と、勸めたが、中間は非常にその忠告を喜んだけれども、坂本は少し傲慢な調子で、

こうる

ただい

ことば

とうどう

こんどう

にその好意に對してお禮の言葉も述べなかつた。伊東はとにかくとして、藤堂は、近藤

いきみ

てぐわう

し

ひと

男の、四天王として知られてゐた人であるからであつたらう。

坂本龍馬龍馬の眞は割合に數がある。長

崎へ往復してゐる時に、盛んにうつしたもの

のやうである。樣子から見て、これは暗殺少

しく前の頃と思はれる。即ち卅一二才の頃。

中岡愼太郎 笑った寫眞、頬づえた

ついた寫眞、中岡のものも相當にあ

るが、こんなきつい顔のは外にない

寫眞をうつす時のこの頃の人の心持

がわかるやうである。廿八九才の頃

であらう。(下)

364

記末始組選新

一十月十九日 拾七兩

七條一件十七人被下 候 事。

同

壹 兩 七一件付下男共へ遣シ。

にち

りよう

とう

やまとのかみ

うしん

どう

よう むねやす

ほん

かひもと

そして廿六日には拾六二分を投じて大和守の刀身三本、同拾六雨で宗安二本を買求め

てゐる。

記未始粗選新

363

*

ト云。

妻去テ跡-五歳ノ男子庄太郎ト云フ者アリ、家來野田伊之助樸源藏共立去ル所賊

兵五六名余力寓來テ曰ク「主人篠原ナル者何クニ潜伏セシヤ”早ク住所ヲ申ス可シ」

ト否ヲ言サス嚴談スト雖トモ「更知ラス」ト而已申ス、

之佐テ諸具品悉ク分取り、三之間表ロニ張番ス。

妻の薩邸内留主居内田忠之助(維新後中辨又、縣令) 高崎左京ノ所=、二日潜伏シ、其

レヨリ大久保一藏後の利通)ノ所二一雨日潜伏ス。集議依テ、同廿五日伏水(伏見)薩

邸二駕ス。同年十二月十八日マデ、同志中在テ飯炊キ水ヲ漑イテ日夜盡力ス。

(秦林親日記)

しんせんぐみ きんせんでいてふ

この事件の後ちの、新選組の金銭出入帳に

352

記末始粗選新

はこ

まいそう

運んで埋葬した。

廿日(油小路協劇翌々日) 晝、余カ妻荻野、新井妻小靜、伊東の某(姓名その他素性を

知るを得ない)薩州遠武氏ノ邸ニ來投ス。遠武氏忽チ余カ輩ニ通シテ曰ク「君等面會然

ル可」ト。依テ二階=呼取り余カ去チ後チ市中ノ形勢且寄寓所ノ始末ヲ問フ。

妻答ヘテ曰ク「十九日朝六ッ前ヨリ何乎胸中穩カナラズ、 寢席チテ門外出デント

セシニ、油小路へ隨從ノ小者武兵衛立歸り、唯、大變ノ一言ヲシテ駈出ス、故二高

台寺營所至り、内外ヲ親見ルニ一人モ見ス、則宮川町 (篠原の住居、同居してゐた様で

ある。日頃は所内にあつて時々この家に戻って来るもの) 立越ス處ニ表口ヨリ賊兵四五

名(新選組追來テ曰ク「篠原ノ妻、只今此ノ家二入タリ、早ク差出ス可シ」 ト亭主ヲ

問ス。 其ノ隙乘シテ裏ロヨリ川岸ヲ登り桂宮權太夫尾崎=過ギリ、直二藤邸來ル」

末始粗選新

361

ما

やまや へ ほ

けいおう

ねん ぐわつか

かんぐん くわ

えちごぐち

しゅつじん みってい

でみ

富山彌兵衛は、その後、 慶應四年四日四日に官軍に加はつて越後口に出陣し密偵に出

えちご いづもざき

みとばんせきしよちか

とりお

どとうそう

くさみづむら

ふかに

ゐた。

ひ

けて、越後出雲崎の水戸藩關所近くで取押さへられ、一度逃走したが遂に草水村の深田

へ落ちたところを混麟の兵のため槍で刺され五十餘の傷を負って醗死した。度胸の

つた人物で、その時廿六歳だったが、が全部抜け落ちてゐた。でつぶり肥つて、齢

低の時は、新選組の御用達をしてゐる美濃の客水野彌太郎の乾分だといつて歩いて

首は、三日間、出雲崎の町端れに晒されたが控札には、

つうはんそく こうせいしよし

だいじょうぶなり

すてふだ

『薩州藩賊、後世諸士の軀鑑、大丈夫也』とあつた。(篠原翁手記)

ぶらこうち

*

にん じがい

こんぐみ えいじさんたう しゅつげん

さて油小路に四人の死骸をおとりとして新選組は衛士殘黨の出現を待つたが、警戒厳

で

重危険を知つて各々姿を隠して出て来ないので、仕方なく五日目にこれを壬生寺へ

10

360

末始粗選新

御手数の御扱に相成、

候事とかへし

か

存上參らせ候、必竟御蔭にて家名を汚さず本意を逸

ふく存上參らせ候、早速御禮の書も差上可申處、近來は多病に

て何も心にまかせず、無らいの罪更御申和解御さなく候。 たいさき品なから、 幸便

にまかせ進し參らせ候、あばれ志のみやしきとおぼしめし、御なくさみ下され候は、かたし

けなく入らせ候。扨は右か ~御禮のほと、短き筆にて長き思ひのまゝには書き

しかたく、千々の一つもと思ひ察しつ 老のひかめる筆の使して、かく申上參らせ

おたちの御方(さまへは、やまくよろしく御言傳言願上參らせ候

日篠原の君へ、御前へ、故監物母瀧子

どうし

うち

もうない

にんけい

くらゐ

たい

でき

同志の中では「毛の百人藝」といはれた位で、大して出来はしなかつたが、馬にも乗

れば櫛もふ、何んでもやつた。一風つた面白い武士であつた。

きさら

*

能末始組選新

859

た

はらだ きすけ

ながやり

猛者もとてもその人物には悔も立たなかった。窓に原田左之助が長槍をしごいて突か

り継ぐにして仕止めた。この時には勿論、島も一太刀やられたし、丹波浜

しきしました らうら

きや を

へいすけとき

士岸島芳太郎等も傷を負はされた。平助時に年廿五蔵である。

つき

*

もうないありのすけ

つがるひろさき だつほん

がくもん

つうせう

::

毛内有之助(良胤) は、津輕弘前藩(安政末年)でなか學間があつた。通稱は平

の

あらた

かんもつ

とし

はたきこ

けんふけん

二、後ちに改めて監物といつた。年卅八である。母瀧子(堀氏)は賢婦人として知られ、

けふし

ぶんひつ

ひい

うしん いへがらなが ありのすけ けいく

こと ゆんぢう

くま

歴史に詳しく、文筆にも秀で、小身の家柄乍ら有之助の教育には殊に厳重であつた。

ありのすけうちじに

のち どうし しのはらたいの しん

てがみ ちょちょうぶ かみ

くないせうじゃなんろくこう

有之助討死の後、同志篠原泰之進に宛てた手紙は女丈夫の鑑とほめて宮内省殉難録稿

などにも収録してある。

あら玉の年立かへり、長閑に相成候處、御打揃、益御さえ~しくわたらせられ、いといと

御めて存上参らせ候、さてとや監物事、 通りならざる御惠みに相成、其上戰死に付ては、

358

末始粗選新

とうどうへいすけ

ふ

う

ぜんしん よ

ふかで あさで

うちじに ひがしがわ みぞ なか

藤堂平助は四方に敵を受け、全身十餘の深手手に眞ッ先きに討死、東側の溝の中に、

・ほむ

仰向けに斬込まれて果てた。 伊勢の藤堂ので、江戸つ見である。品行はり

じんぶつ

こんどういきみ

ろじ たち

こと

よくなかったともいふが、人物がしつかりしてゐるので、近藤勇も、衛士達を斬る事に

とき

な

たす

くらい

ながくらおう

なつた時にも尚ほ「あれだけは助けて置きたいものだ」といつてゐた位である。永倉翁

ろだん

たかひ とき

おう とうどう

つが

ころ

みち

おも

の遺談には、この戰の時にも、翁は藤堂をさせたいと思つて、故意と道を開いた

が、心ないものがあって(江戸浪人三浦常次郎、これはかねて藤堂には一方ならぬ

ひと

うし

とうどう

もど

もうぜん

たち含

とうどう

恩になつてゐた人だといふ)後ろから一太刀斬ったため、藤堂は振り戻つて、猛然と進

こと

んで来たといふ事である。

ことりだけを

みんか

もんちう

こし うまの

てふちん

たち

服部武雄(三郎兵衛良章)は、民家の門柱を背にして、腰に馬乗り提灯を差したま

触って来る者を切って切って切り捨くつた。三八五の大刀であつたといふ。新選組の

ほくしん たうりう とうどうへいすけ

きふとうてご

ひ

るし、北辰一刀流の藤堂平助もあるので、相當手剛い相手であつた。 秦泰親氏が父の奮

と み

こうねんあぶらこち つちふまん

とき

あさや

戦の跡を見るため、後年油小路四辻付近をたづねた時、角のところに麻屋があつてその

老婆が、當夜の戦闘の有様を、二階から覗いてみたといつて、話してくれたそうである

朝になると、四つの死骸がある絆りでなく、澤山人の指が落ちてゐて、どの家の大

戸も軒も血だらけになってところの壁には髪の毛のついた血などがべったりとく

こと

ついてゐたとの事である。

新選組では、伊東を斬るとすぐ手配をして、原田左之助と永倉新八が、近くの麥屋

を借りて、ここへかくれ、士を分けて、伏せ、衛士の出現を待つたもので、

うめん

あた

はつとり

もうない

まれ

ると、服部は毛内と組んで、正面の敵に當り、篠原と富山は東手、鈴木と加納は西手の

しのはら とやま ひがして

かのう にして

ひきう

勢を引受けた。

ち

ふん

の史談館の席上で話してゐるが、伊東は駕籠の中で、うしろの方にもたれか入り、荒

は側にあった。

四氏の中でも服部武雄の死は實に勇ましく、頭から、肩から左右の腕にかけ、

さきゆう

まんしん

み

しょ

りうけつりんり

て

りょうたう にぎ

だい

左右に満身廿餘ヶ所の傷を負ひ、流血淋漓、手に雨刀を握ったま」、大の字になつ

かほつき

へいぜん

ちんゆうごうたん

せいしん

あらは

わたかぶ

斃れてゐる。しかし顔付は平然たるもので、その沈勇剛膽の精神がよく現れてゐた。

中から、真赤に血に染まった詩稿がはみ出てみた。小山氏曰く、私が之た密に収めて置か

はり

ざりしは遺憾の極みである) てゐた砂織は(出立の時同志に窃かに着用したもの) 鑽に厚く

どうふく

まわた ていねい

80

真綿を被せられた胴腹で、その真綿を丁寧に差し縫ったものであつたといふ。

*

この油小路の血戦は、非常にいい夜で敵味方よく顔が見えた。新選組の四十餘名に

踪し、衛士方は僅かに七名ではあるが、京都浪士中第一の劔者などデはれた服部もゐ

くさり

前児

とま

じらうし

にん

かごしま

つうようもん

よ

じす

それから三人で鹿児島の北の御通用門にかつたが、夜の三時過ぎ四時にもならうとす

さもんぱん

さいきんた。

ところもんはん

なによう

なかむらはん

る時で、御門番が起きて呉れぬ、再三敲いた所が門番は何用か」といふから「中村半

※郎氏に逢ひたい」といふと「夜か明けてから御でなさい」といふ。仕方がないから

「御器に怨みはないけれども天下に身を寄せる所がないから、御門前を残しますから」

はか

なかむらはんじらう

といふと、「さういふ馬鹿な事をいふか」と言つて、それから、中村牛太郎に知らせて呉

れました。

いち

ねん ぐわつ

にらしだんくわい お

かのふみちひろ

(明治卅四年四月十三日史談會に於ける加納通廣(道之助嶋雄)翁の遺談)

とうじ けふと

せんぽんどほ さいしう

がくじゆく

こやままさのりおう

このひ

あかつき

當時京都の千本通り西周(後に男爵)の學塾に在った小山正式翁は、此日の暁より塾

ゆう

み

ぼくふ

やくにん

したいけんし

しゅつちよう

と共に散歩し、浦小路六と七條との間を通行して、親しく伊東甲子太郎氏の屍を

幕府の役人がまだ死検観に出張しない前の戦闘場の實況を、 加納鵬雄翁と同日

>

せんたうぜう じつきょう

かのうわしを おう どうじつ

シ感涙似タリ(篠原泰之選手犯「林泰親日記

じごろ

ゆや

連れ立って行きますと、して新選組の諜部に落ちて油小路の西に行った夜の二

わたしみは

ところつき よろ

むちゃくちゃ

ひか

ものひとりけきが

時頃で湯屋があつたが、私は見張って居つた所が月が宜しく、ピカリと光ったものがあ

る、「それ覺悟せよ」といふと、手元に来られたので無茶苦茶に前なる者一人袈裟掛けに

擦り付けて突きとばし、上を飛び越して行くと、又た掛られて、これも選能く難して

通るやうな次第でありまして、それから上に上るも他に行く所もなく薩藩に投する外な

けつしん

そのき きつはん たれ し

ひと

たほ

かごしま

とみ

ひとの心でありますから、共時は薩藩に誰も知つた人はござりませぬが、鹿児島の富

やまや へ ゑ

ひと

このひと わたしは

きめ

どほ かはむかふみち

たがひ

山彌兵衛といふ人がござります、此人も私の馳せる醒ヶ井通り川向の道を走り、お互に

敵が選ふて来たものと思ひ、ふも其やうな事で睨み合って避ける。

こと

がっぺい

きみ

そのうち

すぐき

40

らう

一條へ来ると合併して「イヤ君か」といふやうな事で、其内に鈴木三樹三郎も来て、

末始租選新

359

霊サント志シ、土州邸ニ寄ルニ、留主居之レチスレス。則、藤邸ニス。

余敗走セショリ、東洞院チ過キテ今出川桂宮大夫尾崎刑部權夫方二十九日未明

罷越シ戰争ノ始末ヲ吐露シ暫時休足チ乞フ、刑部忽チ承諾の上二休ス。

同四ッ頃(午前十時) 賊(新選組) 六七名來テ曰ク「篠原ナル者、貴家二潜伏スル由、

引渡せ」下云。刑部答日々「前日來ル而耳、其後會テ來ラス、若シ疑念モアラハ家中

探索ス可シ、併シナカラ主家達スレ後日ノ患アル可シ、暫時差扣エョ」ト云。

賊等此ノ答疑チ晴シ引揚タリ。依テタセッ頃藤邸ニス、留主居長内田仲之助、下

役熊本敬一郎、遠武橘次工殿中ニ於テ面調ス。

遠武曰ク「貴殿方勤王志顯然貫徹スル上弊藩ニ於テマテ助力ス可シ、必ス天下

ノ機會モ近キニアラン、再ヒ國家ニ報スルノ時至ルハ必然ナリ、先ツ其ノ時マテハ枕

ヲ高フシテ緩々休息アル可シ」ト、丁寧至レリ盡セリ、 其ノ深情誠心一々余力骨髓

1

352

肥末始粗選新

此時討死セシモノ、

エドモ衆寡敵セザルヲ以テ勝利ヲ得ス、ニ敗走ス。

服部武雄、毛内有之介、藤堂平助也。

今出川薩藩邸(薩藩) 二引揚者、

三樹三郎加納鷺雄(鷴)、富永彌兵衛、余力輩(篠原) 也。

其後、討死四名ノ死骸チ油小路ニ於テ五日之間、夜々賊兵注意シ所々ニ伏兵ヲ備テ、

我が輩ノ再ヒ來ルヲ待チタリ。然テ後、四名ノ者ヲ壬生寺埋ム(其後明治元年辰三月同志者

供率二百人余引率シ泉涌寺ニ改葬)

同十八日、阿部十郎、内海二郎、兩名早天ョリ伏水山崎邊ニ遊歩、同十九日味爽

高台寺リシ處、同志ノ者油小路ニ賊ト戰シコトヲ聞テ直駈付ケ、窃=観見ルニ

最早討死ノ跡ナリ。大ニ遺憾ヲ催シ、此ノ上の勤王諸藩ト協力同心シ、飽マデ王事ニ

肥末始鉏還新

351

服部曰ク「敵の新選賊極タリ、各々甲冑ノ用意然ル可シ」ト。

三樹日々「新選組ヨリ番スルニ於ティ暗殺形類レス、素ヨリ彼等の面識者也、我

ヨリ禮ヲ以テ受取ルコト然ルベシ」ト。

余曰ク(篠原泰之進)「斯クノ如キ隊ニテ斯ノ如キハチ殺ス、萬一其ノ備無キニシモ非

ス、若シ賊ト相戰ハマ、敵多勢我小勢也、リト雖モ甲冑ヲ着テ路頭討死セ

後世其ノヲ笑フ可シ、各常服ニテ然ル可シ」ト。

同志爰一決、只七名、 垂駕ヲ持シ、人足二人、小者武兵衛(姓岡本)ヲ引率シ油小

路二駈付タリ。

四方ヲ顧ミル凄然トシテ人無カ如シ。依テ直チ=伊東ノ死所ニ至リ其ノ横死ヲ見テ

一同歎息ヲ發シ、速ニ血骸ヲ駕ニ舁キ入レントスルニ、賊兵三方ョリ躍り出テ、皆鎖ヲ

シ散々切懸タリ。其數八四十余人也。 我カ同志の素肌ニテ備ナシ、只傍若無人

末始粗選新

おほごゑ

さけ

せつめい

と大聲に叫んで、そのま絶命した。

おはしら

しづ

そば

また たち

きたく

わ

大石等(外に宮川信吉、横倉甚之助)は静かに側に寄って、いきなり又一太刀、左足に朝

てはずどほ

たやう つじあぶら

りつけて見たが、もうぴくりとも動かないので、これを豫ねての手通り、七條の辻油

小路の十字路を出してて置く。寒気のため、伊東のはいてゐた仙台平のは、血

こほ

いた

が凍りついて板のやうになつてゐる。

油小路町役人、我輩ノ營中(月眞院) 駐來テ曰ク「御衛士隊長菊桐ノ提灯ヲ持ナカ

ラ當町内=殺サレタリ、只今巡邏ノ人之ヲ番ス速二死體チ引退ク可」ト。 共一聲ニテ

隊中或驚キ或怒り、騒擾シ。即、三樹三郎、 服部武雄、 加納道之助、毛内有之

助、藤堂平助、富山彌兵衛、余が輩、 (新井忠雄、清原清は江戸へ出張中。阿部十郎、 内海

二郎等は山狩りに出て留守だった)死ヲ引取ランコトヲ議ス。

紀末始選新

349

してある。土があって、その手前に、法華寺、その澄がほう(とした草。そこ

茶かいると、壁の間がら、手馴れた槍が走り出て、しかも繰りにその近ぐを残るい

てゐたので流石一刀流の観客として知られた伊東も、酔つてはあるし、肩から喉へかけ

て、ずぶりと刺されて終つた。

しま

ລ

あっといつてよろめくところへ飛出して来たのが郷の暗殺がより好きだといふだ

鰍沢郎、それについて元伊東の下をしてゐたがこの頃は分に取立てられてゐる脇

なり伊東のへ来た。伊東深乍ら、打ちに勝藏を拂

藏といふ者が、刀を抜いていきなり伊東の肩へ来た。

かつぞう

あ

つて、勝臓はうめき整を上げて打倒れる。

うちた

ぬきう

かつぞう

まで

しゅつけつはけ

いき

西の方から五六人、力を抜いて騙けて来る。伊東は腕の一突きに出血しくすでに

た

絶え

こしお

ッと腰を下ろし

かんぞくはら

「奸賊原!」

東側にある法華寺の門前にある大きな碑の前へよろめき寄ると、墓石にど

伊東は驚麓で宅へ行った。この月の十日に齋藤一が無断で、新選瓶へ戻って行った

事がある、どうも何にか策がありそうだ油はならないと、同志が帰りに危ながつた

が、伊東は眞斬るやうな事はしまいと一緒に付して出かけて行った。宅には式を

はじめ山崎蒸だの原田左之助吉村貫一郎などの友が集まつてゐて、酒肴を並べ、一同

如何にも嬉々として「伊東先生々ヤ」と、""をすめる。かけたのは午後であつた

る

こくすぎ

らう

までの

べつだん 思うだん

ふく

がそれからずつとノ刻過(午後十時) 迄飲みつけ、別段の要談もせずに帰ること」な

つた。ひょう(らら)として伊東は足許が定まらない位に酔つてゐる。

つきで

かんき

とう

よひ

い月が出てゐる。寒氣ははげしかつたが、伊東は酔をさまそうと、わざと駕籠に、

ちくぶしま

乗らずに歩いて出た。竹生島の曲をつてゐたとも云はれる。

*

はい

みなみがは

あと

木津屋橋を東に入つたが、南側が火事の跡で家もまばら、ところぐ撓跡の板園ひが

やけと

いたかこ

末始組選新

347

その上、この一味に近藤

の計画があるといふ事を一が近藤の耳に入れた。一

ほうとうどうへいすけ

しんきんぐみ ようたつ

みのおほがき けっかくみづの やたらう

方藤堂平助がかねて新選組の用達をしてゐた美濃大垣の俠客水野彌太郎(後牢死)を手に

入れて何事かを企ているともいふので(永倉翁遺談) 土方歳三はかん)に腹を立て

眞院のに二門を上げ、その上から院を射ち下ろして、前北に小銭

そな

↓しう

とむら

いきみ

ほうはつ

いじ

きよ

だ

隊を備へて夜襲をかけ衛士を一擧に葬ふと云ひ出したが、勇は「まァ～」といふので、

しゅだん

きりす

リ

じゅんび

砲發などの手段に及ばず、斬棄てはふといふ事にして、その準備にとりか」つた。

嵐鷹三年十一月十八日。近藤はわざ手紙を持たせて、伊東七醒井の姿宅に

艦sだ。用代は別になかつたとも云ひ、かねて伊東に依頼されてゐた金子が出来たから

といふのであつた(永倉翁)とも云ふ。鶴翁はた「新選組の賊徒等計画ラルテ職殺ス」

ないやう しる のこ

にしむらゅう

こくじ

だんがふ

と書き内容を記し残した。西村翁のは「國事ノ談合アレバ」とのみである。

湊川原のこけの石ふみ。

湊川楠公之碑前にて

一

波風のあらき世なれば如何にせん

よしや淵に身はしづむとも。

こち吹くと云ひしむかしのゆかしけれ

梅し

今も春邊ににほふ梅が香。

蒸汽船神速丸に乗込九日セッ時を出るとて

まらふとは雲上のきみよもてなしに

あるし顔にてにほふ梅園。

二日四ッ時宰府、天神参詣、梅林の嘘に匂ひければ

末始粗選新

315

五四油小路の屍

いとうかしたらう

ゑいしとうどり

とも

な

せつつ

あらた

さつま

おほくぼ

ぞう

東甲子太郎は、衛士頭取となると共に、名を攝津と改め、薩摩の大久保一藏(利通)

なかかちょんじ らう

かうせう

ししゅつ

中村半次郎(桐野利秋)などの交渉がますく密接となつた。 衛士の給典は多くこの手

密接となつた。衛士の総興は多くこの手

かた さつまん とりあつか

から支出され、小荷駄方は薩藩が取扱つてゐた

同志は勤王遊説のために各地に出張する。先づ溝原潛が勢州方面へ出掛ける。配

のぼる

ごうしう

みとやまや へ

ちうごくちほう

こうざん み

しんせんぐみ

登(昇)は江州へ、富山彌兵衛は中國地方へ、公然一味に加はつてはゐないが新選組の

ききしん

らう

ちょう

く

あらゐたを

しうくだ

崎慎八郎(後ちに佐原太郎。)は伊勢へ、伊東はこの前にも新井忠雄をつれて、九州下り

じやうこう お

ざいふ

おうすやうごい

みづの まさな お

をやつて、三條公に逢ったり、太宰府で王卿護衛をやつてゐる水野正名に逢ったりして

もど

りよもう につき

た

か

のこ

戻った。この旅中の日記の端に歌を書いて残した。(泰黍親氏所蔵)

行末はかくこそならめわれもまた

ひろう

る」と披露し、自からその屍を受け取つて、 これ迄にない立派は葬式を営み、佛光寺大

飴からその嘘を受け取って、これ逆にない立派は式を営み、佛光寺大

みやにし くうゑんに

宮西の光寺へ埋めた(明治元年三月同志これを泉涌寺に改葬し伊東甲子太郎と共に祀った)

こけん

しんせんぐみいきのこ

かたぐ

だん

こと

たゞ、この事件は、世をもつてゐた事などの點から、新選組生残りの方々の遺談な

どはすべて脱退失敗による自説を記してあるし、西村翁は、佐野に斬られた腸に

おいし

あやま

よつて、五Hの後には大石も死んだとあるがこれはどうも誤つてゐるやうである。

同人は、近藤の最後の江戸揚げにも同行してゐる気に入りの人物。一ツ橋家の混

いく

こんどう

ほね を

さとうひこ らう あに

むね

すうくらいだ

にその旨を依頼する手紙を數回出してゐる。

こ

だが、この家を残してやりたいと近藤はいろ~骨を折って江戸の佐藤彦五郎や兄など

肥末始組選新

343

書いてもつてゐた。

二張の弓引かまじとものふの

たゞ一筋に思ひきる太刀

おいし

あきで

大石は思ったよりも手であつた。

さのいばらき

ふわ

勤の六名は、要するに大したものではない。佐野茨木に和雷同したに止まるもの

じゃう ほんぢん

そくこくょうちく

と、そのま七條の本陣に引かれ、ここから即刻放逐されて終つた。

は

しかし、近藤はこれには少なからず困った様子である。伊東一派の策動により、どう

も士に暗い雲が動く、ともすれば、分離脱が出そうでならぬ。この事件などが

おも

いばらきら

あひづこう ゆんせつ

たま

せつゆ

きたい

知れてはいけないと思つたので、「茨木等は會津侯が面接を賜はり説論あつたので歸隊を

しやうち

ふた どうし

あびまみ

めんもく

じきい

しゅう

わきま

もの

承知したが、再び同志に相見ゆるは面目ないといつて自裁した、士道の辯へある者であ

つきさ

て一室に案内され、他の六名は離れた屋敷へつれて行かれた。

ま

霊が出る、晩飯が出る、酒がる。まだ諏訪はつて来ない。その中にノ九ッ

いくつ

とき とっぜん うしろ

しゃうじ

(午前零時)餘り屈でうつくしてゐる時、突然、背後の障子越しに「やッ」といふ

と、稲妻のやうに棺が出て、しかも電光石火の手続、木一味四人は身をかはすひまも

かたなて

なく突刺されもとより、刀を手にする暇もなく、がみをして無念の死を避けて怒った。

たゞ、佐野七五三之城のみは、手の苦しさを堪え、死んだふりをしてうつがしてる

ると、のつそりと新選組浪士調役大石鉄郎が入って来た。これが腰をかじめて艦を見

ら足をあけて佐野の頭を蹴った瞬間、すっと上半身を持ち上げた佐野が矢庭に脇差を

ぬいて、だ石の顎から頭べすうと一太が配下うした。大石はあッといつて身を退い

野はその絶命。佐野はかねてこの日の悟があつたものか懐中に群世の歌を

仰付候樣泣血願仕候、以上

卯六月

茨木司、佐野七三之助、 富永十郎、中村五郎、高野良右衛門、松本俊藏、 小

幡勝之進、松本主税町田克巳、中村三彌

たんぐわんしょ こうようにん

きした

こうようにん ひづめ

しかた

といふ。

のふあ

といふ歎願書を公用人(當時小野權之亟、諏訪常吉)に差出した。公用人も膝話の話に仕方

たんたちかへ

ししゃ

きした

こんどういきる

むね

なくこれを受けて一旦立帰らせ、すぐに使者を差立て」近藤勇へその旨を知らせると、

「もつての外の儀、して御採用あつてはなりません」

佐野等十人はその足で月眞院を訪ねて相談の上、その夜はの旅宿に一躍し、

よこてい

夜の明けるのを待つて、十四日々守護職邸へ行った。

ようにん

do

「ちぎちるす

昨日逢つた用人の諏訪常吉が留守、 蹴る迄待てといふので、座敷へ通した。その時は

いばらき

とみなが

ぬい だいへうしや

疲れ走れピノ刻(午前十時)を過ぎてゐる。佐野、茨木、中村、富永の四名が代表者とし

340

末始粗選新

はんかう たいと

み

もちろん

企て時には近藤へ反抗の態度を見せてゐた。勿論いざといふ時には、月真院一味へ加

はる手筈である。

じんせんぐみ あひづこう

だつれい

ちきさん

An

うし

これが新選組が會津侯からの達令によつて直参と定まるや 「われは浪士である。

ゑいじよくこほむ

きうしゆ

つか

奮主の下を去つてゐるのに、更らに新主人に仕へる意思はない。旗下となつて榮辱を蒙

おひ

こっさいたい だつ

ほふしかた

るは、舊主に對して相濟まねから此際隊をするより外仕方がない」と俄かに騒ぎ立て、

二日をおいた十三日、下にある津守護職の邸へ出かけて行った。そして抜けに

乍恐拙者共儀は先年來勤王攘夷に付、盡忠報國の志を逐一途にて本國を脱走致

し、是迄新選組へ依頼罷在候後、差ての御奉公も不仕、時勢柄とは乍申、追々御國

體變遷、随而今般莫大之御格式被下置候段難有感佩仕候得共、寸功も無御座斯被仰

出候を此儘御請仕候而者何共恐縮の至、 、 初一念の程透徹不仕議も敷佃敷、今更

御格式頂戴仕候而は、夫々本藩へも無面目、二君に勤仕の儀も難遁依之難局仕度奉

恐入候得共、御支配の法儀にも御座候、何卒隊長へ右之趣被仰渡、無異儀願之通被

きは た

末始粗選新

839

五三佐野の憤死

こんどう ふくしん

衛士となつた十五名の中、齋藤一(後の山口五郎)はもと

衛士となつた十五名の中、齋藤一 (後の山口五郎)はもとく近藤の腹心である。 隊中

錚々の歛で、男も事毎に目をかけてやつた。これが伊東一涙に異心の出来た頃から努

めて交りを 厚くして、伊東の総に賛成し、分離に際しても朝からよく壺くした。

伊葉も

その劒法を心みとし、有力な味方と思つてゐたが、下らんやこれが近藤の鼠を含ん

だ聞者である。伊東の長との關係が手にとるやうに近藤にはわかつた。

たいちう

*

ところが、伊東の方でも、新選組の中には佐野七五三之(重成)裟太郎”村五郎、蠶

なが

どうし

のこ

かんじや

しんばんぐみ

こんらん

永十郎などの同志を残して来てある。これが間者の役を勤めると共に、新選組の混亂を

見同

同

同同同

同

同

同

同

同

尾山井原永

田 左 之 助

倉

新

郎蒸郎助八

井上 源 三 郎

崎

尾形俊太 郎

惣組不殘見廻組御抱御雇入被仰付候

卯 六月

くみとうどり

おもて

もとだか

見廻組 並 役 茨木司、村上清、吉村

貫一郎、大石鍬次郎、安藤主計、近藤周平、

ごやくれう

ぺうつがふあは

きふよ

組頭取の近藤は、表向きは元高三百俵に御役料として三百俵都合合せて六百俵の給與。貯

ぺう

.

いりやく

ひらかた

にんふち

くみなみ

こんどうしうへい

いさみ

煎役の土方は七十俵に御役料として五人扶持を賜はつた。組並となつた近藤周平は勇の

やうし

養子でまだ十九であつた。

ふういん

しょ

しょふう

三の書は才氣走り、男の書風は底力がある。沖田総司のには、何にも劔らしい

風韻がある。

その頃新選組には、多少の世はあったが、そ二百五十名位の剛士があつた。男の威

れい

おこな

きょくちうちつじよ

いきみとし

すこ わがま

よくばれ、同中の秩序も立つてゐるが、どうも男、歳三が、少し我儘になつたやうであ

る。

こんどうぃか

そうるん

それぐ しき

きか

れつ

てんか

ちきさん

ぐわつか

幕府が、近藤以下の総員を夫々正式に旗下に列し、天下の直参となつたのが六月十日。

とう

ちゃうゑんじ

けつしんるん

うつ

ょくじつ

伊東一味が長圓寺から月眞院へ移つた翌々日である。

見廻組頭取 隊長 近

見廻組肝煎 副長 土

見廻組 格 助勤 沖

田方

總歳

藤

司三勇

独猎

健

東海山三

男の筆蹟 勇は「東州」と號し、頼山陽の書を手本として勉強した。はじめ浪士の募集にじて

江戸を出する時のものは、實に拙かつたと

ふことで、京にゐる間、あの激しい仕事をやり乍

毎夜、どんな事があっても二時間づの習字を廢した事はなかつたといふ。

しょげん

ゑいしたち それぐべんきやう

書見をする夜が多かつたし、衛士達も夫々勉強した。

しのはらお

篠原翁の覺帳がある

「こんばん

わたし くだされ

「私に被下

ありがたう

ぐうとないと

ぎふみい

せんきゆう

わたし

あいらぶきゆう

「私あなたをすきです

えいご

せいぞう ほう

「難有

など英語やら「ロケット製造の方」などいふ火薬を研究したやうなものもある。

げんきう

こんどういさみ

しごと

まいよ

じかん かな

ふじ

こ

近藤勇なども、あの烈しい仕事をしてゐながら毎夜二時間は必らず習字を怠らなかつ

た。はじめ江戸を出て行った當時の手紙などはひどくいものであつたが、慶應頃にな

りつは

ると立派な字を書くやうになった。 賴山陽のが好きで、これを手にした。

くっんとうぶし

とうしう

どんぐ

べんきゃう

ひぢかたとし

關東武士といふところから號を「東州」とつけ、漢詩なども段々と勉強した。土方歳

記末始粗選新

335

東海道の本陣泊り一夜二百五十をして最上の磯籠とした時代に、食料だけで八百の

れうり

ぜいたくしごく

せいくわつ

こと いん きく

くるしからず たいぐう

料理、贅澤至極な生活であつた (秦泰之進翁遺談)殊に印は菊にても不苦との待遇に、

衛

し

おほ

かんき

士は多いに感激した。

しのはらおう

だん

じし

篠原翁の遺談によると、その頃のこうした志士の服装などいいふものは、われが

までさうぞう

ぶこつ

くろちりめん もち

こと

うかう

これ想像してゐるやうな武骨なものではなく、羽織は黒縮を用ひる事が流行してゐ

こんどうひちかた

た。近藤土方などもこれを着たが、伊東なども常用した。伊東は名だいる実で、この

もんつき

すがた

やくしゃ

黒縮緬の紋付を着た姿は、役者のやうであった。

薩摩の西郷吉之助なども、京都にある頃は、流行の黒を着てみた。

*

ゑいし

こんどうたち

こと

・あんしん

こと

かたないだ

衛士は、近藤達に狙はれる事は知つてゐる。どうも碌々安心して寝た事もない、みん

な刀は抱いてねた(篠原翁遺談) それでもその間にを得ると、伊東はきちんと座って

てゐた。

きぬたらう

なが

すん

はっ

すんぐらる よこついり てちゃう

ゆき

甲子太郎が長さ六、幅二寸位の横の手帳へ手記したものがある。

賄方

大平法

喰料丈

八百文

薪炭、油、蠟燭、紙筆等之儀者小荷駄ョリ出ルノ由

泉涌寺ヨリ篠原聞取

一、表札の禁裏御陵衛士

或姓名=テモ不苦

一、印の波ニヒシミニッツナギ 小印

一、菊ニテ不苦

末始粗選新

333

のをやめてぐる(繰りあけてこれを岸へ張り出し、鞠のやうに蹴ころがして

じん たくさんで

ゐると、イギリス人が澤山出て来て、これを軍艦へかつぎ込んだ。後では一同大口を開

き、手を打ち、足をふみ鳴らして笑つたといふ。

どうおほぐち

明治二年彈正台少巡察となり、明治五年には造幣寮に勤め、その後退して悠々の日をつ

てゐた。嗣子秦泰親氏は月下建筑技師として健在である。

ぐわつか

さりやうゑいし

めい

六月八日になつて御陵衛士十五名(篠原翁の手記には、清原、中西、齋藤の三名を脱して

さんりやうぶぼやうとだ やまとのかみに、ゆき ぞく

ちゃうんじ

二名となつてゐる)は、山陵奉行戸田大和守忠至にして、長圓寺から更らに東山の高台

ひがしやま かうだい

じないけつしんろん

ひきこ

もんぜん

きんり つりやうゑいし とんしよ

へうさつから

ゆうだいと

ほうたいこう

寺内月眞院に引越して門前に「禁裏御陵衛士屯所」の標を掲げた。高台寺は豊太閤の

しつきたのまんどころ

りんざいしうずる

きよさっ

こぼりんしうちくぞう りんせん

室北政所(高台院)の住んだところで臨済宗随一の巨刹、小堀遠州築造の林泉は、みど

となものであつた。夏から秋にかけて涙が一ぱい、一同が引越した時にはもう花がつい

882

末始粗選新

んかく

しんたいとも

おざ

めいち

客で、いざ事ありといふ時でも、ぐつと落着いて、進退共に鮮やかであつた。明治卅

ねん

ころまでそんめい

四五年の頃迄存命した。

やまぼち

篠原泰之進は、明治四十四年迄存命し、八十四歳をして中耳炎をやんで渡したが、

ふんふ

ねん ふゆぐわつよこはま

とき よこはまぶ ひふぼりくないだいかんくぼだちらうう

は青山墓地にある。文久三年の冬十月横濵で、時の横濵奉行堀宮内代官久保田治郎右衛

にたのまれ夷人館取締をやった事がある。配でもありしつかりした人物だが、よく

ひと こと

か

ころ

くわゆきじん

かたがき

この人の事を書いたその頃のものに「過激人」といふ肩書をつけてある。はじめに誰か

人が書いて々したものだと思ふ。この時代に服部武雄だの加道之助だのと親交を

ひ はち

ほう な

たれ

墓

ぶにつたものであるが、同十月に海岸通りの幕府へやつて来て火識を掘り投げて

よう

めい

とん めい

07

こと

暴したイギリス人三名をひどい目にはせた事がある。

しのはらじ しん

みふ

あと

めい どうし

一名は篠原自身が組伏せ、後の二名は同志が組倒してすでに、殺そうとしたが、殺す

末始粗選新

331

同

八番隊組長

服部武雄(武州)

三郎兵衛源良章

藤堂平助(武州)

藤原 虎

富山彌兵衛(薩州)

三番隊組長

齋 藤 一(播州)

以上拾五名、何れも、武器具を携べてぞろ本を出て行った。

鈴木三樹三郎は、伊東甲子太郎の弟で、よく酒を飲む。俗に「三重三樹」などと

はぶたへ

この

もの

はり

したたびまで

今はれ、ひどく二重を好み、着物から織はおろか、下滞迄これを使ひ、勿論衣も

ぶたへ

あま とく

二重であつたといふ(篠原泰之進翁遺談) 武術は餘り得意ではなかったが、なかの

末始選新

浪士調役

監浪同同同同

平同士

伍

長

浪士調役

察役

篠原泰之進 (久留米)

林

新井忠雄(武州)

陸之助 一葉

加納鴨雄(武州)

道之助

阿 部 十 郎 (羽州)

二

内 海 二 郎 (上 州)

登 (上 州)

橋本 皆 助(郡山)

毛清橋 中内

原

西

清 (肥 後)

毛内有之介(弘前)

監物 平良胤

末始粗選新

329

じつちう

ち

ぶんり ろん ふく

ノ術中陥入り分離諭服ス(林親日記)

伊東篠原は「われは膝を蹴するのではない、分離は飽も分離である。われ

かつどう

は自から薩長藩と親交を結びして彼等の機密を窺って、新選組 活動にせんとする

いさみ

いきみ ほんとう

のである」といつて勇をうまくペテンにかけた。勇が本當にかけられたのか、かけられ

みき

しょうち

た振りをして見切りをつけて承知したのか、それはわからない。

とうちうかいくわうじ ちようろう~んねん

けいおう

*

どうけつ

くれば三年三月。 泉涌寺塔中光寺の長老湛然の民煎りによつて、同月十日像

葵の命をして、光明天皇御陵衛士を拝命し、伊東はその日の中に新選組本陣を去つて、

うはしひがしづめ ちょうゑんじ

したが

五橋東詰の長圓寺へ行つた。これに従ったもの。

新選組組長

源

鈴木 三樹三郎 (志築)

ひと

この年の九月にまた伊東は旅行をして名古屋方面を歩いて来た。何れも觀玉源

も勤王派の人

くわいけん

々と見のためである。

たく

生によく

伊の戯王運動はいよ恋しくなる。おに一般にゐたくも居られなくなって来た。

それに新選組にして、これによつて、いよ旗下に取立てるといふ話

が出て、それが一日一日兵化して来る。もういけないといふので、伊東が近藤へ、分

離の意思を持出したのは、名古屋からつた二年の九月十六日。七醒ヶ井の近藤の

(太夫方)へ行って、土方歳三をも加へ、こちらは篠原と二人でさか論した。

にちょ よ

はいまかりこ

こんゆうかれら ふく

しゅそくとこころ こと

翌廿七日夜余が輩罷越シ、今夕彼等服セスンパ首足異ニセント、憤心頭髪ヲ侵

スノニテ議論スレバ縮、分離ラ淝バンテ服セス、シ等名ハ徳川

きんのう しゅる

かい

ヲ知ラス、王ノ趣意解セス唯一武道ヲリテパラスル配巳、是ノ

ふんしんとうはつ おか

分が

はなし

記末始組選新

327

*

二月廿七日には、伊は、近藤勇に

行して、尾腔太郎、篠原泰之進と共に、

330

こんどう

ちょうしうしよぶんじつこうしや

京都から殿島へ行った。つまり小笠原登が、

つまり小笠原登岐守が、長州處分實行者として出かけた際で、

ちょうしうくだ

とうしのはら

いくにちかん

へん じゅんゆう

ちようしうけいとう じんぶつ

近藤は二度目の長州下り。伊東篠原は五十日間、 この邊を巡遊して、長州系統の人物

と親交を結び、新選組の参議でありながら、全く近藤一派とは、火と水のやうになつて

しま

つた。

おきだ そうし

しゅつはつ よく

にち

ぶしう みやかはおと らう

留守をした沖田総司から、出發の翌廿八日に、武州の宮川香五郎に宛てたたよりがあ

局長御用向而、赤々、藝州表迄出張、正月廿七日罷り下候間、此段申上候、何、

二月中者、歸京相成様子御座候間

薩軍の奏任となった)を引きつれて出張”した。夜の分らなく市中を探索してみた

どうしよ ゆうじまち なにもの

めい

まつき

しのはら つま

が、ある夜、同所の遊女町で何者とも知れぬ四五名が、眞先きを歩いてゐた篠原へ突

あた

しのまち

きい りょうしんとうりう じふじつ

もっ

たいちう

おも

までたび

たびはかか

ころ

當つた。篠原はその頃四十一歳、良移心頭流の柔術を以て除中に重きをなし、これ迄度

ごうこんむきふ じんぶつ

場數も踏み、豪膽無双の人物であつた。

はたしけちかにつき

いま れいそくまたやすちかし

しょぞう

その手記「秦林親日記」は今、令息秦泰親氏が所蔵してゐる。

え

ふはふばったう

二一言ヲ接エズ双方抜刀シ一時間餘戦争ス、余二名ヲ椰手トシ、米部の三名

ぜ、左右二分離シ、余直チニ一名溝中ノトナシ、腕一名ト接戦及ど、潮ク粗敷

とりあ

わた

だいせう

むたう

にけさる よぴと

だいせ

はう ぞく かへり

キ大小ヲ取揚が蹴放セシニ 無刀ニテ遁去ヲ呼留メ大小ヲ投ゲ渡ス、一方ノ賊ヲ顧ミ

もはやきり あと

最早去テ跡ナシ。

もの

だ

かまた うらをもてつきぬ

あやふみ

るかん

か

久米部ナル者、敵ノ爲メニ高股フ裏表衝貫カレ危ク見エシニテ、遺憾ナガラ駕籠

めい

りよかん ひきとり

ヲ命ジ旅館ニ

記末始粗選新

325

こんどう

しばん

ゆるしたもので、富山は常時から早くも伊東が新選組の参謀として重職にはあるが單純な佐幕家

ではないといふ事を觀破して、これを尊敬慕し、交りを深くしてゐた)

と結んだりした。彌兵衛は、大久保一に手引きして度々見せしめた。

まつせうじき

すこぶ けつべきか

リ

まが

こと

もの

近藤は、眞正直であり頗る潔癖家だから、少しでも曲つた事をする者はすぐに「斬れ

~」といふ。伊東は常に「まあ~」といつて、これをなだめて助ける方に魅るから、

自然、中の"あるものは、それに信するやうになつてゐる。

自然二派に別れた。

農鷹元年七月。大和の奈良に不運の人が潜伏してあるので、によつて、伊東は

ふくしん

しのはらたいのしん

とみやまや へゑ いばらぎつかさ

ごぶないらうにふくめ

まちか

腹心の篠原泰之進をはじめ、富山彌兵衛、茨木司、それに御府内浪人久米部正親(維新後

五二 御陵

御陵衛士

こうか したらう

み

にうたい

たし

しんせんぐみ

せいりよくくは

ちが

伊東甲子太郎一味の入隊は、確かに新選組に一勢力を加へたには違ひなかつたが、ま

たこれが隊の結束を破るものでもあった。元来が伊薬一味は何れも勤王夷、近藤式

さぼくぜう

ろんしや

こと

きんのうらうし

しょう

きつちょうはんし かつどう たいこう

こんどう

ม

は佐幕攘夷の論者である。殊に勤王浪士と稱する薩長藩士の活動に對抗する近藤の努

よく

しきふ

80

くくわ

てってい

たてまつ

きつちょうめ

かたき

やる

力は、ますく思想を佐幕化し、敢て朝廷に反き奉るといふのではなく、薩長を眼の

ぽん

こゝろもち

敵とする生一本の心持になつてゐる。

いとう こんどう

たんじゅん

ちょうしう おかね だけと

たす

ちょうしうはふめん きみつ きぐ

伊東は近藤のやうに單純ではない。長州の赤根武人を助けて、長州方面の機密を探る

としながら、雛かにこれに近づいて王攘夷の運行に加はらうとしたり、薩摩の富山

兵衛(京都の大佛で人を殺し藩を追ばれて新選組へ入ったもので、入隊の時に藩だから怪しい

といつて近藤はなか承知をしなかったが、伊東は、また役に立てる事があると説いて途に入隊

末始粗選新

これによつて、それからは、総へ一もふれる者は無くなつた。

よく

あひづこふ

しんせんぐみ

はたら

しょう

かくほうび

たま

翌十月廿日、會津侯は新選組の働きを賞して、各褒美を賜はつた。

先般三條橋制札狼籍之節萬事指揮手合必死相働候に付

かんぜう

はらだ きのさけ あらゐたいを いとうなみのすけ うつみ

らう

めいおのくまん

れう

と感狀あつて、原田左之助、新井忠雄、伊藤浪之助、内海二郎、(七番組)の四名に各 金廿雨

おんどうゆう らう

ちうでうつね

らう

らう

みづぐちいちまつ

しもと

安藤勇三郎(七番組組長) 中條恒八郎、伊木八郎(兩名五番隊)水口市松(七番組) 橋本

かいすけ

(物見)の五名に各十五苑。加藤、矢口藤助(組同心物見)

皆助(物見)の五名に各十五兩宛。 加藤羆、矢口録助(組同心物見)

れうめい

きん

う

こが。

せんとう

おいしくわ

戦闘に至らなかった服部武雄、大石鍬次郎(両名目付役、監察) 蟻通戡吾、小林啓之助、

こばやしけいの

めい おのくきん

びきづら

いけだこたらう きのしたいわをめい たい

びき

たま

(兩名三番組)の四名に

金千疋宛。池田小太郎、木下巖二名に對し金千疋を賜はつた。

せつ

ほか

きん

いづ

くだ

一説には、殊勳者に對しては外に金三枚宛を下し置かれたともいふ。

末始組選新

とさほ

はか

なが かたなはや

そり

この頃土佐藩には馬鹿に長い刀が流行つてゐた。無反で三尺五寸だ六寸だといふのを

ひと

あづ

じやくすん

このよ

ちさきいか

はやり あらみ

かき

は、ひろ

さしてた人は珍らしくない。此夜の藤崎以下も何れも流行の新身で重ね厚く巾い三

じゃく

すん ちゃうとう

まうしん

きじん

尺四五寸の長刀で、これを抜きつれて猛進して来る様子は鬼神のやうであつた。(新井忠

おも

つか

しま

じうぶん はたら

雄の談として西村翁の記述)が、この重味ではすぐに疲れて終つて充分の働きは出来ない。

後で内でこの議論が出て「アの求延びと重量のために不髭をとったのは嘘である」

ちゅうけん

たいへんへ

こと

といふので、それからは長剣を帯びるものが大變減つたといふ事である。

*

捕りになった宮五郎は、艦つきのま西の町奉行瀧川岐守(播磨守)へ渡さ

今かようどう

ぜんかい

めいぢるしん

くわんぐんぐんそう つと

どう ねんべうぽつ

れたが、養生よろしきを得て全快し、明治維新には官軍の軍曹を勤めたが同二年病没

ほか たかなはせんがくじ

した。墓は高輪泉岳寺にある。

末始粗選新

321

た事情を述べ、隊士功の甲を総じ兼ねるからと、一同へ同一の御群を得たい旨を

かた

語った。

はしひがし

おいしいはらわ めんく

ちうしん

はなよ しゅつどう てお

こと かた

橋東にゐた大石茨木の面々は、注進が遅れたため、甚だ出動に手遅れがあった事を語

あさの かほる しりぬ

どう

こら

あの

たい

なか

たどひとり

り、浅野薫を尻目にかけて一同ぐつと睨みつけた。これから淺野は、隊の中で、誰一人

ひ

として相手にするものがなくなった。

はしもとかいすけ

こんくわいしょち みごと

たい

どうし

くは

せっしゃ

つくば

橋本皆助は、今回の處置美事とあつて、直ちに、同士に加へられたが「拙者は筑波以

せんきう く

こんや

と ゆきせん

こと

はらだ あらゐりやうし はたら

来數度の戦闘に加はつたが、今夜の如き激戦ははじめてある。殊に原田新井雨氏の働

ももすご

かんたん

かた

きは物凄いものであつた」と感嘆して語ったといふ (西村翁筆記)

あらゐたいを

みやか

きりたを

いまる いった

くび

新井忠雄は、宮川助五郎を転倒したが、隊士の今井太郎がけつけて首を描こうと

ふかで

するのをとめて、深手のま」を打つた。

しんせんぐみ

わたなぬ

安藤謙治は総本蝣に討たれ、松島、深田、岡山、川、峰の五都は、れる深手

なん

手に血だらけとなり、碇下りて、こけつまろびつ、北に逃走した。

*

ておひ

新選組は、味方の手をいたはりつき、虫の息の土藩宮川助五郎をに乗せ、十三郎

の際に、扉を張って、本職へ戻って来た。近藤勇、土方歳三、伊東甲子太郎狒座の上

どう

しゃう

はたらぶ

じ

で、一同の殊動を賞し、土方は一々士の働き振りを間取った。

けつとりたけを

いけだ こた らうら

ひおかた いちくかくたいし

しっつちやう

どう て

あま ほど きやうてき

服部武雄 池田小太郎等は、出張はしてみたが、一同の手に餘る程の強敵もなく、

あは

せんとう きんか

ひっそう

むね ほらこく

刀を抜き合せ、戦闘に参加するの必要はなかった旨を報告。

たいちやう はらだ きのすけ

らみたいを

どう

とっしん

こと あらいゐ

いする

隊長の原田左之助、新井忠雄は、同に先んじて突進した上、殊に新井は泥酔してゐ

清、岡山藏六、早安太郎、中山謙太郎の八名、けは中井庄五郎が嫗はつてゐない。

どうみ

あは

お

ふんとう

たば

もとより一同抜き合せて、多いに奮闘したけれども、多勢に無勢である上に、こう

した転合は殆んど堂に入つてゐる新選紙である、駄目だと思つたので、橋を既の方へば

に

とき

あらる

て ぜい

た逃げやうとした時に、新井の手勢が、こつちから攻めて来た。

*

たかせどほ

やう みなみくるみち

でこぼこみち

それでも高瀬通り三條の南車道までは逃げたがここは、凸凹道のひどいところで、

あしは

そうわる

ふちさき しゆりやう

はらだ きのすけ

しやうめんめい

ついゆき

足場が一層悪く、ことに藤崎を首領とにらんだので、原田左之助は一生懸命これを追撃

じぶん たかまた

ふやう

CU

きりふ

しま

し、自分も高股のあたりに負傷はしたが、遂に斬伏せて終った。

はらだ

のの、七番組の伊藤浪之助は、安太郎と結び、受け損じて自分の刀を、

つかな

劫

とうしんまでやえはい

かたな

さいわひ

かうむ

柄中から飯を切られ刀身が入ったが、刀をはねとばされたゞけで、幸に傷は蒙ら

なかつた。

仕 度をして、戸外へ出て、蛇の方を見ると、月光を浴びて、すで橋の上では廿んばかり

いりみだ

きりおひ

とも はくじん

が入亂れて斬合がはじまつてゐる。チャリン、チャリンといふ響と共に白刃が 女のや

うに閃く。

『抜け!』

たちま

にん

ふら

さく

とつけ

ひがし

といふと忽ち十二人一列横隊、路を遮ぎつて突剣を描くて東へ進んだ。

せい

An

原田は、橋本の報告を受ける前に、八九名の壮士が、札場の方へ行くのを麓見し、

この夜更けに怪しい奴と睨んで、見えかくれに尾行して来たので、士が札二校を抜

いて、嘘の中へ授けると同時に、うぬ!といふと第一に斬り込んだ。部下の十二名も

一斉に斬りかる。

壮士は、何れも土州藩で、藤崎吉五郎、松島和助、宮川助五郎、澤田甚兵衛、安藤謝

めい

かわら みなみ ほう

すみゑ

但しは午後十時頃といつてゐる)一かたまり八九名の侍が、鴨硫の南の方から墨繪のや

うに浮いて来た。 長剣を帯び、れる身のいでたちで、時を味し、脂を踏んで

やって来る。

まっす

せいさつは

もくさつ

み

はしもと

真直ぐに制札場、この本柵を越へやうとしたのを見ると、強をかぶつた橋本が、この

””の背時をすり抜けて、新井のある酒屋へ行って、部をした。”は、この

した

めいぶつ

21.80

おも

べつ

はしもと

ひかへ

下の名物になつてゐる乞食だらうと思つて別に気にも留めない様子である。橋本は引返

ちやうくわじよ ほらだ

ほうこく

して町會所の原田へ報告しやうと走る。

あさの

ふくちやうじょきん

からは

きむらひ

浅野(廣島藩)はかつて副長助勤をした事さへあるにも係らず、未練ので、

こう

きむらひたちかたはら

こと でき

候をしてゐながらどうしても、札場の侍達の傍を通る事が出来ないで、ぶる

立

おいしいだらき たむろ

ほうこく

すくみ、大石茨木の屯してゐるところへの報告がだいぶ遲くれた。

新井もこの夜はひどく酒に醉ってゐた。子の過ぎても何事もないので、また今夜も

無事かと、酒をのみすぎて寢てみた時に鬪があつた。それ"といつて、一同手早やく

かほる

守り、原町は自から十二人を統率して、先斗町、所に詰め、淺野

沖田總司に斬楽

はしも

ふたり

こも

せつこう で

られたるは此後の事)橋本哲助(會)の二人が、菰をかぶつて斥候に出てゐる。

は

はしもと しんさん たいし

みとつくは

きよ

きうたう あは

こりやま

橋本は新参の隊士であるが、 水戸筑波の一擧に加はつて相當に暴れて来てゐる。郡山

だっぽんしや

ころ

かりどうし

こんどうひちかた

じんぶっ

の脱藩者で、この頃はまだ「假同士」といふので、 近藤土方が、この人物の腕試し膽

ほんめう ふち ゆう らう

づの

らう あらた

しをしてゐたのである。本名は藤井勇七郎後ちにまた水野八郎と改めたやうである。

んせんくみ きぼう らうし

ふたい ゆる

けんじゅつ

新選組は希望の浪士があつたからといつても、なか入隊は許さなかつた。 剣術の

どうし

かいしゃく

*

あひ

くび

とま

試合をさせたり、人の首を斬らせたり、同志の介錯をさせたりする、そんな時に配色で

ふたい

で かりどうし

しやう

もへたら、もう人際はさせなかった。それ迄は同士として、隊へ寄宿させておく。

の(午後十二時) 蟻になる、月は中天高く澄み渡ったのやうである(永倉翁遺談,

記末始粗選新

315

ましい

しんせんぐみ

たの

へ申入れて、新選組に手配を頼んだ。

*

こんどう

ばんぐみ

たいし

らだきのすけ めい

しっぷうじゅんらいてくわつどう

それっといふので、近藤は、七番組長原田左之助に命じて、疾風迅雷的の活動に移

じやうちほはしちうしん けんぢう はいち

て

り、隊士をぞく出して三大橋を中心に厳重な配置をした。一手は橋の英語の商

家に潜み、一手は高瀬をに入る酒屋に忍び、更らに一手は南の先斗町の町曽所を本

きよ

たいし

うちふたり

こも

こじき

よそほ

まし した

けいかい

ふてい

據とし、隊士の中二人を菰をかぶせて乞食にはせ、橋の下から警戒させせた。不逞の者

あらは

が現れたら銃聲を合圖に、一鄉に討つて出る

鄉に討つて出る戦である。同勢卅六人。劍教授方の池田

にん けんけますうじゆかた いけだ

こたらう はつとりたうを

めいよ

けんし

小太郎に服部武雄 (三郎兵衛)など名譽の剣士も加はつてゐる。

にちぶじ

み

十日無事、十一日無事。十二日夜になつて、鏡のやうな月が照つてゐる。鴨川の流れ

きやう あき

すべ

けいかい

かんきっ

くらる

の音がして、 京の秋は涼しさが、ぞくくする位であつた。 この夜の警戒は、監察の新

にん

さかや

おいしくわじらう

いばらきつかさ

めい はしひがし

井忠雄が十二人をひいて酒屋に、大石鍬次郎(浪士取調) 茨木司(伍長)など十名は橋東を

てきび

を悔、改心候者は御容可相成候間可申出候、且、潜伏落人等見営候者は速に申

出候はゞ、御褒美可被下候、若、隠置き他より顯はれ候は朝敵同罪たるべき事。

けいじ

だいぶ手厳しい掲示である。

きんっ はつ使う?

いめいはくつき

ちゃうしうじん

An

ぐんけ ほうぎよ

「禁闘に砲逆罪明日に付」がひどく長州人には利いた。 これを将軍家の薨去で、征長

な

りさま

せいちやる

ぐん ひきあ

てつきよ

ぐわんぐわんねん

の軍を引揚げた後もほ撤去しない。 元治元年から慶應二年迄三年越立腐れの有様であ

けいおう ねんまで ねんごしたちくさ

る。

八月十九日の夜に、確か三條大橋橋詰の大札を墨で黒に塗りつぶして購麓に取捨

めちゃめちゃ

こは

もの

てて滅茶々々に踏み壊した者がある。(十津川郷士中井庄五郎、前岡力雄、深澤仲磨等であつ

あさ

はつけん

しかた

ぐわつか

たといふ)朝になつてこれを發見したが、どうにも仕方がない。三日目の九月二日に、

あたら

こしら

よくてう

かわらす

か

しんてう

新しいものを拵へて建てると、また翌朝これが同じ磧に棄て」ある。十日にまた新調し

た

どいじ

こんど

まちぶぎやうひがし おほくぼしゆざんのせうにし たかはさぬきのかみりやうめい

あひづうこ

て建てると同時に、今度は町奉行東の大久保主膳正と西の瀧川讃岐守兩名から、會津侯

五一 制札 事 件

蛤御門の後に、一郎が長州征伐の軍が発せられた時、言語止まるところを

知ならいので奉行所は京の甘餘箇所の各定”場に、長藩の罪状を責め、市民の心

けいじ

得ともなるべき旨の掲示をした。

一、此度、長州人、恐多くも自ら兵端を開き、犯闘不容易の騒動に相成、諸人の難蕊

も不一方候處、殘賊も追々召捕取鎮に相成候間、立候者は安堵歸致候、將又、

妄に燒拂候抔浮説を唱候輩も有之歳に候得共、右様の儀は決而無之候間、銘名職

業を勤め立騒申間敷事。

元来、長藩名を勤王に托し、種々の手段を設け、心を惑候故信用致居候者も有

之候得共、禁闘に発砲し、逆罪明白に付、追討被仰付候、若、信用致候者も前非

末始粗選新

空蝉の唐衣なにかせん

鍋もも君ありてこそ

の一首をお詠じになる。侍臣泣かざるはなかつた。

後にこの物で袈裟をおつくりなつて増上寺に御寄進されたが、これは未だに同寺にあり「空

蝉の御袈裟」と申して、寺である。

記末始組選新

311

盡力之次第屹度有之候との事。

一、是なりにて幕兵東歸せしときは、屹度朝廷へ申上、直樣冤罪は朝廷御苑に相成候都合に

盡力との事。

1、兵士をも上の上、橋等も如只今次第に両、勿體なくも朝廷を擁し奉り、正義を抗し、

旋力の相遮りときは、に及決職候外無之との事。

一、冤罪も御免の上は、双方誠心を以相合し、皇の御爲に碎身盡力仕事は不及、イジレ之

道にしても今日より双方皇の御相輝き、御回復に立至り候を目途に誠心をし、屹度

盡力可仕との事。

(四) 家茂將軍の夫人はかしこくも御降嫁あらせられた和宮様であらせられる。この宮様の御

入室のお苦しみは、事毎にお涙であらせられたが、御貞淑の御様は實にわが日本女性の鑑と

申上げればならぬ。殊に家族とは御伸むづまじくゐらせられ、慶應元年五月上洛に際し、家茂は

「御土産の御所望は」と問はれたので、宮は西陣とお答へになつた。翌年七月家薨去

美しい唐織一巻は、その遺骸と共に江戸城へ到着した。宮これを御覧あって追懐の御情に堪

えず

310

末始組選新

伊東甲子太郎、新井忠雄 (陸之助)と共に九州遊説に出かけ、筑後の高良山の麓で、ここから

太宰府に出ようとする時に死んだといふ。 馬場英翁筆記には「太宰府デントスルタ刻、

如何ナル事ニヤ淵上落命セット聞ケリ」とある。

(三) 薩長の聯合について、 木戸松菊侯がこれた手記し、それを坂本龍馬に示し龍馬が「表に

御記被成候六條は、小西雨氏及老兄龍等も御同席にて談論せし所にて毛も相違無之候。後來と

いへども決して變り候事無之は、神明之知る所に御座候、丙寅二月五日、坂本龍」と裏書し

たものが 毛利家にある。慶應二年正月に、薩摩の小松刀、西郷吉之助、長州からは桂小五

郎それに坂本龍馬も加はつて、一種の攻守同盟を密約したのである。これ坂本の一生の大事業

であり、明治維新の大業はこれより生れたとも云ひ得る。

一戦と相成候時は、直様二千餘之兵を急速差登し、只今在京之兵と合し、浪華へも千程は差

置京坂兩處を相固め候事

一、戰自然 我勝利と相成候氣鋒有之候とも、其節朝廷へ申上、屹度盡力之天第 有之候との

一、萬一戰負色に有之候とも、一年や半年に決面潰滅致し候と申事は無之事に付、其間には必

末始粗選新

ゐる際、悪るい時には悪いもので、大坂城にゐた家茂郷軍が、脚気を病んでこの年の

ぐわつはつかには

たかい

きやうねんわつ

さい

七月廿日俄かに他界した。享年僅かに廿一才であつた。(四)

更に、その年の末。十二月廿五日には、御のため、御年卅六を以て、孝明天皇

ごしょ

たい

が京都の御所でおかくれ遊ばされたので、十五代の将軍職をついだ一橋慶喜公は、

わんぎ

うしうさいせいぐん

ひきあ

てんか

けいせい

よそく ゆる

こと

喪の御儀を機として、長州再征の軍を引揚げしめ、天下の形勢は、また~~豫測を許さ

しま

ぬやうな事になつて終つた。

(一) 長州處分案の主なるものは、二ヶ図の中から十萬石を削る事。藩主毛利大膳大夫慶

親は蟄居黜居。嗣君長門守定廣は長蟄居。先きに置された福原麟司益田三家老の家名は永世

断絶。等である。

(二) 赤根淵上の最後についてはいろな説がある。 赤根は長州へ行くとすぐに取押さへら

れ、奇兵隊の替へつれ込まれて、斬殺されたとも、腹を切らされたともいふ。また長州の

植村牛九郎のために胸中を觀破されて、街上に刺されたともいふ。

淵上は、一旦押さへられたが他藩の者なので放送され、生命から京都へ戻ったが、またく

徳川慶喜 慶應二年十二月の撮影。 征夷大將軍としての大禮服である

にん

こんど

ちゃうしうくだ

こんどう くろまく

はな

こう

とも

この二人が、今度の長州下りには、近藤の黒幕として、着かず離れずに、行を共にし

てゐたのである。

ちゃう

こん

‶つかうしや

いま

いし

けんふ おがきはらちながら

長州處分案(謎の行者として、今の小笠原長生子爵の厳父小笠原長行(登岐守、は

おほめつけなる んどしやういか

ひろしま

じめ今の小石川壹岐殿坂に邸があつた)が、大目付永井主水正以下をつれて、廣島へ出張

した二年の二月、長州が悪闘しゐるので、五月になって縁に交渉は厳し、し

ちゃうしうせいばつ

ぐんれい はつぶ

このとき

あかね

ふちがみりゃうめい

て長州を征伐する軍令が發布されたのである。此時も、赤根、淵上兩名は、窃かに

して行ったが、窓に長州藩士に登見されて斬られて終つた。(軽二)

この長州再征軍は、殆んど幕軍運運欺。おまけに土佐の坂本龍馬が秘密の大活動を

しゅつちゃう

はまぐりごもん

れんがふ

やつて、一時は蛤御門に於て、砲火を交へた仲であ

にて、砲火を交へた体である犬猿の長が聯合(三)して、

さいこく しょぼん

はち

て

幕府を倒そうとしはじめて西國の諸藩が蜂の巣をついたやうに手もつけられなくなつて

記末始粗選新

しんはつ

ちゃうしうっか

はぐん

のびひ

ほと

きね

に進發して長州近くに迫まつてゐる幕軍が、幕府の處置が延引くために殆んど氣抜けが

しま

せいめい だけだ

たかいし

こと

A

そうためいき

して終つて生命を提出して戦意思などのない事を聞かされて間は一時溜息をついた。

*

いさみ

じつ ちゃうしうせうやく

CP

へいたい たいちゃう

あかねぶじん

勇には、實は長州の消息はよくわかる。もと奇兵隊の隊長だった赤根武人 (貞一が、

高杉晋作と喧嘩をして脱走して来てゐるのをうまく手に入れて、武はどこれをスパイに

がくもん

んか

さいしほだ

っか

つばんし

あかね

ぶだう

とこ

使つてゐる。 赤根は武道はもとより間もあり、それに雄辯家で才子肌の男。 久留米の

らう

とも こめや

は

おほきか ひる

脱藩者淵上郁太郎と共に米屋に化けて大阪に潜んでゐた(赤根は柴屋和兵衛、淵上は松屋長

兵衛と傷名)

まちぶぎやう

ಽ

きやうと かういん

ろう つな

これを町奉行が嗅ぎつけて、京都に拘引し、六角の牢へ繋いでおいたが、それを聞い

しんせんぐみ

こうしたらう

こんどう

はな

すく

新選組の参謀伊東甲子太郎は、近藤に話して、ひ出して情をして味方につけて

ふちがみ くど

やく

どうほん くわんけい

たい

かんさつしのはらたいのしん

せいこう

終った。淵上の口説き役には、同藩の關係で、隊の監察篠原之進が當つて成功した。

大書記官をつとめて退職し、市外寺島村の別に暮らした。病したのは明治十四年七月一日

七十六歳であつた。墓は谷中の本行寺にある。

徹頭徹尾至公至正少しも機略を用ひる事なく、全く私心といふものない清らかな人であった。

きやうかへ

こんどう

ちゃうしうくだ

しょう

こう

ほうこく

京へ帰るとすぐに近藤は、長州下りの詳細を會津侯へ報告した。

か

らう

しゝとびんごのすけ

には

ゆうす

けいはい

一、家老といつて應對した宍戸備後助(後に瑙となる)は俄か養子で

軽輩に過ぎない

こと

その他、君に感じて出頭したものは何れも偽名である事。

おもて きんしん

せんび

いそ

こと

一、表に謹慎を装ふてはゐるが、窃かに戰備を急いでゐる事。

やまぐち くい

もう

したい

もつ しょじ けん しんき

こと

一、山口に會議町を設けて、諸隊の代表者を見て諸事件を審議してゐる事。

きくふう

一、幕命による封の沙汰などには絶にする意思のない事。

これを聞いて、変の発注侯も灌慣をついた。更らにそれよりも

うしうさいせい

長州再征としてすで

る。

生れ、甘五で永井能登守といふ二千石取りの旗本の養子となった。弘化四年にはじめて部屋

みから御小姓組番士の列に出仕し三百俵の俸を受けたがなか秀才で、嘉永六年には徒士頭

に抜かれ千石を賜り、程なく目付に轉じた。安政元年に長崎御目付となつて赴任、この時に

いろ(海軍に關係しその功労は記すべきものが多い。翌年は従五位下に叙せられて玄蕃頭と

稱し、やがて築地に開いた海軍操練所(兵學校の基礎)の所長となったが、勘定奉行、軍鑑奉行な

どをやり、文久二年、津侯が京都守護職になるのと前後して、その町奉行も勤した。

元治元年にはまた大目付となり、蛤門の髪の時には、戸川鉾三郎と共に、伏見の長州陣にゐ

福原越後同地の奉行所へ呼出して「明日限り退去すべし」と厳達したのはこの人であ

一時寄合席となりまた慶應元年に大目付に戻り、なか活躍した。 三年には若年寄格となつ

*七千俵いたい。 土佐の後藤象次郎が容堂侯にすめて出させんとした大政奉還の願

んで、これを時の軍慶喜(十四代家茂は二年八月死す)にすとめ、將軍装の草案は

この永井尚志の書いたものである。

戊辰の役は函館迄行って幕府のために始終し、明治五年左院少議官となり、八年には元老院權

Q (1) 永井本仁志とび、介と貌した。三河岡鶴田郡松平主水正の岬の子に

行つた) 中小姓伊東甲子太郎、近智武田觀柳齋(武田の暗殺は翌二年九月廿八日)徒士尾形

俊太郎、四名が従つてゐる。一行の目的が目的であつたけに、近藤は劔法者よりは、

學者である三人をつれて行つたのである。

かちがた

ちうこしやうい とうきねたらう きんしふたけだくかんりらさい

徒目目付二人、小人目付四人の外に、主水正給人として、近藤勇(近藤内蔵助と愛名して

ほか

こんどううきにん

いさみ

もんどのしやかちめつけ

にん せうにんめつけ の方針に注意したのは、永井の臨となつて行つてゐる新選組の精鋭であつた。一行の

ぼうしん

この滞在中に、窃かに藩の内情を探知し、 長藩使者の随員と交りを結んで、その今後

はんしゃ ずみさん

こんご

ちやうおす

たいざいは

まちはん ないやうんち

ちう

そ

かに宿舍を引拂つた。

しゅくしやひきはら

ので、餘り深くは追究せず、飽迄も儀を正し、滯在約一ヶ月、十二月の十六日には

ぐわつ

たいざいやく

にち

つひきう

ゆつ

で

ふか

たい

記こと

じんもん けいしきてき

もんどのしやう

ぐんそ

て、八ヶ條にわたる訊問(藩主父子の護慎の實が擧からない事、山口城の修理をして兵備を爲

じんもん

じゃう

長州ばこれにし、奇兵隊よりの宍戸儷後介を、かに老臣宍戸備前の養子に仕立て

新

末始粗選す事等)に、辯疏せしめた。 主水正 (五二)は、この間の形式的である事は知つてゐる

にん 記末始粗選新

303

五〇長州下

はまぐり もん

へんご

くふ

ちゃうしう

くわんけい

り

しやうぐんげご しんせい

‟ちよくきよこ

蛤御門の後、幕府と長州との關係がもつれにもつれて、將軍家御親征の勅許を乞

ふたのが、前にも書いた通り、五月下旬だが、何しろこの頃のは、

は長州征伐どころの騒ぎではなく、体の勅許を道つて、、、、和蘭の四頭公

くわんたい

へうご

にふこう

しまつ

いへもち

おほきかじやう

が、艦隊を引きつれて兵庫へ入するといふ始末。家茂は大阪城にあつたが、内憂

ないい

じつ

わん

くる

ゟ

えど

ひきかへ

こと

外患、その苦しさに堪え兼ねて、そのま~江戸へ引返そうとした事さへあつた。

一、長州の様子はどうだ?御親をとなくてはあるが、その賞は、むしろ名分が立

ちゅうしうくつぷく

しんせい ちよくきよ

ぐわつゆじゅん くだ

つて、長州が屈伏してくればいいのである。將軍親征の勅許は九月下旬に降ったが、

へい

ぐわっ

にち

とつぜんひろしま

きうもん

また一兵も動かさない。そして、その年の十一月十六日に、突然廣島へ着いたのは訊問

しおほめつけながゐ もんどしやうなほし

ふくし

めつけとが

らうた。なる

かう

使大目付永井主水正尚志(一) 副使として目付戸川鮮三郎忠愛の一行であつた。

しんせんぐみ おまだ さいとう

のち

じやうほしきりおひ あひて

とき

かたをか

なか

新選組の沖田齋藤などは、後になつて四條橋の配合の相手は、土佐の片岡と紀州の中

井と知り、八方人相書をまはして手をつくし、検索殿重を極めるので、片岡は、大傷

と自慢した。(田中光顯談)

がよくなると、またこっそりと十津川の田中光のゐたところへ戻って行った。そし

て先づ第一番に、まつ裸になつて肩の深手を出して見せて

「これを見ろ」

じまん

い

末始粗選新

301

おひつ

兵法に等しいものである。齋藤一人が立つて切り立て、切り立て、弁は西の方に

追詰められ、だぢくとなつて終った。

しょ

かにをか

しばんおまだ

ながくら

きいう

A

また

かたをか

ひだりかださ

片岡には、自然沖田と永倉とが左右から斬りかけたが、瞬く間に片岡は、左の肩先と

右の足に深手を負って、橋の上に、ぶつれてった。の中で齋藤が見えない。パ

位を相手にしたのにどうしたのだらうと海町永倉が之れをしに行く。邨弁は、一時そ

にん すたみ

に

の場を逃げたが、三人の姿が見えなくなってから、こつそりと出て来て、感も絶え絶え

になつてゐる片を肩にかけて、ぐその場の生命を拾った。

かたをか

ふかで

やふやまちあねこち

しょてん

いけむらきゆうべる

片岡はずいぶん深手であつたが、漸く麩屋町姉小路で書店をやつてゐる池村久兵衛と

のか

おうきう

あて

しもさりやうしゃ うら

いふのが懇意なので、ここへ逃れて急の手賞を受け、 それから下御靈社の裏手にある

古本屋の小座敷を借りて、ここに潜んで療養をした。

四九 四 四條橋

せいくわつ

こと しんぼう

がま ごうしちう

大胆不敵な片岡源馬は、こうしたぢつとした生活をしてゐる事に辛棒し切れないの

で、十津へ出て行って歛織を戦へたりしてゐる。この十津川の郷士中で第一の客は

邨究官五郎。まだぜ歳そこだが、活蔵元氣な人物、居合を抜く事は一流に達してる

じぶん

しょ

た。これが京へ上るといふのを聞いて、自分も形勢観察に出かけると、一所に上洛し、

なかたち まるたてふ

つはごうし

とんしょ たいざい

しょぼう どうし

おうらい

中町の丸太町にある十津川郷士の屯所に滞在して、諸方の同志と往来してゐた。

ある日、高瀬四條下るので、この片と中井が酒を飲み、鯖途、四條幡器で一

つぶえ

おきだ そうし

なが

さいとう

にん で あは

新選組の一粒選りの猛者、沖田総司、永倉新八、齋藤一の三人に出逢せた。

牛ぎ

けんかく

たがひ

けんくわ

おは

互に、それとは知らなかつたのたが、酔った紛れに喧嘩をはじめ、一斉に抜き合せた。

なか

あひ たつじん

しんせんぐみ

中井は居合の達人だといつたところで、場数を踏んだ新選組のこの中にして見れば、

どうし

ならぬ企てさへある情報を耳にし、元の土佐に於て、容堂侯守護のため、藩のお世話にはな

らず私の費用を以て、江戸へ出たいといふ連署血列の願書藩へ差出した。この血の同

志が五十名、それからずつとこの人達五十人組といつたものである。

けいくわくな

なかにしや さらう

なかにしゆきえ

‟他の同志はこれを知つて、計書の成らざるを知り、中西彌作郎(彌三郎) 中西靭負の案

ぜんご

ひそ

やまと

おちの

さいしょ

をりたちむら ぶんぶくわん

内により前後して、窃かに大和十津川に落延び、最初は折立村の文武館にひそみ、更ら

とぼけ こ

どうしたなかくにをかた せんぷく

にえぐいも峠を越して上場の同志田中邦男方に潜伏した。

かは

はくり

たんざく

きび

ぎけい はけいじ

らう

きしうひ

しかし如何にも幕吏の探索が厳しいので、田中の義兄千葉慶次郎といふのが、紀州日

ひそ

の、つと山の中の三路村にゐたので、昨ので、三慶びここへむこと

なつた。

きか

じじゃう

ひらたいし

めいもく

阪を去りかねた事情があつて、平隊士といふ名目に甘んじてゐた。

+

ちんてい

うち きりこ

ちやうどせつぶん

きいわひ

それッといふので門弟を集め、その夜の中に斬込みをかけた。恰度節分の夜で、

こと

にん

どうとんぼり

いへ

どうし

なかぬきかうたらう

な事に、光顯伯をはじめ同志三人は、道頓堀の鳥毛屋といふ家にある同志の中沼孝太郎

を訪ねて行って留守であつた。居合せたのは大和二四唯一人。そこへどかどかツ

とつて来た。

おほり

ふんぜん

たちむか

つひ

おくざしき

ぜんしん

よ

ふかで

さんきつ

大利は然として立向つたが、遂に奥座敷で、全身七ヶ所の深手を負つて斬殺された。

にんぐみ

ひとり

としいま

ひげら

にち もと

かる み

おほきみ

土佐五十人組(1)の一人で、年未だ廿四。 この非業の死の前一日「元よりの輕き身な

れど大君に、心ばかりはけふ報ゆなり」と偶然にも、世とも思はれる一首をよんだ。

(一) 土佐五十人組といふのは、越前侯松平春嶽が政事として、いろな改革をした

が、人質的に大名の妻子を江戸に留め置く事は云は、人種蹂痛であると云ふのでこれに歸國の

自由を奥へたため、江戸の各藩邸の近所は火が消えたやうになった。これを恨んで江戸市民が

悪口雑言する。この越前侯と土佐の山内容堂が大の仲好しなので、この二人に対して穏やか

四八谷萬太郎の斬込

たに

とき

けいおうぐわんねんしやうぐわつか よ

まだの谷三十郎が生きてみた時である、元年正月八日の夜、三十郎の兄の

おほさかまつやまち

きりこ

もんでい

こと

太郎が、門弟を引きつれて、大阪松屋町のぜんざい屋へ斬込んだ事がある。ぜんざい屋

も

+

しゅうばい

しゅにん もとむしゃのこうちゃう けら

ほんた おほくら

じん

といつても、それは表向きの商賣で、主人は元武者小路卿の家来で本多大内臓といふ人

(

いく

と さ

ろうにんなすのせいま

おほしん

物。この家には土佐の浪人那須盛(本名片岡源馬) 大橋慎三、 大利鼎吉、それにいまの

たな

ぶん はまだたっぺ

せんきょ

田中光 顯伯爵、その時分の濱田辰彌(田中謙助)の四人が潜居してみた。

とき

光伯は時に二十三歳。この赤年等が大阪城に討をかける無謀な相談をしてゐるの

どうはん たにかはたつきち

たにまんだらう

が、同の谷川辰吉といふものから、萬太郎のへ洩れた。

たに

まつやまち

まちだうじやら かま

けんぽふ

おし

おとうと

らう

とも

谷は同じ松屋町に町道場を構へて、剣法をへてゐるが、弟の三十郎と共にすでに

新選へだつてゐる。三十郎は、副長助勤から紅長をやつてゐるが、兄の太郎は、

ほ

おと

み

ひき

といつて、後をも見ずに引揚ける。(西村翁)

*

せつ

くらんりうさい

こんどう ちんべん

たい

だったい

ゆる

こまやう いづも

一説には(馬場文英翁) 觀柳齋は、近藤に陳辯して隊の脱退を許され、故郷の出雲へ

たけだがいたう

An

しん

らうとして、この竹田街道へさしかつた時に、斬られたともいふ。この説むしろ信す

べきである。

末始組選新

295

さいとう

なにごと こうじ

し かう

るが、あれは齋藤が斬るから、そのつもりでゐるやうに、何事も公事である私交のため

に曲げられるな、といはれて来たので、何時、齋藤が斬るだらう、今か今かとはらは

お

らして歩いてゐる。

みち かもがはす

たけだがいだうぜにとり楽し

ころ

みのこく

細い道で加茂川筋の竹田街道錢取橋(土橋)へかつた頃はもう成刻(五つ午後八時)

ぽんき

たけだ

つぎ さいとう しのはら

あと

おうらい

を過ぎてゐる。一番先に武田、次に齋藤、篠原が後からついて行く。もう、

ひとかけ た

ものもなく、人影が超えてゐる。

で

これから出て田村の本街道へ出ると、夜といつても人通りがある、そうなると

ことめんどう

おも

どし

いな

さいとう

うしろ

ぬきう

おほけさが

事面倒と思つたのか、 土橋を渡るや否や、齋藤は「えッ!と」背後から抜討ち大袈裟掛け

たけだ

しのはら

たち

さいしょ

に斬つた。武田があッといつて、のつけ反つたところへ篠原も一太刀、しかし最初の齋

とう

هو

たけだ

そし

しま

藤の一太刀で、武田は即死して終つた。

たけに

さうとう うま

さいとう

武田の双刀を奪ひ、齋藤は

「武田は日頃の廊言にも低いですな』

まつくら

ぐわつする

眞暗になつた。いまでいふ拾月末。

さいとう

しのはらくん

『堂々と薩邸へお入りなさい。夜でもあるから、人道は物。齋藤君(三番隊長齋藤1)

ふみ

篠原君(監察榛原泰之進)御所御苦勞ぢやが伏見の藩邸つてやって下さい」

と、はじめて武田を離すといふ。篠原は割に武田とは何がいいので、この方は有難いが、

くみ

なか

りう

けんかく

けんじゅつけうじゃがしら

さう!

齋藤一はちと危険である。組の中でも一流の剣客で、剣術教授頭の錚々だ。お負けに

少し酒でも飲むと、心を斬りたくなる癖がある。

$46

『それには及びません』

といつて断つたが、アノといふので連れ立って、本陣を出ると、油小路から南に出

て、間の細道を歩いて行く。

しのはら

あんしん

そくか

篠原は出かけに、近藤から、武田の悪謝を説かれ、彼女の安心のため足下をつけてや

記末始粗選新

293

たけだ

こょろ

おも

もの こんどう みつこく

けいなう

これをまた、かねて武田のうぬぼれを快よからず思つてゐる者が近藤へ密告した。慶應

ねん

ぐわつ

たち

ひ

>

かに

こんどう たけだ

たい かんぶれつざ

よびご

わざ

二年九月廿八日、日の暮れ方に、近藤は武田を隊の幹部列座の中へ呼出し故意とニコニ

コして、

『お手齢はこのごろに膝を離れて薩摩屋敷へられると聞いた時、鍵に結構な事

どうし

べつえん

である。れにもせよ苦楽を共にした同志、一つ別を張らう」

しゅえん

もよほ

ただ

くわしま

おも

といつて、直ちに酒宴を催した。武田は、さては破されたか、失敗ったとは思つたが、

こうなっては鷲に狙はれた雀である。

『Sや把者は雛かに薩の情を探るために、霞りに邸しゃうとの心でありますが、ま

ちんぺん

はり むしろすは

こっち

だ定まつてはおりませぬ』

と陳したが、その席は針の建に座つてゐるやうな心地であつた。

さい

たい

この上は、一秒も早くこの場を去らうとして、再三再四、緋退をするけれども、近藤

は珍らしく上機蟻の様子を示して、なか懿さない。

たいし

どう きよくちゃう しんか

こゝろえ

『隊士一同は局長の臣家と心得てゐる」

かん

こと

こんどう

ひらかた

こんどう

しん

のち

など、いい加減な事を近藤や土方にいふので、一な近藤はそれを信じて、後に思は

さん しゃう

さすが

てつ

いじん ひぢかたとし

だけだ

ゆだん

ざる違算を生ずるやうな事になるが、流石は才人の土方歳三、どうも武田には油断はな

おも

らないと思つてゐる。

うち

だんぐてっぽう

せいやうりう

うたい

くふ

しき

よう

その中に、段々鐵砲が渡されて、西洋流の銃隊になつて、幕府はフランス式を採用し

しんせんぐみ

ほう

しゅ

たけだ

こふう ながぬまりう

たので、新選組もこの方の教練を主としてやるやうになると、さあ武田の古風な永沼流

まるうつ

1146

ひちかた

にら

はたいろ しだい

丸寫しでは困って来る。それに土方が読んでゐるので、武田の旗色は次第に悪くなつ

た。

おち

たけだ

こんどう

きんさく

こと

落目になると、いろなボロも出て来る。武田が近藤にかくれて金策した事などが

君にだり、極端に凪はれ出したので、もます大きくなり、時には洋式調練など

を非難したり、家業の伊藤甲子太郎へりにおべつかを使ったり、時々かに薩摩屋敷

たい きみつも

へして、の機密を洩らしてゐる様子さへわかった。

やうす

揮 多:

さら もの

たちとり きつしうだつほん とやまや へいる

をはねて晒し物とした。この太刀取は薩州藩の富山彌兵衛であつたといふ。

はんたいぐみがしら たけだ

五番隊組の武田観柳は雲松江藩の野生であつた。甲州赤沼流の兵法をやる上に

ぶんさい

うへたいちゃう ひぢかた

はか

なか文才があつて、その上隊長や土方などにおべつか許りしてみた。 そのおべつか

振りが、餘程はげしい人物だったと見え、新選組の記述をした古いものや、残り士

をとこ

A

こと

だん

の談話などには、すべてに、この男のおべつかであつた事を書いてある。

京都で第一期時代の入隊者だが、忙しろ町道場にを振るつてゐたやうな武骨者の

としては、兵法者が居ないので、武 武田は直ちに副長助勤となり、全軍の調練を指

ちゃう ほんぢん うつ

だけだ

たいし

ひき

ふくちやうじよきん

いけつ

ぜんぐん

で

くわい みぶむら ひろ

をやつた。七條の本陣へ移ってからも、隊士を率ゐて毎月四五回は壬生村の鬪つば迄

ねっしん

したが

ぐんし

こと

出かけて、こで熱心な調練をやった。従って、自然、軍帥のやうな事となり、ぐつと

お高くとまつて終ふに至つた。

傷は急所を脱れ、潮ぐ生命は助かったが、後手を受ける時に、りにその刀傷の

多いのと、手であるのを見て、氣を失び、そのままた倒れて鋭した。

もとふくちやうじょきん

ひろしま らうにんまのかほる

たいめい ぼうよう

きんきく

こと

かづの

元副長助勤をやった廣島の浪人淺野薫は、除名を冒用して金策をした事が知れ、

さぼりせんしやうじむらつ

おきた

སྐྱོ

しま

川勝寺村へ連れ出されて、沖田総司のために斷され、屍は心の中へ蹴込まれて終つ

た。(連名記には鳥原に於て斷首とある)

こちやづかはしまかつはる

らくさいかはしまむら さん

おさか らうちう

きんか

がくもん

伍長川島勝治は、洛西川島村の産で、大阪で浪々中に参加したが、學間はあつたけれ

おくびゃう いけ

じょたい

い

しま

かは

どもどうも臆病で不可ないので除隊を命じて終った。それにも係らず、その後も浅野同

様隊名を爲づて金策した事が露見し、二條河原で捕へられ、丸坊主に頭を刺った上、前

あさの どう

末始粗選新

289

單に病死と誌してある)

とも

酒井兵庫は、新選組成立と共に、京都から感募したデは第一期以来の人物で、男の

しんにん

いけいかた つと

はまぐりごもん

がっせんご

たい

そうし

へうご

信認もあり、會計方を勤めたりしてゐたが、蛤御門の合戦後、隊がいよく盛んになる

たいし

けいはつしゅんれつき

きつがい

もの かぞ

くらゐ

つひ

につれ、隊士の刑罰峻烈を極め、殺害される者が數へ切れない位なので、遂に怖ろし

たい たつそう

おばかすみよし しんしょくほう

すがた

くなつて隊を脱走し、大阪住吉の神職某のところに姿をかくした。

さいしよ

にんけん

したが

たい きみつ

にぎ

兵庫は、最初からの人間であるから、従つていろ隊の機密も握つてゐる。これに

脱走されては困るので、八方手を靈くして探した結果、その居所を突止めたので、浦田

か

めい

あるよ ふい

總司以下五六名が、或夜不意に彼を襲

きっぽん かいえだたけつぐ ないつう むねみつこく

もの

しやうち

いき

しまだん

『薩藩の海江田武夫に内通の旨密告する者あつて承知した、隊規によつて断する」

をくぐわい ひきだ

むね せんこく

きりふ

旨を宣告し、屋外に引出して、ずたに斬伏せて去った。

とし

る。年廿七であつた。

たいちうだい

やり めいしゆ

はらだ きのすけ ししゃう おほきか

さんか

びつちうらうにんたに

隊中第一の槍の名手として、原田左之助の師匠、大阪から参加した備中浪人谷三十郎

おな

ねん ぐわつにちとし

びよう

いまはんめい

(七番隊組頭)は、同じく二年四月一日頓死した。病氣の何んであつたかは今判明しな

ばらづあたま

たいちうじうじゅつけうじゆかた

ぐみち

まっはらちうし

に

らう

坊主頭で、除中柔術の教授方をしてゐた四番隊組長松原忠司は、谷三十郎の死と前後

しつきく

せつぷく

かたなら

つきた

いうじんたち

いさ

し、些さかの失策(不明)を苦にして、切腹をしやうと刀を腹へ突立てたが、友人達に支

どぜんくわい

へられ、直ちに醫師を招いて養生をしたので一度全快した。

こうなつては隊規により自然組長になつてゐる事は出来ないから、平同士の死に下が

こんせき

せつぷく

けいくめ

し きょ

つたが、間もなく切腹の痕跡の経過が悪るくなつて、死去した。(同志連名記は谷松原共に

記末始組選新

287

瓶の「授、頭をしてみた田中寅藏(加州藩、信行)は、慶應元年三月十五日、

いせつ

しゆうゆう

たいま

みだ

ゆう

ふく

ときわづ

ひ

激の攘夷説を主張し、隊規を紊すといふ理由で、遂に屠せしめられた。その時僅かに

さい けんじゅつでき

ひんかうほうせいいうる

きうし

廿七歳。 剣術も出来たが、品行方正有爲の壮士であつた。

とふく

し

居する前二首の世を詠じ、恋々として死につたい。

ลม

いつかたも吹ば吹せよこの風よ

たかま

はら

ふく

高天が原はまさに吹まじ。

よもやま

とき

四方山の花咲みたる時なれば

親もさくむさし野までも。

**

かんちゃうかた

いうぐう

かあひし

らう

いちやうぼ ふせい

隊の勘定方として優遇されてゐた河合耆三郎(播州高砂の、義輝)は、 計帳簿の不正

はつけん

けいおう ねん

ぐらつ

にち たいちう

おい だんしゆ

せつ

ちゃうば

あるを見せられ、慶應二年二月十九日、除中に於て首された。一説には帳簿のつけ

誤りから金銭出線に不覚を生じたので、自から苴を負って切腹して果てたともいはれ

て切腹させた。

たうりやうおしな

ほ

めかけとも に

しま

一太刀兩足を薙ぎ倒し、そのま妾と共に逃げて終つた。

たうち

あま

ふい

つりせま

町内は餘りの不意だつたので、力を合せるひまもなく、足をやられたので追跡も

でき

ほ

はつ

きんりん ものよ

むね ほんぢん つうほう

もら

出來ず、大聲を愛して近隣の者を呼び、この旨を本陣へ通報して貰った。

たうち

どうし

て

かご

ほんぢん

もど

いきみれつくわ

ごと

ぷり

やがて田内は、同志の手で、駕へのせられて本陣へ戻ったが、勇は烈火の如くに怒つ

しだうふかくご おもむき もつ たいほふ

つぶく まをしった

かんぶ

て、士道不覺悟の趣を以て隊法によつて切腹を申渡した。夫婦はそのまゝになつた。

瀬山瀧人、眞田大郎といふものは、土方歳三が江戸から手引きしたものであるが、

にん

せつぷく

の妻と通したといふが耳に入り、編臓の上、規運として、同時に本陣に

おい

末始粗選新

285

ふく

ひらどうし

四七隊士ぞく! -斃る

堀川の本陣に移ってからは、男は一緒に命じて、死に規律を厳重にし、一にも妨

せつぷく

けいほつ

そうれ

二にも切腹、刑罰むしろ壮烈を極めた。

平同士で田内知(藩不明)といふのがあつた。八條村の野外に小屋敷を借りて、ここに髪

ほんゑんじ

てら

かぐう

みと

きらひ

を聞つてゐたが、それが近くの本圓寺といふ寺に假寓してゐる水戸の侍と密通し、あ

る日もまたやつて来てゐると、突然旦那の田内が来たので、ろいて把に隠れた。

田あ

たれ

とびら ひら

内はその押入を背にして嘘って、ふと見ると酒肴が出てゐ

きす

「誰に酒を出したのだ」

とうろ!~してゐる髪聞いた瞬間、心の中では、さては厳と思つたので、そこの

いな

うし

たうら

かき

あ

たちあが

扉を開くや否や、後ろから抜討に田内の肩先へ浴びせ、ろいて立上るところを、もう

けんざいゆうらうおう

こんどうす

しかし、現在勇五郎翁をはじめ近藤家の人々は「鹿角」を用ひてゐる。

ひじかたとし

土方歳三は、 丸に三つ

ひとぐ

しかづの

もち

記末始粗選新

233

一つき

もち

用ひた。

付を着て、 機械はいつも白い燃をつけ、着物の縞なども、極めておとなしいものばかり

二城へ登城する時は騎馬である。二耐一荷、櫛一、賞に堂々たるもの

とき

うり

つね

うきうけた

であつた。登城の時は草履をはいたが、常には琉球下駄、 陣織は餘り着なかつた。

ほ

かみ ほけんぶく

くら

髪は細元服で大たぶさ(後には總髪して大たぶさに結んだ)口をぐつとへの字にしてゐる

(島田魁翁遺談)

定滅は「丸に三つ那」島田魁翁の遺説(江戸誌二の三)には「下り藤」とあるが、こ

こんどうけ

じつか

みやかけ

わけ

はんめい

みやかはす

れは、近藤家にも、家の宮川家にもないので、どうした語か判明しない。宮川家は代

代「鷹の羽打造」を思ひ、近藤家も、天然理心流初代、内蔵助長裕、二代三助方昌共に

よう

ほし

たいしうすけくにたけ

いた

ひき

いさみ およ

「九曜の星」三代周助邦武に至つて、「丸に三つ」を用ひてこれが、男に及んである。

282

記末始粗選新

をしてある事がわかりました。しかも土地では第一の流行で、井上さんだ

さいごうじうどう

とうひろふみ

おれきく

ひいき

の、西郷従道さんだの、伊藤博文さんだのといふ御歴々の御最負になつてゐました。すぐに大阪の代言人を灘んで、殿へ取戻しに行つて貰ひ、眠とが戦ぶり

かで對配したのです。

つき

したぎ

お肌はその後、朝鮮の貿易商に付き、子供が三人出来たといふ。たどこの記述に惜し

はなし

みゆきだいふ

ほんわうすじよう しつ

むらくは、この話をしてゐる深雪太夫の本名素性を失してみる。

男は外出する時は、仙台平のまち編は極めて細かいのをはいて、上着は黒

じゃうぐら

らうし ふう

ちょっと

うん たいめう ふうぞく

付、下着は八丈位、浪士風はせず、一寸、小藩の大名の風俗であつた。

だいせう こしら

くろっかろいろぎや

いた

いふくふだん

大小のへは黒柄呂色鞘などで、至つておとなしいのを好み、衣服は平常でも多く絞

末始粗選新

281.

明治十二年に、三本木の野さんをたづねた事があります。 ふでもなつかしがつ

て嬉しい待遇をしてくれましたが、「近藤さんの濡れた身の男の子は何うした

までさとご

までてもと そだ

ぶつでし

か」と思つてたづねましたら「五つ花里子にやり、それから七つ迄手許で育てたが、

或るべの勸めに任せて東福寺に入れて佛弟子とさせたところ、和尚も力を入れて

ちからい

いま

するたの

ちしき

はなし

わたし

ゆう

へたので今では末頼もしい智識になつてゐる」との話をきいて、妾はお勇のことに

おも

はちい

思ひくらべて恥入つてしまひました。

暁治十五年に、霞信の“妹”が突然神戸から手紙をよこしたので、海岸の糸屋と

いふ宿へたづねて行きました。その後遠いシンガポールで稼いでゐたと申すので

す。どうせは暗い稼業でせうが、それでも千圓語りの金を持つてつたとの話。

ゆう

けいさつ

たの

ほうて

さが

はくわん

けいしや

それからお勇を警察などにも頼み八方手をつくして探してみると、馬鬪にて藝者

こと

たり

ないとう

もとしんきんたいべつて ぐみ ひと

かほ

ぞん

を

の事を頼みました。内藤さんは元新選隊別手組の人でもよく存じて居ります。

ないとう

かけおひ

ゆう

ひきと

ゆう

こんどう

内藤さんの掛合で、お勇をすぐに引取りました。 さて、お男に「お前の父親は近藤

いさみ

かた

ひこ

とうさま

な

男といふ立派なお方、それが舞妓などになつてゐては、お父様のお名を汚すといふ

ま

もの」と申しますと、おもはじめて父の名を聞くので定めしろきもし、喜びも

おも

あんぐわい

きほど

かん

やうす

ゆくゑ

するかと思ふと案外にも左程にも感じた様子もなく「母の行衛さへわからぬといふ

くらゐ

やは

まいこ

で

はう

わたし なさけ

おも

ないとう

位なら矢張り舞妓に出てゐた方がいい」とのこと。妾も情なく思ひ、内藤さんも、

父の昉労もあるから徳川様に御麗ひして御邸に奉公をさせても可し、数の茶に

こんい

やうじよどうやう せわ

しんせつ

くだ

懇意もあるから、養女同様に世話をさせてもよいと、いろ(親切にいつて下さ

ゆう

うち

ないとう

とうすやう

よく

ましたがお勇はどうも氣がす まぬらしく、その中に、内藤さんも東京へお帰りに

ゆう

ぎおん ちょけん

ま

いへ

にけだ

すべ

しま

なる、お勇は祇園の女街に欺されて家を逃出して姿をかくして終ひました。

惱

はな

ました。

こんどう

かいぐわい

めいち

ねんごろ わたし

個で放したがらないので、その儘にして置きました。明治七年頃、妾は八幡

りの生活をしてゐた開口といふの後妻になりましたが巨人にもこのお男の弱を鑑

し、再び脂取の揶合をしましたが、今度はお男が黒子とは知らないで、何うしても

艦だと泣いて賽の方へ来ないのです。仕方なしに思ひかつてだりはなしにして置き

西郷さんの戦争の時に、御殿で十四五の舞がお

西郷さんの戦争の時に、 祇園で十四五の舞妓がお勇の幼顔にそつくりなので調べて

見るとお勇、此方へ無職で舞妓に出すのも不都合ですが、こんな事をさせてゐては

藤さんのにしても濟まぬと直ぐに掛合をつけたくは思ひましたが、恥心の

(お孝)は網戸へ行ったきり音信不沉、風の便りに聞けば上海とか香港とか

ひとづて

わたしをつと

ひとよし

かけあひと

海外へわたつたとの人傅もありました。妾の良人はお人善でそんな掛合事は出来

はた

可加

でき

成

さいわび

ひと

ぬし、よく警隊の内藤さんといふと麗寺で逢ったのを

幸にこの人にお勇

ふしみとは

せんきう とき きやうと こんどう つか

した。伏見鳥羽の戦争の時、京都で近藤に使はれてゐた伍作と申すのが、妾のとこ

ささく

みかた

はいほく

おほきか

きちん

みこみ

ろへ逃げ込んで来ました。味方はさんぐな敗北、とても大阪へ師陣しても見込が

ないから、大津から身を忍んで逃げて来たとの話でした。

きやうに

近藤さんが京都をたつ時には多少の心をして行きましたが、子供があつて

ひよう

しだい

せいくわつ

こま

わたし ほう ひきと

いもうと

わたし こんどう

こうやうかせ

はなかく費用もかより、次第に生活にも困つて来たので、妾の方へ引取りまし

た。妾と近藤さんの關係は世間へ知れてゐるので、人気が落ち、鍵の出してみた

屋も駄目になったので、鍵は仕方なく家をみ、“妹”は子供を里子に出して、戸

の開港場へ稼ぎに出ました。

”と近藤さんとの間の子は「お男」と名づけ、近藤さんに瓜二つのやうでした。

祭り不眠でならぬので、明治三年頃、里子から邵取らうとしましたが、先きが干概

ちゃ

わたし

末始粗選新

277

こと

近藤さんは、津からお金が下りるので實に澤な生活をしてみました。麓に居

いもうと

うたく

しょはら きんだいふ

ぽんぎ

まの

ぎおん やきぎる

る事などは少なく、妹の妾宅か、島原の金太夫、三本木の駒野か、祇園の山絹、

やまざぬ

やうじょ

よし くわんけい

とここ

でき

いもうと

ほう

そんなこ

うま

この山絹では養女のお芳と關係して、男の子が出来、妹の方にも女の子が生れま

した。

阪本龍馬、中岡愼太郎のお麗人が斬られた日は、近藤さんは氣で〝妹〟の宅に駅

ふたり

ち

わたし

ておいででした。お兩人が殺されてから、二三つて、涙のところへらして「佐

ききたい らうら

々木只三郎等が阪本をやつつけたので、骸に酒が飲める」といつて、佐々村さん

ほ

を呼びにやり、大一座で酒宴を開きました。

おほきか ひきお

とき

ひづい

しょ きやうた

こんじやうなが

わか

大阪に引揚げの時、會津勢と一所に京を立ちましたが、これが今生の永いお訣れで

こんどう

たびんこうよう

おほきか

まい

近藤さんは度々公用で大阪へ参りましたが、間もなく身受けをして、京”べつれ戻り、

い

も

ぶつくわうにしもやしき

わたし いもうと

佛光寺下屋敷(西村翁記述には興正寺)に家を持たせてくれました。妾の妹のお孝と

ま

ちほさか そねざき

ひまと

せわ

きようだいふたり

申しますのが大阪の曽根崎にみましたのを引取り、姉妹二人が世話になつてゐまし

わたしれうまむす

ふしみ

ろしや

いく

とま

〃)

おりゃう

そる

たが、妾が慶麻質斯にかつて、伏見の醫者の家に泊り込んで治療をしてゐる共留

すちう

たう

に、近藤さんがお酒の上でお潔にからかつてが好いになつてひました。

いもうと

そねざき

ちやや 笑うこう

かたぎ

ばら

ま

時、妹は十八で、曾根崎でお茶屋奉公をしてゐたので、堅氣と申すのではありませ

あね

とこねと

んが、姉の男を寝取らうなど いふ氣ではなかつたのです。

じぶん

姿が全快して蹴って見ると、どうも“妹”の素振りが怪しいので、間ひ詰めた末

が、これの露だといつて泣いて指明けたので、姿も野暮は申さず、自分から近

藤に話して、那にお茶屋を持

にお茶屋を持たせて貰ふことにし、二百麗の本を貰ひ、それで島

「ちゃや

う

しほん

こん

原の或る茶屋を譲り受けました。

こんどう

そ

はうん

じみ

ぽんぎ

いき

近藤さんは遊びが好きで、方々にお馴染がありましたが、その中でも三本木の藝

こまの

を

ふか

なか

わたし

いくど

ついひ

駒野と申す妓は深い仲と聞きました。妾はその妓に負けまいと幾度か使をやつ

妓のから木津屋へ連れ込んで、さんざん怨言をいつたものです。酒の席でもそ

の頃は何となく殺気立つてゐまして、今日は誰を斬つたの、明日は誰を斬らうの

こわ はなし

わたしき

たうじ

こんどう

と、それは~怖い話ばかりでした。妾が聞きましたのでは、その當時もう近藤さ

にん ひと

ふうぶん

んは五六十人の人を斬ったらうといふ風聞でした。

わんち ぐわんねん ぐわっそうどうま

わたし おほさか

ほんまちおりや

まを

いた

みう

元治元年七月の騒動間もなく、 妾は大阪の新町織屋と申す妓楼へ替を致しまし

た。これは近藤さんと相談の上のことで、近藤さんの申すには「蹴中で俺が木津

深雪夫と浮かれてあると、現の戦をするものがあるから、ぐ京を離れて

呉れ、それには大阪が近くて窮しからう、ほんの一時の辛抱で、俺があつちへ行つ

ないさうだん わたし じつい

おほさか

て身受けするから」との相談でも實意を酌んで大阪へ行きました。

こんどう

つきた

しょにち

おし

かま

近藤さんも先きの御縁で、突出しの初日からおあがりになり、足繁くお通ひになる

わたし かほ

かくい

はど

しょく きんだいふ

はりあ

ぜんせい

ので妾の顔も廓内で巾が利くやうになり、樓でもお職の金太夫と張合つて全盛を競

たうじよ

ひぢかたとし

しろさだいふ

つたものでした。當時好くお連れであがったのは土方歳三さん、これは東雲太夫を、

✓

またち

らう

なみじ だいふ

なじみ

ふき

佐々木只三郎さんは浪路太夫に馴染をお重になりました。

しんせんぐみ

おもだ

らうしかた

ちが

of

かね

じゆう

Nor

新選組の重立つた方々は、浪士方と違ってお金に不自由が無かったので、遊びは派

手でした。姿のゐる津屋ばかりではなく、諸所のお茶屋を遊び廻り、何處へ行っ

ぎおん ちゃと

やまぎみ

よりひじょ

ても持てたものでした。 祇園の茶屋の山絹などといふものは、まるで寄合所のやう

いけだ や

きよ

しゅこうれう たい きが

かね

でした。池田屋の騒ぎで、酒肴料が隊へ下つたといふ時などは、その金のある

うた

にちや

いうきやち

めや歌、と日夜の遊興でした。

麴ら、どうかお艦の賣れた方の御負を受けたいものだと思つておりましたが、そ

の中に一度、文久三年の、ある方に落籍されて、あのいろな騒ぎのあつた

こぐみ

屋町屋の近くに膣はれてゐましたが、新選

らっし

いへぢう

新選組が突然に踏み込んで、何んとかいふ

浪士をかくまつてゐるだらうと、家中を捜し暴狼籍な振舞、その頃新選組の人は

ふるまひ

ころしんせんぐみ

ひと

心を斬る事を楽しみにしたで、ろしいので、姿がふるへてゐましたところへ、

かた

たいちゃう

どう とりしづ

うたがひ は

ひきと

たうじ

隊長さんらしい方が来て一同を取鎮め、疑も晴れて引取りました。それが當時三

ツ児も名を知つてゐた近藤さんで、安のお目にかいる抑々の御縁初めでした。

そもく

ごゑんはじ

はか

わたし こんどう

いきん

とし

年でした。

鄙らずも妾は近藤さんとお近付きになりましたが、間もなく再勤をせねばならぬ事

朧が出来て、双々、敵の木津屋から深野太夫と申す名で出ました。これが二十二の

こと

てゐるとの事であつた。

わたし たうねん

からだ

そうけん

みち

へいき

要は當年七十一になりますが、身體は壮健、五六里の道なら平気で歩かれます。

さけ の

お酒も飲みます。

わたし うま

やは

かなざ

ときやうと はんぎ

あやや ほうこう

私の生れは矢張り金澤ですが、十三四の時、京都三本木のお茶屋奉公に入りまして、

とき しゃばら ほうこう

だいふ

つきだ

とき

つや

十六の時、島原へ奉公しました。太夫に突出されたのは十八の時で、木津屋から若

だいふ

なの

ころ しまはら

しょこく

いりこ

てんてうかた しやうぐんかたひらひ

太夫と名乗って出ました。その頃の島原は、諸國から入込む天朝方や將軍方のお侍

まいよ

せんせいあそ

が毎夜のやうな全勢遊びでした。

ぽんぎよしだ や

ひ

ほんのう

木戸(前の孝允侯)さんの深いお馴染であつた三本木吉田屋の舞妓で、本名をおつまと

たうじ

ごちやうあい

な

しょうぎく

ゆいめい

申した妓が、當時十五才位で、木戸さんが御寵愛の蹴り、お名の「松菊」を藝名に

こと

ある

たいそううりだ

つける事をお許しになつてから、大屏噴出しました。

記末始粗選新

271

しまはらきつ

+

きんだいぶ

なじみ

かさ

島原木津屋の抱へで金太夫とも馴染を重ねたが、これは當時、京でも五指に數へられ

たうじ

きやう

かぞ

びじょ

とし

した

ふぜい

美女で、年は廿三、水の滴るやうな風情があつた。

ほか

やまきね

ぎおんまちいしだんした

ちゃや

ほんきょ

そ

この外に、祇園町石段下の山といふ茶屋を本據にして、だいぶ遊び、この家にも

じみ

んな

じゃうしんちおほがきや

はうめん

さうとうで

いり

染の女がゐたやうである、二條新地大垣屋その他遊ぶ方面には相當出入したが、いつも

駕籠の垂れを深くしたり、頭 を包んだりして、公然と登樓はしなかつた(明治廿二

年三月當時六十四才で存命してゐた新選組伍長島田魁のは甲斐ともした)

だんわ

しんぎ

おもしろ

ねっしん こんどういさみ けんきう

ところが談話の真疑はとにかく、ここに面白いことは、熱心に近藤勇の研究をやつて

こかしまとしをし

めいち

ねん

たうじ

さい

ぞんめい

みゆきだいふ

ぐうぜん

た故鹿島淑男氏が、明治四十四年、當時七十一才で存命してゐた深雪太夫と、偶然汽

なか

かた

きじゅつ

こ

みゆきだいふ

おひ

ころかなさは

いへ

やつかい

本の中で語つたといふ記述を残してゐる。 深雪太夫はその頃金澤の甥の家に厄介になつ

四六勇の風栄

じやうどほ さめ

ろき

つやばしさが

いさみ

こうせいじ しもやしき めかけかこ

男は、近くの七通り醒ヶ井木津屋橋下るところの、興正寺下屋敷に姿をつてゐ

& A

た。大阪新町の総屋のへで深野太夫といつたが、丈のすらりと高い廿三四の美しい女

であつた。

びやうし

どうにん いもうと

たかこ

しんせんぐみが やいまで

けだ

かこま

いぐらる おね

ゑ

これが病死したので、同人の妹で孝子といふのを受出した。これは甘才位で姉に劣

らぬ美人であった(太夫か天神か不明)ずつと新選組瓦解迄そこに圍つておいた女で、こ

の二女の身受けなどについて奔走したのは、大阪八軒屋の新選組用達京屋忠兵衛である。

京では、三本木の藝者駒野といふものとの間に男の子が出来た。外に植野といふ懿者

も引かせて、その父の家に遊ばせておいたが、これは美人ではなかつた。父といふのは

しょしだいおほべや

へやがしら てんじん おんまへどほ

所司代大部屋の部屋頭で、天神の御前通りに住んでゐた。

びじん

んな

謝く者もあるが微かに信じ兼ねるけれども、竹矢来を通して本堂から見える遊で、

し

こと

の切腹する者があったり、死にされるものが聞こえたり、町人等が縛られ

て攻められてゐるのが手にとるやうに解かるには閉口し、その新築移轉について、野菜

じつ

るだけの事をしたのは事實である。

しんほんちん

おもてもんだかべい しまだいけんくぅんなや ししやのま

ながらう

しょし

十

きやくしゃ

新本陣は、表門、高塀、式臺玄關、長屋、使者之間、長廊下、諸士の部屋々々、客舍

ものみ

なかま こもの

や

かつて もと

りつは

かはやまでとゝ

どうぐ

だいめうやしきふう

物見、仲間小者の部屋から勝手元、 それに立派な整った堂々たる大名屋敷風のも

こと

こんどう ろま

ひらかた

ねま

たいむ

と

ひろま

じょうちゅうごようべや

せいぜん

は城中御用部屋にも劣らぬ整然としたものであつた。

のであつた。殊に近藤の居間、土方の居間などは善美を盡くし、隊務を執る廣間の如き

隊た

まいにちでか

きりあひ

もり

مي

かたわら

いく

むねまでと

毎日出掛けて行つては斬合をする、今日つた者の血が、傍の家の棟飛んだと

まなし

か、破目の白壁より飛ばなかったとか、いや拙者のは屋根迄行つたとか、そんな話ば

かりしてみたといふ。

*

まんぐわんじ ほんぢん

20

ほりかはどうり ひがし おほつやはし みなみふどうぐむら

ちゃう ほう ちょ

本願寺の本陣を更らに堀川通の東、大津屋橋の南、不動堂村に一町四方の地所を求

ひきうつ

とし しよとう

たいし

しき

どう

め、ここへ引移つたのはその年の初冬であつた。 隊士を僅かな仕切りによつて一堂に集

めておく事は、どうも規律の上に面白くない、それに世間もよろしくなく、引いては

たい みけん

くわん

こんどういさみ ひぢかた

めい

ほんぐわんじがは かうせう

ほう

隊の威厳にも闘するからと、近藤勇は土方に命じて、本願寺側と交渉し、一方この旨を

をし

ひよう

ひづこう

ほんちん しんちくい てん

ほんぐわんじ

おい しべん

會津侯へも申上げて本陣を新築移轉した。その費用はすべて本願寺に於て支したなど

末始粗選新

267

みぶむら

ど」もいふがこれは結果からの想像に過ぎない、津侯に叱られて、翌日からの練習は、

王生村の屯所へ出かけて行つてここでやる事とした。

ころ てら ふきん

*

ほんじよはやしてうほぶおんじ はかもり ろうじん まだし

その頃、寺の付近に住んでゐたといふ本所林町法恩寺の墓守の老人の話によると、

願寺の屯所へは、いろな物賣りがやつて來て、隊士をい」お客にした。特殊部落の

女達が、猪の大きな肉を車へ積んで来ては、門前でつてゐる、隊士が出て来て、銘々

もと

じぶんだち

へや なべ もちこ

に

好きなだけ買ひ求めて、自分達で、部屋へ鍋を持込んで、煮て喰べた。

た

さあ今日は猪が来たとなると、これを煮るが、主の居間の方へ溢れて行っ

ས

本楞

しかた

たいよう

たいし

て、どうに

はうじう 短いくわつよほ

うにも仕方ない。大砲などよりは、この隊士の放縦な生活の餘波に悩まされるこ

とが多かった。

會津から砲二門を交付され、オランダ式の調をはじめる。武田観柳察が未溜

へいほふ

まが

てうれん しなん

きよはらきよし あべ

たいほう

の兵法を知つてゐるので、曲りなりにも調練の指南をするし、清原清と阿部十郎が大砲

とりあつか かに けうじゅ

まいにちつよくすりつ

くうほう ほな

うみ

おどろ

の取扱び方を教授する。毎日強薬を詰めては、ドカンと空砲を放つて、周圍を驚か

はなは

せること甚だしい。

王生の所では、如何にも場末であつて、市中取締に不便だからといふので、ここへ

ひきう

こと ゆる

しゅっしよく

たいはうれんしふ

いき

ほんぐわんじもんす

こうぎ

じつ

ど

移る事を許した守護職も、この大砲練習には些さか驚いた。それに本願寺門主から

で

にち いきみ とびだ

の抗議も出たので、一日、勇を呼出して

きうきょうちか

たいほう れんふ おだ

「宮居近くにあつて大砲の練習は穏やかでない」

しか

と、やんはりと叱りつけた。

はこの練習は、主をして節をこしらへさせるための手段であつたな

末始粗選新

265

四五 新

營

きはうどほ

しゅくわいじょ

住み賦れた王生の屯所を掘って、希望通り西本願寺内の集會所へ引越して来たのは

けいおうぐわんねんぐわつけじゅん

しふくわいによ

慶應元年四月下旬であつた(永倉新八翁の遺談には慶應三年三月とあり或は蛤御門の合職直後と

も云ふが、しばらく西村文の元年四月に従ふ事とする。西村翁は西本願寺門主の侍臣である)

ぜんこく どうりう そうりよ

うふ

きやうき

とき しゆくはく

また ぜんざんそうりよ

集會所といふのは、全の同宗の僧侶が召集されて京に来た時に宿泊し、又は全山僧侶

つけう

とき

しよう

たみ

し

おほひろま

いく

大説教などある時に使用するところであつて、疊五百を敷く大廣間、これを幾つにも

仕切って士のをこしらへた。

ほんどう

ひだ

だけ やらい

くべつ

もちろん らうや

くびき

どたん

本堂との間には、青竹の矢來を結んで區別し、湯殿は勿論、牢屋から、首斬りの土端

はまで

えいちう

うす

場迄もこしらへて、永住の樣子である。

しんせんぐみほんぢん

くわんぽんから

には「新選組本陣」と看板を揭げた。

こんどう

しょ

のこ

だつそう

には、近藤への書を殘して、脫走などはせず、そのまい、前川方で自殺したとも

ふへかかた じきつ

云ふが、要するに、土方歲三との勢力爭ひが、高じてこんな結果になつたものであ

る。

をした

と申渡した。

献もとよりすでに悟は定めてゐる。 瀧田が追跡して来ても、もし一戦をするの心

こと

ほくしん とうりう

えら

も

ほ

があれば、やみくと捕へられる事のない腕は持つてゐる。北辰一刀流は大千葉のとこ

ろで競傳、その上、柔術がよく出来た。

ありがた しおは

「有難い仕合せでござる』

そくざ

くろは ぶたる

もんつき あらた

ふとん

し

たんざ

いうく

と答へ、即座に、黒二重の紋付に改め、蒲團を敷いてその上に座し、悠々として、

まで どうし

みづきかづき

きのふ迄の同志と水盃を交はした。

かいしやくおきた そうし

やまなみとき

さい おきた

づ

さい

せんぷうはつらつ

した

やまなみ

介錯は沖田総司、山南時に三十三才、沖田は僅か二十三才、劒風撥溂たる下に、山南

くび

じつ ひきうさいご

の首は落ちた、實に悲壮な最後であつた。

おそうじ

ほうむ

遺骸は直ちに、壬生の地蔵寺へ葬つた。

にはいかない」

と、その話の一番を残して脱走した。

*

いまみ

きんらいやまなみ やうす

ひごろ

かは

ちうもく

さい

男は、近來山南の樣子が日頃と變つてゐるのを注目してみた際であつたから、すぐに

たつきう

おきだそうし

うま

點

おほみ おほつ

やど

やまなみ はつけん

その脫走が知れ、沖田総司が馬で追ひかけて、近江大津で、宿をとつてゐた山南を發見

し、直ちにこれを、王生へつれ戻って、櫛の前川一室に監禁した。神田は勿論山麓

かたなて

は

たいき

きりす

かくさ

が帰らぬといつて刀に手でもかけたならば、その場で隊規によつて棄てる覺悟で出か

けたが、山麓は、たと云ふがましに愕然として戻って来た。脱走は仕切れないと諦めたや

うである。

直ちに近藤以下の幹部が残して、きのふのの幹部にし

しんせんぐみ

ほふれい

だつきう

の法令により脱走の故を取つて切腹を命ず」

たいし

つね

ぶ だうれんま

ひつえう

けいこ

~11

はい

しほんやく

を許さなかったが、更らに改めて師範役を任命した。

その他、隊士は常に武道練磨の必要があるといふので、その稽古は一刻も願すること

にんめい

劍術師範頭

播盛奥加松武武頭

武州

州岡州賀 前州

柔術師範頭

播 州

久留米

篠 原

齋吉新田 永池沖

村

田

井中 倉

田

小

忠寅

新

太

貫一

1

泰之進

郎雄藏八郎司

256

末始租選新

勘 定

掛

外茨

諸士取調役兼監察

篠原泰之進

川

尾吉蘆新山篠

合

形村

谷崎

耆

俊業

忠

三

太

1

郎

郎郎雄蒸進

11

木

名 司

記末始組選新

255

橋池中富小中加久近伊葛阿前奥

田村山

小小

本

小太郎

皆

原

幸

彌兵衛

三兵

西

藤

*

部 正 親

納

東山

部野澤

鐵武

芳

十五榮

雄正

五八

書は

親祐郎郎郎郎助

い鷲

純鵬

助郎郎衛造 登

たと

N

記末始粗選新

林

川

信

四番隊

武 田

三番隊

原鈴藤谷井武松齋

五番隊

井 上 源 三 郎

六番隊

七番隊

八番隊

九番隊

十番隊

伍 長

鈴木三樹三郎

原田 左

田 左 之 助

島

田

魁

堂

平

三+

源觀

柳齋

原藤

忠

助郎郎郎齋司

1

太

勝

郎

司

末始粗選新

四III 武道師範方

しんせんぐみ

よく けいおうぐわんねんしょか ころ

あら

しょくせいた

まで

ふくちやうじょ きん

新選組仗、翌、慶應元年初夏の頃L、新九在職制之樹T大。九迄の「副長助勤」之

「組長”上改岁、宅DFL助役ELT「L彭」二咎,一觚千名之助THELㄤ。

總長

副長

參謀

一番隊

二番隊

伊近

甲方藤

歳

郎三勇

伊東甲 子太郎

永沖

倉田

新總

八司

252

記末始組選新

*

かうゆう

伊東一味の參加によつて、新選組はまた一勢力を加へた。伊東の外部に對する才氣走

ゑんまんいう

かいけつ

へうばん

つた交渉は、すべて組にとつて圓識有利な解をするやうになり、且つその評判もよく、

いさみ

にぶい

あ

さんざう

やくめい

た

勇は、入隊と同時に擧げて「参謀」の役名を奥へた。

やうふしうさい やまひ

ぜつはう

ききやうま

こと

江戸の養父周齋の病がいよ~絶望と告げられたのは、歸京間もなくの事であった。

ぐわつ

にち

しゅぢる

かずやりやうにゆん

たま

みやかはおと らう

しんろろ

十月廿六日、つまり主治醫の粕谷良循は、多摩にゐる宮川五郎をはじめ、親類一

たい

に對し

ゆうや

きうまく

やうたい みうけ

はやひきゃん

どう

ちつ

ぐわつ

にちあき

『明夜より早晩にかけ御臨終の容體と見識られ」

といふ早飛脚を立て、一同ぞくと集まった。

りやうじゅん しんさつどほ

良

しきよ

きどうひこ

・月廿八日朝六時 (午前六時)周齋は、小石川小日向の道場奥に

の診察通り、十月

ぎしいさみ

た、六十八歳であつた。葬式は、陛下の高弟であり義子男とは義兄の

しうさい

こいしがはこ ひなた だうじやうく

五郎が親切に

にやってく

くれ。 名は仁光院殿忠山道周居士)

いき

(大和郡山藩) 茨木司(御府内浪人) 青柳牧太夫(藩不明) 中村玄道(久留米浪士) 安富才輔

(御府内浪人)神崎一二三(御府内浪人) 富永十郎(同)後藤大助(同)小林幸之助(同)柴田

勝三郎(藩不明)吉田寅之助(京都浪人) 田内知(京都浪人) 舟津謙太郎(藩不明) 篠崎愼八

郎藩不明)古川小二郎、藩不明)小林峯三郎(同)梅戸勝之進(同) 沼尻小文吾(同)田村一

郎(同)鈴木直人(同)林小三郎(同)今井祐三郎(同)三井貫助(同)岡島品三郎(同) 水口市

松(同)加賀爪勝太郎(同)三品一郎(同)三品二郎(同)佐久間健助(同)松本喜三郎(同) 大

石造酒之助(同)横倉甚之助(御府内浪人) 小幡三郎(藩不明) 中條常八郎(同)三浦啓之助

(佐久間修理悖、客員)(永倉新八同志連名肥)

以上五拾名。(同時頃京都に於て加盟した多少のものも含んでゐる。三四名の淵もある) この

がい

いた

の めい

中、後に殺害さる」に至つた者六名。(伊東甲子太郎、服部武雄、毛内有之進、茨木司、佐野

せっぷく

は

もの

めい

七五三之助 富永十郎)切腹して果てた者四名。(橋本昔助、柴田勝三郎、吉田寅之助、田内知)

しけい しょ

めい

隊規にふれ死刑に處せられたもの二名。(横倉甚之助、篠崎慎八郎)但し篠崎は危機を脱走

M

末.

めのすけ

しのはらたいの しん

どう しはんだいなかこしのぼる うつみ

らう

佐野七五三之助(尾州藩) 篠原泰之進 (久留米藩)それに伊東の師範代中西登、内海二郎の

とうかいだう

つぎ

しゅくえきとま

みさ

ぐわつ

駕籠にも乗らず東海道五十三次をぶらくと、宿驛の泊りを重ね、十二月の一

にち きやうつ

日に京へ着いた。

この日

は、近藤から一同を除士として支給するとの話であったが、伊東は
、

しきふ じたい

じゆう

とにかく京都へ行ってから、改めて入隊するといふで、この支給を
退し、自由な

هوى

たび

氣持で旅をした。(篠原泰之進翁遺談)

こんどういきろ

たび とうけぶじんぱしふ おう

せんご

ほか

近藤勇この度の東下武人募集に感じて前後に參加した者は、この伊
東一味八名の

新井忠雄(御府内浪人、 荒井とも書いた) 安藤勇太郎(京都浪人) 毛内
有之進(津輕弘前耽

藩)伊東鐵五郎(御府内浪人) 近藤芳祐(御府内浪人) 久米部正親(御府内浪人) 小原幸

造(罰)富山彌兵衛(薩州脱藩)中村小三郎(藩不明) 池田小太郎(御府内浪人) 橋本助

・末始粗選新

ひさん

とうゆ さひはひ

おい いうし

してゐたので、久々の東下を幸に、江戸に於て有志の武人を募集する旨を公表してゐた

ぶ じん ぱしふ

むね

こうへう

かめい

よろこ

ので、伊東に加盟の意思あることを聞いて、大いに喜んだ。

とう

んのう こんどう

さく

ころ

こんどう

はくし

きう

きよくにんねつしん

伊東は勤王、近藤は佐幕。しかしその頃の近藤の佐幕思想は、極端に熱心なものでは

なく、たっ人とも夷のに於て共鳴し、一に意見を述べて、同盟を誓った。

*

ぐわつか

こんどう

しゅうぐんじやうらく

ようい

じつかう

こと

し

十月廿日。近藤は、将軍 上洛の建白が容易に運行されない事を知つたので、一先づ

きやうもど

こと

うふうきい

びやうやう

たいこと

ゆうす

さいし

京へ戻る事となり、養父周齋の病

も只事ならぬ様子ではあつたが、ろく妻子と

ひま

ど

はつそく

語りつける暇もなく、江戸を発足した。

どうかう

伊東甲子太郎が、近藤との約束により、佐賀町の道場をんで、家族を三田町に世

ませ、江戸をしたのは、翌十一月十四日であつた。

じってい

らう

かなうみちのすけ

はっとりだけを

同行は、實弟三樹三郎をはじめ加納道之助(後に鵬雄、相州伊豆藩)服部武雄(播州赤穂藩)

著

庫庄

変

をよくし、むしろ學者肌の人であつた。

八日旅出に際し、京の島原木津屋に別宴を張った。その前後の日誌である。剣法も強かったが和

伊東甲子太郎の筆蹟 新選組参謀、後に近藤のため暗殺された伊藤武明の筆蹟。慶應三年一

+

と

たけだ こううんさい

戸の武田耕雲斎などもりがあつた。

だうじゃう

じゃうしうしゅっしん

かにのぼる

うつみ

道場には、上州出身の中西登(昇) 内海二郎の二人が代稽古をしてゐるが、常に五

こん だいけいこ

六十名の門弟がだし、その頃、ふの道場として盛つてゐる方であった。

ちか

かめざはてふ

てんか だい

だいたうじゃう しやうぐんけ

て

ぢきしんかゆりう

とこやしもうさのかみ

近くの澤町で天下第一の大道場 将軍家のお手をとつた直心影流の男谷下総守 (精

一郎信友)すでに亡く、名劔島田虎之助(観山、また亡かつた。

しんせんぐみ とうどうへいすけ

ほくしん とっりう くわんけい

きんのうじやういろん

新選組の藤堂平助は、同じ北辰一刀流の關係もあつた上、勤王攘夷論が一致してこの

伊とは、ねて懇親の間であつた。近藤勇の東下につき、一足先きに江戸に出

てゐた平助が、煽りに伊東を説いて入隊をすくめ、近藤と児の手筈をつけた。

男は、池田屋事件を父に報じた手紙にもある通り、自分が武州の出身だけに、どう

も中國西陵の武士は家に入らない。「兵は東に限り”」との縁は事にこれを深く

つね

四二伊藤甲子太郎

たけ

深暒佐賀町に町道場を開いてゐた伊東甲子太郎(三二)といふ北辰一刀流の観客があ

のすらりとした眼の涼しい非常な実男で、なかよくつた。この人の戦闘

臟は、同流の中にあっても、戦のへで、な鋭艦であつた。(同志篠原泰之進翁遺

ときは

ちく だつはんしや

すき おほくら

ししやす いとうせい

びやうぽつ

さが

常陸志築の脱落者で、はじめ、鈴木大藏といつたが、師匠の伊東精一が病沒して、

ごうじゃう

あとつ

もんてい どう すきよ

ぼくら

いとうけ

なあと

町

の道場に、後嗣ぎが無い。 門弟一同の推擧によつて、大藏はこの伊東家の名跡を

こと」なり、伊東甲子太郎武明と名乗るに至ったのである。

親ばかりでなく、國際にも深く、和歌などもよんで、極く穏やかな人物、真面目

そういろんしや

はや

じってい

気

らう

とも

きんのう こくじ

ほんきう

な勤 撫夷論者である。早くから實弟の鈴木三樹三郎と共に、勤王の國事に奔走し、

水み

し

ちやうしうさいせい

ちよくきよ おほ

よくねん けいおうぐわんねんうるふ

ぐわつ

伺し長州再征(一)の勅許を仰いだのは、翌年、慶應元年 閔五月である。

(一) 第一回長州征伐は長州毛利父子 (慶親定廣) が伏罪謹愼し、事件の發頭として京を侵し

稲原越後、國司信濃、益田右衞門介三名を自双せしめる事によって、征長軍はに一兵も

へずして徹退 (或るべく戦争はやりたくないのだから)した。但し、その分については未

決定のまぁ、年を送って慶應元年となつたのである。

した

ひざ せつ

くわいえつ

じんりよくくだ

といちう

親しく膝を接して會調した。

伊豆守は、親征如何は第二の問題として、兎に角上洛して、天機を奉伺されるやう御

いさみ はなし

霊力下されたいといふ男の話をきいてゐたが

だんかん

うさまごじゃうらく

「誠忠の段感じる、た、上様御上洛となれば麾下のものどもにしても少なからぬ

って いりよう

お手當が入用であるからー」

と、財政的にも苦しい幕府の立場をそれとなく洩らした。男は思はず涙を落とした。

うへさまったんしん

ごじやうらく

れいいだ

そ

てあて

「上様御單身にて御上洛とお布令出し遊さるれば、お手賞などによらず武忠の士はか

とも つかまつ

ら進んでお供を仕りませう』

といつて、その場は一先づ退かつた。

いきみき はう

しやうぐんいへもち じゆうらく

た

じゅうらく

ごんき

ほう

しかし男の希望するやうになか將軍家茂の上洛はなく、三度び上洛して、天機を奉

きやうと んせんぐみ 射任

つか

どういさみ

こうよう

もっ

まかりとほ

「京都新選組、大御番頭取御扱 近藤勇、公用を以て罷通る」

我々に、く三人も名乗りながら走り通った。闘所役人は、その無器にあきれたが

『待て』

かご

といつてゐる中に、もう駕籠は三時も先きにとんでゐた。

こいしかほこ ひなたやなぎまち こんどう

たうじよう

かご

さやうと

づ

A

たんひき

いさみいか

小石川小日向柳町の近藤の道場へ駕箱の下りたのが、京都をたつて僅かに三日目。

にん

石に勇以下の四人もぐつたりした。

男は、翌早朝、先づ和町倉御門内にあった津肥後守の留守邸へ頭して、いろい

ろと、肥後守の話をして、事情を述べ、活動方法についての打合せをして一

旦退とつた。

それからは連日連夜、都府の老中を訪問し、或は建白書を奉 殊に松前伊豆守とは

まつまへいづの

にん

ことほ

り、もう外に方法はないと思つて、これを會津へ申上げると、

そくこくしゅっついた

『それでは即刻出發致せ』

との言葉。

ぐわつうこ

男は、永倉新八、學者の尾形俊太郎、兵法家の武田観柳齋、この三人をつれて都合四

その日の内に、肩だりをつけた早駕籠を仕立てさせて、飛ぶやうに江戸へ向った。も

いくにち

やうさむ

十月も残すところ幾日もなく、京の寒さは身を切るやうであつた。

ばせて、箱根の關所も乘打をした。

かご

なか

いさみ さけ

駕の中から、勇は叫んだ。

駕籠で一気に桑名桑名からは伊勢を艦で熱田へ乗越した。海上ひどい暴風雨

いのち

あぶ

ぶじ

あった

まい はやかご

に逢って、生命も危ない目に逢つたが、とにかく無事。熱田からまた四枚の早駕籠を飛

はこね

生きしよ

のりうち

ぐわつか

こうふ

つぐづ

ことん〜

ぼう しつつい

を八月二日に公布して置きながら、この愚圖々々してゐて、事に幕府の威望は失墜す

ぐわつ

せいちやうそうとく を はりこう よしかつ

ふくしやう そうげんこう

やうしまったひらしけあきとも

にら

る、十月十二日になつて征長総督の尾張侯 (慶勝)が副将の越前の子松平茂昭と共

「うしよょん ぢうしんく

ひら

に参して御暇を申上げ、で廿二日には大阪で、

で廿二日には大阪で、追討諸藩の重臣會議が開かれて十

一月十八眠を見て、攻撃開始と定め、全部は十二月。大阪としたが、さて、

しやうぐん みこし あ

そうなってもまだ江戸の将軍の御輿が上がらない。

もんだい

きんのうたう しょうぐん ちょくめい かろ

これで、ぐづくしてゐてはまた問題になる。勤王黨に将軍は勅命を軽んじたといふ

た

で

こうゆき こうじっ

ろん

こんどう

きしようもくし

攻撃の口實を與へるやうなものだとの論が出て、さあ、近藤は例の氣性で默止して

はゐられなくなつて来た

*

江戸へ早馬の便は立つが、はちっとも進まない。男は、江戸の御老中に

ご しんせい

てんき ほうし

ごじやうらく

迫まつて、御親征はとにかくとして、天機奉何のため上様の御上洛をおすめするよ

くだ

(四)近藤の長剣論として有名なもの。

殊に脇差の二尺三寸五分は、當時の男の武骨ぶりた忍ぶに足るものである。

*

男が、この手紙を差立てた時は、春にでもなったら、一度は江戸へ下らうといえ

であつたのだが、時局は、信の後に於て男を座するに忍びさる状態に置いた。

*

*蛤御門の戦争で、理は何れにありとするも、禁闘に勤して砲した長州の罪す

ひき

ちやうしうつひたうみことのりはく

べからずといふので、戦争につき廿四日(元治元年七月) 朝は、長州追討の新幕

府へお下しになつた。

その驚め、江戸にある将軍家が親しく御の軍(中国、四岡、九五藩)を統べる事

240

末始粗選新

添書に、俺ほ時節柄御自愛幕一になさるべき事、杵屋(粕屋良循のことへ宜敷くと

こと

きやうと

した。

Infir

の

京都は殊の外寒氣が強い事などを認めてある。

こんどう

やうと

むくわん

しゃう

じゃう

ひら

(四) これによると近藤は、京都にあつても「久武館」と稱する撃劍道場を開いたやうで

あるがずいぶん探してみたが、それに開する記述は何物もなく、且つ、あの務の間

こうも

ちょっとふ

らない。

まつひつ

ぐみ

まな

に、新選組と離れて、道場を持つ事は一寸腑に落ちないので、これはどふいふ譯かわか

えろめい ゆんのすけとしいぶ

源之助といふのは現に、日野宿に長命じておられる佐藤俊の事で

幼名を源之助俊宜といつたのである。

(1)長州の間者三名、御倉伊勢武、荒木田左馬之亮、楠小十郎を指したもの。

(ID)天王山の戦役、長野の敗走者の大阪に潜伏してゐるのを追捕のために向った時の事で、蔵屋

敷を襲うて女子供まで取押さへ、これを町奉行所へ引渡して後、しばらくその動静を探るため西

御堂に本陣を構えてゐた時である。

(三)佐藤彦五郎が如何に勇の爲めに盡してくれてゐたかがわかる。

候ては必定刀相損じ可申候、萬一折れ申候節には長きに限り可申候。特に荒木又右

衛門は、櫻井切掛節候、刀折れ其節脇差二尺二寸五分有之候ゆく、尤脇差働と奉

存候。折れ申候刀は伊賀守金道二尺八寸五分有之候。先頃荒木家にて一覧仕候、殊の

外美事の品に御座候得共、右の脇差の事に御座候間、 必、 小は長きに限り可申候。

扨亦金二十兩差送り申候間、去る二月借用分、家根替分御請取置被下度、尚又、老

父家族共、差支有之候節、何分宜敷奉希候。 撃劍御取直の義、是亦宜く願上候。

井上氏、小島氏、橋本氏、門葉一統にも呉々も宜く奉希候、乍末筆御嫡子源之助様

始め皆々様、尚弥宜く奉願候 以上

十月二十日

佐藤彦五郎様

近

藤

勇

238

末始選新

三人同志致居、如何可致歟と久々心配仕候、無據殺害致申候。 (1)

下拙義も大阪罷越候滯留中、(二) 間者の爲、一夜相忍び申事御座候。 彼是一夜安心

致事無御座候。兎角御用多、會津公役所、赤は御所、町奉行等へ日々御用に付罷出、

寸暇無之、素々不學短才の下拙故、如此の義は決て預り可申筈には無御座候得共、

萬端事一人掛り故、心配仕居候。實に御尊兄御別宅に於て、酒肴時々思出し候得

ば、東下一刻も急度奉存候得共、赤、國家大義も相辨へ候得ば、右様にも不相成、

愚拙心中御賢察伏て奉希望候。 老父病氣如何御座候や、彼是御配慮の事と奉存候。

て拙宅留守中は御厚情 (三) 相成、其上、稽古場家根の儀、是亦難有奉存候。門

葉御取立の義、別て難有仕合に奉存候。 京師においても久武館相建申候(四)。 いづ

東下の義、來陽にも可相成かと奉存候間内は可然様御世話奉希候。

土方氏も無事罷在候。殊に刀は和泉守兼定二尺八寸、脇差一尺九寸五分堀川國廣。扨、

脇差長程宜しく御座候。(五)下拙義も當時脇差二尺三寸五分御座候。實地場に至り

記末始組選新

四一 勇江戸入

いさみ えど

びゃうふしうさい

ようにい

てゐる。

秋になつて、男の江戸の病父周齋は、段々容器がよくなかつた。 たよりによつて、勇

もあれば一度江戸へ下りたいが、忙しろ成ない務な上に、時々大阪へも出て行

かねばならぬので、江戸御府内には妻のつねもあり娘の子もあるが、どうも蹴りかね

その頃、江戸の佐藤彦五郎に宛て出した手紙がある。

其御地愈御勇健奉賀候。然者毎度御尊書御尋に預り、殊に委敷御書取り被下、且、

下拙始め一統慎靜可致旨御教諭被仰越難有承知罷在候。 七月以後堅く相慎み居候。

扨て、 先頃平野次郎御所燒拂之一味、 三條木屋町屯致居、繩手夜討後、局中に間者

いきみ

ていまへ

は、「醫楽その他御芳志は忝けないが、繁藩の掟として、彼らに人に傷けられ士道を感じ

めた者には薬を興へぬ事になつてゐますから御無用になし下さい」との挨拶で、使者

せっぷく

かん

おほきは

は「はあ、切腹させられるな」と感づいて、大騒ぎとなった。

し

朧の切腹を知らせる土佐の使者と、柴司の切腹を知らせる會津の使者が、土佐の蹴

しはる

邸前でぴったり出逢ったといふ芝居のやうな話もある。

はんしんしはつかさら

ほふおわび おことば

たさいませっぷく

あひは

このだんご たけ

ちうやくまで

「藩臣柴司不調法御詫の言葉なく只今切腹して相果てました。此段御営家御重役迄』

こうじやう

といふ口上である。

くやみ こうじやう

ししゃ

土佐からは折返して、梅の口上をもつた使者が来て、これで一時雨藩の雲行面白くな

かつた事も無事に解決した。肥後守は可惜器の死を忘れみ、”弟”の外三郎及び兄

まりやうめい よびだ

あておよ

もんぶく

馬雨名を呼出して、御手當及び御紋服を噓はつた。

一部(永倉新八翁遺談)には、櫛をつけられた時、土州の藤田は堀を飛越へて逃げやうと

けん もんだい

きづ

わり あさ

んてい

してゐたもので、傷は割に淺く、そのま藩邸へ歸つたが、この一件が問題になると共

に、傷を負ったまい、遊館に至らずして歸邸したのは卑怯なる振舞であるといつて切腹

を命じられたといふ事である。

も

ししゃ

さしつか

みまひ

それを知らぬ會津家は、重役を使者とし、藩をも差遣はし、見舞させたが、土佐藩

とさはん

しつ おい とふく

は

の一室に於て屠腹して果てた。

たい

しはつかきま

ついた。

たい

かうせう

これには、土佐も我を折って、そのま」交渉は打切りたがってまされないのは

あひづほんてい

したう

ย

つぷく

こと

柴司。間もなく、會津藩邸へ引とつて士道の義理にまつて切腹する事となった。自から

先に立つて最後の用意にとりかくり、髪を掘り、死装束に改めて、誰かに、設けの座に

近藤勇る無論その席に出て、かに記と盃を汲んだ。記ば、一座を見渡して

『さらばでござる』

といつた。介鑑は司の弟同名外三郎、涙ながらに、美事な太刀取であつた。一同も

なみだの

只、 涙を呑んだ。

はやうま

と

*

はんてい ししゃ

直ちに早馬で土佐の藩邸へ使者(小室金吾及び佐々木只三郎の實兄手代木直右衛門)が立ち、

ひとちが

せっしゃ

とき

『人違ひするな、拙者は土佐の麻田時太郎だぞ」

おさだときたらう

どな

しばら

しつない

かけこ

せつめい

と怒鳴つたがもう遅い。柴等が、驚いて室内へ込んだ時にはすでに、絶命してゐた。

(西村文翁筆記)

もんだい

さあそれが大きな問題となった。

かねて新選瓶にしては、いい感じを持つてゐない上に、下手戍の砦が管津の者なの

で、土佐藩邸からの交渉は厳重を極め、一擧に、新選組の屯所を襲つて、殺にする

ちょくゆ こんばんぐみ

リ

こう

かけひ

ひづ

などいつて来る。しかもそれを直接新選組にはいつて来ず、會津侯への掛合をするの

きすが いさみ へいこう

で、流石の勇も閉口した。

あひづ

ちはじ

會津の千葉郎といふ氣骨の人物が、双方の間に立つて、丸く溜めやうとするが、士

しゃうち

つひ

しんたい

きう

みづ

佐がどうしても承知しない。 千葉もには進退にして、自から土州の藩邸を訪ね、そ

せつしや

しい當時にあつて、かに新参者のびをされるのもよくないためか、結局は

しんせ にいちゃう まんぞく

「拙者はたゞ新選隊長で満足で御座る」

かうせう じたい

こと

といつて、交渉を辞退してふやうな事になつてゐた。

九月につて、津侯の手の者の中から紫記、辰野勇(勇吉)など指名の戦士が改めて

しんせんぐみ

かにふ

そくじつ たい

ひがしやまかうだいじょ

あずほのてい ちゃうしう そうし

新選組に加入した。即日、隊務についたが、東山高台寺境内の明保野亭に長州の壯士が

めいせんぷく

じゃうほうはい

おぎだ そうし

ひっとう

はらだ きのすけるのうへけん

三四名潜伏してゐるといふ情報が入ったので、沖田総司が筆頭で、原田左之助、井上源三

らう

はへぬ

たいし

しょづかきら

くは

めい

ぶそう

いく

とりかこ

郎など生きの隊士に、柴司等も加はつて甘名、直ちに武装してこの家を取圍んだ。

ところが、質はその武士達は長州人ではなく、何れも土佐の中であつたのだが、鶏

つかさ おやま

しゅうじご

なか ひとり

やり

つきき

しま

司は誤って、障子越しに、その中の一人を撃をもかけずに槍で突刺して終つた。不意を

刺されて、

御社

見み

けにん

けんかく

あつ

みまわりぐみ

そうくわん

じつけん くみがしら

はう

本御家人の剣客の集まり見廻組は、蒔田相模守が總管はしてゐるが、實權は組頭の

佐々木只三郎が握つてゐて、この一味がまた相償に、かつて廻る。佐々木は,館津侯の

靈手代木右衛門の弟で、腕はよし背景はよし、京都では響いたものである。

これがよく仕事の上で、新選組とかち合せをやる。「彼女は者の方で斬る」「いや拙者

うち

しゃうとつ

あと

せつしや

たがひじゃうほ

の方で片づける」こんなことで、はじめの中は、度々衝突をやつたが、後には互に譲歩

して、うまく行くやうになった。

近藤にしては、正式に幕府のを興へやうと、いろな交渉はあつたが
、

待以上に出するには面倒な事情もあるし、且つ、男としては、素性のやかま

四〇

柴司の切腹

ぐわつ しゅつぢん

しんせんぐみ

ぐわつ

にち

ひき

ゐる。

で

み

とんしょ

もど

九月に出陣した新選組は、八月十五日に久しぶりで壬生の所へ戻って来た。(永倉新

とき

めい

だっそう

ぬい

八翁遺談)出かける時の百名が、討死やら脱走やらで、 六十名そこくの人数に減ってる

る。それに、まだ長州の飛躍が油断ならず、諸藏の浪士が、れる腕に一物をもつ

て、京だつて来るので、王生へつてもゆつくりしてゐるには行かない。男は毎日

のやうに守護職や、船と打合せをしては、夜のちなく市中の選をやって

男自身が巡邏に出る時には、白い肥馬に跨って、常に蹴士五六人が、白い鋼巻をして

どてつほうだま

した

棺をもつて供をした。一度鐵砲玉の下をくぐつて来たので、士の気風が、以前に較べ

とだいぶ厳しくなつた。(島田魁翁遺談

記末始粗選新

229

犀ニ隨ツァ断頭ノ響アリ、予呟然タリ。

次に大村包房は、大きな降で、予の獄房にむかつて「村井氏、永のお別れで御座るぞ」と呼ん

だ、これも赤た斬られた。

海諸人、予始知其殺也因調嚮日且後者、予亦及巳、草卒之間、頓決死即改

靜座而待

指を折つてゐると、刑ぜらると三十三人、日が暮れかけて始めて了った。予は刑事への迎へ

の音が何時近づいて来るかと静かに待ったが遂に来らず、既にして燈がついた。

終に獄吏の湯淺満載が来たから「自分は何時やられるのか」ときいたが、満載は笑って答へ

ずにさつて終った。

この筆者村井正も、この時は助かったが、その後三年、慶應三年十二月、途に獄中に於て首き

れた。

既ニシチ

といつた。獄中の志士はこれを聞いて、その倣言に腹を立てると共に、がっかりした。

頃、火は堀川に延焼したから、この獄もあぶない、因は何かへ移すだらうといふ話を聞

いた。午後になってから、数人の役人が槍を手にして、獄吏を先立て、監房の外を往来す

る。先づ但馬一舉の人、平野臣、横田精之、大村包房、本多素行が引き出されて去った。

その次に向ひの間にゐた親(彦山の俗) 乗盛を出し、次に予 (正禮)のところへ来たが、

一人が帳簿を見てみたが「ことは後廻しだ」といつて、そのまと去り、 三條公大夫丹羽守正

雄、三條西公大夫河村能登守季興及びその僕二人。 大和一舉の杜本勝定、乾嗣龍、 古東秀親

水郡長雄 吉田良秀、 石川貞元、 保母景光 原田一廣辻同、田中楠之助、木村楠馬!!倉

才次郎、等と僕二人。 足利尊氏の木像斬りたやつた長尾武雄、それから池田屋一件の古高正順

(俊太郎)、長州の山田虎、内田太郎、佐藤一郎、吉田五郎、南雲平馬、櫻山こと、村上俊平、

京都廣田精兵等廿七人。以上卌三人をぞろ(引出して行つて、キリシタン牢だつたところ

の東に一かたまりにして置いた。出火のためなら、予 (正禮) たも同じくすべきである、これ

は妙だと思ってゐた。

人が突然やって来て警備をはじめた。暫くして東の方の火が漸く下火になつたやうではある

が、どうやら禁闕の近くに火が出て、婿は南の方に迷しり、爆地をゆるがし、砲の春はます

熾んになった。さては長州(西兵)が、かれての志をして洛中へ討入つたのであらうが、

下を焼くなどとは不穏であると思つてゐる。 平野國臣のはすぐ傍らなので、共にこの事を

語り合って、どんな事になるのかと心配してゐた。

牢番の者にいろ~と聞いて見るが話さない。その中に、日が暮れかけて、火はもう三條を

過ぎたといふ。本番は逃げて一人もゐなくなった。夜になつてから、長州の敗戦である事を

知つたが、何ほ本當の話をきゝたい、山崎の守はどうなったらうと思つてゐるが、わからない。

窓から眺ると、京は上下火炎に蔽ばれて、赫々煌々 夜間色を禁じ得るのである。

一夜まんぢりともしない中に夜が明けた。火は下京を掃蕩して、天地相映、日色銅の如く、

しかもまだ止まない。折柄、外が俄かに騒がしく、獄吏は急に警鐘を亂打し、警兵を集め『敵

が獄に迫った』と呼び立てた。砲へ彈玉を仕込むやう、投身の刀をさげて走り廻ったが、

これは間もなく所司代の巡羅銃隊が京中を廻つてゐたものとわかつて、ほっとした。しかし獄

吏はなか威張って『長州の弱虫共何んぞるるに足らんや、嵯峨山崎の敗けざまは何んだ』

滅しその上に早馬を飛ばせて打合せの結果、奉行瀧川讃岐守具擧は「破獄を企てた」と

い目を見て、未だ罪の取調べもなさないに

つ端から断する事に決定した。

ぼうだん

たきがまきぬきのかみ

よ

處の後、守護職會津がこれを聞いて、縁石にその暴にろき、川讃岐守を呼

しか

ᓄ

びつけて、ひどく叱り飛ばしたといふ。

*

使うし

しんせんぐみ ちょくせつくわんけい

この暴處置に對して、新選組は直接關係はないけれども、(近藤勇以下獄中に入って一々

こんらん うち

ر

さんざい

ひきう かうけい

槍を以て刺して廻つたといふ説がある) 混亂の裡にあつて志士を斬罪した悲壯な光景は、三

ねん ぐわつ

にち れい きんもん せいへん

ごくしゃ った

くまどころ しう

年八月十八日、例の禁門の政變によつて、この六角の獄舎に繋がれてゐた藏人所の衆、

むらろしうりゅうしんま

しゆき

るいし

しょうぎ

いま

たうじ

つひかい

ひとく

村井修理少進正禮の手記した「綵史」に詳記されて、未だに當時を追懷する人々は、こ

解乙

よ

な

の一文を読んで泣かざるものがないのである。(原文漢文)

七月十九日朝、東の方に火が起って、砲煙天にとろき、吶喊の壁は耳に徹する。幕兵二三百

三九六角獄の悲劇

ころ きやう

かく さくらや

こくじ

ほんそう

とら

この頃、京の六角の獄舎には、多く國事の奔走によつて捕へられた勤王の志士

いけだ やじへん

たかしゅんたらう

ご とりしら

うち

きんのう しし

れてみた。 池田屋事變の古高俊太郎も、その後取調べもなく、ここに打込まれてゐた

はく

しかね

はかりごとぐちべい

が、自分の自白によつて、あれだけの志士が屍となり、瓦にしたのを恥ぢてか、

殆んど後からぶつて来た同志の人々とも言葉を交へず、たゞ々として、の日の

からんことのみを祈つてゐたやうである。

火事は次に、この牢の方へ燃えて来る。四人は、パ千にも群るべき恐ろしい

志士ばかり、これをだしてやつては大変である。その上、長州藩士その他同志が何時何

虎から襲ひ込んでこの人々をひ去ろうとするかも知れない。火が漑しくなるに、従づ

て、これが、町奉行所と、牢役人との間の大問題になつて、先づ三百の兵をて厳重

はや

224

【記末始組選新

くなかった。

にち

ふつぎやう

きやうへいくわ

はまぐりごもん

きかひごもん なかたちうりもん

この前、十九日の拂曉から燃え出した京の兵火は、蛤御門、堺御門、中立賣門の激戰

ちよみん せうぼう て

なので、町民も消防に手を盡 霊くす事も出来ず、炎々として全ぐの延びるに任せた。翌

廿日には、黒煙深くを掩うて、太陽が赤に見えた。燃は遂に二里に及び、四萬三

千戸は烏有に闘し、新玉津島、新住吉麻神社をはじめ神蔵、佛閣の焼失したものも少な

て、堅さかの武装もせず、その大麗な態度に、新選組はそれが何人であるかは知らなか

つたが、たゞ一人の射ちかける者もなく、ぢつとしてこれを見詰めてゐた。後になつ

そうたいしやうぎ いづみ

て、それは總大将の眞木和泉であつたと知れた。

しづ

おも

すが

まくはり

うち はい

せい

たいようせうぢう

その姿がやがて、静かに幕張の内へ入ったと思ふと、一斉に火蓋を切った大砲小銃の

つるべう

いさみ す は

たいし

さんじやう

釣射ち。男は素早く隊士を伏せしめて、この弾丸を避け、一歳つくと、知のやうに

のぼ

山上へ駆け登った。

ほんえい

ほのほ み

たうことぐ

さいご

し

ひさう

どうし

にん くろこけ したい

がまつて、

が鎮まつて、悲壮なる同志十七人の黒焦の死體の中に、直垂の焼け残りと、

その時はすでに眞木の本管からすさまじいが見えて、一悉く最後と知れた。

直動の増け残りと、美な

うち

もうす

いづる

どうていねい

とりあつか

切腹の様子から、眞木和泉はすぐわかつたので、一同叮撃にこれを取扱つた。眞木は時

に五十三歳である。

天王の能には、和泉の名を見て、米千千俵と黄金三千両がしてあった。

末始粗選新

てんわうざん

のぼ

か

とき

ぐわつ 十ゑ

えんねつと

いまみ

たいし

よろひかぶと

天王山の登り坂、時は七月の末である。炎熱溶くるやうであつた。勇は、隊士の鎧冑を

解かせ、身輕るになつて、足撃やの行軍をした。少し遅くれて會津勢も来るし、薩摩の

も来る。互に避けの名をいでゐるのである。

*

まぎ いづみ

眞木和泉は、 のぎの樹から樹へ幕を張り廻らして、として無きが如くであ

やまどり

つた。山島の啼くさへ聞こえた。

山の登り口と、中途で、和流の状態を捨てあったのを見してあるから、恋に相當

はうくわ

きんでん ちゃうほど

いきみ

じゅんび

きつ

ぐん

やうす

砲火の準備ありと察し、山顚二丁程のところで、男は一先づ軍を止め、その様子を観測

してゐる。

このとき とつぜんさんてん

まんまく

こんじき えぼし

したたれ

此時、突然山顚の幕をしほり上げて、金色の烏帽子に垂衣を着た人物。 何にやら

高に名乗ると、朗々と詩を吟する力強いが、樹の間を縫って響いて来た。敵を前にし

記末始粗選新

221

ひき

まぎ いづみ

ちゃうたう りよう

きんのう

さきがけ

ちやうしうにんけん

たゞ眞木和泉だけは、長州を利用して、勤王の魁せんとしたもので、長州の人間

しょ

に

こと いきよし

たび せんらん

ではない、これと一所になつて逃げ歸る事は 潔 としなかった。しかも、この度の戦亂

に高股を打貫かれてゐるので、王城の地を臨の場所と定め、死の同志僅かに拾七名

てんのうざん は

のぼ

ぼくえい は

たてこも

を率いて、一気に天王山に馳せ登り、ここに幕營を張って、立籠つた。

いさみ

+

あいづほん

めい たいしょうじんぱくら

さんはうちゃうぐ しぶぎやうはやしごんすけ みきわめぐみ

勇が一隊を統べて、會津藩の二百名(大將神保内藏、参謀長軍事奉行林權助)見廻組

くしん

らう

とも

にとりまし せんちん

かた

ぬい たいしやうまきたさがみのかみ きんぽうちやうさまたど

の幕臣三百名(大将蒔田相模守、参謀長佐々木只三郎)と共に張った錢取橋の戦陣から

ひきあ

あらた

てんわうざん きうたう

にち

揚げて、改めて天王山の掃蕩に向つたのは、廿一日であつた。

＊

蛤御門前後にて、傷した者もあり、疲れてある者もあるので、男は一々瓶を

概して、腕の立つ者のみを選んで五十名を弱つれた。永倉新八は膜に突し、原田左之暁

てつほうきづ こほむ

へいき

は肩に鐵砲傷を蒙ったが、平氣でこれにも加つた。

くは

220

末始粗選新

いさみ かつちう ひぢかたとし

いかふくちやうにょきんまでねな

かつちう たいし

おさぎち

せいふく しゅつどう

勇は甲冑、土方歳三以下副長助勤迄は同じく甲冑、隊士は淡黄地の制服で出動した。こ

この時分總隊員は百名であつた。

*

世に♪ふ蛤御門の合戦、潤もなく長州勢ばるところにして、島又兵衛、バ

江九一等の鋼々は軍の中に討死し、熱血児久坂玄瑞など、自から居するの止むなき

に舞った。れも惜しい人物である。

一方からは火が起こる。

ほんごく

長州勢ば、無念ではあるが手も足も出ない、そのまいを巻き、館を失って、ぞくぞ

として本へ避けて戻る。

めするのも聞かず、を推して参し、上の御前に、ひれ伏して

しんふせう

ぎょくたい しゅご

たてまつ

と云へども、撃つて玉を守護し奉る』

むね

そうじやう

えっけん

ひだほと

ほど びゃうせい

旨を奏上した。この謁見の間、殆んど座に堪えぬ程の病勢で、顔面蒼白、悲壮なもので

がんわんそうはく

ひきう

あつたといふ。

上はこの時すでに、御所お立退きの御用意を聞こし召されてゐらせられたが、管津

ひごのかみ

むね ごんじゃう

ふくふ

はしけいきやう くわな えつちうのかみ さうはう

だ

さんない

肥後守が、 一橋慶喜卿と桑名越中守に双方から抱かれて、参内した旨の言上をするや、

直ちに御謁見を給はり、津侯が、気息奄々として奏上するを開召され、御隣のお思

召しで「其方に住する」といふお言葉を給はつたのである。

はちひ

じつ

まつ

幕府にとつては實に危機一髪の場合であつた。

新選組は、先頭に赤地に「誠」といふ字を抜いた際族を夜風にひらめかして

ぺう

城の二人、御弐席格で、御料三千俵をいたき

くみがしうこは

を利かせた。瓶頭が小枕

兵衛、七屋代三郎、高之、大飛戡三郎、佐々木三郎、間宮孫四郎、久保田

三郎、大澤溉八郎、坂本盛三郎の九名、どれを見ても一癖も二癖もあつた。役料は三百

で

ゆ みづ

と

*

よりなかったが、いろな機密費が出たので、金銭を湯水の妮くにより撒き、よ

くに乗じては人を斬った。天下の御直参だけに、暴も高飛車なものであつた。

しゅつどう

たちうりもん

十八日の夜につて、五ツ(午後八時)の鑑を聞くと、満を持してゐた長州勢ばかに

ちゃうしうどうじゃう

動をはじめた。宮中にも、長州に同情する公卿もあり、先づ長藩図司信濃の一隊が中

せん

3 16 22

者

きやう みゃこたちま

だいこんらん おとい

立賣門の一戦に火蓋を切って、京都を忽ちにして大混亂に陥し入れて終ぶ。

しま

管津は、‶蛤御門を守つてゐるが、砲弾は盛んに御門の上空を飛んで、禁廷内をおび

たてまつ

まつひらあひづこう

ころちゃうどっかうき

ひきこも

ちう

てんね

やかし率った。松平會津侯はその頃恰度病気で、引籠り中であつた。典醫のたつてお止

なか

末始粗選新

働無之様相嗜む可き事。

一、烈敷き虎口に於て組頭の外屍骸引退く事爲さず、始終其場を逃す忠義を抽んず

可き事。

一、合戰勝利後亂取禁制也、其御下知有之に於ては定式の如く御法を守る可き事。

右之々堅固に相守る可し、此旨執達仍而如件。

とんえい もんぜん

たかく

は

しかもこれを、屯営の門前へ高々と張っておいた。

京都見廻組は多く梶本御家人の子弟、或は緒ある家柄の武士で組織してゐた。江戸

し

よかは

らう

きた

らう

とうりう

ぬいしゆ

の赤羽橋で清河八郎を斬つた一味の佐々木只三郎もゐるし、一刀流の名手といはれた高

くほんの

かど

けんかく

あつま

久半之助もゐる。みんな腕の利いた一廉の劍客ばかりが集つてゐたものである。

とりしまり びつちうわさを

まんごく

まきだ さがみのかみ

しもふさ

いざさ

さくまつだひらいづもの

取締が備中尾で一萬石をもらつてゐる時田相模守、下線の飯で六千石の松平出雲

相守式法不可胤、といふやうな識み難いものなので假名交りに書直した)

軍 中法 度

一、役所を堅く相守り、式法を亂すべからず、進退親頭の下知に随可き事。

一、敵味方強弱の批評一切停止の事。

附、奇嬌妖怪不思議の説を申すべからず。

一、食物一切美味禁制の事。

を待つ可き事。

一晝夜に限らず、急變有之候とも決して騒動致すべからず、心静かに身を堅め下知

一、私の遺恨ありとも陣中に於て喧嘩口論問敷き事。

一、出勢前に兵糧を食ひ、鎧一縮し槍太刀の目釘心付可を事。

一、組頭討死に及び候時、共組衆共場に於て戦死を遂ぐ可し、若し臆病を構へ其虎口

逃來る輩有之に於ては、斬罪微罪共品に随つて申渡す可きの、豫て覺悟、未練の

把末始組選新

215

じゃうなはて

じまん

よしおがしやうすけ しうゆき

ころ

こと

こうぎ

四條繩手の料理屋で酒をのんでゐた自藩の吉岡庄助を襲撃して殺した事について、公儀

うったで

はくぶ

へい

しゅん ひきわたしごうだん

へへ出て、下手人の引渡を強談したが、一たまりもなく蹴だされたので、蹴った方も、

よき

蹴られた方も、その時からすでに今日あるを期してゐたのである。

じうぶん て

つ

幕府も充分の手はくしてある。津、彦根、大垣の三浦が先づき出し、加賀、膳所

つ ふしみ

おほつ

しゅび

あた

の兵を以て伏見、大津の守備に當らしめる。

長器は素硫藩主父子のために一行の人京をしてゐるが、武器をへて、聴かなけれ

ば、武力をして押入るといふのであるから、昔の取扱いについて、彼我の間に使者が

たがひ

ど

かうせうひ かさ

ぐわつむな

ぐわつちうじゆん およ

互にお百度をふみ交渉日を重ね、遂に六月を空しくして、七月も中旬に及んだ。

しんせんぐみ

きやうにみまわりぐみ あは

つかはうめん

けいび

ちんちう

いさみ きよ

新選組は、京都見廻組と合して、四塚方面の警備をやつてゐる。陣中に於ける勇の擧

止は、すこぶる議厳を極め、一にし、厳重な法度書を布告した。(原文は、役所堅

に敗れて退いた一の蜜を繋ぎ、毛利侯父子の裏情を調べ、再び京都に入る事を許して

ふしみ

やまざき

おう

せん

貫はふといふのではあるが、要は、伏見、山崎に嵯峨を呼應せしめて、一戦を試みる

こゝろ

悟である。

ち

ふくはらえちご

どうぐ

ぶよう

ぬきみ

てつほう

廿六日には福原越後の手のもの三百は、堂々と武装し、抜身の槍を持ち、鐵砲をかつ

はっか

ぎ、旗指物をひるがへして、居の地を憚るところもなく行動して、嵯峨勢に合した。

ちへぎ

これを遮るものあれば、

らくちう はなはらうぜきしや

ともう

ふか

たいへん

「洛中は甚だ狼籍者が多いから、若し途中で不覺をとつては大型である」

とし、味に、心を無にして、するといひ、形式的に、あると

かな

ぐん

さんはい

ころには必らず軍を停めて参拝した。

いけだ

じへん

よくくじつ ちゃうはん きやうとる する やくみ の おりえ

いけだ

くわんけい

愛の翌々日、長藩の京都留守居役美乃織江は、池田屋とは何んの関係もない

末始粗選新

213

三八 軍中法度書

池田屋事變の飛報を耳にして、長州藩内は艦の涙やうであった。上下、繋げて

である。

のにし、扉に根拙いて、断熱涙にむせぶ者が多い。來島又兵衛が先づ先して

物

きやうか

からうふくはらえちご

ようけん

しょう

へい

のぼ

一気に京へ馳け上つて来た。笑いで家老福原越後は、江戸に用件ありと稱して、兵三百

ぐつ

にち

を引いて、この六月の廿二日には大阪に入った。

おほきか

はい

久坂玄瑞が来る、久留米の神主眞木和泉が来る、この手は約三百の邸を見て、大阪へ

だるとすぐ避を船で山崎へ出て来た。越後の軍勢が伏見にまつたのは、廿四日

すると、これに相醇じて、京の藩邸に潜伏してゐた士が、そ三百人、かに嵯峨の

天龍寺へ集まった。表面には、去年八月十八日、宮中に於ける津薩摩との勢力争

しんせんぐみ

しゅつどうじこく

きりこみけつかう

とある。これによつて、新選組の出勤時刻が遅れ、止むを得ず單に斬込を決行した事

じゃう するさつでき

情も推察出来る。

やじゅんなんし

さやうとふ

くわんり

この池田屋殉難七士の墓は、今は京都府の管理となって、三藤寺内に範をめぐらし

て祀られてある。

末始組新

しょじゅう

書状には、

きやうとつようよ

事欵の翌日、即ち六月七日に會津藩の京都御用所から、江戸の同藩御用所へ差立てた

長州人兼而入京相成候人別外之者共大勢潜居、頻に御家へ寇を成候様之企有之哉に相

聞候、新選組に而升屋喜右衛門と申者召捕詰問に及候處、品々如何成義共有之、夫而

己被差置候而は、御爲不相成候間、御人數御貸被下候は召捕申度旨申出候由、公用

方より申出、拾置候而は御職掌不被爲立は勿論、患害眼前に切迫致、召捕に相成

へは一層増し儀と、深く御事成候得共、外に宜敷御工風も無之、機會取

失候へば、却而彼に制せらる」之段に相至、不得止場合と御評議被成、御內慮御伺被

成候處、御前に而も無據儀と御決心被遊、一橋様御始、所司代、町奉行衆へ御打合に

相成候處、何れに而も御同意に有之。

御聽右者探索相行届忠勇儀烈之志厚候段相心得候より一際奮發相働候段一段之

事に候也

だ

といふやうな感を出した。

*

とう

男のもらった長道の刀は、初代の最上大業物であつたとも云ひ、陸奥大三善長道(藤

*

いけだ やじへん しうゆき

けつかう

まで

そう

四郎)であつたともいふ。何れにしても、管津侯自慢のお鍛治である。

ただ、この池田屋事變の襲擊を決行する迄については、 會津肥後守もいろくと心配

した様子である。長州藩士の不踪について素より一擊に滅は望んだが、嘘によって更に

て

じた

また一層の恨を買ひ、縁には手もつけられぬやうな事態になることを恐れたのである。

おひづひごのかみ

しんぱい

うまき

まつり

さわ

ではないのである。京の上下は、この噂で持切って、祇園のお祭どころの騒ぎではなか

つた。

*

會津侯は、新選組の活動にして、非常な満足で、直ちに「感状」を残し、手旬の際

うづと ほか

きん

とう

士に對しては、金五十兩宛、外に一統へ五百兩、隊長勇には、三善長道の刀一振を賜は

たま

れろ たいちよういさみ

よしながふち

かたな ふり

つた。

ちょうてい

たいし ろ ろう

ぼしめし

きんす

れくだ

ぐわつ

ひこの

朝廷からも、隊士慰労のお思召をもつて金子百兩下し置かれ、翌々八月、 府は肥後

守に對し

後守

一、六月六日浮浪之徒洛内に屯、不容易企有之候節、御方へ御預相成候新選組こと

惡徒共討留召捕拔群之働候段達

208

末始組選新

*

いしかわじゅんじろ

と

*

とひらしがる

がんじがんねん

けふと

のぼ

くろたに

(七) 石川潤次郎は土佐の房足輕である。元治元年にはじめて京都へ上り、黒谷の三

家の別邸へ觀してゐる。この六月五日の夜は、實は合に加はつてゐたのではなか

しょよう

つた、所用あつて、望月義窟を訪ねて行くと、あの騒ぎである。見るに見れて、自分

じた

かたなぬ

ねんれい

も刀を抜いて立會ひ々討死を避けたのである。年齢などもつまびらかにしない。

*

て

この騒動の後始末がついて、津桑名の手の者が、ぞくと脂揚げ出したのは、六

ぐわつか

まんごく あひづひごのかみ

ひるどき

月六日のもう時(九ッ)を過ぎてゐた。夏の陽がかんと顧ってゐる。

とにかく、廿八萬石の會津肥後守と、勢州桑名十一萬石の松平 越中守が、全力をあ

せいしうくわな

まんごく まつだひらえっちうのかみ

ぜんりよく

もの

じへん

しんせんぐみ

しゅうげき

たんじゅん

げて、三千の手の者を動かした事である。新選組が一つの旅館を襲撃した単純なもの

末始粗選新

のために、後ろから、槍で突かれて斃れたといふ。

*

おほたかまたじろうしけおき

に ちうべ

とも

いけだや

くわいごう くわ

またじ

(六) 大高又次郎重秋は、兄の忠兵衛と共に、池田屋の會合に加はつてゐた。 又次郎

は四十四、兄の忠兵衛は四十六、この夜の志士の間では年輩者であつた。播州の藩

士である。

又郎は、武田流の兵者で、の天才といはれた。その上、鞍の製作がうまか

まんこう とりに

ちんせい ねんいい

ふ

しょこく

しし

おさらい

ひと

つたのでこれで、藩侯に取立てられてゐた人である。

安政五年以來、京に留まつて、諸國の志士と往來し、王の大義を稱へてゐたが

らずも、この難に逢った。

兄の忠兵衛は、残念ながら傷を負つて、生き捕になつて、牢んだつてゐたが、翌月末

とも

ねっぺう

ごくし

に、傷と共に、熱病にかつて、獄死した。

そんのう たいぎ

となな

袋

きみ

とい

やくわん

いけだ や

し得たるに止まり、拒腕、時をすごしたが、窓に池田屋の難に逢うたのである。

す

* < どうし

やまだ のぶみち

ちうすけ

き ひころかん

うすけ こゑ

その少し前、同志の山田信道が、重助に逢った時、日頃元氣の重助、聲を落として、

ふく

れんか

かんがへ

「君は國につて死せよ、われは輦下に死する”である。共に輕ろい身の上ではある

にん

ところおも

こんく

こざん

が、任する所は重い。 魂魄となってまた故山に逢うであらう」

といつた。

にしむらかねふみおう

よいけだや

すこ

西村文翁の記述では、この夜池田屋では、少し酒に酔ったので、をさまそうと二

際を下り、奥座敷の縁側へ出て涼んでゐた。ここへどやと観入されたが、残念な事

はおひ

たんとう

かな

に、こんな場合で、短刀をさしてゐるのみで刀がない。

立つたが、忽ち獲物を落されて、生捕りにされたけれども、方になつて、僅かなすき

に

みはらまちまでく

ほど

を見つけて、逃げ出した。河原町迄来ると、蟻も出られぬ程の、槍ぶすまをついた會津の

あいづ

みはりへい であ

じゆう

あいづ

見張兵に出會つて、細つきのま」で、からだの自由は利かぬ、遥々、會津の名もないも

道中筋の、宿といふ宿には、みんな自分の人相書が壁に張られてゐるといふやうな水

第であつたが、松田は時には堂々と自分の本名を名乗り『死生命あり、

にんさうがき

もと

いうく

ごうご

しう

いざい

そんぼう

こと

てん

存亡は天に任せ

ん』と豪語して、その人相書の下に、悠々と一週間も滞在してゐるやうな事もやつた。

大阪にゐた時は、商人の真似をしたり、博徒の群へだつたりして、恰度その頃上京し

まなべ あきか

あんさつ

けい げんちう

てゐた間部詮勝を、暗殺せうとしたが、警固厳重で、手の下しやうがない。

仕方なく、時機を待つために富田林のに、波多野右馬之亮と名乗って、兵學の家熟

あや

あるよた すう とり

しの

まつだ

もんてい

を開いてみたが、間もなく怪しまれて、或夜多數の捕手が忍び寄った。松田は門弟の知

らせによつて、これを知つたので、から、の扉を開いて、飛躍し、

「は波多野右馬之亮である、そのにうろしてゐるのは何者だ!」

だいかつ

て

ど

うしな

に

と、大喝したので、捕手は度を失って逃げ散つた、

まか

し

このを見て、悉く兵の手を整ぺたが、糖極まりなき當時の政局は、恋

を全ぶするの機密を興へ、僅かに中山忠光卿天の川の義に際し、兵を動かして

べつどう

覚瓶など、肥後の觀玉家は何れも、江戸と京都を往復して活躍してゐた。

松田は、城州西の、または大和十津川の郷士などを集め、藩

の後に賞る湯五

へえ

たいせう おした

きんのう せんぼう

かんがへ

生か

なにごと おも

郎兵衛を大将に推立て、勤王の先鋒をやる考はもつてゐたが、何事も思ふに任せなか

つた。

ころ

うた

この頃よんだ歌に、

一すちに思ひこめてし眞心は

神もたのます人もたのます

といふのがある。

気二戦、江戸をたつて、韮に江太郎左衛門をたづね、時間を論じたりして、

ぎ きよ

とうほんさいそう ちょうしうみと

都に入り、福田霊のところに寓して王の襲撃について東奔西走。長州、水戸など

くしん

の人物と逢って、相談するにもこれ足らぬ有様で、その史の眼を忍ぶ苦心は、一通

りのものではなかつた。

末始粗選新

203

十七の頃に、眼の事務をとらせたが、事務などには手をつけず、常に天下の大勢の

みを減じてゐるので、罪の意味をして、この丸の玄賊に魅された。その第二の丸に

はんしゅ おとうとうりひぎみ

ちうすけ こうき いた

よろこ

しょく

は、藩主の弟護久君が住んでゐるので、重助は好機到れりと喜んで、よくその職につ

くしたので、怨ち、久君の知るところとなり、次第にその所論が重用されるやうにな

つた。

のりひさぎみ のそ

と

16

ちうまでゆ

ある時、範久君が野遊びに出た。

には

途中迄行くと、俄かに

つきしたがう

あしはや もの

『予に遅れずに付随び得る足の者はあるか」

と叫んで、動け出した。

し

しばらくつてゐる中に、侍臣は一人減り二人減って、最後にたった一人ついてゐた

ちうすけ

のは、この重助であつた。

えい ねん

ころ

みやべ

かんとう

ながとりひさぶみ とぐろきぶへ

嘉永六年に江戸へ出た。その頃は、もう宮部も関東にゐたし、永島古文、武兵衛

40

じて駆けつけて行つてこの裁に逢ったやうである。

いけだ や

ふくし

めい

たい

すぎやままつすけ

よく池田屋の即死を六名と書いてあるものがある。これは大ていこの杉山松助が、腕

物

おと

たんぜつそく

のら

いき ふきみへ

とうや はんべい しうよう

しゅつけつ

を斬り落さられて、一旦絶息したが、後、息を吹返し、潮く藩邸へ収容されたが、出血

多量のため死んだと述べてゐる。

ひと しにはしょ

せつ

要するに、この人の死場所に二説あるが、現場で死んだのが本賞だ。

*

まつだ ぢうすけ

ひき

くまもと じんぶつ

のりとし

ひどう

ゆうかん

とき たずな

た。

ほん

と

(五) 松田重助は、肥後熊本の人物である。範義といつた。非常に勇悍で、時に手綱な

きじゅつ

ぼう こうどう

馬の如くであつたと記述されてゐる。それかといつて無謀な行動をする講ではなく、

関術策、志士中の策士として聞こえた。宮部黒蔵に師事して兵法をび、年は僅かに

十歳の相違であつたが、宮部にしては、常に師のを忘れず、避の態度で終始し

記末始粗選新

つみ こうむ

きうる

『これは、きつと幕府から罪を蒙るに相違ない』

と、すぐにこの意見を言上し、話しを得て、江戸へ上り、老中松倉彫防守に見えて、東

風不競談」一冊を捧呈し、その眞意を開陳して、蹴って来た。

盤、江戸へ出やうとして、京都の邸へ足をとめてる時に、この池田屋

の一件が起きたのである。

いけだ や

みやべ

よしだ

のち てき みかた

宮部の死と共に、吉田の死は、後に敵も味方も惜しまぬものはなかつた。

*

すぎやままつすけ

かんすい ごう

ほんのう

ねん

けふと

(四) 杉山松助(介)は寒翠と號した。本名は律義といふのである。 安政五年に京都に

ゐて、志士狩りをやつた間部詮勝を討取らりとした事があったが、此際は實行する程に

鍔らずして止んだ。長州では優祿の武士であるけれども、興間もあり氣節もあつた。ボ

戸孝允の自然にある如く、この夜ははじめからは池田屋にあなかつた。君の身の上を案

よしだ

こた

おうたい

ぶし

吉田は先づ應援の武士にしこちらから口を開いて、

ごろえど おいて

いか

しゃる

「この頃江戸表では如何なる芝居をやつてゐますか」

と、聞いた。相手は度を焚かれて、

かなでほんちうしんぐら

『假名手本忠臣臓である」

と答へると、

けんぶつ

『見物はどうですか」

ほいり

『大入です』

はず

『然様あるべき筈です』

と、これから吉は、四十七士をとして、忠君の道を論じ立て、並居る者を煙に巻い

て終った。

くふやくにん

りょかん

ちょうしうぶし

きりこ

はなし

うきょ

よしだ

この幕府役人の旅館へ、長州武士が転込んだのはその後の話。この暴には吉田も驚

ろいた。

しやういん とら

のち

としまろ

しやうけんめい

しずくはうたんぐわん

さいよう

おかま

かうべん

松陰の捕へられて後は、稔磨は一生懸命その釋放を嘆願したが採用されず、いょく

ゆつ

江戸送りとなった日からは、一と間に閉ぢ籠って、無言の一ヶ月を送った。

兵庫酔威の隊に瓶入れられて、しばらくそこにゐたが、夜かに脱走して、江戸へ

出た。ある陛下の家に寄宿して、幕府の動に意を注いである中に、長州が朝廷守衛を

じられるにつたので、昔はいで大洛し、藩の謝罪を掛け、怨ち許された。

ちやうしうぐわいこくせん う

ぶんきう ねん なっ

はくふ

たちま ゆる

赤間ヶ關で、長州が外國船を擊つたのは文久三年の夏。幕府は、ほしいま」の行動だ

もんせき

ちゃうしう

じやう

きゆん

ぐわつ

きしつかへ

はず

といつて問責するが、長州は、攘夷の期限は五月である、やつても差支ない筈であると

つひ

ぼくふ

ぐんかん

む

抗辯するため、遂に幕府は軍艦を差向けて来た。

さうしだち

と

し

長州の壮士達は、これを奪ひ取つて絡まふといふので騒ぎ立てたけれども、命によ

り、それは避ぎられ、赤間ヶ器の営にあた麻呂が、一人その軍艦へ乗込んで行った。

烏帽子をいたゞき、直垂を着て、しづくと艦へ乗り込んだが、威風堂々、燃々道ら

はくふ

ひとく

あつ

かん

かほみ あは

ず、幕府の人々もたさ、威歴を感じて顔見合せて居並んでゐた。

かうどう

もう

秀といふ。

ぶしおよ

にん

みやべ

こうたく

つた武士凡そ三千人。宮部は推されてこの總督となつ

ぶんきう

ねん ぐわつ せいへん

きやう ながら

とき

みやべ

したが

みやこき

文久三年八月の政變に逢つて、七卿が長門路へ落ちた時、宮部もこれに随つて都を去

つたが、翌元治元年にまた京に入り、老僕一人と共に、古高俊太郎のところに寄宿して

ゐた。

*

ちやうしう よしだ としまろ

さい

としまろ

ひざね

な

(睦三) 長州の吉田稔磨は、この時まだ廿四才であつた。年麻呂ともいひ、秀實が名

ようはうすこぶ くわいる

むだぐち

G

んちょくぢうこ じんぶつ

よしだしやういん もん

である。容貌頗る魁偉で、無駄口を利かず、謹直重厚な人物であつた。吉田松陰の門に

へいがく

きは

موم

はい

つて兵學を究め、松陰は名を無と興へ、非常に可愛がった。

たじってんか

こと

くちぐせ

くざかけんすい

たかすぎとうかう

よしだ

『他日天下に事あらばきつと君を用ひるぞ」

しゃう

しやういんもんか

とよく口癖にいつてゐたといふ。久坂玄瑞、高杉東行とこの吉田を稱して松陰門下の三

末始組選新

197

とうほう

はうめん たび

あひだ

へいがく

けんさん くしん

ふた くに

かへ

はやしとうじ

東奥の方面を旅し、その間にも兵學の研讃に苦心し、再び國へつてからは林藤に

わろう こてん

げんきう

ついて、皇朝の古典なども研究した。

清河八郎のやつて来たのは、文久二年。黒藏は、その後、 もなく

いさ子とも馬に鞍おけ九重の

御はしのさくら散らぬ間に

しゅ

のこ

こきやうい

きやうと

のぼ

あるひ さつま

はんしゆ

た。

あるひ ちやうしうたづ

の一首を詠み残して、故郷を出で、京都に上ったが、或は薩摩に行き、或は長州を訪ね、

ふくふ

藩主にたいしても、朝廷及び幕府の近況等を詳細に報告し、自分の意見もたび白し

絆侯が、あの騒擾に際し禁護の下心を見て、兵を棚に上せたのは、宮部の献策

にょつたもので、この一戦には、宮部も加はつて就した。

宮部等は、翌年一度びへ引取ったが、朝廷より、諸藩から親兵を差出す可しとの

ひきぐ

し

ちゃう

よめい

また

定なので、

じゃうきやう

とき しょこく

五十餘名を引具して、又もや上京した。この時、諸國から召に感じて集ま

あひだ

とき

きたそひよしまろ とほ ॺ

たかを

ちむら

しやうや せがれ

あんせいい

志士の間にはこの北添佶磨が通り名であつた。高岡郡大内村の庄屋の件で、安政以後の

幕府の所爲を痛覚し、名も本山七郎と改めて、先づ江戸へ出た。一時、大橋正の間に

だって間を読んだが、二三の同志を得たので、奥地方から蝦夷地の方法も旅行をし、

それから京都へやつて来た。なか雄識家で、公卿の邸に比し、關東各藩の情勢を

ろん

どうかんぷく

論する時には、一同感服したといふ。

*

みやべていぞう

ひのくにますき ごほりた

ひと

し A

あひだ

しゅう

じんぶつ

(二) 宮部鼎藏は、肥後國益城郡田代村の人で、志士の間には、主要なる人物であ

しょこくきんわうか

*

ひさ

みやべ

くわいけん

こと

もつ

に ゆう

つた。諸國勤王家は先づ、肥後の宮部に會見する事を以て一つの事業としてゐたやうで

ある。清河八郎も、先づ肥後ではこの人を訪ねてゐる。

でんじゃう やう

ふそらいろ しや

ていぞう

こと きら

やまがりう

號を田城と稱し、家は父祖以来醫者ではあるが、鼎蔵はそんな事を嫌って、山鹿流の

へいはふ

れつしん

さい ころ

しだ

兵法などに熱心した。三十才の頃に熊本藩に召されたが、しばらくして暇を

ひ、

末始粗選新

195

ぐわつか

つひ

には、池田屋脱出に際し、三人斬し、外二三人に傷を負はせたやうに犯されてゐるが、こ

れば少し疑問がある。

佐伯報は、死の一太刀を受けて、捕へられ、六角の獄舎に投じられたが、翌年六

つみさだ

だしゆ

月四日、遂に罪定まつて斷首された。

長州佐波郡鈴屋村の八幡宮神主であるが、長州禁裡守衛を免ぜられて、毛利侯父子が参朝

止められたことから憤慨し、家を配して八幡隊といふに加盟した。

文久三年の十一月に奇兵隊とこの八幡隊から三十名の秀材をすぐつて、ひそかに京へのぼせ、

間諜の役を命じたが、佐伯は即ちこの間の一員である。常に石見國高の郷士宮藤主水と

古高俊太郎の手引を以て、宮中公卿の邸に出入し、宮中の様子を探知しては、これた在

國の同志に報告する重要な役目を勤めてみたのであつた。

*

まさよし

(1) 土佐の北総告は、本賞は北と書き、名は正信、借磨と称したのであるが、

が、文久三年八月十八日の政變後は、大阪、江戸、江州の間に出没し、分彦也と偽名して、

親王公卿の館にも出入し、長州のために多いに説いて廻った人であった。

野老山五郎は、背中に深く三太刀やられたが、その場を逃げて、長屋敷へ

aten

けいくわ ふりやう

つたけれども傷の経過が不良で、すっかり化し、その月の廿七日、年十九の器少で藩

邸の一間に渡した。

野老山は土州藩士の大男で新規の七石七斗の武士である。文久三年から京都の

戒を命ぜられて入浴してゐたものであった。時に「所山」とも解し、名もはじめは五吉郎、

後に五六郎といった。

まうどん

しんせんぐみ きりむす

すう しょ

さて

とうそう

望月義澄は、猛然として新選組と斬結び、敷ヶ所の手は追つたが、逃走して角倉邊

に

ほん

すみくらへん

けふ

までやって来たけれども、もうこうなつては逃げたところで、捕へられるは、今日か

日かの問題に過ぎぬと概念し、陰にひそんでそこに膜を切って果てた。

この人は通常黿彌太といつた。土佐藩邸にあって新留守居組といふのを勧めてゐたが、藩

豊信に命じられて勝安房守について航海術を修業し、前矚望されてゐた。宮内省殉難録

記末始粗選新

193

かろう

まねかえ

ぐその場だけは、辛じて免れ得たといふに過ぎなかつた。

西肝臓は、生捕られて、牢に入れられてゐたが、翌慶應元二月十一日、病のため

で

しま

に獄中に死んだ。西は取調べの時、ふところから「王を斬るの」といふのが

はうわう

なかがはのみやき

たてま

とき

きたそひよしまろ

たの

出た。某王とは中川宮を指し奉つたもので、これは土佐の北添佶磨に頼まれて書いたも

しらす

ました

のであると、白洲で申立てたといふ。

ひろおかなみひで

ちか

耕蔵は直純が本名で字は正義。別齋といつた。京都の書店であるが道を踏じ、易理の

研を積んだ硬骨の人物。一時洛東の錦織村に接したことがある。梅田雲と交り深く、彼の

死後は自からその故宅を取片づけ、石碑なども建てたりした。大和の義擧にも關係あり、志士

との交渉は深い。牢死した時は四十二才であつた。明治元年になって、朝廷西川の死憐み、

その一女のために終身二人口の靴を賜った。

しよ ふかて

いけだ や

だっしゅつ

かはらまち ちゃうしう

廣岡浪秀は、数ヶ所の深手を負って、漸くに池田屋だけは脱出したが、河原町の長州

までは

よ

ろじやうばつめい

そし

屋敷の近く迄逼ひ寄ったが、遂に路上に絶命した。年廿四である。

廣岡は通浪秀といつたが、 正器といふのである。長州大嶺神社の神主で、長州屋敷にゐた

*

てきふたり

ふに

うはうんまへ

おほきか

まんてい

けられ敵二人を斬ったともいふ)再び、妙法院前で取押さへられ、大阪の土佐藩邸へ護

選されるに及んで、切腹して果てた。年廿二であつた。

長州の吉鶴といふ人物。江戸の井町長の門弟で、法の者であつた。

丁度この事變の夜、ある酒亭にあつて酒をのんでゐたところへ、管津勢が、池田屋の餘

驚狩りとしてどし(押込んで来てどなり、ひながらも、力を抜いて立つたが、

ひ

たぜい

おは

とし

に多勢に斬られて終つた。年三十四であつた。

いけだ や

しんせんぐみ

しうゆき う

しかね

さら

まねが

池田屋で、新選組の襲撃は受けたが、潮くにして、その場に、”を晒すことだけは覚

にしかはこうぞう ひろをかみひで ところやま

きちろう またそのよしまろ もちつきよしづみ き へきぎひこ しよし

れた西川耕藏、廣岡浪秀、野老山五吉郎、北添佶磨、望月義澄、佐伯彦の諸士も、た

لهم

たらいのち

+

この激戦の飛ばつちりで、可惜生命を捨てた志士がある。

どうはんふじさ

まん ちやうなんらう まきてる

やとひしがる めした

土州藩藤崎要範の長男八郎(輝)は、足軽に召され、七石七斗の小身
ではある

し

ころ

だつまん

うほうい

うきよ

てうど

が、氣慨ある武士であつた。その頃は、脱藩して妙法院に寓居してゐたが、丁度六月五

ぐわつ

こく

そうしん

よる ようじ

いけだ や りょくわん ちか

おは

あひざ

くわな

じうぶん てはい

日夜、用事があつて、池田屋旅館の近くを通り合せた。 會津、桑名が、 充分に手配をし

ぶし

とき

てゐる時なので、何度からかどやくと二三人の武士が出て来て、

ごはん

つんめい

「れの御か。御名は」

ゆんもん

と、尋問した。

おも

池田屋に、こんな事があつたとは知らず、器の、俗に士狩りといふ混士改めだ

ひとり

とつざんもの

と思つてゐると、その中の一人が、突然物をも云はずに斬かけて来た。

藤崎は、手早く受止め、身を醸して疾風の如くに逃げたが(この時、櫛でつつか

りと転落されてゐた。藤堂平助も、眉間から小馨の恋を、深く、一太刀やられて、戦線

こぐわい しりぞ

いきみなみく

くせん

を戸外へ退いた、男も並々ならぬ苦戦であつた。

けんゆきひら

なか

きやうなつ

しんせんぐみ

みぶ

とんしょ ひきあ

2100

剣戟めく中に、京の夏の夜は明ける。新選組が、壬生の屯所へ引揚げの時の沿道は

見物の人をもつて埋まった。沖田は幸に元気が復したので、隊士に看護されつい歩

とうどう

ち

はこ

ながくら

ぜんしんち

るいてゐるが、藤堂は血だらけのま釣で運ばれ 永倉も、全身血だらけであった。

隊は二弾。近藤、土方は、微を含んであれ程の死戦をやったとは思はれぬ程に落着

る。

いてゐた。

打合ひのため、つたり、折れたりして解くだらない方は、みんな抜き身のまいであ

じぶん

すがに

だ

よく

はや

自分もまた、別に姿をかくしてゐたが、すぐに尋ね出され、翌六日には早くも町奉行所

へ立てられた。一取調べの上、七日入。八日には抗かくした妻子も町奉行所へ

なさ

たと

まちやくにん

かけつ

引かれたが、これはお情けがあつて直ちに町役人に六箇月お預けとなつて歸された。

さわた

惣兵衛は獄中で熱にかつて、に七月十三日に死んだが、死は、特に戦人と

ひみつ なか しもたちうりじゃうんじ まいちう

妻に下渡されたので、秘密の中に下立賣淨圓寺に埋葬した。

まちぶぎやうしょ

池田屋の器その他は悉くされ、その上七ヶ月の營業停止。 妻子がはじめて自

もど

分の家に戻ったのは、この年ももう十二月の末であつた。

*

なに

じかんよ

ゆきせん

な

しんせんぐみ ようや

.

めいじん

何しろ二時間餘にわたれる激戦である。名だる新選組の猛者も、先づ名人の沖田が、

たかひ

" びゃう はい

かつ

こんとう

ながくら

きころ ゑり

戰のに、持病の肺が悪くなつてひどい咯血をして昏倒した。 永倉も、着込の襟から

腕のをほろに切先きでやられ、何時の間にか、左手の親指の根の肉を、すば

188

記末始粗選新

たか

そくし

いじゃう

志士の即死は以上の七名。生捕廿三名

は、これを大和小路三体組手の三線寺境内へ

揚げて行った。

血みどろになって離れてゐる志士の死

選び出し、どんとり込んで、そのま

忙しろ、京都の六月、江戸の質夏よりも暑いので、ば、すぐに何人であるかさへわ

からぬ位に腐って、後に、胴は四斗へ入れて寺へ埋め、首は晒す事となったが、晒

し首の捻札をつけるに困って、池田屋の使用人を呼出して「これは宮部さん、これは大

しまべつ

高さん」と、識別さしたといふ話である。

はなし

池田屋の主人惣兵衛は、貯めくの下を妻子をつれて逃げ、それは親規の家に預けて、

けんふしや好きだ

天才師の創法者沖田に立つては、殆んど子供にされて、れて終った。長州の浦

節の日記には、吉田は池田屋内ではなく加州屋敷の前で見張と戦って死んだことになっ

てゐる。

ちゃうしう すぎやままっすけ

くらんはち

よこ

こて

うちおと

はなは

しゅつけつ

同じ長州の杉山松助(四)は、永倉新八に、横から小手を打落されて、甚だしい出血

のために死んだ。

ひご

まつだ ぢうすけ

さうたう やつ

おきだ そうし

はつけん

肥後の松田重助(五)は、相當に遣たのだが、沖田総司に登見された。この夜は、

幣をしめた商人の風態をしてあたし、得物は短刀であつたので猛然と斬り思つたは祭り

ひ

てんさいおきだ

うちおと

おきた

また

しま

くび

たが、相手が天才沖田、瞬く間に打落されて終った。そこで沖田に首をはねられたとも

ひ、一先づ逃けて、津勢にうしろから槍でやられたともいふ。

播州の大高又次郎(ほ六)、土州の石川潤次郎(謎)など、何れも、一度といふ

うちじに

ところで、討死した。

志士は二階から、どん

などへ飛降りて逃げやうとする。その中に、こた手に

たれ

れて、近くの四屋重兵衛といふ旅を襲った土方親が、そこには誰もなかたつの

で、どやくと、恋屋へ馳けつけて来た上に、津桑名の武装した兵三千人があ

ひは七百人とふ) 漸くやつて来て

ぐやつて来て、池田屋から、長州の方面へかけびつしりと、警備

を立て、殊に池田屋は、ぐる巻きにして、一定逃さぬやうになつて終った。

とまで き

どな

こんどう みかたたいぜい

その時迄「斬れ斬れ」と怒鳴つてゐた近藤は味方多勢と知ったのではじめて「生捕りにせ

めい

たっか

よく」と命じつ戰つた。

みやべていぞう

した と

ち

宮部 (二)は、この一味の頭目であるが身に敷ヶ所の傷を受け、進退谷まつて、

ふく

は

階段の下で屠腹して果てた。四十五であつた。

長州の吉田稔糖(詮三)は、先きをやられたが、端に薄手だったので、その

たん ちゃうしうや

ひきかへ

きう ほう

えんぺい

もと

ま」危地を脱し、一旦、長州屋敷へ引返して、この急を報じ、瑗兵を求めてから再び手

櫛を卵きさけて、池田屋へ取りて恋し、裏庭で、飛田総司と一蹴になつたが、忙しろ

ふたとて

*

らう

こんどういさみ おきた そうし

とうきう

近藤勇と沖田総司は、かを星につけたまゝぐん(奥座敷へだって行って、裏手か

おもてぎしき ゑんがは

がくらしん

とうどうへいすけ おもてぐち

はらだ きのすけ たに

らの逃走を防ぐ。 表座敷の椽側には永倉新八と藤堂平助、表出口には原田左之助と谷三

やり

かま

十郎が、槍をもつて構へてゐる。

たに しんにふ たいし

びつちう うまれ おほさか らうくちう あに たにまんだらうおよ おとしうへい にんおひたづき

谷は新入の隊士だが、備中の産で大阪に浪々中、兄の谷萬太郎及び弟周平と三人相携

にふたい

たねだ ほうざうゐん やり

たい

うでまへ

はらだ

ひと

へて入隊したもので、稲田賢蔵院の槍をとつては大した腕前であつた。原田はこの人の

もんじん

門人である。

あに まんだらう

おほさかまつやまち まちだうじゃう

らう

ぞく

兄の萬太郎も、大阪松屋町に町道場を持つてゐる剣客であるが、三十郎の槍は俗に「千

石ものだ」等と云はれてゐた位である。

184

末始粗選新

會新選組等暴=池田屋チ襲フ、宮部鼎藏、吉田年磨等、其外難=斃ルモノ十數名、

先是、宮部鼎藏ノヲ捕エ、共ョリ古高新太郎(俊の間違ひ)二及ブ、宮部ノ僕、主

人鼎藏ト、古高二寓ス、當時有志士 爾他古高ニスルモノ不少

此夜諸士會同、古高ノ縛ラレテ新撰組中在ルヲ急製シテ奪還セント欲スルノ

議アリ、又尹宮ノ賊ヲ助ルヲ怨シ其根本ヲ除カントスルノ論アリ、嚣々不決

長州邸内ノ壯士モ舉テニ應セント欲ス、余、當時京都邸内諸士總管ス、依

テ、余、曽テ古高ト同盟ノモノ三人選と、古高難ヲヲ許シ、其他ヲシテ門

出スルナ禁ス

千時、杉山松助邸内有り、則、松助命ジ、門殿ニシ、前途亦大事、猥リニ此

ニ應スルヲ許サス、松助、此夜、變聞キ、余ヲネテ池田屋ニ來ラント欲シ、

途中、賊ノ爲ニル(木戸孝允自記の自叙記)

記末始粗選新

183

りつ

すぎやままつすけ

ひろをなみびで

荒嘩稔磨、杉山松畴、岡滅。 土佐の野老山五郎、石川灑郎、北漆街

まろ

もちづきよしずみ はんしう

おほたかうべ

どうていまたじらう きやうとせいごろん にしかこうぞう

磨、望月義澄。播州の大高忠兵衛同弟又次郎。京都聖護院の西川緋蔵など、一粒選りの

にんぶっ

ふがふ

立派な人物ばかりでも十五六名はあつた。

ちかうはん

たゞ、當然居合はすべくして居なかったのは、長藩の桂小五郎(三一)であつた。もち

ろんこの夜の合の秘密な”は噓つて来たので、長州藩職かく身を護って、職

飛躍をつけてゐた小五郎は、五ツ(午後八時) 心屋へやつで来たが、その時はまだ、

たんたいしうやしき べってい

ひき

じへん

誰も集合してゐなかつたので、一旦野州屋敷の別邸へ引揚けた。事の起きたのは、そ

れから間もなくである。

六月六日(五日の間違ひ會及新撰組等、暴ニ長州人ヲ捕縛シ或ハ撃殺セリ、長州人

大に怒ル、孝允等モ此夜旅店池田屋ニ會スルノ約アリ、 五ツ時初夜此屋ニ至ル、同

志未ダ來ラズ、依テ一去テ叉來ラント欲シ、對州ノ別邸ニ至ル、而テ未経數刻、又

つぶえ

信嶌藤齋流念無道神は劍のもの頃するゐてし躍活にん盛 五小桂

し威業大のあすか抜刀てつから作りあで手ひ遣の流一でん學に

るあで影面の時當ふいとたげと

182

末始粗選新

そうべ

びっくり

とも

だりはし

したまではし

おほろ

ておいたといふ。惣兵衛は、吃驚すると共に、二階の段梯子の下迄走り寄つて大聲で、

かい

みなさま りょきやくしら

『お二階の皆様、旅客調べでござります』

と叫んだが、1度、談を怒って、車座になつて酒を飲んでゐた人々には、はつきり取

くだらなかった。

きたぞへよしまろ

土佐の北添佶磨(話】)が、同志がやつて来たのだと思つて、

『んだ!」

こんどう

かほ

うしな

か

といひだら、うつかりして出て来ると、ばつたり近藤と顔を合せた。度を失って駆け戻

ろうとした瞬間、男は、どどどと階段を矢のやうに昇って、頭から肩へかけ一文字に

斬り下ろして終った。三十、惜しい人物であつた。

いけだ や

*

しふがふ

ひとく

じんぶつ

ひさ

けつぶつ

ぞう

まつだ ちうすけ ちゃう う

この夜、池田屋に集合してゐた人々は、肥後の傑物宮部鼎蔵(堆實)
松田重助、長州の

やうし

な

さとうそうべゑ

あらた

へ養子となり、名も佐藤惣兵衛と改めてゐた。

ゆんじらう ちやうなんりうじし

みやがはけ

たうしゅ

やうとんけふ とも

源次郎の長男隆司氏がいま宮川家の當主で、養豚業と共に、依然多摩方面の大百姓と

いぜんたま はうめん

わりよく

して威力を張つてゐる。

ひと

おち

あた ゆう

すなはいま いさみ あと

この人には、叔父に當る勇五郎が、即ち今、勇の後をついで現存される勇五郎翁であ

けんきん

ゆう らうおう

る。

いけだ や

にはさ

こんどう

しゅじん

近藤は、池田屋の庭先きへずうツと入ると、

ご ようおらた

『主人はをるか、御用改めであるぞ』

と撃をかけて、燃々としており込んで行った。転込んだ味方は僅かに五、もとより

ほんと けつし

かくご

本堂に決死の覚悟である

一時間に大戸を降ろして、村鍵をさしてあったのだが、これは内から山崎器が開け

しやう

七月

近藤周齋

荻原多賀次郎様

近

寺 尾 與 次 郎様

蔭山新之丞様

島崎勇三郎様

宮川香五郎様

いさみ ちゃうけい

宛名の島崎勇三郎は、近藤里方のもの。宮川五郎は、ふたもなく頭の長"

ちゃうなんけんじらう じなんゆう らう

なんぐんぢ

ちゃうちょ ゆき じ ちょ

おとさらう

で、音五郎に、長男源次郎、次男勇五郎、三男軍治、長女お幸、次女おりせがあつた

さいまへ びゃうし

いさみ ちょくけいくじらう

こたひらひらなかしんでん 80 とう

が、おりせは二十歳前に病死した。男の直兄久米次郎は、小平村中新田の佐藤といふ家

藤

末始粗選新

179

候。

一、此度戰功且探索方萬事周旋指揮宜敷により、長道の御刀當節の御褒美として拝領

仕候。組一統へ金五百兩拜領仕候。 此假御吹聽申上候。

一、關東表武人の有志御座候はゞ、上洛致様、精々御賴申上候。兵は東國に限候と奉存

候。此段宜敷御周旋可被下候。

一、大樹公御下向、御老中水野、稲葉兩公より、下拙の身分迄、彼是御内意有之、速

に御目見以上召出申度候へ共、先例無之候間、與力上席と被仰聞、尤難有心得候へ

ば、右等に取立可申哉に御尋御座候。依之、江戸表親父へも此段申上、共上難有御

請可仕と申上置候、如何致し可申哉、此段一同様へ御賢察御返書奉待入候。

一、先日板倉周防守殿家来より、養子貰受申候。當節柄、死生の程も難計存候より

右等の心構致候。追て委敷可申上候。名は周平と附置申候。實は御相談の上、可申

己上

上筈に候へ共、此段行屈兼候。追々御陀申上候。

一、尖矢

一、重藤弓

五百筋

十一

其外着込刀、長刀、武器類、 五長持有之、今日會侯へ引渡申候。

一、折惡敷、局中病人多にて、僅々三十人、二ヶ所の屯所に二手に分れ、一ヶ所土方

歳三を頭とし遣はし、人數多く候處、其方には居合不申、下拙僅々人數引連出で、

出口に固めさせ、打込候もの、拙者始沖田、永倉、藤堂、悴周平(今年十七歳) 右五

人に御座

て徒黨の多勢を相手に、火花を散らして、一時餘の間、 戦闘に及候處、 永倉新八

の刀は折れ、沖田総司刀の帽子折れ、藤堂平助刀は双切出ささらの如く、 周平は

槍を斬折られ、下拙刀は、虎徹故に、無事に御座候。追土方歳三勢駈付、夫よ

召捕申候。實に是迄、度々弁、二台と候者は稀に覺候。 今度の敵、多勢

とは申しながら、孰れも萬夫の勇士、誠に危き命を助かり申候。先は御安心可被下

可被下候。

一、拙者租仁钴、藤堂平助深手、永倉新八薄手,外汇手疵請候者無之候。先、御安心

一、會侯仁、二人深手負申候。所司代越中守樣御手汇、一人即死、一人深手請申候。

尤、外々の樣子未龙相分不申、勿論、所々汇深手LT倒居候族有之候趣、未尤

幾數即死候哉、不分明仁御座候。

追分0次等尚可申上候。

一、具足

新選組分捕致候品々、左の通御座候。

十一

一、槍

二十五筋

一、木砲 十貫以上 五挺

一、短筒

三十挺

一、燒藥 火筒

十本

桑侯手に一人召捕。

本國へ行候手筈、豫て治定致候處、て局中も右等の第可有之候哉と、人を用

ひ間者三人差出置、五日早朝、佐敷もの一人召捕、篤と取調候處、登圖哉、 右徒

黨一味の者故、夫より最早時日難移、速に御守護職、所司代に此旨御届申上候處、

速に御手配に相成、其夜五ッ時と相觸候、惣て御人數御繰出延引に相成移り候間、

局中手のものばかりにて、右徒黨のもの、三條小橋縄手に二箇所致居候處へ、

二手に別れ、夜四ッ時頃打入候處、一ヶ所は一人も居不申、一ヶ所は多勢潜伏致居

余て覺悟の徒黨の族故、 手向戦闘、一時餘の間に御座候。

打留七人、手爲負候者四人、召捕二人、右は局中の働に候。

漸く事濟候跡へ、御守護職、御所司代、一橋殿、彦根、加州等の人數三千餘人出張

に相成、夫より屯所へ被打入候、會侯の手に四人、召捕、一人打取。

翌六日晝九ッ時、人數引揚申候。前代未曾有の大珍事に御座候。

ふしうさいほか めい お

翌月早々、近藤勇が、その詳細を自から丸餘のに認めて、江戸で
""にある

した

父周外五名に宛て差立てた手紙がある。

てがみ

燈下取急亂筆啓達致し候。向暑の節、彌御清榮奉賀候。當方一同無事罷在、乍憚御

懸念被下間數候。

然ば、此度賞六月五日夜、洛陽動亂の一條、關東に於ても撫々紛々と風説可有之、仍

御案じ御心配も御座候哉と存候間、不取敢御安慮可被下候様、左に奉申上候。

彙て大樹公御發駕前より、紛々と沸騰致居候より、御東下御延引相成候様、乍不及、種

★周旋候へ共、其義不相叶、御下向に相成、京都御手薄と心配致居候折柄 長州

藩士浪士等進々入京致し、都に近々放火砲の手筈に事定まり、其虚に乗じ朝廷を

やう

-174

記末始粗選新

かは

時刻になつても、津侯の手兵はなか出て来ない。近藤は、づ、隊士をパニ

かづ 別々に、三條近ぐの所へ詰めさせて置いて、極めて筋かに、日頃の避難

よそほ

と凝ることのないやうにはせた。

日の本祭といふ祇園祭の宮、ことには、少しむしくした夜で、夕涼みの人達が、

ぞろ通って行く。

*

こんどう

ひづ

へい

のこく

″がたみ

しんぼう

近藤は會津の兵を刻(十時)迄待つたが、姿も見せないので、辛棒し切れなくなつて、

みづ

いけだ や

きりこ

いけだ やじへん

いちるしん

遽々、自から池田屋へ転込んだ。世にいる「池田屋事變」。このために明治維新が一年遅

ほど

れたといはれる程である。

三七 池田屋事變

かねて泊り込んである山崎と、新選屯所との観測が、ぴったり合って、今夜相違な

く屋へるものがあると、戦したのは、五日のもう然であった。

「それッ」

こんどういさみ

たと

たいしぜんぶ

ひじやうめいれい

きこ

う

あさき ち

といふと、近藤勇は、直ちに嫁士全部に、非常命令を傳へ、着込みの上に淺黄地にだん

ぞめ そでじるし

れい せいふく はおり ちゃくよう

かたなてやり けんちう けんぶん

だら染の袖印のある例の制服の羽織を着用させ、刀、 手槍を厳重に検分した。

くみ

なか

ほさか しゅつちやうちう

ちゃうどなつま

びやうにん お

そうろんわづ

紙の中には、大阪へ出張中のものがあり、丁度夏敗けで病人が多く、總員僅かに三

めい

4

あひて

ちうじん

くだ

まん

てちが

十名に過ぎないので、相手の浪人がどんな企てがあるかも知れず、萬に一つ、手違ひで

せんしう こんじ

しゅごくよく しょしだい

てんまつ しやうさいほうこく

よ

いぬのこく

もあつては千秋の恨事だと、守護職と所司代にこの顛末を詳細報告し、この夜の戊刻(八

せい しゅつどう

てはづ

於

時)を期して、一斉に出動する手筈を極めた。

たか

こと

まきか どうし

ふりえき

高の事であるから逆に同志の不利益になるやうな事は口を開くいが、忙しろ家探し

きうたう しょうこ にぎ

あひて

しんゃんぐみ

で相當な證據を握られた、おまけに相手が新選組であつて見れば、どんなひどい拷問を

せいめい

かくご

さんごきく

するかも知れない。先づ古高の生命は亡いものと覺悟をしてさて、前後策はどうしたら

よいか。

たい

しんせんぐみ

とんしょ

ちに新選組の屯所を襲撃して古高をひそうといふ論者がある。

ことごと いた

けいぐわ

そくこく てはづどほ

やきうち

事茲に到つてはかねての計畫の洩れる恐れがあるから、即刻、手通りの、 焼討をや

らうといふものがある。

ぼうきに

べつ なん

こと

どう

いや、それは暴擧だ、別に何にもそんなにあはてる事はないではないか。一同、一先

こく

きくわい ねら

どうし

あつ

づそれぐ國して、も少し機会を狙ひ、同志を集めて、再擊を計らうといふ論者もあ

さいきょ

はか

ろんしゃ

る。

ほう

たく

れんらく

ひみつ

たやす

はく

志士の方でも巧みに連絡をとつて、秘密な會合をとけては、論じ合ったが、古語がま

ふ話

いう

どくわいがふ

さかに他易く自白するやうな事はあるまいからとにかく有志が一度合しやうとい

になつた。

末始粗選新

171

きん もうしん ほうひ

もっとちっ

たかがみやほっくわ

ては、先祖と中心に四方を大を以て取位女のみか、中川

きんだい

しゅごしよくあひづこう

ぐんしん ちまつり

はんちやうしうけいしょだいめう そ

いきほひじやう

参する守護職會津侯を襲えて先づ軍神の血祭とし、反長州系諸大名を襲つて勢に乗

すんり

するさん

しゅじやうちやうしうごうざ たてまつ

だいみつはう

こと

じて禁裡へ推参し、主上を長州へ御動座し奉るといふ大密謀のある事である。

じつ

ほど

は古をこれのものとは思はなかったが、デは思はぬひ物をしたやうな有様

でこの自白によつて、忽ち新選組総員の大活動ははじまった。隊士は東へ飛び、西へ走り、

まちばぎやうよりよくとうしん おうらいみんほん き

きや

*

こう しょしだいくわな

ぎおん しまばら

津侯、所司代桑名、それに町奉行與力同心の往來頻繁を極め、祇園、島原、木屋町

から二條通り、長州藩士探索の手は、次節々々に延びて行く。

古高逮捕の事實は、京都に潜んで煽りに覲玉を企ている志士の色を失しめた。古

せなか

〳

ち

なが

ふるだか

さん

背中の皮が破れて血が流れたが、古高はたつた一言、

ほめう

だかしゅんたらうまさやす

「如何にも

にも本名は古高俊太郎正順である。それならばどうしたといふのか
』

めいもく

ゆふこく

とぅく ひぢった

そら

こういったきり、冥目して終つた。

夕刻になつて途々、土方はむかっ腹を立て、古高をしばつたまさにへ釣るし上

こう

うら

ひ

ふうたか

すんくぎ

っつう

そく た

げさせ、足の甲から裏へ五寸釘をづぶりと突通し、それへ百目蠟燭を立て を

とろりと蛾を肌へ流すやうにした。

これには、游石の古龍も堪えかねたと見え、ものと一時間もえ苦しんだ上に素直に

じんもん

でうどほうへんりよしゆく

こた

尋問に答へるやうになつた。

それによつて、三條通邊の旅宿に、いろな藩の名を掛けてつてゐる武士は、

こと

どう

ちゃうしうじん

きやうがくいろ しつ

ぐわつ

多く長州人である事もわかったし、しかも一同の色を失したのは、

せんご

前後を期し、然風のを選んで恐れ多くも禁の風上に潜行して火を放ち、場合によっ

末始粗選新

みぶ

かねて萬一の用意があつたものと見え、歴だ末に郵送、素早やく濡れ、何にか秘

謦書類に火をつけて少し逃げ遅くれた主人喜右衛門だけが捕まった。家探しをすると把

のが授けになつてゐたといふ。武器及び志士往復の書類も多數にあつた。

榊屋喜右衛門など」は素より殴りの名で、本名は古高俊太郎といつた。選

坂田郡ので、山科毘沙門堂門脈につかへ、京都に入つて倒幕勤王の運動をはじめ

うったうんぴん

しんゆう

てゐたものである。 梅田雲濱などは親友であつた。

肥後の志士宮部麟 (實)は、僕と共にこの家の一室に寄宿してゐたが、この

あさ さひはい ぜんやらいぐわいはく

なん まめか

朝は幸に前夜來外泊して、難を免れた。

とんしょ

*

ひきた

しゅんたらう

ひぢかたとしそう

しりあが

壬生の屯所へ立てた俊太郎を、土方歳三が、尻上りの多摩で、針を刺すやうに

もと

ふくさ

ちゆう

とりしら

こたか

けつし

ごんょんく

重に取調べたが、素より古高も決死の覺悟である、一言句も口を開かない。

りに薬屋と大小の取引をしてゐるので、では、勿論これが、武士であるとは、人気

のつくものもなかつた。

所司代の足転で、渡邊幸右衛門といふんは、乞時に化けて、その以前から毎夜

屋の軒下にねてある。これへ、志士のその他探した事は、細々と書いて、紙屑の

まど

やうにして窓からほーんと捨て」やる。

いけだ

*

四條寺町で古道具と馬具とを賣つてゐる株屋喜右衛門といふ人物が、どうも怪しい、

ぐい しろもの

ますや

しゃうにん

すつかり商人には成り切ってゐるが、洗ってみれば意外な代物であるかも知れない、そ

いく

やとひにん

おや

れにあの家にある雇人なども怪しいといふ事がここからわかつた。

沖田総司、永倉新八、原田左之助の三人が瓶のもの甘餘名をつれて、一斉に裏と表

ぐわつか きうゆう

から桝屋の寝込みを襲つたのは六月五日の早暁である。

末好粗選新

167

士をはじめ、詣頭暁の混士が、頻りに代入するやうである、どうも怪しいといふ事

ほうこく こんどう

う

ぐわつ すゑごろ

の報告を近藤の受けたのは、五月の末頃であつた。

すぐに、偵察を出していろ調べてみるが、相手も餘程注意深かくやつてゐると見

こと

しかた

えて、なか尻つほをつかまれるやうな事はしてみない。仕方がないから、探偵方を

ぼう ぬいしゆやまざきじよう

ぎやうしやうにん

やつてゐる棒の名手山崎が薬の行商人に化けて、わざ、先づ大阪へ下った。

たんていかた

大阪の浪人で、大阪の事情はよく知つてゐるから、ある船宿で、しばらく襟し、こ

やど

じゃうきやく

の宿から、常客であるからよろしく頼む、といふ丁寧

くむ、といふな紹介を貰って、再び京

ふたときやう ひき

かへ

いけだ や

ぐわっ

か

返し、池田屋へついたのは、六月の二日である。

いま ちが

じぶん ぎおんまつり

ぐわつか

あてこ

きやく

今と違ってその時分の祇園祭は六月六日。これを當込むらしいお客がすでに一ぱい

いけだや

ながねんとりひき

ふなやど

きやく

ことは

したざしき おもて

で、池田屋も困ったが、長年取引のある船宿からの客なので、断りかねて、下座敷の表

の間へ入れておいた。

山崎は、翌日は二体の薬問屋へ行って、澤山な薬を仕入れて運び込ませ、その他

に「歎願の筋あり」といつて、上野信濃から、中山道を美濃、ひどい山路を越へて越前へ出た

が、謎に敗れて、この十二月二十日には、同者悉くを打たれて怒った。

情を知らぬ由比圖書といふ武士の獨断で敦賀船町の千倉に打ちこまれて、土間へ荒莚を敷

いて、食事も探飯を時々投込まれるやうな虐待を受け、に翌慶應元年二月四日から廿三日迄

毎日々々町外れの松原へ引出して首を斬られた。七百餘名の中、うまくいひ逃れた者三百五十

人は追放又は罪、十五才以下の少年は、同地の本妙寺で坊主にし、残り三百六十名を全部斬

つた。

大きな穴を掘っておいて、ると、どん(この中へ踏込む。今、松原神社となつてゐると

ころは、この穴の上である。

水戸の英傑武田耕雲、田丸稲之右衛門、藤田東湖先生の子小四郎など、みんな斬られた。

*

きやう

でうこ はし かはらまちひがしい

りよくわんいけだや そうべゑ

ちゃうしう ほん

京の三條小橋、河原町東入る北側に旅館池田屋惣兵衛といふのがある。長州の藩

ぐわつ

にち

あひづひきのか

な

やみうち

だいぶつ

くび

五月二十二日には、 會津肥後守家來松田鼎が、 暗討されて、大佛に晒し首となった。

どうち

なかがみや が しんたかはしゅんのじゃう

ほんわんじまへ

越へて甘七日には、大阪へ行つてゐた中川宮の家臣高橋健之丞が、同地の本願寺前でや

られた。

管津侯もまた、その行動に先手を打つため新選組に命じて充分の働きを求めた。乞食

ぎやうしゅうにん

はた

いきみひぢかた

しんかう

になるものがある、行商人になつてゐるものがある。 男や土方は、深更よくこれらの

関士が、庭先から君び込んでの秘密な報告を聞いた。

水戸の天狗業が、故郷公の神輿を奉じて日光山に詣で、つて筑波山に立籠り、

とし

の旗擧げをしたのがこの年の四月。

ぐわつ

沼玄蕃頭が大將となつて闘東十餘藩がこれを取んだので、仕方なく一方を抜けて、

同志七百余人。その頃京都にあつて禁裡守衛總督 海防禦指揮といふ役にあった一橋慶喜公

中飛躍であつた。

神文依如件

昌宜(宜)の下に不規則な時に「瀧如」といふを押してある。

*

ぶんきう

ぐわつついたち

三年は危機のうちにすぎて、明くれば四年の春。これが三月朔日に改元あつて、

ぐわんち

きよねん ぐわつきやう

「元治」となる。

去年八月、京を追はれた長藩は、幕府の命に抜いて

「寃を闕下に雪ぐ」

ちゃうはん

ふくふ

ぬい

といつて、邸を

みて帰りに大京の機をねらつてゐる。それに京に居残った藩士は、

ちうび やく

すがに

名を變へ、姿をかへ、落首する、桜文をする、いろな流言を放つ、死者狂ひの職

昌

宣

いさみ もんてい

いちくけつはん

にうもん しんもんてう

ますもの

あづか

うち

くわんいま

ひ

勇の門弟が一々血判をした入門「神文帳」の巻物も預つて、その中三巻は未だに、日

のしゅく さとうけ

こ

な

おな ひつせき

野宿の佐藤家に残つてゐるが、名前は誰か代筆をしてくれたものやうで、同じ筆蹟が

きいろ

けってき

あと いま

たまく

かくまき

多い。黄色くなった血滴の後が未だに生々しいものである。

へきとう どうゆう しんもん

各巻の辟頭に同流の神文がある。

神文の事

一、天然理心流御流儀仍執心不淺懇望仕候に付御相傳可致下旨辱奉存候事

一、指南免許無之内親子兄弟たりとも相傳申間敷候事

一、手前不至内他流と試合一切仕間敷候事

1、他流之兵法批判申間敷候事

一、手前不情にして對師御恨申間敷候事

右之條々於相者天神地神惣く日本大小之神祇別而熊野三社大權現鹿島大神宮之神罰

天罰可蒙立所者也

八月完

池田屋事變について會津侯から新選組へ賜はつた云は"感狀である。

神日本

神祇別吧

三社大權地底面

大神宮之神

神文件

心

男門人の神文帳 巻物になつてゐる。云は"天然理心流門人の連別歌で、名前を書いて血を捺

してあるのが三本。これはその最初の神である。

162

記末始組選新

何分東下の儀相不成候間、 不惡御承知被下度、當人に相成替り、御看病之程於私共

御頼申述候 以上

九月廿三日

男が京都へ行ってからは、江戸に残った人や、道場の修繕その他一切は、兄弟子で

ある日野宿の佐藤彦五郎が世話を焼いてみてくれる。日野の佐藤家の道場へ通って来る

ものはもとより、江戸道場の稽古日にはらず、出張つて来て、男になりだつて佐を

とつてゐた。

ふこ

らう

う

いさみ おと

すなほ じんぶつ

したが

たちかち やわ

彦五郎は、腕は男に劣つてはゐるが、素直な人物で、従って太刀筋がらかであつた

もんてい

なつ

なぬしやく かねも

じぶん

かね

から門弟はよく懐いた。それに名主役で金持ちであるから、どん~
自分の金を出して、

道場に手を入れるので、男のある時よりはぐつと奇麗になつてゐる
。

記末始粗選新

161

みこみ

になる見込はない。

男のところへ度々、至急つて来るやうにと手紙を出したが、男には
、一簡

げつよ

えどくだ

ひま

を要する江戸下りの、暇はなか得られなかった。

みぶ

とんしよ

いさみ み

せわ

ひしょ

ひろきはかん

壬生の所にあつて、男の身のまはりの世話を焼いてみるいは秘書のやうな廣澤

と

らう おほの ひでま

りやうにん

みやかはおと らう

かけやましんのじやう てらを やすじ らう はぎはらに

がじらう

ぬい

次郎、大野英馬の兩人から、宮川晋五郎(勇の長兄) 蔭山新之丞、寺尾安次郎、萩原多

とうひこ

らう

賀次郎(何れも府中に住居する勇の家) 佐藤彦五郎 (日野宿名主、同門の先輩で義兄と稱した)

せりざ

のち

ぐわつ

にち

した

てがみ

の五名に宛て、芹澤を斬った後、五日目の九月廿三日に、差立てた手紙がある。

(虫喰ひのため欠字となつてゐる個所が多いが意味だけは通する。)

扨て近藤氏御親父御大病の由而急速東下候様御申越候處、當表其節之形勢實に治

亂安危之際、且此間芹澤鴨儀病死、當組五拾人餘烏合之浪士、爲近藤氏壹人之總括

取締罷在候處此節東下候而は、分崩離散も不計、誠一日片時も相離候儀六ヶ敷第

に御座候間、親子之御情實に御察申入候儀に御座候へ共、當地之模様鎮靜に趣候迄

160

記末始組選新

すいふはんで

*

にんけ

うちた。ひとりのこ

ふくちやうじょきんのぐちけんし

はらだ きのすけ

うし

水府藩出として十三人結盟の中只一人残った副長助勤野口健司が、原田左之助に後ろ

とし

ぐわっ

にち

から刺されて、果てたのが、この年の十二月廿八

水戸は‵悉く根を絶つた。低し野の死については、赤倉新八翁などは、王生の

きころ

せつ ほんと

方で、切腹して果てたと手記をしてゐるし、(事情不明) 刺殺し説は反新選組側

きじゅつ おほ

じつ しんざう

しもそめや

の記述に多いから、實は真相ははつきりわからない。

この頃、男の父近藤は、江戸小石川小日向の道場で、中風をやんでゐたが、一

進一退の歳""であった。土方歳三の實弟で、その頃まだ府中の時には出ず、

るしや かすやりやうじゅん

かんご

下染屋にゐた醫者の粕谷良順が、看護をして(順は循とも書いた) ゐるが、どうも達者

ゆく

*

よくじつ

こんどういきみ

ひづこう たい

きよくちゃうせりでは きくや ぞく

しうしんちう ころ

翌日になつて近藤勇から、會津侯に對し、局長芹澤が昨夜賊のために、就寢中を殺さ

ふくゃんもくしだい これなく

けしよだ

ぼうそうくみるん

ふがふ

そうれつしょ

れた、不覺面目次第も無之といふやうな屆書を出し、一方總組員を集合して、葬列蕭々、

どうし はつしよう

ち

ちぞうじない まいそう

同志發祥の地たるこの壬生の地蔵寺内へ埋葬した。

江戸を襲ったのが、二月八日。芹澤も僅か六ヶ月に餘る短かい月日であつた。

いさみ しゆちう お

局長は男だった。人となった。直ちに山麓を推して繍長とし、民が長と

して、生れつきの分を勢揮し、目を八方にぎょろつかせるので、全く新選組は、近藤

男の手中に落ちた。

153

記末始粗選新

也。

娼婦此粉亂逃失タリ、仍テニ樺のザリシ

らに ちうすけ

さん

よ

つきた

めい

たす

ひらやま

とあるが、平間重助については一言も及んでみない。

芹澤は、立てしてみた六曲屛風を蒲の上に押しかぶせられ、上から滅茶苦茶に

ぬきあ

しんさう

を突立てられて、合うこともなく、死んだのが、真相のやうである。

平間も、蒲團の上から二突きされたが、糸里と共に、落命したふりをして不思議な生

とうさう

命を助かつて逃走した。

のどもと

平山は、眠もさまさぬ中、喉元へずぶりと二刀やられた。

にん

うち

にんし

にんたす

六人の中、三人死に、三人助かったことになる。

記末始組選新

157

と

うなぎが聞えた。

にほんぐわじ もんす

じしん

ば、

しんせんぐみ

ひん

こんいう

にしむらかねふみおう きじゅっ

西本願寺門主の侍臣で、新選組の人々と懇友があつたといふ西村文翁の記述によれ

沖田総司芹澤寢所忍ど入、言葉モカゲズ芹澤ヲル。 芹澤キナガラ心得タリ

ト起直リ脇差ヲ抜テ討テ掛ル、沖田ノ鼻下輕傷ヲ負ハセタレトモ 土方歳三ノニノ

太刀ヲ受ケ損ジ、切倒サレテニ命チ殞ス。

婦ウメモ即座に切殺サレタリ。

平山五郎三南 (山南敬助 原田左之助ノ二士ノ爲ニ殺害セラレタルハ無殘ナル事共

まよなか

て来てみたが、この頃ではおも、泣き泣きらの武ふま」になつてゐる。本祭で

また大盃に冷酒を飲んで、芹澤はお梅と共に寢て終った。

飛山は、角屋を出てから、桔梗屋の小といふのを連れて戻り、平間も輪違屋糸里

たがしつ せつ

といふをつれて歸つて、互に室を接してねた。

真夜中である。

といつた。

＊

小紫が、便所へ行こうと、何気なく紙を開けると、暗な中に刀をぬいた武士が二人

のやうに立つてゐる。人がすうっとへ寄ると、

やかにかへ

「危ない、このま館へ蹴れ!」

いつたと思つた瞬間に、芹澤の部屋で、うむっといふ唸繫がして、輪の眠れるや

記末始粗選新

155

おこた こおほ

ごうだん

たいひ

しょう

たがく きんすa

うは

隊務を怠る事多

且つ、度々民家を襲うて強談し、隊費と稱して多額の金子を奪って

しま

ゐる。この種を、みんな握られて終つた。

さすが

膜を切らぬといふなら隊の法度書のに照らして、斷首にも仕まじいので、流石

こくし

もつ じ にん

しんみ

ゆうちょや

なが

けつくわ

しま

國士を以て自任した新見も、遊女屋に、血を流すやうな結果になつて終つた。

せりさば

いたで

これが芹澤にとつては、ひどい痛手である。

かへ

み

ふくちやうじょきんひらやま らう

ひらまちうすけ

かご

めい

芹澤が踊るとすぐ一味の副長助勤平山五郎が立つ。平間重助もを命じて中座した。

二人とも水府の脱落者で芹澤とは器ともに、切っても切れぬ縁がある。

せりさは

ほんえい

ちゃうほりかはふとものどんや ひしや

にょうば

うは と

芹澤は、かねて、その本營へ、四條堀川の太物問屋菱屋の女房お梅を奪ひ取つて連れ

＊

三六 芹澤暗殺さる

ぶんきう ねん ぐわつ

にち まよなか

さふか

芹澤鴨の斬られたのは、文久三年九月十八日の真夜中である。

しまばら すみや

しんせんぐみ くわがふ

せりざ

れい

この夜は、島原の角屋で、新選組の合があり、芹澤は鄉の如く大酒をあほつて、

ありさま

かご

みぶ

もど

後不覺の態で、にゆられて、壬生へ戻った。

じつ

は近来芹澤には内心配からぬ日が多い。同じ水戸の出身で、江戸駅の

ひとり しんみにしき

とも頼んで来た局長の一人新見(錦山といつてゐた)は、十日程前、近藤土方一味の

ために、蔵の遊女屋「の」の上で、悪事の数々を、鍛膜をあげて攻めつけ

られ、に窮して腹を切らされた。これも人物ではあったが、第一遊蕩にのみ耽って

ゆうと

ふけ

末始粗選新

153

*

そのころ

其頃、

新選瓶は、長藩京都張揚げの大に際し警のその窮しきを得たといふの

で、将軍家の名をして、お曾津侯から、恩賞の沙汰があつた。局長”は、大御番頭

つき

あて

とり

あつかひ

りやう ふくちやう おほごはんぐみがしらあつか

りやう ふくちやうじよきん おほご

取のお扱を受けて月の手當五十兩、副長は大御番組頭扱ひで四十雨、副長助勤は大御

ばんぐみ

つき りやう ひらどうし

おほごばんぐみなみ

つき

りう

番組といつて月卅両、平同士さへ大御番組並とあつて月十兩づ」を給されること」なつ

せいしき ぼくしん

しよく

おあつか

てゐた。しかしこれは正式に幕臣として職についた次第ではなく、たゞ御扱ひとなつて

したが

ぜんぜんじ ゆ

たちは

橋の上でのみ或る一定の地位を得たもので、従って全然自由な立場にあつた。

は、形上郡三郎に背嘆から尻へかけてすらッと、一刀浴びせられたが、そのまゝ逃走し

た。

くすのき

どこんどういさみ まへ

ひきだ

じゅんもん こうべん

はらだ

はら た

楠は一度近藤勇の前に引出されたが、訊問に抗するといつて、原田が腹を立て

よこひ

くび

横合から首を斬つてのけた。

しん

ゑちご

らう まつ

らうだつきう まつながかぞえ だつきう

くらいせたけ

新

記録には僅かに、越後三郎、松井龍三郎脱走。松永主計脱走。御倉伊勢武、荒

だ

くすのきこ

らうだんしゆ

かんたん

木田左馬之亮、楠小十郎斷首と、簡單に書いてある。

*

せりではかも

よ

これより先き、局長(新撰組では長局長としてゐた) 芹澤鴨は、すでにこの世に

亡くなつてゐた。禁門のあつて、堂々隊士を引いて、蛤門に參入し威風大いに揚が

じけん ちよくご わづ

くみ ばんえい ぎんのじやうかた

つた事件の直後、僅かに一ヶ月にして、親の本營八木源之丞方に、血だらけの死骸とな

つたのである。

しがい

記末始粗選新

151

みちはた

さんきつ

鮮つにして、道で慘殺された。

いせだけ

*

あらきたさまの

御倉伊勢武と荒木田左馬之亮が、斬られたのは九月十五日の頃であつた。監視してる

とは氣の時かなかつた四名が、打ち揃って、大原三位重德の邸へ

ち揃って、大原三登虱御卿の助”出かけて行ったとこ

しま

ろを握られて終つた。

この日、御倉と荒木田は、宿舎の前で、縁側へ出て日向ぼりをしながら廻り髪結

に膠代を剃らせてゐたところを、藤倉新八、信太郎の三人に、後から刀で背

中から腕へ突き通されて僅かに前の小刀へ手をかけたばかりで死んだ。

えちご

まつる

おきだ そうじ

とうどうへいすけ ふみこ

ばや まど

に

越後と松井は、沖田總司と藤堂平助が踏込んだが、素早く窓を破って逃げた。この

とき

しょうこ な

くる

まつながかぞえ

ぎの時に、かねて證據は無いが臭いといはれてゐた楠小十郎(京都浪人) 松永主計

りやめい

かほいろ

ら

に

た

くすのき

はらだ きのすけ いけど

まつなが

(京都浪人)の雨名が、顔色をへて逃げ出したので、原田左之助が生捕り、松永

ところが、これが何れも長器とはい係があつて、どうも隊の機密をご報告して

こと

こんどう

かんち

しま

すこ

ゐるらしいといふ事を、近藤は間もなく感知して終った。それからは、少しはつきりと

しょうこ

した證據をつかんだら、すぐに朝つてうつもりで目をつけてゐる。

これとは反野に長州を脱藩して、大阪浪々中、瓶に加盟した佐伯赤三郎(又)は、そ

ちゃうばんしゝ

まち

きん

ちゃうしうやしき

たく

の後、巧みに長藩志士と交り、時々は長州屋敷にも出入して、その行動を探知するにつ

でいり

かうどう たち

どうはん けつぶつけんろく きかぎすけ

よしまはら すみや とくうるもんかに

よ

とめたが、同藩の傑物玄瑞久坂義助がこれを観破して、ある夜島原の角屋徳右衛門方に呼

とっぜんおど

はく

びよせて、突然躍りかつてこれを縛して終つた。

つひ

うち

ぽんきたのはら ひまだ

佐伯も今更吃したがどうにも仕方ない。遂にその夜の中に、千本北野原に引出され、

きやうと らうにん

三五 長州 の 間 者

たけ あらまだ

ちご さぶらう うつのみやらうにん まつい もうさぶらう

京都の浪人、御倉伊勢武、荒木田左馬之亮、越後三郎、 宇都宮浪人、松井龍三郎の四

ひづき

みぶ

とんえい

にふたい しぐわん

ぐわつ

にち

相携へて壬生の屯營へ、入隊を志願して来たのは、この八月の廿五日であつた。

めい

名

あい ちの ちゃうしうまんのうとう かめい

(一説に元治元年一月ともいふ)われ四名の者は長州勤王黨に加盟してゐたものである

ぎろん きうい

だったい

りせんぐみ

あひづこう

とも

きんのう

ほうこう

が、議論の相違で、脱退して来た。聞けば、新選組は、會津侯と共に勤王のために奉公

こと

ぜひどうめい

されるとの事である、是非同盟させていたゞきたい、といふのである。

こんどういきみな

かが

しゅくしゃまへかはさうじ かた ふりあ

た。

めいともこく

近藤勇は何にか考ふるところあつてか、宿舎を前川荘司方に振當て、直ちに四名共國

たんていか

めい

もんけんさしかま

さいのに S

とくてん

た

たい

せいふく

んてうれうねよ きみつ

事探偵方を命じ、門限差構ひなく、出入自由の特典さへ奥へ、隊の制服新調料及び機密

きんす

りゆう わた

費として金子百兩を渡した。

り、大阪から艦によつて江戸へり、十六日には江戸城べつてゐたので、この太

きやうと

には、京都にはゐなかつた。

いへもち

どめ

じやうらくえどしゅつはつ

とし

ぐわつ

にち

ほか

きゆうはい

家茂二度目の上洛に江戸出發がこの年の十二月廿七日、船で大阪から京へ入ったが、

江戸へ戻ったのは、翌元治元年六月廿日であつた。

たいざいちう しやうるないだいじん

いへもち

じゅ

るうだいじん

す

あらた

しょ

この滞在中、正二位内大臣の家茂が、従一位右大臣に進み、まがりなりにも改めて庶

御の謎”を噓はつたが、天下のは、武器にとつてむしろ刻々に悪化し

て行つた。

いへもち

たいきやうちう

おも

きんわうがた きづちう

さくにう

きょくりまくしょうぐん

家の滞京中はずいぶん辛い思ひをした。勤王方の宮中に於ける策動は、極力將軍

の威望を失せしめんとするのであるから、江戸の老などは、飛脚のたよりにし

えどじやう

さんふ

ては、江戸城へ参集して

うへきま

ようと おい はづか

「上様は京都に於て恥しめられた」

な

こと お

といつて歯ぎしりをして泣くやうな事が多かった。

等は、新撰組の取締を受けて其跋扈を逞しうし得ざりしより、新撰組を不倶戴天の仇となせり。

維新後此の浪人と同系統の人々政権を握り、 新撰組の適法の行爲を犯罪となし、其の私怨を

報ゆるに至れり。 近藤勇の犯罪は甲州勝沼の一戦と、東に於ける戦闘準備のみなるにかは

らず、勇を斬に處したる後、其首を京都に送りて之を梟し、京都を以て犯罪地とし、勇が京都

に於ける適法の行爲を犯罪とし、は、私怨を報いたる一例なり。且、彼等は口に筆に、新撰

組罵り私設の暴行の如く云ひ做せり、 愛に於て世人も赤々之にはされ、小説に講

談に、新撰組を暴行團體の如く信するに至る。而して其のを解く者なきは予の遺感とすると

ころなり(男爵山川健次郎博士、永倉新八序)

*

ぐわつか

じやうらく

しゃう

ち

てうてい

せいりょく

さっぽん

ちゃうほん

三月四日に上洛した将軍家茂は、朝廷に於ける勢力が、時に、薩藩となり、長藩とな

あるひ あひづ

くわ

とき

おも

くつがへ

そんのうじやうみ

り、或は會津や桑名が時を得たかと思へば、またすぐされる。尊王攘夷となつたり

こうぶがったいろん

てうれいぽかい 1:4 ころざし ちが ことほ

ぐわつか

80

公武合體論となつたり、朝令暮改、

志と違う事多く、六月九日、一先づ京都を去

146

記未始粗選新

此節種々浮説等も有之に付ては、自然右等に泥み、市中の者共猥に立騒候儀無之様、

町役人共事専ら其所を取治め、火之用心尚更入念候様可致候事

八月十八日

だ

松平肥後守御領浪士、市中晝夜とも見廻り候様、肥後守殿より被仰付候、爲心得

相違置候樣被仰渡候事

しんせんぐみ こうぜんきゅうとぢ あん せめ

といふ布令を出した。 新選組は公然京都治安の責にある。

文久慶應の、幕府の命により時の京都守護職會津參議(當時左近衛中) 松平容保卿に

附屬し、其の膜となりて京都の秩序と安亭とを保護したるは新撰組なりき。 初め芹澤が

隊長たりし時には、紀律も厳ならず暴悍の行なきにしもあらざりしが、近藤勇が隊長となり京

都守護職に附屬ぜしより、隊長勇を初めとし、其の責任の重きを自慢し、律を厳粛にし、恒に

守護職の命令により行動したる適法の警察隊なりき。故に當時有志の徒と稱する過激派の浪人

などあるが、まだ江戸にある頃のものか、京都へ来てからのものか、はつきりしない。

ん

きやうと!

二番目の何によれば江戸らしく、三番目によればむろん京都である。

れば迷ひしなければ迷はぬ戀の道

なかろ

か

ぼんすみ

ゐ

と句帳の真ん中頃に書いて、これは、すらッ(と縦に三本墨を引いて消してある。

し

とし

おもしろ

歳三を知るには面白いものである。

この愛の十八日につき、人心々として諸器の混士やら、公卿やら、尻馬にの

しき

ほんそう

しちう

つて町人迄も煽りに奔走して、市中の混甚だしく、手のつけられない状態なので京

と

まちぶぎゃう どうひづけ

都町奉行は同日付を以て

土方歳三の筆 土方歳三より同流の先輩春日除長佐藤彦五郎俊正に宛て文久三年八月十七日子

の半から長州に代って俄かに會津、薩摩、淀三藩が禁闕守衛となり何れも戎服して夜半に参内

したあのごた の小競合の時に用ひた鉢金と鎖の手常を贈った時の手紙。

144

末始粗選新

つてある。小手も同様、裏に「玉」の一字が墨で書いてある。 るくて一騎打の転

部にもいいし、砲にも備へたもので、この頃の戦場は多くこれであつたやうである。

さとうけ

ぶんきう ねん はる

としぞう

はいくしふ

ころはつけん

けんし

同じ佐藤家で、「文久三年の春」と書いた歳三の俳句集をこの頃發見した。半紙を十

まい

へうし

ほうぎよくしふ

ほう

じぶん

とつたものであらう。

白牡丹月夜に染めてほし

枚ばかりとおたもので、表紙には「豊玉集」とある。豊は、自分の名「義豊」の一字を

玉川に鮎つり来るやひがんかな

公用に出て行く道や春の月

記末始粗選新

143

三四 土方記念の鉢金

ひぢかたとし

5

きうきよさんにふ

さい

ちやくよう

はちがね

よくねんはる

ししゃ

土方歳三が、この日、急遽参入に際して着用した鉢金は、翌年春わざ

-使者に持た

んか

ぶしうひの さとうしゅん らうかた おく とい

せて、

家である武州日野の佐藤俊五郎方へ送り届けた。

一つ

覺

一、はちかね

右者八月十八日御所非常並廿三日三條なわ手のたかひに相用ひ候間此はちかねは佐

藤兄へお送りさし上候

四月十二日

方 歳 三

はちがね

へびさし

22 A

あさ ぬり おみ

くさりは

鉢金の前廂が三つに疊み込めるやうになつて居て、しころは麻の布へ網の目の鎖を張

歳三の鉢金 手紙を添へて佐野彦五郎へ贈った土

方歳三着用の鉢金。前の方が三つに疊み込めるや

うになつてゐる。 手甲の裏には「土」といふ字を

書き誌してある。

新撰組副隊長土方歳三

函館に脱走して榎本武揚

にした時のもの。榎本

軍の制服を着てゐる。總

髪、刀の柄がしらに、金

で自分の定紋たる三つ巴

のかざりがしてあった。

死の際の刀の一 精は

達侯より拝領の薄水色

の絹紐で、これは形身と

して府中在日野の佐藤家

に送られたので、現在同

家に秘蔵されてゐる。

142

末始粗選新

おいはひはなし

はなはたけ まば

とき せりざ

ゆうき りん!

ありさま ます

幸に話はすぐについて、 お花畑へ廻ったが、その時の芹澤の勇氣凜々たる有様は流

てんぐ たうい らい

かづ

りつほ

石に天狗以来の場数を踏んだ立派なものであつたといふ。

*

おほさか らうにん

りやういしんと りう しのはら のしん とも くみちう きうき な

せきぐちりうじうじつ

مري

大阪の浪人で後に、良移心頭流の篠原泰之進と共に組中の双璧を爲した開口流柔術の

高手松原忠司(治)は、早くから髭を切ったつるの坊主頭で、この時はこれに鐵入

しろはちまき

の道々

おほなぎなた

も

べんけい み

の白鉢巻をし、おまけに大薙刀を持つたので、辨慶を見るやうであつた。 しかも、 行軍

ほうこん けいせ いらん ごと

てんか

いうしこれ

「方今の形勢累卵の如し、天下の有志之を知るや否や

こゑたかん

さけ

とま

と、節をつけ聲高々と叫んで通った。

かうぐん

末始粗選新

141

三三堂々芹澤の態度

しんせんぐみ はまぐりごちん

とき

きんもん

にら

うち

ちやうはん くわいさつ はんし

新選組が蛤御門へ着いた時は、もちろん、禁門の裡にあつて、長藩と薩の藩士が、

みつてゐる時で、各門の警戒も鎧武者が群れ集まつてすこぶる厳重になつてゐる。

まへ

いな

よろひむしや

せい やり つきだ

門の前へ行くや否や、鎧武者が一斉に槍を突出して

なにもの

なの

「何者だ、名乗れ」

こんどう しんみ

とつぜん

すこ

せりでは

たけだか

といふ。近藤も新見も、突然だつたので少し、おどろいたが、芹澤は威丈高に

ひづこう あづか しんせんぐみ

こうようかた

きうたつ

はなはたまで

とほ

「會津侯お預りの新選組である。公用方よりの急達により、 お花畑迄まかり通る!」

とき

おし

『壬生浪士の方々か、これは失禮いたした』

ちゅうごし

こん ぜろん ×

といつた。この時にはもう足を一二に構へて中腰におとし、二言と議論に及べばすぐに

も擬能にするやうに軽くてみた。これを見てその職業に飲まれてか、

たく

しつれい

やまと

つがは はい

いうぬい

はなし

びて大和の十津川に入ったのは有名な話。

きゆう まも

かつちうすがたくさかよしたけ

くら

七卿を守って、甲冑姿の大坂義が、「世はかりこもとれつき、さすいと

こがは きりた

く

いた

の小川に霧立ちて、へだての雲とはなりにけり。うら痛ましやたまきはる、内

ねとみあそん すみともやうみぶ

きは

でう

ひがしくぜ

にしきこう

に明暮れとのゐせし、實美朝臣に季知卿、壬生、澤、四條、東久世、 そのほか錦の小

たび

じどう

路殿、いまうき草の定めなき、旅にしあれば胸さへも、進みかねてはいばえつと、降り

あめ

たえま

なみだ そで ぬ

うみやまおさじ

はら つゆしも

なこは

は

しく雨の間なく、涙に袖の濡れ果て、これより海山が原、 露霜わきてあしかし

うら

しほ つら うきよ

ひがしやま みね あきかざみ

る、難波の浦にたく鑒の辛き浮世はものかはと、ゆかむとすれば東山、峰の秋風身にし

みて、弱なダなに聞馴れし、妙法院の鍼の音も、なんと今は哀れなる、いつしか暗き

をひくして百敷の都の月をしめで給ふらむ」と、千古に残る今様の名文に胸中

の悶々をやつた。

てっていき

きやうくわんわ

うは

ちやうはんもうりこうし

にふらく

きん

かくしょ たせう

朝廷更らに七卿の官位を褫ひ、長藩毛利侯父子の入洛を禁じて、各所に多少の小ぜり

しんきんぐみ くわつきく

ひがあり、新選組の活躍したのは廿三日から廿四日にかけてあつた。

こぐそく、よろいかぶと あるひ ぢんまり

もの

しろもめん

ゐる。すでに小具足、鎧冑、或は陣羽織などを着てゐる者もあるし、白木綿の鉢巻や構

など戦争の時の印なども手渡されてゐる。薩摩は同じところへ、どし兵を送り、

はちまき たすき

たいほう

ひた

かくご

長州へ向けて、いざと云へば火蓋を切る覺悟。恐れ多くも禁裡は今にも耐火の

ちまた くわ

巻に化そうとしてゐる。

なかはのみや くわんぱく ちゃうこう とくだいじけう

kにはさ

ほうれん

ひえいざん

中川宮關白二條公、徳大寺卿などは、御庭先きに鳳輦を奉じ、比叡山か、加茂の八

幡宮かへ、主上の御動座を用意してゐる。

ちゃうぉん ふんがい どはつくわん

はしよがら

しづ

たんひきの

長藩の憤慨は怒髪冠をつくものがあつたが、場所柄だけに、むしろ静かに一旦引退く

はう

こと

てすみかたかたつは

にら お

こと

にち

はんどきひ

方がよからうといふ事になり、敵味方片唾をのんで眺め合ふ事まる一日、七つ半刻日の

暮れ方になつて潮ぐ、御門と、鷹司邸の裏門から、二千七百餘を四陣に分ち、涙をの

だいぶつ

むちうきょさつみやうほふるん

ひき

うさねとみ

でうにしすことも

でうっかった

んで大佛の無住の巨刹妙法院に引揚けた。わざと藩邸へは入らなかった。

三條實美、三條西季知、四條隆謡、東久世通禧、壬生基修、錦小路賴德、澤宣嘉の七

〝長器と行動を共にし婉法院に入り、〟更らに、雨の頻りに降る中を、〝京を落ち延

みぶもとちか

ひがしくせ みちやす

にしきこぢよりのり きはのぶよし

138

末始粗選新

ミニ 赤地に「誠」の隊旗

しんせんぐみ

あひづ こう

こうようかたのむらさ へいる きゆうたつ

せりではかも てば

ぐそく+がたみ

新選組は、會津侯の公用方野村佐兵衛の急達により、芹澤鴨は手早やく具足姿に身を

酢め、もの」牛刻經つか經たぬに、隊士八十名を二弾とし、堂々として"蛤御門へさし

まつき

こんどういきみたい ちゅうぶ

せりはかも しんがり

きよくてうしんみにしょ

かつた。眞先きにゐるが、近藤勇、隊の中部に芹澤鴨、殿には同じく局長新見錦がろ

た。

あかち

まっしろ

まこと

じ

しずく ほう たいき

せんとう

赤地に眞白く「誠」の一字を染抜いた六尺四方の隊旗が、先頭にたつてへんほんとし

ひるがへ

どう

しゅつぢん

きぶん

てる。一同はじめて出陣らしい気分を味つた。

ちゃう ますだもんのすず たいしやう

おかひまちもん とんしふ

ぐわんば

長州は、益田右衛門介が隊として、堺町門に屯集し、退却の命をこばんで頑張って

言上するを得ずにお送りになったが、十七日重ねて参内、主上大和行幸攘夷御親征をおとめ

申上げ、遂にこの事の策源地たる長藩禁門退却が行はれるに到ったものである。

今日に於ても、久邇宮家にあって、新年の御酒を下さる時は、宮中の「雉子酒」と申上げ、

雉子の焼肉に熱いお酒を注いで下さるべきところ、雉子肉の代りに小さな焼豆腐を入れて、

賜る。

これは、維新前皇室の式徴と共に、宮家に於かせられても殊に志士の出入はげしかつたため

御勝手方御不自由の事多く、雉肉をお求め遊ばす事も御心に任せられず、焼豆腐をお用ひの場

合が多かったので、その後宮殿下の御遺志により、今日も何ほ、その當時を忍ばれるために、

久邇宮家は、この豆腐の雉子酒をつけられておられると現れ承る。恐多いと共に當時の宮殿

下の御心御活躍の様が忍ばれる。

さんにふ

たちま

がらもんいか

もん

へいさ

たまつだひらさがる かる

わけべさまやうの

うへ だんぜうたいひつ

参入し、忽ち、唐門以下九門を閉鎖し、この他松平相模守、分部左京亮、上杉彈正大弼

まつだひらびぜんのかみ まつだひらはらのかみ

しゃうぶしよさだ

はつ

じんぬんせいび

ほう

松平備前守、松平淡路守などすべて卅一將、部署定まつて、大砲一發、人員整備を報じ

ひがし そら

しらぐ

た時には、東の空が、白々として来た。

(一) 中川宮融親王 中川宮は伏見貞敬親王の第十子にあらせられる。はじめ一乗院に入

らせれて法親王と申上げたが天保十四年の頃に、鼻じて粟田青蓮院にお移りになり、尊厳

法親王とお改めになった。従つて粟田宮とも申上げる。 皇室の式を憂ひ、諸王の志士と

度々御協議の事があったのでに相國寺の一室に御幽居の日を送らせらるゝに到ったが、間も

なく閉とかれ、御還俗あつて中川宮又は賀陽宮と仰せらる。剛御熱誠志士の間に興

あり、呼んで「今大塔宮」と稱せられた。後更らに久邇宮朝彦王と申し上げ即ち久宮の第一

世におはします。 現久通大宮邦彦王殿下は、 中川宮の御長子に渡らせらる。

文久三年八月十八日の政に際しては、宮の御活躍は非常なもので、是に先立つ事二日、すで

に十六日には、早暁参内あり、親しく主上御所に押して、御意中を奏上せんとしたが、主

上御病のためその事を爲し得ず御座を待つ中に、他の人それく出勤して、胸中の秘中を

三禁門の大政變

よくく

にら

しゅやういうぬい

だいせいへん

きんちう しりぞ

じけん

この事件の、翌々十八日は、史上有名な禁門の大政があつた日である。

きうちうしゆ

その時迄、宮中守護に任じてゐた長州が、薩摩と會津の聯合策動によつて、かに、

さつまあひづ

ちょくせつ

かは こと

禁中を退けられ、薩摩會津が直接これに代る事となった。

ちやうしけい もくろ

ゆじやうやまとざやうこうぢやうぬけつかう

にち かいさつはんけい

なかはのみやた きらしんわう

長州系の目論んだ主上大和行幸攘夷決行は、十七日、會薩器系の中川宮尊融親王(一)

きふきよさんだい

い

いきた

みや

ざやうこうちうし

ちゃうしうけい ひ さく

たちま

の急遽参内により、直ちに、宮に命じて行幸中止の汰があり、長州系の秘策は、忽

したが

はん

ちにして一擲されたため、禁中にはどんな騒ぎが起きるかも知れない状態となった。

なかはのみや

こんやね ほんとき

もつ さんだい きんけっ しゆい

従つて、 中川宮からは『今夜子の半刻(午前1時)を以て参内、禁闘を守衛すべし」と

の命令が、守護職會津侯所司代、淀藩稲葉長門守正及びその他の三藩へ下る。

よろひかぶと あるひぐそくっきり せんきう ふくそう

三藩の兵は、瞬く間に、れ れる。 鎧冑、或は具足鎖、戦争の服装で、 ぞくとして

末始粗選新

しよいうぶつやきはら

てんめい

所有物燒拂フペシ、是レ天命ナリ」

とやつた。

しょぞん

ざは

しょち

どこからか、公然と抗議があり、或は會津侯からのお叱りもあらば、これを以て言譯

み

へうめん

しづ

けつまつ

する所存と見たので、表面は、すこぶる靜かに結末がついた。

しかし近藤、山麓、浦野原町の五名は、守護職屋敷に呼出だされ、雛かに芹

めい

澤の虚置を命じられたといはれてゐる。

末始粗選新

133

ところが、火の消しといふやうなところには、芹澤陛下の士が、鐵砲をもつて立

つてゐて、一ぱいでも掛けたら射ち殺してふと怒る。芹澤は屋根の上へ立つて

てつはう

つてゐた。

まぢゆう

きは

つひ どざうぜんぶ

うちこは

よくじつ

2

夜中、この騒ぎをつけ、遂に土藏全部を打壊したのが翌日の午後二時過ぎ。午後四

じごろ

せりざ

れんこ

ひきあ

時頃になつて、芹澤は「愉快々々」と連呼しながら、壬生へ引揚げた。

こんどういきみ

近藤勇は、苦がり切つてゐた。

あづかり まつだひらひづこう しょしだい にしまちぶぎやう

かくだいみやうやしき おもて

えら

これよりも、腹を立てたのは、お頃の松平會津侯。所司代、西町奉行、各大名屋敷、表

向きは蹴つてゐたが、それぐパを見て管津へ、裡にくこの不穏を説じ込むもの

ほ

が多かった。

おは

きいちう

せりざ

はや

けんじやう たてふだ

た、この騒ぎの最中に、芹澤は早くも現場に立札をして

しゅん だいかんぶっなり しよみん こんなん

たけ

ぐわいこく こうえき

だいさいにん

「當家ノ主人の大好物也、諸民困難ヲハズ利慾取り、外國ト交易ナス、大罪人ノ

182

˙末始相撰新

三〇 大和屋燒討

ちらりとこれを聞き込んだは、によつて、むかむかッとして来た。王生へ戻り

がつ

にち とっせん

ぬい

たいし

よしや まち でふどほり

やまと

て間もないが、八月十三日、突然五六名の隊士を引きつれて、葭屋町一通にある大和

やしやうかに

たかひ しやくようかた ごうだん

庄兵衛方を訪ねて、隊費の借用方を強談した。

大和屋では、主人がへ出てゐるので、感じかねると、眠りにべもなくきつぱり断づ

うち おほきは

たので、その夜の中に大騒ぎがはじまつて終つた。

しま

}

芹澤は、蹴の大砲を脱出して行って、どんだ和屋の土蔵へ射ちかけた。

を入れて一氣に続いてしまうつもりだったが、なか磨けない。その中に、の建

玉など

たて

もの

ひのみやぐら はがね

に

しょしだい ひす

つぎ

に火がついて火事になる。の見櫓で早鐘を打ち出す。所司代の火が来る

ばんだいみやうひけ

肩が馳せつける。

記末始粗選新

131

こと

たといふ事であつた。

噓によると、朝廷へ一萬雨を献じ、藤本石の天忠組へも、少なからぬ軍費を差し

(一) 藤本鐵石 縁石は備前藩士である、問も深かかつたが武技は殊に名誉であった。文

久三年八月に、朝麟は天皇親しく大和に行幸あり、神武天皇の御陵を拝し、ここに攘夷の

下し給ふと定まつたと聞き、松本圭堂外同志三十餘名 侍従中山忠光卵を奉じて、京し、

大阪から河内に出た。この時には風を望んで集まるものすでに千を越え、 近畿のでその行程

こばんで戦を開いたものがあるが、悉く熾石圭堂の軍に勝つものはなかつた。

大和の十津川から天の川に出てここに陣をんだが、京の禁延守護に政あつて、王か

勢を失するに到って 津藩藤堂高献の軍と戦ひ、年四十七、文久三年九月十五日に なる

職死を遂げた。

がつおほきか しゅつちやう

しんさんぐみ

がっ

はい

七月大阪へ出張した新選組は、八月に入ると早々壬生へ歸つて来た
。

きらくみ

すちう

きんのう

ふじもとてつせき

まつもとけいどう よしむらとらたらう

てん

がはぎ きよ

留守中、勤王の志士藤本鐵石(1) 松本圭堂、吉村寅太郎などが、天
の川義擧のた

ぐんし・ぼしう くだ

かんしやうちうばつな

ぶっくわうじたかくら あぶらしやうやけたうへゑ

ぽんにしの

ぐすり

軍資募集を企て、奸商誅伐を名とし佛光寺高倉の油商八幡卯兵衛を千本西野に引つ

でふはしづめ せいさつま

さら

がつ

か

できごと

ばり出して首を斬つて、それを、三條橋詰の制札場に晒したのが七月十四日の出来事。

とき すてふだ

やまとや しやうべゑ およ ほかりやうめい きよしやうどうざい

きゆう

か

この時の捨札に「大和屋庄兵衛及ど外兩三名ノ巨商モ同罪タレベ梟スベシ」と書いて

たう しゃうべ

ちゃうどし

おひ

ふばしひがし せうに やく

あるので、驚いたのは、當の庄兵衛である。恰度知り合の五條橋東で小兒薬のおけや

う

いくらちくぜんのすけ

きんわう

まじは

ほ

藥といふのを賣つてゐる板倉筑前介 (醍醐家の臣)は、勤王の志士に交りが多いので、こ

使う

じよめい

”)

のにたよつて、その手で、八方へ発起して命を乞ふた。

記末始粗選新

心が氣節高速で、八方にを光らせるため、大阪に於ては新選組は我儘は出来ない上

すまふきりすてもんだい

こんどう

たい

言うもんてき たいど

ふく

角力問題で、 近藤にして問的態度をとったのを含んだのだといふ。

やまざき うちやま

しんぺん

とき

かれ

せききやくお

きよたく

山崎が内山の身邊を探索した時には、彼はすでに刺客の襲うことを豫期し、居宅は職

みつしつ

密室へけられるやうになつてゐた。

重に取締り、居間の床の間の物の裏のを繰り扱いてあって、いざといへば何時で

128

末始粗選新

てその場を去った。

きやうと

もど

あらた

ちんさつけんいん しやうさい した A

それから京都へ戻って、改めて暗殺原因の詳細を認め、これを老中の門前へ張札をし

ろうちう

もんぜん はりふだ

た。

といふ事になつてゐる。京から大阪へ出張した名も、前の五名の・・島田

たんていかた

おほさからうにん やまざきじやう

魁、それに探偵方のために大坂浪人の山崎蒸が加はつてゐる。

うちやまんさ

けんいん

しんせん

みがは

ほ

まじゅつ

うちやま はくり

さんわう

内山暗殺の原因について、新選組側の多くの記述には、 内山が幕吏でありながら勤王

とう みかた

ちやうしうてき

はたら

しんはう うしな

おさか

いか

り

黨に味方し、長州の手先を働いて、幕府の信望を失はせるために、大阪で米價の釣上

やまざきじゃう たんち

けに奔走した。しかもそれが成功すると、今度は油を占めて、上げてゐる事を、

こと

山崎蒸が探知したので、これはやらねばならぬといふ事になつたといふ。

はんしんせんぐみがは せつ

うち

一方、反新選組側の説によれば、それらは何れも配のこぢつけであつて、質は、

さい

ど

ら、一斉に躍り出した。

ごゑい けんかく

もの

にん

かごや

とも に

しま

護衛の劍客などは物の数ではなく、四人を見ると、駕屋と共に逃げてふ。沖田は素

早く、外から一入れてから、手の内を引出し、すぐに首を刎ねだ。血だらけの厳

ようい

だけ

つき

はしぎは

さら

こののかんぶっ

そうゆ

かひしめしよにん こんきう

そのまゝ用意の青竹に突きして、橋際に晒し「此者好物ニシテ燈油ヲ買締諸人ヲ困窮

セシムルヲ以テ天誅チカルナリ」と揺れを添えて、立去った。

とくく

にち まやうと

ふ せいさつちやう

くび

ふだ

翌々廿二日、京都の三條の制札場にも、首はないが同意味の札だけを建てた。

ながく しん

さら

くび

だん

永倉新八翁の遺談によれば、

最初の一刀を驚くれたのは、土方歳三で、首は近藤が自から打ち落した。はじめは

ようい

ちゃうど かなた

ちゃうちん み

晒し首にするつもりで、その用意もしてみたのであるが、恰度、彼方から提灯が見えて

心が来る様子なので、近藤は紙へ『天下ノ義士之ヲ謝ス』と書き、屍の胸の上に置い

二八 内山暗殺一件

うちやまひこじらう

しんせんぐみ あんさつ

がんぢがんねん

内山彦次郎の、新選組に暗殺されたのは、元治元年五月廿日。(その時にはもう芹澤鴨も

ゆっ

殺されてゐる)

こんとういさみ

みづ

おきた そうじ

はらだ さのすけ ながくらしん

みのうへけ

らう

にん

近藤勇は、自から、沖田総司、原田左之助、永倉新八、 井上源三郎の四人を引きつれ

おほさか

て、わざ大阪へ出かけて行った。

うちやま

ごろ こと ほかご ようはんた

よる

はんしょ

きが

たこく

内山は、この頃、殊の外御用繁多で、いつも、夜四つ前には番所を退ることがない。

この夜も、翻所を出たのが四つ(午後十時)下り、すでに往来には人通りが絶えてる

る。驚へのつて、驚傍には、護衛の客がっついてゐた。

たんち

いさみ

み

かたな

てんまばし

たもと

時刻は、探知してわかつてゐる。勇の一味は、すでに刀を抜いて、天満橋の袂にかく

おきた

はらだ

ひだり

ながくら

のうへ

みぎかは

れて待つてゐたので、が橋へかいるや否や、沖田と原田が左から、永倉と井上は右側

と、突込んで来た。

こんどう

まちか

よりき

こと

きもち

近藤にしてみれば、多寡が町方の奥力、しゃれた事をいふな。といふやうな氣持があ

る。

たうはう

ぶれいうち

がいとりすて

しょう

いや、當方は、無織討にしたから死骸取捨を處置されたいといふ旨を届けたにす

とっ

みぶん もの

うちやま

内山は

う」

かさ

うへたちい

ぎぬ。その上立つてのおたづねを受けるやうな身分の者ではない」

と、少しむつとしてつ」ぱねた。

「われらは町の取締をしてとする。然るに恋しくも、人命を失び、その理由の是非

‟曲直を解職せざるにだては、役儀が相立申さん』

こんどう

と、重ねて来る。近藤は、

「われは會津侯の支配である。たつて聞きたくば、北方へ照管されたらよろしから

と、飛に、館をなして、その場はとにかく物別れとなつた。

ニセ町方奧力内山彦次郎

ぶれい はたら

近藤男は、とにかくこの一件を大西町奉行松平大隅へ届け出た。われにし

きりす

て無禮を働いたから捨てたといふのである。

ぶぎやうよりき うちやまひこじらう

されたい」

ぎんみかた

ごろ かんちゃうかたまは

奉行興力に内山彦次郎といふのがゐた。吟味方をしてみたが、この頃は勘定方に廻り、

なかしつかりした人物と見え、奉行所をパで切って避してゐるやうなところがあ

つた。天保八年大熊代八郎の騒動では、若年ながら自からその追捕にむかつて、活躍し

たと云はれる。

この内山が、男の届を受理して、さて公事が異力の資格をして、

「たい無職をしたから斬ったではわからぬ。如何なる無職であるか、それを詳細に申

未始粗選新

123

けんくわ

しんせぐみ

ながくら すまふ

くぼう わざ

ラ

と

ひらやま

らう

この喧嘩により、新選組では、永倉は角力の八角棒で脇差を打ち落され、平山五郎は

かたびん した

しまだくわい

かたな きつき

むね

胸を打たれ、沖田も片髪を強たかにやられたが、島田魁のふるつた刀の切先きにさはつ

て、郝倉の左腕に少し傷がついたけで、俺が側では、即死五名、手銀十六名を出し、

総崩れとなった。喧嘩の最中にい月が出た。(永倉新八翁遺談)

おほどきをのは

けんくわ

しんせんぐみ

こんどういさく

す

هذلي

もの

大關小野川は、この喧嘩は實は知らなかつた。新選組でも、近藤勇は、少し調べ物が

あつて、京屋方に居殘つてゐたので、同じくそんな事は知らなかつたのである。

＊

にしむらかねぶみをう しんきんぐみ まつき

けんくわ

ほどおほけき

西村舵文翁の新選組始末記などには、この喧嘩はそれ程大袈裟なものではなく、

すまふとりすうめい

ぐみすうめい

こうろん

おきた

ながくら

ひとり

すまふ

力軒

屋の濱際で、角力取數名と、新選組數名とが口論をはじめ、沖田と永倉とが一人の角力

とり

きりころ

ふたり

取を斬殺し、二人に手を負はせたに過ぎぬともいふ。

から

かたよ

ふとり

『片寄れとは何んだ』

と、を返した瞬間に、芹澤は「えッ」といふとに斬った。玉をたて、離れる角

力取を 見向きもせずに、さっさと行つて終った。

すまふ

嬉し行ったところに、現橋といふのがある。この橋で、また角力取がやつて来て、

同じやうな口論をした。それは斬らずに、道ひ滅した。

このごたで、齋藤の痛みもつたと見えて、そこからすぐに堀の新地の仕様と

ひら

おほどきをのがはき

こうべ や

た。

のぼ

おほきかたまふ

いふのへ登って、酒席を開いたが、ここへ、また大阪角力の大關小野川喜三郎部屋の角力

取が「敵討だ」といつてわァ~いつて押しかけて来て八角を振ってしい喧嘩 となつ

まふ

せりざはこんどう

おまだ そうじ

ながくら

芹澤近藤は、山南敬助、沖田総司、

八など、一粒

けんどうめいよ

一粒よりの剣道を

けいこぎ

けんや ちゃうやど きゅうやちうべ かた わらじ

いざい じゅんび との

て、八軒屋の定宿、京屋忠兵衛方へ草鞋を脱ぎ、しばらく滞在の準備を整へる。

器鹿、十五目。朝からぢり 照りつけてり恋しい暑さなので、芹澤をはじめと

して、正蔵、鳥田魁、野口健司など八名が、京みを仕立てさせ淀川を下った。

永倉と浦町、平山五郎、藤一の四人だけは、臓の片びらを着てみたが、他の人は

わきざし

さ

稽古着に袴をつけて、脇差だけを差してゐる。

鍋島岸へ瓶がつくと、どうしたものか

う船を出そうといつて、一間がぞろ

らくやつて来る。少し酔つてゐる。

れい

うし

芹澤は例の調子で

かたよ

『おい、片寄れ(」

すまふとり

がひどく腹を痛み出した。それでは、も

へ上ると、ふから、大きな角ががっ人ぶ

まさか しんせんぐみ

じんぶつ

けいこぎすべた

ひ

と、聲をかけた。角力取は、稽古着姿の相手を見て、眞逆に新選組の人物とは知らない

二六角力

角力を斬る

はうめん

こと

七につて、新選組は大阪に出張。しばらくこの方面の警戒探索をする事となった。

よこくきんゆう ろうし

いりこ

しょしだい

しゅごしょく

みまはりぐみ しんせんぐみ

京にもどん 諸國勤王の浪士が入込むが、 所司代、守護職、見廻組、新選組の目が最

わざ

おばさか おし

と

しき

くう

ふうひやう もつぱ うへ

まちぶぎやうによ

しいので故意と大阪に足を止め、ここで頻りに策課する風評が專らな上に、 町奉行所だ

てうす こゝろもと

おひ こう

しんせんぐみ だ

けではどうも手薄で心許ないと、會津侯が、わざ新選組を出してやった。

さつま

えいこく ぐんか・

ょうゆき

よく がつ

きらり しゆゑい

この七月のはじめに、薩摩が英図の軍艦を砲撃したり、翌八月には、禁裡守衛につい

つちやうしうあひづくはな

だいせいへん

ちよくば

ぶつじやうきうぜん

ありさま

て、薩摩長州會津桑名の大政變があらうといふ直前であるから、その物情騒然たる有様

は、何時何歳で、どんな思ひがけない事が影響するかも蹴り知れない時であった。

この屋處分の一件には、島原麗がえ持つた。

きぶつ

きぶつ

ほと

のこ

しま

料理の器物といふ器物、殆んど一つ残さず滅茶々々にして終つた。

い

もの

たちまに

8

ふしようしゃ

せりざ

くら

まんぞく

家内の者は、忽ち逃げ去ったので、別に負傷者はなかつたが、芹澤はそれ位では満足

たいめい もつ

すみやとくうゑもんふらち しょい

かかんきんしんもうしつ

むね

せず、遂に隊名を以て、「角屋德右衛門不埒の所爲あるにつき七日間謹愼中付ける」旨を

ひわた

言渡した。

*

ぶんきう ねん

がつする

みなくちはん こうようがた

まんてい

ざつだん

この文久三年の六月末に、水口藩の公用方が、會津の藩邸へ出かけた時の雑談に、う

はな

しん ぐみ らんぼう

せりでは

ながくらしん

はらだ きのすけ

のうへけん

つかりして新選組の亂暴を話したといふので、芹澤は、永倉新八、原田左之助、井上源

三郎、武田観柳の四人を、水口藩邸にねぢ込ませ、公用人を生捕りにしやうと騒ぎ立て

ちきしんかけりう だうちゃう ひら

とだえいのけ

らんかん

でふどほ

たが、二條通りに直心影流の道場を開いてゐる戸田榮之助といふ剣客が、その間に入つ

ゆうや りさは なっとく

どう

しまはら

すみや

そうだい

こと

て口を利き、漸く芹澤を納得させて、隊士一同を、島原の角屋に招待した事がある。

＊

その酒席で、芦屋のびに氣に入らぬ事があるといつて、芹澤は、の報画の

大鐵威を振りして、膳椀から瀬戸悦一切、手爵り次第に打壊し、その上、二階

の欄干を引抜いて、これをもつて場へ下り、概を指割り、更らに流し場へ行って、

あひだはい

したが

守護職會津々のおげといふので、京の町奉行興力同心も、新選組のする事に

ついては、良きにつけ、悪しきにつけ、見て見ぬふりをしてゐるので、その勢力が強く

なるに従って、芹澤鴨は、世來の亂暴籍をはじめて来る。世上これを「壬生浪士」と

かけぐち

たれ

らうし

みぶろう

いつたが、口には誰も「浪士」とは武はずた「王生活」といつた。

芹澤はひどく大酒で、酔ってくると、段々むづかしい顔になり、誰彼の見境ひもなく

なるのである。武は、酒だが、何しろ腕が出来る上に、底の知れない腕力があり、

たんあは だ

とき

さあ一旦暴れ出したとなると、その取鎮めに骨が折れる。酔はない時には、 ざつくばら

ぶうつ

じんぶつ

んな如何にも豪傑らしいい氣質の人物であつた。

京都浪士御倉伊勢武(國事探偵方、斷首~6)同、 荒木田左馬之亮 (同、斷首~)同、越後

三郎(同、魔走)宇都宮浪士松井龍三郎(同‟脫走)

平同士—— -谷萬太郎、谷周平、佐々木愛女郎(大阪浪士) 佐々木藏之丞、西岡萬助

(戰死)三浦常三郎(武州浪士、大阪ㄈㄟ戰死)石井清之進(戰死)相馬主計(武州浪士、切

腹)足立五郎、野村利三郎(大阪浪士、戰死)柳田三二郎、中村金吾、竹内元三郎、馬

詰柳×齋、馬詰柳太郎、馬越×郎、蟻通勘吾(戰死)村上淸(熊本浪士)田村太三郎(戰

死〕新田角右衛門、富永政之助、木內峰太、斯波綠之助i(盛岡浪士)石川伊太郎、松永

主計(京都浪士、脫走)山野八十八、江畑三郎、松崎靜馬、楠小十郎(京都浪士、斷首)角

田五郎、森平八(戰死)玉置伊之助、石井伊之助、正木鐵之助、上坂甲太郎、大町綱

太郎、岩崎一郎、布施多喜人、石川三郎、松原幾太郎、

右の人員は京大坂にて募集いたす(計七十一名)

野(後に副長助勤、京都島原にて首さる) 出雲浪士武田観柳斎 (後に副長助勤。殺害せら

盛岡浪士吉村貫一郎 (後に浪士調、殺害ぜらる)藩不明大月銀蔵(後に浪士調役) 熊本浪

士蘆谷昇(後に浪士調役) 一橋藩大石鍬郎(後に浪士調役、戦死)藩不明川村隼人

(後に浪士調役)大垣藩島田魁(後に伍長、病死)大阪浪士川島勝司(後に伍長、断首)大阪

浪士林信太郎(後に伍長、水戸街道にて殺害さる)藩不明奥澤榮助(後に伍長、病死) 徳島浪

士前野五郎(後に伍長)藩不明阿部十郎(後に伍長、病死) 京都一月寺脱走葛山武八郎(後

に伍長、切腹)

龜山浪士峰島芳太郎(會計方)大阪浪士河合耆三郎(会計方、断首さる] 同、酒井兵庫 (會

計方) 和州植村走尾關彌兵衛(計方、病死) 藩不明大谷勇雄(會計方)

たいし

どう めんぜん らうどく

にないま

せつよく

しかもこれは士一同の面前で朗読されその他内規として、一にも切腹、二にも切腹

を見てとする數個体があつた。

たか

まづ はあひ こと

せつよく

あい

むね

例へば、敵と争って、その敵をさず、後ろ傷の場合の如きも切腹を命する旨を言渡

された。

どんで

まやうと

おほきか

あつ

もの

れんめいちゃう

この前後に、京都、大阪から募集に感じて集まつた者の連名帳がある。(永倉新八覇遺

稿。×の印は文字不明のところ)

對馬浪士安比留榮之介(後に副長助勤、病死す) 熊本浪士尾形俊太郎(後に副長助勤明

石浪士齋藤一(後に副長助勤) 大阪浪士谷三十郎 (後に副長助勤、病死す) 同、松原忠司

(後に副長助勤、病死す) 長門浪士佐伯亦三郎(後に副長助勤、断首さる) 京都一月寺院走安

藤早太郎(後に副長助勤、病死) 大阪浪士山崎進。後に副長助勤。銃死亡)廣島浪士淺

末始租選新

113

一、士道二背キ間敷事

二四俠士ぞく(集る

澤山の中には、ずいぶん暴無類のものもみたが、浪人の集合としては、概して規律は

たと

正しかった。

こんどう

ゆうゆう

きよくあうはつとがき

けいじ

間もなく、近藤の主張により「局中法波書」が掲示された。

一、局チ脱スルヲ不許

一、勝手=金策致不可

一、勝手訴訟取扱不可

一、私ノ闘争ヲ不許

右條々相背候者切腹申付ベク候也

112

末始祖選新

ようにん

せり

あと、よかった、と一同喜んだがこれをきいた命津は、しびつくりした。幕府が

立つかれるかの、高等政策に、日も夜も足らぬだしさをつけて、邃ひうつかりして

ゐたが、これは何にも混士をってある常の手落ちだといふので、すぐに、器の公

よびだ

用人から芹澤を呼出して

をした

と申渡した。

「商人どもから金子を借用したとあつては、如何にも肥後守の不眠といふ事になる。釜

子二百脚は、営家から支出するから、早速返濟致すやう。今後は當方に於ても注意は

ふそく

つどこうょうかたまでましいで

するが、不足の事については、その都度公用方迄申出るがよろしからう』

間、手なども、程なく手渡されて、これを所の城に立て並べ、早朝

練を行び、浮浪人の取締、市中の巡察、新選組の存在が、一日一日と天下にはつきりし

て来る。

末始粗選新

11

111

二三

だんだら染の制服羽織

勇士はぞくしまつたが、貧乏世帯には困り果て、局長筆頭の芹澤が、自から、

きんなんけいすけ ながくらん

はらだ きのすけ

のうへん らう

ひらま

らう のぐちけんこ

へいまじゆうすけ

山南敬助、永倉新八、原田左之助、井上源三郎、平山五郎、野口健司、平間重助の七人

おほきか

で

こういけばんうゑもん だん

こ

きんす

りやうか

をつれて、大阪へ出かけ、鴻池善左衛門へ談じ込んで、金子二百両を借りて来た。

たん

まつはらどほ

だいまるこ ふくてん

あさ はおり もんつき

ひとへ

くら はかま

すぐに、松原通りの大丸呉服店を呼びつけて、麻の羽織、紋付の單衣 小倉の袴、こ

とに砂織は、公式の場合着用するものだからといつて、黄地の裾へ、だんだらを

その

ちょっと

きし

うちいり

抜いて、

たいしぜんぶ

すんぽふ

ちうもん

一寸、義士の討入に着たやうなものを、隊士全部の寸法をとらせて、注文した。

はおり

なが

しんせんぐみ

せいふく

この羽織は、それから永く、新選組の制服になった

とうきや とうとうしはん

新徴の助勤齋藤一は剣道の達人で、明治になつて、 山口五郎と改名し、 東京高等師範

新徴の嘘覲齋藤一は劔道の達人で、明治になって、山口五郎と改名し、

がくかう

けんじゅつ せんせい

たに

じんぶつ

ゆう

はらだ きすけ

せんせい

ほうぞ

31

學校の剣術の先生を勤めた人物。谷三十郎は、原田左之助の槍の先生で、藏院流の名

しゅ

つはらちうじ

どうだうか

をがたしゆんたらう

がくしゃ

やまざきじゃう

のち たんていかた

手であつた。松原忠司は柔道家。尾形俊太郎は學者である。山崎蒸は、後に探偵方を

んきうしゆぽっ しんそくしん

う

つか

め、變装出没、神速辛棘を極はめた。香取流の棒をよく使つたといふ。

調役並監察

大垣脱藩

同 大阪浪士

同

脘京

月

走寺

林川島

島

勝

田

司魁

同

大阪浪士

勘定役並小荷駄方

大 脘和

田

植

同 大阪浪士

同同

走村

名

信太郎

酒井 兵庫

河合耆三郎

尾關彌兵衛

岸島由太郎(芳)

安藤早太郎

108

末始組選新

同同同

同

同

同同

同明石浪士

永倉新八

原田左之助

藤堂平助

井上源 三郎

平 山 五 郎

野口健司

平間重助

齋 藤

1

同同

同 熊本浪士

同 大阪浪士

大阪浪士

同 大阪浪士

E

谷

尾形俊太郎

崎

松原忠司

蒸()

記末始粗選『

107

ミニ 新選組第一次編成

しんせんぐみ

はんおほ

よめい

こと

新選組も一番多かった時には、三百餘名もみた事があるが、とにかく百餘名の人が集ま

局長

つては、今迄のやうに、識ばかりではやつて行けない。確然と、一味の幹部を定め

る必要が起きたので、先づ有力者の選擊によつて、中の統制を立てた。

助勤

同

E

副長

同同

新近芹

見藤澤

錦勇鴨

山南敬助

土方歳三

沖 田 總司

よめい ひと

106

末始粗選新

おら

らうし

ちゃう

あつま

たちま

よめい およ

にわたり、新たに浪士を徴募して集るもの忽ちにして七十餘名に及び、いろくと機密

きみつ

ひろぼう

の絃も要る。いや、ひどく貧乏をした。(氷倉新八翁遺談)

*

男は頻りに多摩の

五郎や、日野の佐藤彦五郎に無心をしては、仮にも困る急

しの

りやうきんしきうち かしくだされたく

てかみ

みやたわけ

のこ

場の凌ぎをつけてゐる。「五兩金至急御貸被下度」など、いふ手紙が、今も宮川家に残

てゐる。

記未始組選新

にんせつ

にんせつ

幕末壮士隊「新選瓶」は、はじめてここに雄々しい呱々のを上げた。十三人は、概

夜して酒を飲み、そのに涙をしたものである。ば十七(この外に粕谷新五郎、

齋藤一、佐伯又三郎、阿比留鉈三郎四名を加ふ)があり、廿人説があり、廿五人説(田中伊織、

新田革左衛門、葛山武八郎、松原忠治(司) 安藤早太、河合義三郎、酒井兵庫、奥澤榮助、佐伯又

三郎、川島勝次(司)等加ふ)などもあるが、十三人説か正しいやりである (高幡山金剛寺

殉節兩雄之碑。永倉新八翁同志連名)

にんせつ

れる京都は不案内。枕がしらを吐いて高論を吐いてはゐるが、すべて物事思ふに低

せず、八木方で、不自由勝ちの生活をしてゐる中に、四月となり、五月の聲を聞く。

京の五月は、なか(暑い。江戸をする時の仕態。もう節句だといふのにまだ

おほ

あひづこう

いい

わたい

さやう ほさか

綿入れを着てゐるものが多かった。それに、津侯の意によつて、京、大阪から西

さいこく

*

(伊勢津藩主藤堂和泉守の落胤、北辰一刀流千葉周作目録者)

井上源三郎

同

(近藤勇立の門人で目録者)

仙臺脫藩

山南敬助

(千葉周作の免許皆傳者、後ち近藤勇の手直しを受けた)

白川脫藩

冲田總司

(勇門下の随一人である、免許皆傳者)

松前脫落

永倉新八

(神道無念 岡田十松門人、免許傳者

伊豫松山脫藩 原田左之助

(勇の手記は佐之助とある。賢蔵院流槍の達者で、谷三十郎門下の免許者)

末始組選新

103

水戸脫藩

新見

(神道無念流岡田助右衛門の門人で免許皆停である)

E

野

口

健 司

(或は健治又は健二と書く。近藤勇の手配したものには健二とある。
神道無念流の達人百合

本升三門人、目録者)

(神道無念流齋藤彌九郎篤信齋の免許者)

同

庭

平 山 五 郎

平間重助

芹澤鴨取立ての門人で目をもらつてゐる、純然たる鴨の輩下である)

(近藤周助及再門人、目録者)

江戸 御府内浪士 近藤

(天然理心流近藤周助門人、師範役)

同

同

土方歳三

藤堂平助

勇

錦

102

未始組選新

役である)

「乍恐御城外夜廻等の御警衛御命被下候は、難有仕合に御座候元より毛頭私意無之」

これの御命ももとより心魂に徹し有難く存じてある。只々生命を戦闘にした

しんぐわんで

い心願に出るもので、若し

「願意御聽届不相叶候は退身浪々致しても天朝大樹公の御守護攘夷可仕決心に御座

候」

といふのである。

ふだ

即日、この願書が聞届けられて、署名の十三人は、そのま」「津」の身

虫となった。八木家の門には新しいのをつて墨痕滴るやうに「壬生浪士屯所」

の大札をかゝげた。

水戸浪士

芹澤

鴨

(本名木村繼二、常陸國水戸郡芹澤村の鄉士で、剣道は神道無念洸戸ヶ崎熊太郎の門人、師

の身の

末始粗選新

101

關東の武骨拾三名

まやうらく はる

たけは

ひがしやま みねく

京洛の春はいま酣である。東山の峰々は青葉のいろに包まれた。

ぐわつ

にち きよかは み えどぎやくもど

そび

みぶむら

こうし

ぎけんのじやうかに

のこ

くわん

三月十三日。清河一味の江戸逆戻りにいて、壬生村の郷士八木源之丞方に残った關

東の武骨拾三名は、その日の中に、長丸の嘆願書を出して、意のあるところを守護職

へ通じた。

ねが

たぐきたくお願ひする。

しゅうぐんけ

じゃうじゃうごにいざいちう

からは

まんぜん

こと

「われわれは、将軍家が二條城御滞在中なるに係らず、漫然として江戸へる事は

忍び得ないところである。それも江戸へつてすぐに攘夷の先鋒でも勤めよとの

もちろんた

かへ

たかへ

ﷲ

はなよ ふ

せならば、勿論直ちに飾るけれども、そうではなくて、只歸つて居れでは甚だ不本

意である。何卒、将軍家が江戸へお戻りになる迄は御衛を申上げる事をお許しい

100

末始粗選新

庭にて、新磔の諸役立の上、大村はその場に転伏せ、藤は重傷を負はされて、

かさ

三日後に死んだともいふ。

ゆうてん この

だいせう

ほどひろ

のはかま

天は好んで細身の大小をさし、びらうどの幅の縁のついたどんすの野袴などをは

をり

くろちりめん

り

この

きはち

いてゐたそうである。羽織は多く黒縮で、ぶつ裂きではない丸羽織を好み着物も黄八

じゃう

かうしゅう

丈などを着た。甲州から金がいくらでも来たらしく潮でださつばで、何度から見ても

りつは

とのさま

った

立派な「殿様」であつたと傅へられてゐる。

末始組選新

99

つむき

ぶんきち

でいり

ゆうてん ようじんぼううちだ さらう せんのすけ とき

らうし

ましう

津向の文吉との出入について、天の用心棒内田佐太郎(御之助と共に浪士の募集に感

にふたい

かうしうひしやま

さんくわ はしょ

きりにを

きう

じて入隊した。甲州菱山の生れといふ)に、喧嘩の場所で、斬されたもので、双方覺

悟の果し合ひも等しく、敵の噓と云ふべき筋合ではなく、且つ當人は萌天ではなかつ

ゆうてん

た。

しかも、千住の遊女屋へ誘い出して、酒をすめた上、ののべ松を癒し

込んで抜けないやうにして斬りかいつた、このため之助は熊獄し、潮のまんで立

能つたが窓々やられたといふのである。

*

な

かたきうち ごじつものがたり

on

うちだ き た らう

かたきせんのすけ

尚ほ、この敵討の後日譚として、當の内田佐太郎は、敵が仙之助 にあらず、自分で

ある事を名乗り出で、敵を討つたごパ(外に一名の助太刀があつたともいふ)にして、

はた お

ぶんきう ねん

ぐわつ

にち

いちだ まち

じぶん

きさかうへ ぶんとんじよ ひろ

更に、果し合ひをいどみ、文久三年十一月十七日、(飯田町もちの木坂上の分屯所の

*

せつ

きじゅつしや

せんのすけ

もとかうしう

ほふいん

よし

ゆうてん

あひとないそのけつかんみんぶらい

し

この説の記述者は、仙之助を『元甲州にて法印の由、天と相唱、其實奸民無頼の醜

きらふ

面に候』と、けなしつけてある。

或は仙之助は、侠客を糖った賊であるともいふ。

＊

80

せつ

更らに一説には、

らいすけ

じつ ゆうてん ころ

らいすけ

うしうくろこまむら かつぞう

來助は實は天が殺したのではない。もと來助は、同じ甲州黒駒村の勝臓といふ

とき

はくと

ようじんぼう

くろまま おやぶん たける

どもやす

ゆうてん やぶんすち あた

博徒の用心棒になつてゐる時に、この黒駒の親分、武居の吃安と、天の親分筋に當る

かどぐち

なじみ

せんゆすけ

ふたり

うち

それぐ馴染があるので、仙之助と二人は別々の樓に揚がった。

午前二時頃に二人は、之助のある遊女屋へ行って、「急の用事が出来たから、すぐ

へ出て」と申入れ、之助が、そんな事とは知らず、うつかりして出て来たと

ぬ

かたき

なっ

みぎびだり

ころへ、出し抜けに「親の敵」と名乗つて、右左から斬りかけた。

能之助も、もとより手くり合ったが、酒に酔いしれてゐたのと、相手の二人がま

つか

たなか、

ぜんき

みずらぷらや

x

せき

かいこ

使へるので、前記の水油屋の店先へ駈込むところを々討たれた。

そこへ、見通りの役人が来たので、この敵討の次第を申述べたところ役人は「とにか

ふたり

けいご

夜が明けてから」と、そのまい、二人を警護してゐる。

この配合の事が、本所の紅屋敷へ聞えたので、之助の狐下の者は、何れも潜込を

けて、駆けつけて、二人を討取ろうとしたところ、役人は「驚方に於て召捕つたもの

ひきわた

1:00

まかりな

は

ぐわんは

しかた

せんけしかばね

は、引渡す事は罷成らぬ」と、頑張ったため、仕方なく、歯がみをしながら、仙之助の屍

ほんじょ

ひきと

をかついで、本所へ引取った。

二〇敵討異説

たい、この端天之助の話は、先討としては繰りはつきりしてみないので、異能がいろ

さいご

いろある。最後を遂げた年が四十二であると云ひ、或ば四十五であるとも云ふ。

はしょ

ぜんき

ゆうちょゃや

>

じつ

おうしゅく

場所についても、前記の遊女屋の前といふのもあれば、いやそうぢやない實は千住宿

のすけ

みずあぶらやとせいとねがはや

水油屋渡世登根川屋であるともいふのである。

ゆうちょゃや

*

大村藤林の雨名ば、仙之助を伏と見定め、掘りに機銃を狙ったのであるが、忙しろ

は腕が出来る、容易な事では討てないと思ったので、十五日の夜、何気なくづて

千住の遊女屋に誘った。

忙しろ、君たゞる浪士組の連中であるから、遊女などにも、

し

仙之助の墓は、今、本所區太平町日蓮宗法恩寺内陽運院にある、震災でやられたが、

しやうめん

ほんてつみんそうゆうら ちんこ

墓はまだしつかりしてゐる。高さ三尺、 一尺四方の石で、正面に「本哲院宗勇智山居

墓はまだしつかりしてゐる。高さ三一八四方の石で、

にち

ひよこ

ひのくにこふちう やまもとせんの たけふぢはらきよのり みぎ

ぶんきう ねんきのえみ ぐわつ

士」、左横に、「甲斐國古府中 山本仙之助藤原清儀」右に「文久三年癸亥十月十五日

どうきん りやうおさむ

かいめう うへ

まる

うち きく よこ

わり

じゅうぶ

くわべ

堂金三兩納」と彫り、戒名の上には、丸の中に菊を横に二つ割にし、上部だけに花辨が

した むち

りつば

ほか

あり、下が無地になつてゐる紋がついてゐる。なか立派な墓である。

しゅ

なんびと

つたむゑん

ちかごろ かうしう ひと

ひと そふ

施主の何人であるかはわからないが、一時全く無縁となつたのと、近頃、 甲州の人で

京橋の地に水蔵を祭ってゐる婦人が、この墓の面倒を見てゐる。何んでも、天がこ

くわんけい

の ころ

ゆうてん かたき うつ

の人の祖父と關係があつて、その祖父がある者に殺された、それを天が仇を討つてく

れた事があるので、その報のために、今日、花を手向けるのだとの話である。

94

託末始粗選新

*

して探してゐる中に、彫月十五日の臨八〇時(午前二時) 北千住一丁目駿河屋といふ遊

妓屋の前で、計らずも、山本を襲見した。

おほむら

とき

さん まじ

すだち

大村は、その時には、一言も交へずに、すぐに、斬つてかつた。藤林は、助太刀を

するつもりで、かにそりを呉れて待つてゐたが、大村は若年に似合はずなか

するど

鋭いも

とうく やまもと うちと

しま

ので、遥々、 山本を打留めてつた。

へん だいくわんしはい と

じしんほん

といけい

ほむら

この邊は代官支配の土地なので、すぐに自身番へ届で、もとより、大村には何のお

かま

構ひもない。

じけん こうくわ ねん ほったん

あだうちまで じつ ちう

つじゃ

事件は弘化二年に端して、仇討迄に實に拾八年間を費してゐる。

末始精選新

93

「やれやれ」

ほむら

やまもと

ひか

といふので、大村は、すぐに、山本に向ひ

どんねる かうしかじかざはむら

たび ぶいしや

つらいすけ

うちは

前年、甲州鰍澤村において、旅の武者で桑原來助といふものを討果たした

じじつ

と聞くが事實かどうか」

つめよ

やまと

詰寄る。山本は

だしぬ

こと

こと はなし

こと

「間抜けに妙な事をいふな、わしはそんな事は話にも聞いた事はないよ」

と、まして、さっさと行つて怒った。

しま

此際は、両足とも半信半疑で、に斬りかけるやうな事もなくれたが、おかしい事

に、山本は、それから間もなく、紙を脱走して姿を晦まして終つた
。

こうなるといよ山本が仇らしく思はれて、同にもそれとなく話して
、手分けを

よこ

すば

じじつ

はなし またぎ

ねんまへ

わか

何しろ話は又聞きで、しかも十九年前の事件だからはつきりとは解
からないけれど

野には相違なく、敵は、甲州の博徒で端といふものである事だけは
戦した。

八番隊の小頭山本仙之助は、甲州の産で、天といつた事はかねて聞
いてゐる。間ほ

たし

ゆうてん

うる

らいすけ

ころ

もいろ調べると、確かに天に相違ないが、来助を殺したかどうかは、どうも、

べやうがないのである。

ぶんきう ねん ぐわっなんにち

おほむら ふちばやし

しょよう

ちうまでい

即ち、文久三年十月何日かに、大村と藤林は、所用のため、千住迄行つて、ぶら(

こづかはらまでかへ

ひとどほ

きび

やまもと

でつく

小塚原迄つて来ると、人通りもない淋しいところで、ばつたりと、山本に出喰はした。

ふちはやし

藤林は、袖を引いて、

裾を引いて、

肥末始粗選新

91

ねん

はくと

うしうかじかざはむら りよしゆく

くわはららいすけ

こうくわ

ねん

ゆうてん

年に甲州澤村の旅宿で、桑原來助といふ劍客が弘化二年の秋に、綽名を天といふ

ころ

はなし

こと

はな

博徒に殺されたといふ話をきいた事があるといつて話してみた。

原因は、その萌天が、賭博の事で、ある夜その旅宿押かけて、主人と口論をした。

あま はず

ごうどん

ちうさい

いうてん

それが餘り激しいので、 客の來助が見兼ねて、強談に仲際したため、天はとにかく

その場は大人しく一先づ蹴った。

あと

らいすけ しゅじん

さす の

なにもの

おもてはう

その後で一來助と主人が、酒を飲んでゐるところへ、何者とも知れず、表の方から鐵

砲を打ちかけた者がある、それが飛助の膜へった。飛助は、非常に立腹してすぐに

わたなぬ

てつ

4U

ほう

とびだ

まうぜん

やみ

いうてん

なか

たすう

刀を抜いて、鐵砲の来た方へ飛出し猛然と追いかけたところ、闇の中に天が多数の

こぶん ゐ

とびだ

てつほう

ふがで

らいすけ

乾分を引きつれて除くれてゐて、不意に飛出して、すでに鐵砲で深手のある來助を、

ころ かた

それはひどく酷い殺し方をした」

といふのである。

90

末始粗選新

たび

來蝣といつて、喜左馬頭の家来大村といふもの子。弘化二年に、剣道修業

ねん

しかざはむら

なにもの

ころ

の旅に出て、翌三年、甲州瞰澤村で、何者にか殺された。

たつを

かほ し

せいちゃう

尾は、その頃生れたりで父のも知らずその事は成長してから聞かされたが、さ

かたきう

らうし

ちやうど

て仇を討ちたいが、殺したのが何であるかわからない。心にかけて探してある中に、

ひれ

こと

浪士の群に入る事となったのであつた。

ばんた

丁度十九歳 若い者は若い同志で、十隊の金子龍之暁の下で上杉正の腕藩嬴椛

鬼一郎といふ廿三才の若侍”と、殊に親しく交りを結んだ。ある時の藤村へ大村が、

じぶん

かたきうち も

こと はよ

自分の敵討を思ひ立つてゐる事を話したところ、藤林が偶然にも、

じぶん

せん

もうけふ

くわいく

とき

ほった

『そうか。それなら自分は、先年剣道の修業に廻してゐる時、堀田侯の家来で、海貞

郎といふぐと懇意になつたが、その人からこんな事を聞いた事がある。海氏が弘化四

うみ)

記始粗選新

69

89

おは

かしうけうかく

一九 祐天敵を討たる

かひ

いうてん

やまもとせんのすけ

らうしぐみ

ひき

甲州侠客「甲斐の天」こと山本仙之助は、浪士組から引つき新徴組となつたが、

いんちやうぐみ

けいかい

鄭革後の組織にて、八番隊の小頭を命じられ、部下名をつれて、堂々として市

である上に、色の戦いでつぶりとした

の警戒などに出かけた。四十二で恰度

で、立派な武士。別に正式に劔道をんだ謝ではないが、幾度も斬りたはつたのに出

バしてゐるので、度胸がよく、場馴れした劔術であつた。

けんじゅつ

こ

はんたいくろろ たく らうてつぎ

おほむらたつを

ことし

ぐわつ

らうし

同じく廿五番隊黒井卓一郎手付にゐる大村達尾は、今年二月にはじめて浪士が京へ上

つた時から、参加してゐたものであるが、これが父の仇を探してゐる。父の本名は桑原

きやうのぼ

る。

にんぐらるどうしつ

ど

ど しょくじ べんたう

はこ

すんくら

かく

ANOT

しらきはこ

三人位同室、三度三度食事は辨當で運ばれた。 八寸位の四角ない白木の箱で、それに

鋭とおかづがつてゐる。

めし

どうもその飯がぞんざいに炊くのでうまくないといつて、盛んにぶつ云ひ出する

のがあつたものだから、間もなく「鋭のいやなものは米でやる」といふ事となり、目に計

つては生来をもらひ、これをその部屋で焚いて食べた。今の自妓生活と同じであ

「外をするために、粘も要らないといふものには、鮭をくれた。二雨の総金はその頃

としては、大したもので、本所界隈になどをかこつてゐたものも少なくなかった。

すく

しろ今日は平隊士でも明日は何にかの都合で、一足飛びに大になるといふやうな世の

ちょっとうざう

たいしたち せいくわつ

中だから一寸想像もつかをい隊士達の生活であつた。

一八新徴組

をがきはらやしき ろうし

なか きよかは み

きんわうじやうみは

かた

のこ

小笠原屋敷の浪士の中の清河一味、勤王攘夷派がこれで片づいたので、残つた人々は

ぼくふ

もと

りつしんしゅつせ

まつたたんじゅんとくがは

たこれ幕府の下にあって、立身出世をしたいというものだけ、全く單純な徳川の一部

あらた

せうないこうさかるしけのじやう ふく

では

こうりゃうち

となつたから、改めて内侯酒井繁之丞の附属とし、出羽の公領地二萬七千石をそれ

ひょん

に宛て、

四月十七日、今迄は浪士組々々とのみいつてゐたのに對し、新たに「新徴組」と

めいく

こうぜん えどしち

とりしまり めい

命名し、公然と江戸市中の取締を命じた。

たいし

めい

その時は、隊士は約二百名に減じてゐた。(高橋泥舟翁遺談)

新徴組の平隊士は、月二兩の給料を異へられ、すこぶる澤したものである。八器に

86

末始組選新

さくや

でん もと かしら

ふ

しょく

貴殿は元は頭であつたが、今日はどういふ職務で御出でになつたといふと、松平はい

うどの めん」

せつしや ろうし とりあつかひがしら

や昨夜その鵜殿は冤ぜられて、拙者が浪士の取扱頭となつたと、斯らいひました。

それならそれで宜しい、出ませうといつて設定所へ出ますと、村上外七名、何等の際

ぎんみちうほりながとのみ あづ

まつだひら

ねんかん ご いっしんまで あひだ

味もなく、吟味中堀長門守へ預けるといふことで、それから六年間、御維新迄の間と

ぎんみ

こ

らくちやく

こいつしん

じぶん

うへ~

いうものは、頓とその吟味の落着が付ませぬ。然るに御維新になつて自分も此の上吟

味の沙汰には及ばずと言ふことで出ました」

記末始粗選新

85

み こくびく

だいけっ

わた

ほうへい

がんは

こと でき

なりして罪の黒白がわかつてから大剣といふものは渡すものである、ここで渡せとい

ま

つてもだしてお渡しする事は出来ない。殊には自分は今は混士の身となつてゐる、

に鵜殿鳩翁がその取扱を、将軍家から命じられてゐるのである。この鳩翁からの能

手であれば何時でも、何處へでも罷出る拙者。それに何んぞや、見受けると、外には

砲兵も来てゐるやうである、欺くの如く、野心者を弱くいるやうな手賞では、だして

く事は出来ない」

と頑張った。

ふふそく

かれら

周造遺談「これは徳川時分の法則でありまして、彼等もこの正論にには一言もなく

て、馬場翁のところへ行きましたが、豊におらんや、鵜殿はすでに免職せられて、

早くも松平上鶏介が代つてやつてゐた。その松平がやつて来たからにむかって、

わた

じゃうわけつかう みつけい

くふ

らう さいご

た

かづさのすけ みつこく

攘夷決行の密計が、幕府に洩れて八郎の最後を見るに到ったのは、この上総介の密告で

あるなどとも云はれた。

はくろちゃう みや

しかしうぞ~

と

ほんじょ

むらかみ

しんらう

一隊は、馬喰町の井筒屋を襲ひ、石坂周造を捕らへ、本所からは、村上俊五郎、和田

まつざはりや~きく しらみしやうべ

ふぢもとのぼる

い ひった

かくはん

あづ

きんこ

理一郎、松澤良策、白井庄兵衛、藤本昇の六名を引立てこれを各藩にお預け禁錮とした。

とき

くび

たの

あんしん

やど

いしざか

この時八郎の首を山岡に頼んだので、些か安心して宿にゐた石坂のところへ、どかく

おしこ

こ

とき

さすが

す びっくり

うち ひとり

とつぜん

と押込んで来られた時には、流石に少し吃驚した。その中の一人が、突然、

まかりで

「自分達は、何んの御用であるか知らないが、評定所から固をして出よとのこと

たいけん

くだ

であるから、どうぞ大剣をお渡し下さい」

しうざう

といつた、周造は、

でき

がた ごしやうち

とほ

へえちゃう! で

まちぶぎやうに上

『それは出来ません。あなた方も御承知の通り、評定所へ出るなり、町奉行所へ出る

末始粗選新

83

「七 組屋敷を包圍

とも

じやうるかうどう

でき

見たのは、本所三笠町に応じて威力をつてゐた混士の、

らう

し

八郎の死と共に、攘夷行動はもちろん出来なくなったが、それよりも、直ちに憂目を

同志の人々である。

御殿場翁は、その夜の中に、取締不屈だといふので、混奉行を強職され、家の日

とりしまりやく

たかはしせい

らう

ていう やまをかぶったらう きんしんへいきよ

こと

には、取締役にある高橋精一郎(泥舟) 山岡鐵太郎は謹慎閉居といふ事になつた。しか

ろうしぐみ くわんけい まつだいらかづきのすけ」 には

ふくわつ

そうとりしまり

も、はじめに、この浪士組に關係した松平上総介が、俄かに復活して、その取絆とな

こうない をだはら なかつ

しらかば

きうま

たかさき

ほん

へい

とつぜん

かきちやうやしき

荘内、小田原、中津、白河、相馬、高崎の六藩の兵を率ゐて、突然、三笠町屋敷を

とりかこ

んで、八郎に一味して、横襲撃を企てたものを、一々厳重に就職した。その頃、

清河八郎と妾阿蓮の墓 小石川傳通院にある。首を埋め後ちに

この墓をたてたが、明治四十四年更らに故郷荘内清川村に改葬

した。阿蓮には特に貞女と彫んである。

清河八郎の筆 八郎は東條一堂の家塾及び後に安積良療につ

いて學んだ。なか學者であつた。

既作国

萬里雨音

82

把末始粗選新

(住一) 八郎の著作 八郎は日本中足跡印せざるところ無き程に旅行もし、出現、風

の如く來り風の如く去るやうなふうであったが、この間にあつても實によく筆をとり物を書い

た。多くは甘才以前のものであるけれども、もし武事につて、全然學究の生活に入つてゐた

ならば、後世、事者としても、永くその名を残したであらう。

一才 (嘉永三年)

西遊記事一巻

廿八才

(安政四年)

大學言一卷、中庸言一卷、

(安政六年)

論語言三谷 女道篇二卷、 武道篇一卷、

中記事

三才 (文久二年)

就中「潜中記事」の如きは、八郎奔走の行程を知るに、もつとも詳細なものである。 その他

文章百五十篇、古時三百篇、奉母記 兵鑑廿卷。

記末始粗選新

81

でき

ので如何とも出来なかつた。

らう

おんさつ

けつくわ

み

しんいうかねこよ

らう

はくふ

とも

八郎の暗殺は、結果から見て、親友金子興三郎が、幕府のために友をつたもの」や

やまをか

すう ちょじゅつ

うである。かねて、荷物などは、山岡とか高橋とかへおいてあるが、多数の著述 (1)

ものなどは、友であるから、んどすべては金子へ武してあったことは、職

ぱんじつ すなは

かつ

にち こきやう ふほ

だ

てがみ

あきら

前日、即ち四月十二日に故郷の父母に宛て出した手紙によつてもらかである。

絆には、何んでもよく打明けた仲であつたので、今度横襲撃攘夷の事も話したが

これを聞いて、赤石の金子も愕然たるものがあつた。

これを打明けてから、二三日の後に招待されて鈴子を訪ね、窓に暗殺されるに郵つた

〃

かも

らう おとうとさいとうくまらう

らう あづか

しな うけと

もので、その後三日目に、八郎の弟齋藤熊三郎が、八郎の預った品を受取りに、金子の

ところへ行くと、子は左右に護衛の壮士数名をつれて配合した。熊三郎にも、すき

かくご

かねこ

しゅうみ

あらば一討ちにといふ覺悟はあったのだが、金子は顔色を變へて、始終身がまへてゐた

かねこ

80

記末始粗選新

わたくし、ひそかに、

清林院貞榮香花信女

八郎の戒名は

と、おくりないたし候故、くりことにも私の本妻同前に思召し、御たむけのほど偏へに願上

申候。まことに評判よろしく、たとひばてもうれしく候へども、うきめにて死にしこと悲し

かきりなく候。それにつきても、れんの母親のあんどするやうに、拾つかはし故、父上

と好きやう御はからひ、おくりくだされたく、親も年よりのよし故、なるだけ早くあんどいた

させたく候。これまた願上候

年は廿四十八から八郎の傍にあつた。 羽前の國熊井出村の生れで醫師の娘だが、事情あつ

鶴岡の娼家に賣られた。八郎見るところあってこれた姿としたものである。實に貞女であっ

た。蓮とは八郎が泥中之邁よりつけた名であるが本名はわからない
。

清秀院殿忠正明鸛居士

といふ。

て、度々手酷い拷問を受け、八郎の行衛を自白させやうとしたが、お題は口を結んで、一言も

答へなかつた。文久二年閏八月七日に江戸の荘内藩獄中に病死したが、八郎はこの事を知

らず、一日も早く出獄せしめんと、頻りに大赦運動をやり、松平慶永侯へ上書したりしてみた

のであつた。お蓮も、もう三四ヶ月の我慢であった。

當時、八郎より、荘内の母につたお蓮に闘する手紙がある。

さて又おれんこと、まことにかなしきあわれのこといたし、 さんれんかぎりなく。

されど、此ことは、なだかき士、四人もしにしゆえ、その人々とともに、めいどにまゐろなれ

ば、まさかにふそくはあるまじく、くさばのかげにては、うれしくおもひたるべきながらも、

まことにくかなしき事いたし申候。 いづれの人にも、みなよきものとほめられ、このことに

ても、かみかたまでも、よきみさほの女子とで、女のほまれになりしゆゑ、常人ばかりにもな

く、わたくしもうれしきことにおもひおりしところ、はかなくなりて、まことにざんれんに御

ざ候、くりことにも世のひょうばんよろしく、ほめられ候ゆゑ、まづはあんどいたし、なにと

ぞくわたくしの本妻とおぼしめし、あさゆうの、えかふ御たむけ、子供とひとしく御思召被

下度、くりことにも、れがひあげ中候。

＊

たづ

鐵舟は、この首を、傳通院の子院處都院の住職に頼んで、鋭かに同寺へ埋葬し、墓

も建てやった。通院際に、阿麗(1)の墓と共にあるのが、それである。

建て」やつた。今、傅通院内に、妾阿蓮(1) の墓と共にあるのが、それである。

哪治二年、更に郷里荘内瀧川村に改罪した。

やなぎざはこうて

かいさう

ころ だいみやう きんぽんぶし およ ひきとりにん

屍は、柳澤侯の手により、その頃、大名の勤藩武士及び引取人のない無縁者を葬る

あざぶ みやたららやりせいねんじ ほうむ

てら

めいち

ねんはいじ

ひえんしゃ ほうむ こと

になつてゐた麻布宮村町正念寺に葬ったが、この寺は、明治廿年廢寺となつたので、今

よし

は訪ぬるに由もない。

(一) 八郎の妾お 八郎が雨國帰りに町人を斬った時には、神田お玉ヶ池に門を張つて

「武教授」の看板を出してゐたが、この一件で、身の危険を感じたので、直ちに家をだとみ

安積五郎、伊牟田尚、村上俊五郎と實弟齊藤熊三郎及び妾のお薄をつれて川越在奥村に潜

伏した。

直ちに探知され、八郎等は逃れたがお蓮と熊三郎は取押さへられ、江戸へ引立てられ

一六 首をかくす山岡鐵舟

さとうづけ

おしいれ

はこ

談)

うづ

心臓はこの首をすぐに砂糖にして押へかくしたが、どうも臭くていけない。毎日

鯨夜、家のまはりを、町の目暁しが、うろしてゐて離れない。旗本の山へは、

うぶんにち

こと めいりやう

やまをか

わざ

こんど

つかり踏み込めないが、充分睨んでゐる事は明瞭だから、山岡も、故意と今度はゴミ

箱へ埋めた。矢張り臭い。

くさ

道場の秘を上げて、その眞下へ埋めたがこれもいけない。最後には謎々裏の大きな

した

しやく ほ

グミの木の下へ五尺も堀り下げて埋めておいた。ゴミから首をそうとして髪をつ

かんだら、ずぶりと抜けて来て、どうにも手のつけやうがなかつた。(山岡松子刀自

山岡鐵太郎 明治元年、卅三歳の時の寫眞である。晩年はだん(目玉が光つて凄くなったが、

この頃は、爲る事の割には、やさしい顔付をしてゐた。譚で腹を練り上げた剣法。この人の「突

き」は、太刀先きに火をするやうであつた。

76

末始粗選新

まする。

つて居った風もござりませぬが、胴巻を調べて見ますと、百編以上の用意鉉もござり

それからまあ名帳も無事でござりまするから、それで自分は誠に安堵をして、

さへ手に入れば、外に宝物はない。なれども、八郎の首を、どうも此大道に乗置く

やまかてったらう

して、山岡太郎へそれを送りました」(石坂周造翁遺談)

附属の者に持た

記末始粗選新

75

じぶん

ちゃうょん ぬ

と自分が長剣を抜きました。

ぷん

じんぶつ

このいきほひお

みぎびだりひら

すんほど

さて、その時分の人物は弱いもので此勢に恐れて先づ右左へ開きました。そこで、

らう

ひった

ずつと進んで、八郎の首を立てて見ると、未だ手は上手な者でないと見へて、首

が一寸程も噓付いて居ります。

さけく

酒臭さかつた。

くび

めい れんめいちやうくわんり

自分の目のつけるのは、だして先方の首ではない。五百名の連名帳が官吏の手に落

いのち す

ちれば、即ち、自分はじめ五百名の者の覲王者が連鎖される、はどうしても、自

まで

と

わたしの

の命を捨てる迄にも取つて來にやならぬといふのが私の望みでございます。

なれども警吏が見ておりますから、先づ斬りしてある首を焼きまして、さうして

織に包んで居る中に、自分の附属の者(浪士組)が、ぞろ(後ろ鉢巻で押込ん

あやうはん おしがる

そのいきほひ おそ

みなに

で来ました。雨藩の足軽どもは、共勢に恐れて逃けて終った。

とうにん くわいらう きが

かんしん をとこ

へいぜい

とん

それから當人の懐中を探すと、感心な男でござりまして、 平生は頓と金子などを持

一五石坂周造

くろちゃう りよしゆくろづや ちど

こうぞう

馬喰町の旅宿井筒屋に戻ってみた石坂周造はこれを聞いた。

てかっ おほはや

あかはは

ありま

『直ちに四ッ手籠の大早といふものを雇って赤羽へ馳せつけました。見ると有馬の足軽

あしがる

と松平山城の足軽とが警固してなか館へ付けませぬ。遠くすかして見ると、

八郎が朝れる時の檜木で編んだ陣笠を被って、織のも八郎の紋でありましたか

ところ

よつ

じぶん

わく

あしがる

かんだ

ら、それへ進まうとした所が、なか警吏が寄付けませぬ。そこで自分は一策を考

このけいし

むか

へて、共警吏に向ひ

彼虎に蹴れて居る者は清八郎といふものと""つて居る。疲れは拙者の爲めに仇

いた

で、父の嘘は供に天を戴がず、批者がすべきものを何者が害したか、質に遺憾

かはね いへど

の至り、と難る一万恨みをせにやならぬ。妨げをすれば汝等も側に斬るぞ。

末始粗選新

73

いま

カン

たいへん

きは

しろ大な騒ぎであつた。

ごろ

おもてもんはう ひとごろし

「今の午後四時頃に、表門の方で人殺があるといふから出て見た。一の橋を渡って一

か二間ほど行きますと、立派ながれて、首が右に落ちかつて轉げてゐました。

その様子は左の方の後から横に斬られたものと見えて、左の健一戎程かけて右の

首筋のば過ぎまで、美事に切られて居ります。 其上に顎の下邊に更に一刀痕あり

ます。多分離れた後で一刀をせかけたものと見えます。脇差は立派は黒で

みぎ て

てつせん

も

甲斐組の裏際で、右の手に鐵昜を持つておりましたと見え、右の手を伸べて北側に棄て

てありました」(上之山藩士相戸武兵衛翁遺談)

末始粗選新

たち

ردرم

背後から斬つたのは、同じく浪士組の窪田千太郎、中山周助、高安次郎外一名で、

即ち六名の刺客の中、三名は、京都で、周防守に命じられて、浪士隊へ加はつた者

達であつた。

事である。

かんし

江戸へ蹴りて恰度十八日目。攘夷行の日と定めた十五日に先立つ僅かに二日の出来

八郎は年僅かに卅四であつた。

一の橋を赤橋の方へつたすぐのところで、澤の献であるから、屍器は柳澤邸

こと

監視する事となる。

えどじだい

江戸時代には、その家の前の道路などに、死人があると、その一番近い方の家のも

やくにん しゅつやく

まで

かんし

のが、役人が出役する迄、これを監視する義務があつた。

記末始粗選新

71

られたともいふ。

らう

八郎

『おう』

と離したが、佐々木は、かぶつてゐる自分の陣笠をとつて、非常に丁寧にお俳儀をす

ひだりて ちんがさ

るので、八郎も左手で陣笠をぬいだ。

*

その、脱いだな、と思ふに、後から、さッと厳しく、頭を斬りつけたものがあ

らう

かたなて

いた

ざんねん

こゑさけ

まへ

る。八郎は、刀に手をかけたが、抜くに至らずして「残念」と一聲叫んだま」、前のめ

めに、どっと離れて怒った。或ば、臓をもつてゐたため、かに手をかける事もなくや

かつたものである。

*

八郎の、金子の屋を出て来たのは、もう七〇時(午後四時)を少し過ぎてゐた。露

くらるよ

てっせん

さけ

あしもと

みぎて

から訪問して、酒をよばれてゐたので、足許が、ひょろする位につてゐる。右手に

鐵をもつて、ゆったりと一の橋を渡ると、の方から、武士がパ

きよかはせんせい

「清河先生」

と蝶をかけた。見れば、佐々木只三郎に見四郎である。京を残して下る日に、親た

に世に命じられて、浪士組に加はつたが、二人とも講武所の劍術教授方をやる名代の

なだい

とうじてんか

しょう

ひと

緦士。殊に佐々木は、小太刀をとつては、當時天下無双と稱された人である。

記末始粗選新

69

はんてい

うちもん

この草原に葦竇張の茶見世が出てゐたが、この日は珍らしく四五人の武家がこ

てへ腰をかけて、茶を飲んだり、餅を食ったりして何にか待ち躍の様子。

鞍澤邸の東の端から、三田の小山町の高臺に出る坂道がある。この機にも二人の武士

たとづ

がうろくして、佇んだり歩いたり、時にはしゃがんだりしてある上に、時が

ほう

藩邸の裏門の方へやつて行つては戻って来た。

一四 赤羽橋の暗殺

らう

な

しょせい ひとり

かねこ

八郎は、けはどうしたのか、いつに無く書生を一人もつれなかつた。金子はなかな

がくしゃ

らう

きかんさい じゆく おい

けんさん

かみのやまはん

いせいてき

か學者で、八郎とは安積齋の塾に於て、共に研識に耽つたが、上之山藩では内政的な

ちうせき

かくらうみづの こう

ぶんがく

うじゆ

じんぶつ

じゅんざん

きくか

重責にあり、閣老水野侯などに文學を教授したりした人物であるが、純然たる佐幕家で、

こうじん

あま

溝が胸中勤王實行運動の大事を企てるについては、公人としてはり贊成してゐな

やまをか

い

はくろちゃう りよしゆく

しかしうぞう

山岡の家を出やうとする時に、馬喰町の旅宿からやつて来に石坂周造と出逢はせた。

「何處へ行くか」

「約束があって金子興三郎のところへ行く。よく同意するといふから今日は血を

しま

させて終ふつもりだ」

れんめいちゃう

こと

し

とふところに連名帳のある事を知らせるので

「何しろ脱しいから氣をつけて御で」

と、そのまゝ れた。

かみのやまょん ながやもん

いま あざぶ

はし

でんしやどほ

上之山藩の長屋門は、今の麻布一の橋からこの橋の方へ行く電車通りに向って建つて

うらもん

はん ほう

はし

おかれまし

みち

ふるかは

きそく

ゐる、裏門は十番の方にあつた。一の橋から赤羽橋への道は、古川に添って左側が一

面

くさばら

やなぎざはこう やしき

の草原で、右はずつと柳澤侯の屋敷になつてゐる。

記末始組選新

67

おく

うた

でき

『奥さん歌が出来ましたよ」

はくせん

ぼんしょこう

といつて、白易を三本所望し、一本には不思議な事に

魁けてまたさきがけん死出の山

迷ひはせまじすめらぎの道

わた

こ

ほん

と書いて渡した、殘る!!本に

砕けてもまた砕けても寄る波は

岩角をしも打砕くらむ

君はたゞ盡しましませおみの道

いもは外なく君を守らむ

と詠んだ。

ふしぎ

こと

ミ 風邪加減の八郎

よこはま

もど

とかは

すこ

にち

ねっ で

横濱から戻った清河は少し風邪をひいたやうであつた。 十二日はことに熱が出て、一

にちやまをか

いく

こち

はし

ではかみのやまじゅうしゆまつだひらやましろのみはんていない

日山岡の家にねてゐたが、十三日には麻布一の橋の出上之山城主松平山城 守藩邸内

ながや

いうじん かねこ よ

らう たづ

やくそく

あぶろ

はい

まつきを

の長屋にゐる友人の金子與三郎を訪ねる約束になつてゐたので、朝風呂に入り、眞青な

配色をして出かけて行つた。いつもの通り、黒二重の付着物に七子の付織を

ねづみたてじま せんだいひら

まかま

か そうほつ ひのき

ちんがき

て、鼠竪縞の仙台平の袴をはいてゐる。髪は總髪、檜木で編んだ陣笠をかぶつてゐた。

出がけにお湯の蹴り道で、隣りの高橋源舫のところへ寄って雑談した。泥舟は登

たかうじ こくき

しま

さいじょ

あひて

ほほし

城の時刻が来たので、すぐに出かけてつたが、妻女などを相手に笑ひ話をして、

*

その嘘書を八郎がとつた、主人は朝つて捨て、首は晒し、扉は凧國橋から、

なか

けつほん

ぼくふ

けんまく

こま

河の中へ抜けたが、この血に物をはせて、幕府に喰ってかいる八郎の見幕に困り、

いよいで、暗殺をする事になったものやうであつた。

殿をつけても八郎はなか討てない。第一腕が出来る、それに書生を可愛がつてゐ

ちょっとぐわいしゅつ

るので、(1)一寸外出するにも四人や五人はらずついて出る。

もつともこの時代には、一人で出歩くといふやうな事は、八郎ばかりでなく、蹴りな

かつたものである。

(1) 仁心のある人で私の病中、私は木綿物を着てみたが、其時に自分の着てみた絹物を脱いで、

を着て早く病気を良くして呉れろといつて置いて行った。それは人を見ていろの事をや

つた。金銭の事などは更に厭ったものでなかった(中村維隆翁遺談)

どの

びっくり

さうだん

けつくわ

らうし

どう

かん ま

ぐわいしゆつ

鵜殿も吃驚し、いろ(相談をした結果、直ちに浪士一同「五日間一歩も外出する

きんそくちう わうす

ぬい

な」と命じ、その禁足中の様子を山間鐵太郎が問合せると、依然として浪士がりに比

そう いんねん

ぽつ

こと はなは

りやうごくひろくわうじ みせちのこや

こうゆう

没してゐる。殊に甚だしいのは、兩國廣小路の見世物小屋で興行をしてゐる象に因念を

つけ「鼻を斬らせたらしてやる」と、力をぬいて暴れ出し、少なからぬ鉱をとった

もの

者があるといふので、

にせうし

て

とりさ

「Sょ~低浪士であるから一つわれの手で取捕さへる」

ぶぎやうしよ うちは

H

せい しゅつどう

く

うち

ぎぶつ しゅくわいかんぺ らう

らうし

うし

と、奉行所と打合せて、三百餘の浪士一斉に出動し、瞬く中に、偽物の主魁神戸六郎、

くちはちんきちいか

ひきと

栃葉新吉以下卅六名を捕らへて、屯所の土へ引張り込み、嚴重副問の結果、この爲

ぼくふ

たいめい

らうし こま

ことじ はく

浪士は、幕府の命によつて、浪士困らせのためにやつてゐる事を自白したといふので

ある

説べて来る。一説には、これは、浪士隊をいためつけて手も足も出ぬやうにするため

くりかうづけすけ きくはう

しんぎ

らうし

らんぼう

へいかう

の、小栗上野介の策謀だともいふが、その真偽はとにかくとして、浪士の暴には閉口

した。

おぎやうしよ

いさ

もの

きは

らうしとりまり

とのき・

こう

奉行所では、些さか腫れ物に綴る氣持ちであったが、浪士取締の鵜殿鳩にして公

文書をして「近頃市中に浪士の者で、商家の金銭を強識し、又吉原などへ入して、

うきやう

じん

無錢遊興をしたりするものがある事を毎日盛んに眠って来る。これらはあなたの方の

ちうほうこく ゆうし

はんな

こと

おも

そうけんぢう とりしま

忠報殿の勇士では萬々無い事とは思ふけれども、何ほ一階厳重に取締っていたじきたい

いみ

こと

ものです」といふ意味の事をいつて来た。

*

62

把末始粗選新

もの

はまし さつ

ぐわつ

にち つ

よく ぐわつ

らう

濱を視察して置こうといふので、三月廿八日に着いて、翌四月の十日、八郎は二三の若

いりけんぢう よこはま

せんかう

けんきう

はうりやく

よくじつえ ど

者をつれて、出入嚴重な横濱に潜行し、地理を研究し攘夷の方略をたてて、翌日江戸に

もど

どうし

どう

戻り、同志一同に對し

また

もつ だんかう

「よく来る十五日を以て斷行する」

むねつ

旨を告げた。

たんづ

これらのは、幕府でもうすくは感付いた。いよらなくてはならぬのだ

わか

ふくふ

こま

にせらうし もんだい

が、それに、も一つ幕府の困ったのは、低浪士問題であつた。

*

かきょちらうしたい

しょう

しちう らう きぼうかう

はたちの

まいにち

まちぶぎやうしよ

三笠町浪士隊と稱して市中で狼籍暴行を働く者があるといつて、毎日々々町奉行所へ

大名行列などでも、この混士隊の行軍が先きに見えると、わざと道をそらした。

剛兵庫風の行列が、道の狭い不器のところで、出合はしたが、兵庫頭の行列は、みん

なぜ戦の石の上へ、あぶなげに佇立ちして、浪士隊の通過を避けたといふ話があ

はなし

る。

しゃ。

じやうらくる すちう

むちう みまは

にっくわ

ほんじょ

やしき

將軍家上洛御留守中とあつて、市中の見廻りをやるのが日課だつたが、本所の屋敷にゐ

る者は

ぎに、屋敷の中で飲をやつたり櫛を使ったりして、部を滅茶々々にし

たものであつた。

きよは

*

一味のふところには、どうやら鷺行の資金も出来かつたので、この上は横

00

末姑粗選新

60

三押借り

はたらこと

かね

しかた

いざ加しうざう むらかみしゅん

盗を働く事はやめたが、どうしても金は要る。仕方がないから、石坂周造、村上俊

五郎、和野理一郎、藤本昇、松澤良策などが主として、借りをやつて歩いた。残

くらまへ

ひ

ふださし

とき

はくちうどうぐ

のりこ

きんわう

蔵前に賛澤三昧の日を送る札差に目をつけて時には白書堂々とこれへ乗込んでは、勤王

どうる

じんちゅうほうこく と

まとま

かね けんのう

あるはん こと

まんれう” とりお

攘夷、盡忠報國を説いて、つた金を献納させた。或晩の如きは、一に壹萬兩も取上

こと

げた事がある。(清河同志草野剛三翁遺談)

かきちょうろうしぐみ

刪

たいめい

ろうしたい

ろうし ぐみ

三笠町の浪士組は、まだ定まつた隊名がなくた浪士隊とか浪士組とかいつてゐたが、

えどしちう

りよく

たい

いしか しちう みまは

はじやう つれ

江戸市中に於ける威力は大したものであつた。石坂は市中の見廻りには馬上で常に七八

めい

とも

名の供をつれた。

て、苦した者が、盗名をして綴らなければならぬ。故に、これはどうしても止そう』

+

ぬう

そのくはだて

れうしん

たざいま

こういふことで其企を止めました。さて良心といふものは妙なもので、只今になつ

て考べて見ると能く彼の時分にはさういふ悪心が一時に残したものだと、自分から考

じぶん

くらる

へる位でございます』

*

この談話をした頃は、石坂翁は、越後の方へ行って頻りに石油の登掘をやり、失敗失敗に

もこりず奮闘してゐられた。あの燃ゆる液遣へ「石油」と最初に名をつけたのはこの石坂翁で

ある。

58

末始粗選新

けん はしょ

あるひまた

せいめい

着きましたが、さて、そういふ危険な場所、或は又まかり違へば生命にかゝる程の

事でございますから、噐らぬ者に付けて、露を描くよりは、しろ々でやらう

にんほどそのこと

けつ

ちるよで

まる

といふやうな事で、七人程共事に決して、それから或夜出て参りましたが、さて、ど

けんにんじがき を

うも良心といふものは怖いもので、只今でも彼は建仁寺垣が多うございますが、舊

じぶん

んにんじがき

幕の時分には、塀といふものは御座いませぬ、大概建仁寺垣でございます。

その本間の家へ行って見ますと、建仁寺でつまらぬでございます。その門を批

倒して入つても何んでもございますまいが、どうも良心に恥ぢまして中に這入れない、

いけだとくたう

りやうしん は

なか

はい

ほど

きう

そうすると、池田徳太郎でございます、これが呼びました。

「何んだ』

『いや、この企ては止そう」

「どうい譯だ」

こんにちまでめい

ちほうこく

「いやまあべて見やう。これが露して見ると、今日迄銘々盡忠報国だといつ

末始粗選新

57

でも潜たら蛮からうと貯ういふ。それは如何にも面白い、

織を着るといふこ

わかしいへやすこう おかね じんばおり

الموهو

よろし

ちんょおり

هري

とは昔家康公が茜の陣羽織を用いたことがあるから大きに宜からう。その陣羽織を用

りやうか

りやうくら

かね じんちうほうこく

とう だいぎ

かね

ひるには千五百兩掛る、其の金がない。千五百兩位の金が盡忠報國の黨が大義をな

くらかね

ことな

へうぎ

そうといふに、それ位の金が出来ぬといふ事は無からうと、いろ評議をしたとこ

ろが、画家のためにすることであるから一つ娥を脅かして取らうと云ふて、中には

ぼうろん

こんにち

かんが

たいへん ぼうろん

じぶん

かんが

暴論もありました。今日になつて考へると大變な暴論ですが、その時分の考へではそ

うたう かんぶへ

じぶんら

しろ

い すやう

こつァ

つく

よこはま

れが相當な考ですな。 自分等が一身を犠牲に供して國家のために盡すので、 横濱あた

ぐわいこくじん まんちやく

ところ かね

りに居つて外國人を瞞着して得た所の金は、どうしても、そういふ物をとつても驚い

ろんりや

とこういふ論者がございました。

ほんまかづま

さア、それなら何度へ金を取りに行くといつたところが、時分の議には、根岸

もの

これ みやきま

ごからう

たいへん

かね

に本間主馬といふ者がゐる。是は宮様の御家老で大變に金がある。そういふところの

鉱ならば何んでもない、その家へ一つ金を借りに行くがい」といふ議がきました。

56

末始粗選新

しゃ

じやういじつかう

みつけい

「たいきよ

よこはま おし

しちゆう

ひ

八郎は頻りに攘夷實行の密計を樹てゐる。先づ大學して横濱に押出し、市中に火を

ぐわいこくじん かた まし

くろぶね

せきゆ

じゃう

つけて、そのごた~に乗じて、外人を片っ端から斬り巻くり、黒は石油をかけて

かながは

ほんえい

あつき

焼き拂ひ、すぐに神奈川の本を攻めて、軍資を奪い、厚木街道から、甲府城に入つて、

ぎぐん

しやうい

きん

こ

ここで、攘夷、しかも勤王の義軍を起そうといふのである。

らう どうし

やまをかてつしう

もうとけいこ

*

ぎてい

八郎の同志で、後ちに山岡鉄舟の妻英子の妹桂子を妻とし、つまり鐵舟の義弟となつ

た石坂周造は、はじめから清の策動とは切っても切れぬ縁があるが、明治卅四年三月

九日、史談して親しく當時の有樣を話してある。

「五百名程が横濱へ入する、それには印として何か赤い物でも付けて、赤い哺織

末始組選新

55

1 茜の陣羽織

京都に於ける清河八郎の遣りばを、第一にひどく稀につてゐるのが老中の倉周防

(後に伊賀守)である。自分がた徳川家思ひの、正直な善人であるだけに、武は

つか

かんべん

しま

こと はら

ば幕府を しに使ったといふので、もう勘辨はならぬからと、これを斬つて終ふ事に腹

を極めた。 江戸へ蹴るや否や、八郎の周圍には器の目が鋭くなり出したのである。

きゃう

えど

もど

うちう

しま かんがへ

むね

ふく

らう

一説には京から江戸へ戻る道中で、やつて終う考で、この旨を含めて佐々木只三郎だ

はやみ また らう

には

速見又四郎だのを、かに仲間に加へたらしいとも云ふ。しかし道中では、八郎も充

ぶん

てし ごと

はたらもの しゅうる

はな

こと でき

分に氣をつけたし、手足の如くに働く者も周圍には離れぬから、どうする事も出来なか

つたやうである。

54

記末始粗選新

「左様か、ではしづかに成佛なさるがいと」

こんな事をいつて、が引取るとすぐに息が絶えた。

*

鐵舟の編んだ流儀は無刀流。その形や技に拘泥せずして心裏極致に悟入せよといふのである。

大悟のの口吟に「論心總是惑心中、凝輪高還失工、 要識劍家精妙虞、電光影裏斷春風」

とあり、爾来これにとつて道場春風館と稱した。鐵舟の書は一刀流兵法と認めてあるが、

假名目錄十二箇。一、二之目付之事。二、 切落事。三、遠近之事。四、横竪上下之事。 五、

色付之事。六、目付之事。七、狐疑之事。 八、松風之事。九、地形之事。10、無他心之事。

11、間之事。一二、残心之事。一刀より起つて萬刀に化し、萬刀一刀に帰す。 年月の数十二

ヶ月あり、一陽に起つて萬物造化し、陽中陰をめぐみて、萬物生じ、陰ことに極りて年月つく

るものと見れば、陰中腸して又いつか青腸にかへる。 陰陽巡環して玉のはしなきかご

とく當修業も赤斯如。 cある。

末始粗選新

53

から明治十三年三月卌日の夜明け迄十七年の間つくいた。この時はじめて譚劍一致の妙諦を悟

つて、師匠から洸一刀の自得せる無想の極意を授けられたのである。剣を学んで四十年、

四十五歳の春であった。

鐵舟の構へはいつも星眼で、突きが第一の得意であつた。面や籠手には入れたが、胴には決

して入れなかった。これは胴をうつために身を屈める時に、こちらの手がうまく行つても、同

時に自分の頭と腕をやられる危険があるといふのである。

上段のへも鐵舟はしなかつた。籠手を上げる瞬間が危険だし、どうも左右の籠手にすきが

立ちやすいといふのである。

明治廿一年七月十九日、年五十三、胃癌を病んで没した。臨終に際して、夫人英子を呼んで

浴室に入り、かれて用意した白衣に着かへ、金剛経一巻を懐中し、左手に念珠、右手に團扇を

持ち、静かに病床に座って、時の来るを待った。

そこへ、明治維新の大業に生死を誓った勝海舟翁が見舞に来た。

「いよ(御臨終ときいたが、どんな容子ちゃな」

「ようお出で下された、たく今が涅槃に入るところです」

52

末始粗選新

一説には、中條は日常、鐵ごしらへの下駄をはいて歩るいたなどともいふ。

(二) 高橋と山岡 舟の家は六百石をとる旗本である、小野朝右衛門と云ひ、 本所大

川端に住んでゐたが、舟は出で山岡紀一郎靜山の妹英子の婿となった。高橋泥舟はこの静

山の弟、英子の兄で、はじめ精一郎といつたが、早く高橋家へ養子となったものである。 弟の

泥舟も槍に從五位の位ありと云はれた名人、兄の山の槍術もまた天下無双であつて、十五斤

の爪槍をふるつて一日千回の突を試みて稽古をした。安政二年六月、面をやんでしたが、

まだ七の盛りであつた。

舟はこの義兄静山について槍を學んだ。後年彼の突きが、前後にない名譽と稱されるに到

つたのは、この修行によるところが多いといはれる。

鐵舟ははじめ眞影から愛し、後に北辰一刀流千葉周作の高弟井上八郎清虎について修行し

たが、小野派一刀流の家元中西忠兵衛子正の利又七郎義明と立つて、遠くその及ばないの

悟り、文久三年以来はその門下として師事した。厳舟が師淺利の突き破る迄の苦心は、それ

蛇し、時はひどく貧乏をしつけて、部屋も僅かに四つ位よりなかつた。

らうしばしふ しゃう お

しかしうざう いけだとくたらう

らうし

とんしょ しつ

先きに浪士募集の掌に當たつた石坂周造や池田徳太郎も、浪士の屯所に室は持つても

事實は二人とも、日本橋馬喰町の宿屋住居をしてゐる。大松屋といふのにあたり、弁

屋といふのにつたりしてみる。

(一) 中條金之助 旗本でした。すらのりとした小粋な人物で、維新後に私が物心ついた頃

はもう七十をすぎてゐて、東海道金谷ヶ原の百姓隊の隊長をしてみました。有名な劍客で、死

チョンマゲを結つてゐましたが、時々東京へやつて来ては「百姓ももう馴れたわい」とい

つて笑つてゐました。 その副隊長は舊の馬術の先生で、 大草といふ人でした。

毎年三月一日には、父の鎧舟が道場へ東京中の剣客を招いて、道から悟つた「五點」とい

ふ獨特の組太刀を使つて見せるのですが、この相手が定つて中金之助だつたものです。 は

挽いてありますが、真剣ですからばつばつと火花が散って物凄いものでした。(山岡松子刀自談)

末始粗選新

じつ

やう のぼ

おと

あつ

實は、この一行が京へ上つた後で、ぞく募集を聞きつけて集まったものがあつて

よめい

上

ひとまと

しうよう

めつけやく

なんか

それが百六十餘名にも及んだので、とにかく、一器めにして収容し、目付役だつた劍客

ちうでうきんのすけ

とりあつかひ あい

とりしま

がつ

の中條金之助(一)がその取扱を命じられて取締つてゐたが、これを合すると三百八

よめい

らうし

かきちやうやしき

かうじまち いひだ まち

きざかうへ

十餘名の浪士なので、三笠町の屋敷から溢れた一部は、麹町の飯田町もちの木坂上に彼

とんしょ まう

しうよう

こと

屯所を設けて、ここにも収容する事とした。

清河は、小笠原の邸にも一室をもつてはみたけれども、寝泊りは殆んど、小石川啄

づうろんうら

こいしかはたけはやちゃう

やまをかてったう

てったらう

とな

通院裏、今の小石川竹早町にあった山岡鐵太郎の家にしてゐる。鐵太郎のすぐ隣りには

しんるる あひがら

たかはしい せのかみ

たかはし

だうん

ていたく

高橋伊勢守が住んでみて、親類の間柄(二)ではあるが、「槍の高橋」が堂々たる邸宅に

やしき

ていきやう

の二た屋敷が提供された。

*

をりよ

せいてん

どうおのくしゅくしや には わらじ

は折好く晴天。一同各々宿舍の庭で草鞋をはいてみると、

にっいま

かほしいそのかみどのでいう

ら

ゆかたさとた。

『只今、高橋伊勢守殿(泥舟)が新たに浪士取扱を拝命し、講武所剣術教授方佐々木只三

らうしとりあっかひ はいめい

かうぶしまんに

らう

はやみ また らう たかく ぼ

よたてつ らう ながる とらのすけ ひろせ

しょせんせい

らう

郎、速見又四郎、高久保二郎、依田哲二郎、永井寅之助、廣瀬六兵衛の諸先生が、 浪

ししゆつやく にん

士役に任じられた」

こと

はつぺう

といふ事が、表された。

ぞく

りも同じ木管路を通って、道中十六郎。三月二十八日に一同元氣で、江戸へ安着し

ほんじょみかちやう はたもとをがきはらかがのかみ あきやしま

もど

らうし

しゅくしゃ

た。本所三笠町の旗本小笠原加賀守の屋敷が、戻った浪士の宿舎となつたが、これは

よたかおがきはら

やしき

ちゃう ほう かこひなか

おな またもと にしを

やしき

俗にいる夜鷹小笠原の屋敷。 一町四方の園の中に、同じ旗本の西尾の屋敷があつて、こ

けつべきす

きか

おも

こんとう

からぬ。八郎はまア策士と云へば策士、山師と云へば山師見たやうなもの、近藤は少し

くらましやちき じんぶつ

まうげん

をした

深過ぎる位正直な人物(結城無二三翁遺談)に猛然として不服を申立てた。

「われらは幕府の花に感じて集まったものである、へ白より何なる命令があつた

やうぐんけ

にせよ、将軍家よりの御沙汰が無ければ、京の地は一歩も離れる事は出来ない。毎に

きしづどほ

おひな

貴下の差岡通りには相成らぬ」

ことな

しん

いぐわい

思ふ事成らざるなしと信じてゐた八郎は些さか意外だった。これを聞くと、むうツと

して、満面を注ぎ、刀をとつて枕に手をかけたが、一同がまア~となだめて、その

場はどうやら無事。しかし結局は芹澤、近藤の一味は、瀧と別れる事に誰がついた。

せりざはこんどうひっかよ

*

かんちゃう

どうし

あい

ぎんのじょうかた

がつしゆく

らうし

のこ

芹澤近藤土方と勘定して同志十三名。 八木源之丞方へ合宿した浪士がみんな残った。

らうし

めい

み

きょかは くは

きよう はる

にち

江戸から来た浪士二百廿一名、それに満河が加はつて、京の春に別れやうといふ十三日

記末始粗選新

47

らうしぐみ

10 憤然袂をわかつた勇の一味

みぶ

わづ

か

らう

「た」

浪士組の壬生に止まつたのは僅かに二十日に過ぎなかつた。

三十三郎、立ちをして江戸へ逆戻りと定まった前夜、一同は新徳寺に集合し、八

あが

郎つッたちよつて

わた

くだ

『關白の命である、われは江戸へ下つて、いよ攘夷の急先鋒を勤める事となつ

とひした。

*

今日迄、つてゐた近藤一味。夷はもとより反野ではないが、八郎の遣り口が氣に

ゐる時の事件で、東海道神奈川と鶴見の間、生爽といふところで、薩摩の島津三郎久光の行列

横濱の英人が馬で乗打をしたといふので、リチャードソンといふのが斬殺され、マ

とクラークといふのが深手を負ひ、ポロダイル夫人が帽子を斬られた。

-

シャル

「島津久光公は奈良原氏を駕の傍に召し寄せ、御家老小松刀を以て間はしめられるには、

何故に外人を斬ったのか、答へて、行列を遮らんとしたからでございます。煎れて間はれる

には、行列を遮って無禮をしたものは斬る理由はあるがまだ遮りもしない者を斬ったのはど

うしてか。奈良原氏は然として、お言葉ではございますが、日頃より断る無礎をさせないこ

とこそ御供目附の役目と存じて居ります、若し外人して行列を遮らせて彩ったならば、た

だ腹をきつて申譯を立てればならなかつたのか、幸にもざらめ前に斬ってのけたのは、役

目を仇にしなかつたものと存じます、それがしの面目はこの上ありませぬ」(海江田子爵

遺談)

下手人奈良原氏は御供目付の奈良原喜左衛門でこの騒動のため、幕府は英國に對し償金十萬磅

を支拂ひ、英國と薩摩との鹿兒島灣戦争がはじまった。

末始粗選新

45

うんうんどう

にち

かんわづ

つき

を望み、裏面運動をやつたので、廿三日についてその間僅かに七日、その月の中の三十

にち

てうてい

くしふるん

てついき

おもてな

ちよくちゃう らうしぐみ

日には、朝廷の學習院から、それぐ手續を経て、表向きの勅諚が浪士組へ下った。

浪人 奉行

同 取締役

殿

翁

岡鐵太郎

今般横濱へ英吉利軍艦渡來、昨戌年八月武州生麥に於て、 薩人斬夷の事件より三個

申立、何れも難聞届筋に付、共旨被及應接候間、己に兵端を開くやも難計、仍而

其方召連浪士速に東下し、粉骨砕身可撕忠誠候也。

三月に入って、八郎は前後四郎、各方面にして、いろな建白書を差した。

*

(一) 生麥事件 文久二年八月廿一日、即ち清河等の浪士連中がまだ江戸方面にうよくして

らうし

を打つつもりだつたからである。これには、浪士一同、閣老と共にうまく一杯喰はされ

どう

かくらう

とも

ばいく

た。

芹澤、近藤も舌打ちをしたが、どうにもこうなつては大勢上仕方がない。ぶり(腹

うち

こま

ぬ

を立てゐる中に、閣老も困り抜いて、

なまむぎにけん

こと

せんたん

ひら

こと

『生麥事件(一)がどうなるかわからない。事によると戦端を開くやうな事になるかも

知れないから、浪士は、先づ江戸へ戻って、こつちで活動してくれ」

こうじつ

かんが

ふたえど *

?

と、口を考へ、再び江戸へ追ひ録さうといふ事にした。

こと

らう

らう

じゃうしょ

てうにい

じぶん

こと つう

八郎は八郎で、もう先きの上書によつて、朝廷には、自分の意のある事は通じた

くゎんぱく

には、白から「聞寂感不斜」といふしもあつたので、この虫をだせん

はくふ

ม

くわんけい

じぶんたち

ぞん でき

たちもど

とすれば、敢て幕府には關係なく、自分達の一で出来るといふので、江戸へ戻る事

*

後に中村雜隆となつた當時の草野剛三(取締役付)も、この使者の一人であつたが、

かた

夜から今朝にかけての八郎の態度といふものは、既に死の悟であつたと語り残して

ゐる。

じやうしょ

とりあ

らう ばんじ おも

くふ

かくらう

上書はお取上げとなつて、八郎は萬事思ふ壺にはまつたが、驚いたのは幕府の閣老

で『溝滅やり居つたな』と、桜倉周防守は、早くもその前後策に手をつくし、に

りつぷく ないしん

かまれてその立腹も内心一方ならぬものがあつた。

けれども、職が問題だけに、きどうする事も出来ない。溝が深の意を知

出来るだけ手を延ばして、くの混士を集めたのも、はじめからこの大芝居

といつた。

ぼくふ

し

おう

といふ幕府の召には感じたが、涙なんかは質はないから自由だ、といふやうな意味のも

のを読み上げた上

『もとより御異存は御座るまいな」

と、を光らせて一座を眺め難した。

浪士達は、その鋭いに呑まれたのか、蹴りに八郎の高飛車な策にあつ気にとら

れたのか、とにかくその場は、それでまつて、翌朝、日の出づるを待つて、八郎は、

いたんりやく

はいか

にん

せんまつ

たうこ こくじ きんせい

くしふるん しゅつとう

才膽略にたけた輩下の六人を選抜して、 當時事參政の詰めてゐた學習院へ出頭して

この上をせしめた。六士の出づるに際して、八郎は誰をまし

『お取上げがなかったならば生きてるなよ」

末始鉏選新

41

うどの やまか

くふくにん

鵜殿、山岡など幕府役人は、前川荘司方へ宿をとった。

まへかはしやうじかた

ど

はん

らう

らうし

どう

しんとくじ

まね

みづ

しゃうざ

京へ着いてすぐその、河八郎は、浪士一同を新徳寺に招ぎ、自から端然と正座に

だいとう

ひきよ

らうし

じつ いぐわい

はつぺう

じ

ついて、傍近く大刀を引寄せ、浪士にとつては實に意外なる事件を發表した。

こと

京へ来たのは、近く上洛あるべき将軍家茂公の守護とは只名のみの事であつて、その

すなはたい

しんじつ

そんのうやうる

せん笑

眞質は、たゞ(尊王攘夷の先鋒たらんとするにあるのである、即ち直ちにわれ!の

てんちゃう たっ

ひっそう

じやうしよせつしや

きよう

のあるところを天聴に達する必要があるので、上書は拙者が起草しておいたといつて

おんどだうん

音吐堂々として、

右に付幕府御召には相應じ候へ共、禄位等は更に相承不申只々尊攘之大義のみ奉相期

候間、萬一皇命を妨け、私意を企て候輩於有之は、たとひ有司の人々たり共、聊無用

捨刺責任度一統の決心に御座候間 云々

40

末始粗選新

みぶ

ほんぶ

九壬生の屯營

しんとくじ

壬生の本部は新德寺においた。

ゑもんかに

清河八郎をはじめ廿一名は本部泊り、井出友三郎方に四十三名。宇都宮左衛門方二十

名取締付は多く献部三郎。その他鄉士八木之丞力。前川司方などへ分宿した。

*

こんどう どうしゅく

ぎけんのじようかた

こぶん

みと

芹澤は近藤と同宿で、八木源之丞方と定まる。芹澤の子分としては水戸から来てゐる

にいみにしき ひらやま らう ひらまきんすけ

んどう

み

ひちかた はらだ とうだう やまなみ

新見錦、平山五郎、 平間金助、野口健司。近藤の一味は土方、 原田、藤堂、山南、沖田

ころ

のうへ ながくら

めい がつしゆく

わらじ

こんどう

井上、永倉と、すべてゞ十三名の合宿となつた。この宿で草鞋をぬぐ頃には、もう近藤

男は、断然この二百卅四名の浪士組の中につて、自然重きを爲すにつてゐた。

89

月四日、無事二條の城へぴつて来る。

一方、去年五月、競使大原重徳卿闘東下向の際の紙によつて、混士隊のに遽る」

とうかいだう

しやうぐんいくもちこう しんはん しよしやう ひき

こと五目。十三日に、これは東海道から、将軍家茂公は親の話をみて上洛し、三

じやうらく

38

記末始選新

こと

やまをか

ひきかへ

と

こと

といふ事で、とにかく山岡の引返しを止める事になった。

はんたい

むらかみしゅん らう

きよかは らう

どうし

けつぶつ

こんどう み

六番隊の村上俊五郎も、清河八郎の同志として、傑物ではあったが、近藤一味から見

こと

やまなみけいすけ

むらかみ

ごちゃう

たうらう

れば、物の數でもない。殊に山南敬助は、村上の伍長づらをするのが癖で、道中ちょい

み

~(職疇を賣つた。

なまいき

相にして見れば、この近藤一味が、どれ程のものであるかは解からない、生意気な

やつ

こと

はや

けんくわ

くもゆき

奴であるといふのでその喧嘩を買ふ。穏やかならぬ雲行をつけてゐたが、とにもかく

にも、一名の深伍者もなく、江戸を憂つて十六日目、二月二十三日に、この一行は京都

郊外王生へ着いた。

着くとすぐに、形勢危うしと知った山は村上に説いて、バをとらせ、山麓の前へ

行って、道中の無職を詫びさせた。山岡は道中物事の端々に、この近藤一味の只者でな

くわんは

い事を早くも觀破してみたのである。

末始粗選新

37

‶

しゅ

わがま

めたが、その後も宿々での我儘はやめなかった。

せつしや

流石の山岡鐵舟もこれには胎して、如何にもなりかねたか、もう四日位で京だ

かなうにゆく はい

ゐ

せりざわ

といふ加納宿に入った日に、芹澤にむかつて

じしよく

もど

なにぶんあと

『捕者は、ここで離職をして江戸へ戻るから、何分後のところはょろしく』

あいさつ

と挨拶をした。

せりは めんくら

したい

いま

はんたいせつ

やまか

これには芹澤も面喰った。この新微浪士隊にとつて、今一番大切なのは山岡である。

とりあつかひ うどの違うおう

ぞくり

らうじん

らうし

取扱の鵜殿鳩翁は、ほんの俗吏上がりでお負けに老人で、まるで浪士の氣持などはわ

かへ

しま

くふ

くわんけい

うしたち とり

しまり

からない。山岡をして終つては、幕府との關係もうまくないし、第一この浪士達の取

せりざは

くらみこと

締がつかないと、芹澤だとてこの位の事はすぐにわかる。

『者の我儘について然様な事を仰せられるならば、拙者は今後充分行動を悔しむ」

に

も、しまつたと思つたからすぐに芹澤のところへやって来て

せりはせんせい せつしやども そこっ

「芹澤先生、拙者共の粗忽でござった』

わび

せりではよこ

ฝ

ろく

へんじ

しょうち

と、Sろくにして詫をするが、芹澤横を向いて碌に返事もせず、いつかな承知をしな

しまひ

い。しかしお経には、

っしはい

およ

やどな

せっしゃ

せつしや

かんがへ

こんや

よちうかいり

『いや、御心配には及ばん、宿無しの拙者にはまた拙者の考が御座る。今夜は夜中郭

りすこ

ほ

を焚いて暖をとつて過ごさう。しかし、その癖が少し大きいかも知れぬからお驚きにな

るな」

あた しだい もくざい

しゆくま

と、いつた。日が暮れるとすぐに、さア手り次第、木材を集めて来て、宿の真ん中で

てん

こ

天も焦けるやうな大火を焚き出した。

火の子は宿中のやうに降る。みんな水橋を下げて屋根へ上つてゐるといふ有様で

何時火事になるかも知れないから、百姓町人、寝る事も出来ない始末。

この一件は、それでも町と近藤が、虫を殺して三郷九して、ぐ、芹澤をなだ

記末始粗選新

35

した。

موب ひやうちやうしよ

らうない ぜつしょくだんかう

たつた龍の口の評定所で調べられた時、牢内で絶食を断行し、小指を噛み切つて、そ

ちしま

の滴る鮮血で

雪霜に色よく花のさきかけて

散りても後に匂ふ梅が香

と、扉の歌を書き、この血なまぐさい紙片を牢の格子へ張っておいた。

こんどういさみ

近藤勇は、取縮付池田徳太郎の手役として、道中の、

を命じられて本隊より

あしは

一足早やく、宿々へ先乗りをする事になったが、桜橋、浦和・大宮

あけを

宮、上尾、

こと わす

鴻ノ巣、 熊谷・深谷、と行って次の曲へ着いた時、どうしたか芹澤の宿をと

しま

事を忘れて終つてゐた。

ゆふこく

ほんたい

U

せりは

เม

いけだ

こんどう

そこへ夕刻になつて本隊が着いて、いざッとなつたら、芹澤の宿がない。 池田も近藤

34

記末始粗選新

八 水府脱藩芹澤鴨

だうちう とりしまりやくづせりぎはも

ゆんご

せつ

しんだうむねんりうど

ほんやく

範

道中、取締役付芹澤鴨の我儘は言語に絶した。神道無念流戸ヶ崎熊太郎の取立てゞ、師

めんきよしや

こと りりやうひと

へいそ じんちうょうこく

せりばから

の免許者である。殊に力量人にすぐれ、平「盡忠報國の士芹澤鴨」と彫つた三百

の臟を握って、何にか氣に陰はないと、喉が裂ける程に怒した。常陸芹澤村の郷士

ざきくまた らう とりに

のつか

あま 「おほ

で天狗業の生残り、本名は木村、短氣で我輩で、暴で、一般の人には相違ない

こと

が、扱ひかねる事が度々であつた。

天狗業時代、潮来の宿で、何にか些さか氣に陰はぬ事があるといって、部下三名を土

職場に並ばせておいて、片っぱしから首を斬ったり、鹿島神宮へ参識して、殿の太鼓

めざは

てつせん

やぶ

が餘り大きくて目觸りだといつて、これを鐵扇で、叩き破ったりしたものである。

部下と云へどもだである、この斬殺一代で江戸へ立てられ、今の和田倉門の東に賞

記末始粗選新

33

いうてん

こうくわ ねん あき かうしうかじかざはから

ころ

くははららいけ

けんだうしゅけ

この商天のために、弘化三年の秋、甲州瞰澤村で、殺された桑原來助といふ剣道修業

しゃ

せが ほむらたつを

はくぜんおや

たい おうぼ

きみ

ばんたい

者の大村尾といふのが、莫然親の敵をさがして、この隊に募し、男のゐる六番隊

さんか

わか

に参加して行った。十九歳の若ものである。

こんどういさみ

七 祐天仙之助

ち

ひらたいし

とりあつか

お

ひだかたとし

には

近藤勇(ʽo)等は、平隊士として軽々しく取扱はれ、たゞ默々として歩いて行つた

がくら

おきたそうじ

とうだうへいすけ

やまなみけいすけ

土方歳三(ʺ)、永倉新八(ʽo)、沖田総司(ʽo)、藤堂平助(ʽT)、山南敬助(ʺ)など錚

らう てつき

劍響れも十把ひとからけとなって、六番隊村上俊五郎の手帖となつてゐる。

五都隊の伍長山本修之(三)は、甲斐のばくち打ち、甲州一器に縦張りのあつた香具

の親分三井の宇之吉の後をついだ天之助で、子分名に賭場の用心棒をしてみた

州の生田佐太郎もつれて、この募集に感じ、近藤が平隊士といふのに、こ

まんざし こうやう

れらが俄かの二本差で伍長となつてゐる。

之助は、甲州府中行藏院の行者裂の弟子ばりで、と疇をしては嘘つてゐた法聡

である。デは行者上りの無頼漢に過ぎない。

記末始組選新

31.

隊は七つ。その外に取締付といふのがあつた。

一番隊 伍長、根岸友山、山田官司、德永大和三名。隊士廿七名

二番隊 伍長、武田元記、大館謙三郎、黑田桃珉三名。隊士廿七名

三番隊 伍長、常見一郎、新見錦、石坂周造三名。除士廿七名 (近藤道場井上源三

郎はこの隊にあつた)

四番隊 伍長、齋藤源十郎、松澤良作、青木慎吉。隊士廿七名

五番隊 伍長、山本仙之助、森土鐵四郎、村上常右衛門三名。隊士廿七名

六番隊 伍長、村上俊五郎、金子正言、西恭助三名、隊士廿七名(近藤勇以下一黨

乙の隊仁bb)

七番隊 伍長、宇都宮左衛門、大門志津馬、須永宗司三名。除士廿八名

取締付 芹澤鴨、池田德太郎、齋藤熊三郎(清河八郎實弟)の他LT廿三名

きやうと

六木曽路を行く浪士隊

四日に合して、六日には全部の編成を綴り、一時間をおいて、八日にはすでに、一同

しゅつはつ

京都へむかつて出發した。

これは江戸の闇老が、集まった顔ぶれを見て、赤く江戸へぐづさせておいては碌

な事を仕出かさない、とにかく京都へやれば、こつちの責任は無くなると考べたものら

かう

しゅく

そち

とほ

どうらく

しく、一行二百卅四名、板橋宿から木曽路を通って、上洛する。

うどの

やまをか

い なか な

た

ひとり ほんたい

鵜殿も行くし、山岡も行く。清河八郎は、連名の中に名さへ出さず、たった一人本隊

たかけた

む そり

なが かたな

たい

あと

を離れ、高下駄をはいて、無反のすてきに長い刀をさし、隊の先きになり、後になり、

40

ぶらりと歩いて行った。

29

清河ではどうも信用が足りないので、 本當の浪士は集まりません。其慮で致し方なく近國へ出

張して百姓や博徒などを集めました。

歳が幕府の方では集つた觸れを見て、これは少し約束に違ふと思ひました。 集った方では、

すぐ旗本にでも取立てられる事と思つてゐたのに、一向其の様子もないので、清河や石坂に喰

つてかゝります。無論その命令などは奉じません。

それで清河はじめ上總介までが今で云へば責を負ふといふのでせう、自から身を引いて改めて、

幕府から、鵜殿鳩翁を頭に、山岡舟 松岡の兩人

に任命しました。新選組結城無

二三翁遺談、翁は明治四十五年五月十七日東京に於て沒す)

38

28

肥末始粗選新

かく

となり、松平上総介が、混滅からその人數をきいて吃した。

とのこと。

どの

『少なくて二百五十代、先づそれ以上に概成るものと思はれたい」

これは闘つた、幕府では五十と定めて、パ噐り五十部計二千五百両の仕竣盆

より下さらない、擦の五代の人では、どうも手も足も出ないので、その日に道まつ

まつだひら びんごさく

とつざんじしよく

しま

て、松平は前後策もつけず、突然辭職をして終った。

しかた

うどんざる

おう

うにんとりあつかひ

でも仕方がないので、かに目付をした鵜殿甚左衛門鳩を浪人取扱として、兎に

にわ

でんづうるんだいしせいろん くわいがふおこな

角、傅通院内處院で會合を行つた。

どう

あてふそく

鵜殿は浪士一同にむかつて、手當不足の事情を告げ、

しょくん じんちうほうこく

「諸君は忠報の士である、今更手の多少によつて姉といふはあるまいと

へい

じん ゑんりょ

ひきとくだ

するけれども、もし御不平の仁は遠慮なくお引取下さい』

しん

ました

申渡した。

らうし

か

らうちう

びつちうまつやま まんごく

じやうしゅいたくらすはうのかみはら

浪士お掛りをやつてゐる老中、備中松山五萬石の城主板倉周防守の膜では、先づい

ぬい

じつさい

きよかは

ところをすぐり取つて五十名といふつもりであつた。しかし、實際に募つてゐる清河に

とほ

さく

もつ

は、前にもいつた通り策がある、此際何んでもいいから集めるにだけは集めて置こ

じぶん

つごう

りよう

かんがへ

う、そして一つこれを思ひ切つて自分に都合よく利用してやらうといふ考である。

かは

は觀玉家だ、幕府のために粉骨砕身する譯がない。一、先には申した通り交

ねん

ぐらつ

りやうごく

こうず

どうね。

年五月に、雨國であの事件をやってからさへ、敢て公儀を恐る」ところもなく、同年の

ઉત

なかやまどんう

〝うた〞よしけう

しゅしよ

しうかくはん きょへいたうはく さく

冬には、中山前右中將忠愛卿の手書をふところにして、九州各藩を擧兵倒幕を楽して廻

ほど じんぶつ

こょろ

ひとぐ あや

にら

さすが

かくらういたくら

とき

つた程の人物である、心ある人々は怪しいと睨んたが、流石の閣老板倉もその時は、こ

きづ

れははつきりと氣附かなかつた。

ぶんぼう ねん

ぐわつみ

こいしかはでんづうるん

りんちゃうらうし くわいがふ

明くれば文久三年、二月四日にSょ~小石川傳通院で、新徴浪士の會合をやること

板倉周防守名は勝靜、幕

老中として浪士扱御掛であつた。

鯉沼伊織 後の皇后宮太夫香川敬三、下穂

流山に陣し「勇ある者、智無し」といつ

て近藤勇をうまく陣地へ引込んで

捕らへた人。常時官軍の参謀。 廿六

歳の弱冠であつた。(上)

浪士には清河八郎江戸出發以来關係深かく、後にこれを暗殺せしめた

のも周防守の差指である。近藤勇とも又因縁深かく、剛腹なところが

あつた。維新後は上野東照宮の副祠官となり明治廿年迄存命した。(下)

五 老中板倉周防守

たう

ちかた

おきた

やまなみ

はらだ

w

のうへ とうだう ながくらまで く

・しば

近藤勇の一黨は、土方、沖田、山南をはじめ、原田、井上、藤堂に永倉迄も加はつて

うしごめ がふはんさか やしき

まつだひらかづさのすけ たづ

ぱしふ しんい

浪士募集を聞くとすぐに牛込二合半坂に邸のあつた松平上總介を訪ねて、 募集の真意を

聞いてみた。上総介はなか器量人で、攘夷の本旨から、春は将軍家(家茂)にかかせ

ごじやうらくあそ

こんくわいだしふ ゆうし

けいい

きやうとしゅご

られても御上洛遊ばさる」によつて、今回募集の勇士は、その御警衛として京都守護に

もと

にん

むね ゆうべん

どう いぞん

さんか

任すべきものである旨 雄辯に説いて聞かせた。素より一同に異存はない、すぐに参加

の意を述べて、先づ”の道場へ取ると、先づ酒を買って一「ひょくわれら

てつ

しゅくはい

の時來れりと」 夜を徹して祝杯を擧けた。

末始鈕選新

25

朝にする鹿々 の建白。その他、八郎の——は、悉く、の志によるが
、

今度の浪士募集なども、素より人知れぬ深謀があるのである。

(一) 奈良原喜八郎 は後の男、明治十年頃には新橋煉瓦地の第一の遊び手であった。者な

どは「盃をやらう」といつて呉れる盃の中には、酒の底に二分金がちらくしてゐる。新橋花

月の眞黒い子守が気に入ってこれを手に入れたりした。如何にも武士らしい剛放な整ったとこ

ろがあった。新橋花月平岡得甫翁談)

24

記末始粗選新

ぐわんねん

そう

ぐっつ

きやうた ながかはちっすけ

づ

じにゆうなかやまた、よしちうじやうと

しう

おい

元年の十一月には、京に田中河内介を訪ね、侍従中山忠愛中將に説いて「九州に於て

そんの

王攘夷の義徒を募る」手書を書かせ、直ちに九州へ渡って、煽りに策動した。

二年四月十三日、有名なる伏見の寺町屋事件の黒幕はこの八郎で、これは実に失踪

じへん

はんし ありま しん

いか

いくめい

だっしゅつ

した。この事といふのは、薩摩藩士有馬新七以下六十名かゞ、藩邸を脱出して、

この寺町屋に食し、ちに京都につて、九條縣白及び所司代湿弁を襲撃し、下

じやうる

ちょくちゃう

たま

にして、謎をはらんといふのである。

かくご

*

危機一髪に際し、藩主だ光の命によって、豪な奈良喜八郎(1) 下八名が、恕

なら はら

+4

だか

どうかになした

死の覺悟でこの席に行き、奈良原は眞つ裸になつて、一同の刀の下に、その中止を

うし

かくたう

たがひ ししゃう み

こと いうめい はよし

した。格闘あつて、互に死傷を見た事は有名な話。

.記末始粗選新

23

はくふ

もつて来いの腕があつた。その頃は牢に入つてゐたが、この仕事をやるために、され

て出て来たものである。

かは

らう

じやうるうはくろんしや

たいぎ

本來清河八郎は、攘夷討幕論者である。この大義を爲すためには、先づ飴から犠牲に

くっ

ならなくてはいけないといふ覺悟はあつた。

とうほんせいそう

じつ

りよかう

かくはうめん

ぶんきうぐわんねんいらい

東奔西走、實によく旅行をつけて、各方面にこの議論を説き廻り、文久元年以來は

こいり

ころ

幕府の偵吏がその周園につきまとった。その頃よく、

『一度他出すれば、首が一城づい詰

などいつてゐたものである。

22

末始瓻選訢

かは

きょかは

にち

きうそく

くわんさいくわんとう

それにも係らず、清河は一日の休息もなく闘西闘東から、陸奥の地方迄足跡到らざ

むつ

ちはうまでそくせさいた

ほど

くわつぞう

もうしばしふ

けんさく

ききだ

ちょくせつま

とくこう たてま

ない程に活動した。 しかもこの浪士募集の献策に先立つて、直接松平春嶽侯に奉

きふむ

あく

じゃうる

たいしや

てんか

えいさい

すういく

こと

ある。

どうし

つた「急務三策」は、一に攘夷、二に大敵、三に天下の英才を教育する事ではあつたが

んてつ

あらかじ

さくまう

たいしや

たうじ らうや

すべて自己の目的を貫徹せんとする豫めの策謀で、大赦によつて、當時牢屋に入つて

ひまだ

ある同志を出したかった事もあるが、それよりは、自分が雨で人を斬ってその罪が

あるので、これによつて読天白になって、嘘々と活動したかったのが大きな理由で

はい

らうし しみ

だんど

どうし

いしきりうざう

いけだ とくだらう

浪士募集の段取りについては、すべて八郎の策に出で、同志、石坂
、池田徳太郎

りうめい

くわんとう

かふしう

はうん

ねっしん

いうてい

ことろ

いしさか

ひこね

らうにん

の雨名が、關東からずつと甲州の方面にかけ熱心に遊説を試みた。
石坂は彦根の浪人、

いけだ

けいしう

ふたり

きも

たま

ふと

きりやく

じんぶつ

こと

池田は藝州の浪人だが、二人とも膽つ玉の太い機略のすぐれた人物で、こういふ事には

末始組選新

21

四八郎の腹の中

く

あひだ

きよかは くらう

なみひととほ

までも

せんねん

ここ迄持つて来る間の、 清河の苦労はまた並一通りのものではなかつた。前年、すな

ぶんきうぐわんねん

ぐわつ

りやうごくまん ろう しよぐわくわいな

いうしか くわいがふ

はち、文久元年の五月二十日、兩國萬八樓で書畫會に名を贈りて、水戸の有志家と合

みち にほんばしじんう ちんちやうがいじゃう こい

ちゃうにん ぶれいう

しての戻り道、日本橋甚右衛門町の街上で、故意に喧嘩をつた町人を無打ちにした。

何しろ蔵田お玉ヶ浦千葉周作の門人で、腕は利くし、酒に酔ってもゐたので、一万

ぬきう

すばら

かたないきほ

くび

せとものや

さつと抜打ちに喰はせた。この時つた刀の勢ひで、その首がすぐ前の瀬戸物屋の店へ

らう

はな

飛込んで行つたといふことを、一所に戻った山岡鉄太郎が話してみた。(現存してゐる餓

舟長女松子刀自談)その勧めに、つまりその時は公儀お尋ね者の身の上であつた。

「みせ

20

末始粗選新

に截意をし、十二月十九日に、総介にして、正式に浪士募集の沙汰を下した。

*

此度御政事向追々御改革被遊候に付ては、浪士の内、有志の御集相成、一方の御

固め可被仰付、尤篤と探索を遂げ、一旦の過失有之候か又は遊惰に耽候共、改心

の上忠報国の志厚輩、 既往の儀は格の謎を以て御発しの儀も可有之候間、共

心得にて名前取調、早々可申間候事

當時清河八郎は水戸にかくれてゐたが、形勢斯くの如しと聞いて、すでに十日に江戸

まかてつたらう

きぐう

へ入り、かねて懇意な山時鐵太郎のところに寄寓してゐた。

記末始粗選新

19

これを表向き込んで行ったのは、上総介忠敏である。

かづきのすけ

じぶん

くふうぶした けんじゅ うじゆかた つと

けんかく

まへ

上総介は、その時分、幕府講武所の剣術教授方を勤めて、 剣客として名前を知られて

あたが、或る日突然たる供廻りで登城した。この人は徳川家康の六男松平忠輝八代

しろ

の後で、芝居でやる馬斬り長七郎の血統、デは、本来徳川の親であるから、別に極

りやうち

すてぶち

みづ

こく

まつた領地もなく、捨扶持として僅かに三百石を貰つてゐるに過ぎないけれども、いざ

と云へば御譜代の大名、上席につく事も出来る身分である。

かづきのすけ

とじゃう。

上総介が登城して、浪士募集の建策を論じたうしろにあつて呪みに糸を引いてゐるの

は内清川村の郷士清河八郎は明(ME)のぎょろりとした耐な人物、丈はすら

武雲も出来たが學間も深かかつた。私も老中の板倉風防もよくその

は知つてゐる。要するに「浪士は集めて置いて取締るに限る」といふので、直ちにこれ

こと

ןו

武文で産出人たへらしを組士浪ろた母の組選新郎八河清

とちたかたに策士策 てつ從く多策術かさ些かたれぐすに道兩

たつな

18

末始組選新

三清河八郎策動す

文久二年の暮にまつて、幕府は忠報を名として、かに諸の浪士を募集した。

ころ

ちうしん

つん らうにん はつこはなはだ

こ

な

”!

この頃、京都を中心に攘夷論の浪人の跋扈しく、何時何處で何にをやり出すかわから

きんのう

めり

わ

じょう

ない。勤王もあれば佐幕もある。 どつちでもいがこの騒ぎのごたくに乗じて何にか

じつ

やらうといふやうなものがある。實に手がつけられなかった。

じっかう

ろん

これはうつかりしてみては議論ばかりでない、行するものが出て来る、何んとかしな

からうち くる

らうし しふ

こと けんさく

くてはならないと、閣老達が苦しみ抜いてゐるところへ「浪士募集」といふ事を献策した

ふ

せいじ そうきい

ほんたう たいらうしよく

ちゃん まっだひらしゅんがくこう

ものがある。幕府の政事總裁で云は本當の大老職にあるのが、越前の松平春嶽侯、

末始組選新

17

らう

さい ぞんめい きんそん

してい あつ

いま

けんき

かゆいてんねんり しんりう

をし

勇五郎は七十九歳で存命。近村の子弟を集めて未だに元氣に家藝天然理心流をへて

ゐる。

*

しんじゆく おひわけ

けいわうでんしゃ

ひた

ていうは

新宿の追分から京王電車へのつて、ブラットホームも何にもない飛田給の停留場へ

りて、右へどん(だって行く。武蔵野らしい燃ポ欄があつたり、桑畑があつたりして

길기

みら ぱんち

へん

ばん

こんどう

千里の道、番地は千九百十五番だが、この邊で「創へる近藤さん」と聞けばすぐ

わかる。

ふちう

けいさつ

お

のぞみ

あびだしそくしんきちし

をし

男五郎もやるし、府中の警察へ勤めてる翁の後添との間の子息新吉氏も戦へてゐる。

を

いく

いきみるぶつ おま

そぼく あいよう

かたなかけ

た。惜しいことには、この家には勇の遺物は餘り無い。素朴な愛用の刀架が一つ、

ほか

しんりう めんきょじゅう ふたまきみ まき

砲の弾丸入れが一つ、外に天然理心流の発許狀が二巻三巻ある。

奥五郎翁の家 勇の妻つれ女、娘瓊子と共に明治卅六年五十五歳で

沒する迄この家に住んだ。 いま勇五郎翁がこの座敷の横手に道場な

へて家の天然理心流三多摩青年のために敬へてゐる。

近藤勇五郎翁 男の娘瓊子の婿となつて、その家をたてた。勇刑死

の時は十八歳で、武州板橋の原で、義父の首を目撃した。當年七

十九歳。

かたなち

くさ

のち

『刀が血のために腐ったよ」

ちょ

とき はなし

と、後に日野家に立寄つた時の話であつた。

でん

いしだ さんかく

じゃうびゃく

たいし

かな

しょち

こと

家傳「石田散薬」は、新選組の常備薬として、剛士は必ずこれを所持する事となっ

てゐた。

*

いきみんけ みやかはけ

あに けっとう

つ

こんどうけ

いざみ つま

あひだ

勇の本家宮川家は、兄の血統をついでいてゐるが、近藤家は、男と妻つねとの間に

でき

ひとりむすめ

ちゃうけいおと らう じなんゆう

たまこ

らう

出来た一人娘の瓊子に、長兄音五郎の次男勇五郎を迎へて養子とし、この仲に勇吉とい

ゆうし

なか ゆうきち

せんきう せんし

たまこ

さい わかに

じつじやう

ふ子があつたが、日露戦争で戦死をし、瓊子もまた廿五蔵で天死をした め、事上の

いさみ けつとう た

男の血統は超えてゐる。

男の妻つねは、八王子の千人同心、松井八十五郎の娘である。男の死後明治卅六年、五

十五蔵しい日を幾つて亡くなった。

おも

のうか

かでん

いしだ さんやく

ほねつぎうちみ

まんざい のうか

思ふにも任せず、家傳の「石田散樂」といふ骨接打身の妙薬をもつては、近在の農家か

ぎやうしやう

4

けんだう

ねっしん

たいへん

農家へと、行商をして歩いた。しかし剣道に對する熱心といふものは大變で、何

虎へ行くにもきつと、面小手を結びつけて、武州から甲州へかけ、道場とい

ふ道場へはらず立寄って、絆を低くして、手二手の指を乞ふたものであつた。

忙しろ、女のやうな物しいで、しかも後年はなか奪大な態度になったが、そ

の頃は如才ない愛嬌者だつたので、何度でも親切に扱ってくれた。

しんせんぐみ

きやうらくち

まま

うはさむら

こ

新選組として、京洛を血だらけにして廻つてゐる時に、この噂が村へ聞えると、

やま

をとこ

「あんな優しい男がなァ」

と、信じない者さへあつたのである。歳三は、最鋭をとつて立てば、釜のやうに

ゆうまうけんご

とつ

きやうとざいにんちう

なつたもので、勇猛言語に絶し、京都在任中、

父母には早く死別したので、に、生活のためではなかつたが、十一の時、江戸へ出

したや うへの ひろこうち

こども

まつざかや でつち 笑うこう

こと

ねん

て、下谷上野廣小路のいとう松坂屋へ丁稚奉公をした事がある。しかし一年とはゐず、

ちよらう

十一の子供でありながら、九里の夜道をたつた人で、間もなく、桜へ戻って粘った。

それからは姉の縁家、日野の佐藤彦五郎の宅にゐて、名主役の使ひ歩きなどしてゐ

たが、再び歳を過ぎてから江戸へ奉公に出て、今度は奉公先きの女中と關係して失敗

した。この一件を彦五郎に知られ、 さんぐられて、自分でまたてくと出かけて

行って、奴どの事件は奇麗に解決をつけて蹴った。

じぶん

武道を””して、それに執心し出したのは、その後の事であるが、食器の身の上で、

で

しっぽい

末始組選新

13

ま

し、村の素人義太夫でなか上手に語った。大作は谷村の家に養子となり者

りやうじゅん

かいぬい

のち

わうじ

うっ

さか

を學んで良順と改名し、後八王子の町に移って盛つてゐた。

ひの

さとうひこ らう えんづ

あひだ うま

けんのすけとしのぶ

ひの

おのぶが、 野の佐藤彦五郎に縁付いて、その間に生れたのが源之助俊宣。いま日野

いうびんきょくちゃう

とうじんし

郵便局長をやつてゐる佐藤仁氏のお父さんがこの人で、ことしは七十九歳で、存命で

ある。

歳三には妻も子もなかつたので、その後はないが、家を艦いだ長兄喜六の子が、土

だといつて、石田村に、八十四歳で存命である。中風をわづらつてゐられる。

土方歳三は、五尺の上に五ずは確かにあつた。ひどく苑のぽいのやうにいふが、 勇

と並ぶとつぶしだけは、かつたのである。なか美男子で、解報であった。

しうすけ

ころ うしごめ

まちかうらいやしき だうぢゃう

躍してこれを江戸の道場につれて行った。周はその頃、牛込十騎町高麗屋敷に道場が

もんてい

た

つき うら なか

いじゃう

みなみにま

きたた

あり、ここでも門弟はとり立てたが、月の中、半ば以上は、南多摩、北多摩、あの邊へ

へん

でけいこ

つひや

かけての出稽古に費した。

＊

同じ多摩の日野宿の名主で、佐藤彦五郎俊正といふのがある。これも同じく自宅に道

ちゃうも

しうすけ

けいこ

しぜんいきみ

した

いきみ

きしゆく

場を持つて周助の稽古を受けたが、自然勇とも親しくなり、男ばこ」でこの家に寄宿し

ひぢかたとし

てゐる土方歳三を知るやうになつた。

＊

三はこの日野の石田の大きな百姓で、五人兄弟の一番末つである。長兄が喜六

ためじらう

よく

そんなひとり

けいためじらう めくら

とし

爲次郎、大作、女が一人あつておのぶ、その下が歳三。 兄爲次郎は盲目で、石翠と號

記末始粗選新

11

ニ 勇の家、歳三の家

まど

もともと男の家は、武州調布町上石原の百姓で、伊豆韮山の代官江川太郎左衛門の支

煕である。父を宮郎といつたが、この人はかねてから久夫(ひさつぐ)と呼ばせ

きぐら

てゐた程で、何處か氣位が高く、弓はなかなかよく引いた。

ちやうなん おと らう

なんくめじ らう いきみ

なん

いさみ しうすけ

うし

長男は音五郎、大男条文郎、男はその三男である。男が周助の養子となったのは十七

ある

みやかはとうた なの

よび

まさよし

の時で、それ迄は、宮川藤太と名乗り呼名を昌宜といつた。

父の欠郎が、自宅に道場をこしらへて、月三郎の地方に時稽古に來る周脇邦

時を迎くて、達に戦へてもらつてゐる中に、周助が男の非んな太刀筋に目をつけ、

る入抽に

ゐる。

れ斗殘の

ろに

はて架

う打ゐ

に粉る故

ななも鄉

つどの

の刀架 故鄉の家

。

てる

の生家

らぶきでぶ

五てぇん

五郎翁である。

てゐるのが勇

る。庭に立っ

古い家であ

の系一の米宮豚があら今多勇

住をつ本川をつら西は摩の

居つを家郎家家づうへ京郡生

がい距ね氏 業いか入王調家

あだてつの勇とてつ線布遠

る勇い血のしゐて飛村景

五勇で統次てるの半田上

木里給石武

が兄る

郎の

翁家道こ久る

林もか原州

10

末始組選新

10

翕談)

じつ するど

たちあひ

かけ

とくちやう

るので、質に鋭いものであつた。立會の掛聲としては特徴のある人であつた。 (佐藤俊宜

ひと

末始粗選新

6

*

他流試合でも来ると、その場に居合せたこんな人達が、誰でもどん道場へ出て棍

て

手になる。

男は他流試合の浪人などは、殊に手厚くもてなして踪した。中には無作法なものも

はら

やうず

けんじゅつ

*

たい

つて來たが、いつもにこくして腹を立てる樣子もなかつた。劍術としては大したもの

ほね す

ではなかったが、その度胸つのつたことには、誰も彼も一目おいた
。

日頃の撼拐や、雜談の時には、極くそくい聲であるが、いざ遊館となると、その

かける

こと

おひて

こる

掛聲の大きく烈しい事は、相手の腹へぴーいん)と響いた。え」ツ、おうツといふ聲

つよ ひと たくさん

いきみ

てうしだか ほ

こ

はら

で

で、太い強い人は澤山あるが、勇のは、調子高い細い聲で、しかもそれが腹の底から出

あ

沖田總司筆 勇の門から出たが劍法はむしろ師匠の勇以上で、その太刀筋は殆んど天才的名手

であつた。白河の藩士だが、ひどく肺ふわづらつてゐた。

末始選新

宜翁談)

しつ

よりはずつと恐ろしがつてゐた。

多摩の方のは戦といつても武士ではなく、多くは百姓ので、これが道場へ来る

時には、心をさしてを着て来る。みんな二里三里の道は、氣で通った。(佐藤俊

男の道場には、他流ではあるが、松を脱して江戸にぶらくしてゐる永倉新八も

よく来たし、伊像松山の脱落者で稲田賢蔵院の鎗をつかった原田左之助も入りびたつて

ながくら しんだうむ ねんり

をかだ

まつ もんじん

うで た

ゐた。永倉は神道無念流の岡田十松の門人ですばらしく腕が立った。

やまみけいすけ とものぶ

ぶし

せんだいだつはんしゃ

こんごう

たうちゃう たちあひ

いさみ

山南敬助(知信)は仙台の脱藩者で、はじめ近藤の道場へ立合に来て、 勇のために竹刀

だっちゃうもんじん

もの

をはぢかれて、それから、この道場の門人になつた。物にこだはらないあつさりした性

質の武士であつた。

しなへ

肥末始祖選新

7

八王子、府中、上石原から

府中、県から日野宿、小さな同流の道場がいくつもあつた。

男は、その頃はまだ無元服にしてゐたが、たぶさに結ってぶつさきの

酢や胴を作へ結びつけ、これをかついで、草鞋ばきであのをぐる

かはいろ

つ、そで

あき

なつ

嘘つて説

へて歩いたものである、夏などは、よく樺色がかつた筒袖の腕のぶつさきを着て来た。

ちりく照らされて飛びっしょりになってやって来た。

を着て、

彻

道場のある家へ先づ草鮭をぬいで、そこで四日なり五日なり説へて、また沢の道場

いきみ

へ行く。男の来ない時には、きつと代りに深田総司がやって来た。しかしこの人は、自

ふん

でき

し

かた らんはう

たんき

もんていたち

いきみ

分の出来る割 教へ方が亂暴で、お負けになか短氣であつたから、門弟達は、

末始粗選新

こうえい

いさみ さんぱふてんねんりし

をほとほみ ひと こんどう

らすけがみち

勇の剣法天然理心流は、遠江の人、近藤内蔵之助長裕からはじまつてゐる。この人は

かとりか しまりゅうじんぐういの

さくい

さと

てんしんしやうでんしんだうりそいひしのちやうるさいいへなほ

千葉の香取鹿島兩神宮につて極意を悟つたといふ天真正傳神道流祖飯長威齋家直の

こち

後裔だといふ事で、 江戸へ道場を開いた。

ひと

四人中に抜群の腕を示したのが武州多摩郡が

村戸の人で三野昌、これが、子

ども

こんどうながみち やさし

供のない近藤長裕の養子となって理心流二代目の

家。

のりゆき

またこ

しやうで

しゅんざいしまざましうすけくにたけやうし

けんとう

くにたけ

くにたけ

昌に双子なく、百姓の出ではあるが門弟中の俊材島崎周助武を養子して劔能を譲

おな みなみだまきからひらを やま しゅつしん すなはいきみゃうふ

つた。邦武は、同じ南多摩境村小山の出身で、即ち勇の義父である
。

邦武にまた子がなく、男をへて四代の宗家としただが、昌邦武と続いて二代

八王寺を中心に、あの途には、しば倣を纏いで通り、従って、男の様になって

たまぐん

さんざい

もんてい

にん

あま

も、多摩郡に散在した門弟は、三百人に餘つた。

末始粗選新

5

*

俊宜翁談)

口の大きい眉の逆まつた艦ではあるが、いつもにこしてゐる上に、べだき

かん

ものやき

な笑窪があくので、逢った感じは物優しいい」ところがあつた。(府中日野町七十九才佐藤

じぶん こぶし くち なか じいう

よく自分の拳を口の中へ自由に出し入れしては、

『加藤清正は、口が大きくて、恰度自分のやうに目にしたといふが、自分も加

藤のやうに心堰をしたいものだ』

と笑ひながら云つた。

ちょっとみ

こぶしはい

ལམ

くち

しかし、一寸見たところ、拳が入る程の大きな口には見えなかった。(明治廿三年三月、

新選組伍長島田魁翁遺談、常時六十四歳で存命してゐた。

近藤勇 慶應二年乃至三年の頃京都に於ける撮影といはれる。年卅三四。京へ上る時には講武所

風に細く月代を剃つてゐたが、この頃は髪結び。口が大きくて拳がやす 一入つたといふ。

肥米始粗選新

じゆくとう

いさみ し はんだい

うしうしらかは だつはん

Au

おすた そうじ かねよし

塾頭で、男の師範代をするのが、奥州白河を脱藩して来てゐる沖田総司(房良)、まだ

さい

じゃくはい

けんばふ

てんさいてき めいしゆ

じつ みごと

ひち

歳になるかならぬの若輩だが、法は天才的の名手で、罠に実なものであった。

かたとし

よしとよ

みのうへ

かづしけ

うだうちゃう はへぬ

はしうさく けんぶくわん

方歳三(豊)だの井上源三郎(一重)だのといふ當道場の生抜きに、千葉周作の玄武館で

ほくしん たうう

とうだうへいすけ

な

めんきょ

やまなみけいすけ

北辰一刀流の目録をもらった藤堂平助や、同じ千葉の免許をとつた山南敬助なども、こ

たうちやう

しなへ

こども あつか

ほんき

たち

の道場へ来てみるが、みんな竹刀をもつては小兒扱びにされた。恐らくは、本氣で立會

ししゃう いきみ

こと

つたら師匠の勇もやられる事だらうとみんないつてゐた。(永倉新八翁遺談)

男は、道場へ出ての立館には、定まつて下屈をとった。少し反り加減で、腰をぐつ

めいじん

こわざ

だ

した。

けつ

と出した構えである。決して名人ではなかつたが、こせとした小業のない、がつしり

した手堅い法であった。びーんと、うまく小手へぴると、大概の相手は佐を取

●記末始粗選新

3

三井文庫

I

近藤勇の道場

こんどういさみ だうちやう

こいしかはこぴなにやなぎちやう さか

やうふ

うすけくにたけ

近藤勇の道場は、小石川小日向柳町の坂の上にあつた。 養父の周助邦武は、なかなか

使ったんだが、すでに七十に近い老器で、名前も周齋と改め、デは大先生として、時

けいこ

み

で

て

こと

だうちゃ わか もの

くらる

みづ

しなへ

たま道場へ若い者の稽古を見に出る位のもので、自から竹刀を手にするやうな事は無く

なつてゐた。

のうぎ

てんねんり しんのう

ぶしう

たま

そだ

けんばふ

えど

流儀は天然理心流。 武州三多摩に育つた剣法で、江戸には餘りはやらなかったが、そ

だうちゃう

まいにち

めい

ぬい もんてい けいこ

れでもこの道場には、毎日五十名から六十名の門弟が稽古にやつた来る。

新進

選

始

末

記

8

桂小五郎

伊藤甲子太郎の筆蹟

徳川慶喜

六

近藤勇の蹟

……

1七 '坂本龍馬、中岡慎太郎

八 後藤 象 二 郎

……

1九 永井玄蕃頭、榎本武揚

……

……

……

……

……

|||

6 江戸城西丸大手、同大手門内、同半藏御門

近藤勇最後の奮戦場甲州柏尾

…..

1111

甲

證

近藤土方の墓、殉節兩雄の碑

……

……

……

……

(目

男の刀架、 勇の生家、 勇の生家遠景

次

.....

......

終)

11EK

壽

四

四

四六

四

7

*

目

男の刀架、 勇の生家、 勇の生家遠景

近藤勇五郎翁、勇五郎の家

……

清河八郎

……

八 七六 五

六 老中板倉周防守、瞯 沼 伊織

….

山岡鐵太郎

……

……

……

清河八郎の筆蹟、清河八郎と妾阿蓮の墓

京都守護職當時の松平容保侯

……

乾

10.

土方歳三、記念の錬金

……

11

土方歳三の筆蹟

……

……

……

ミニ池田屋事變の感狀、勇門人の神文帳

……

……

…

……

……

……

……

……

……

……

四

10k

二六

……

巛

……

……

1311

贤

一方

*

*

目

五七 京を去る

进入

墨染の難

五九

伏見鳥羽

KO

江戸へ帰る

六一 甲州鎮 撫

六二 金銭

金銭出入帳

大三

下總流山

六四 最後の

日

大主

大夫

鴨

宮

の

古

墓灣

……

...

......

......

......

......

......

......

......

......

.....

......

......

......

......

......

......

......

......

......

....

……

……

……

……

……

……

…….

新選組始末記挿入寫眞

……

……

……

……

……

……

……

.

……

MKO

……

……

……

……

三六

三元五

001

10

四六

川

……

电子

……

……

……

!!

目

5一

四 五

新

本

營

四六 勇の風采

隊士ぞくく斃る

四八 谷萬太郎の斬込

四九 四條橋畔……

五

長 州 下 b

五

制札事件

五二 御陵衛士

五三 佐野の憤死

五四 油小路の屍

五五 龍 馬 暗 殺

五六

天 滿屋 騷動

……

……

…∷

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

1100

110:11

二六五

1140

五

天

回到

三月

三东

川中

三

堂々芹澤の態度

土方記念の鉢巻

長州の間者

芹澤暗殺さる

池田屋事變

軍中法度書

三九

六角獄の悲劇

○

柴司の切腹

勇江戸入

111

伊藤 甲子 太郎

武道師範方

四 山南敬助の最後

……

……

……

……

……

……

….

…..

……

……

……

……

……

……

……

……

…

……

……

….

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

......

191

1凹川

12

1日

1国

11111

1111

11110

110

136

1

110

3

*

DITE

天麻

賴

……

討組

MO

大和屋燒討

排

禁門の大政變

三二 赤地 !!「誠」の 隊旗

……

……

……

……

……

……

…..

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

101

10+

111

11

119

1110

110

......

111k

......

11110

......

ingl

110

K

2

*

九

壬生の誉

.....

......

憤然袂をわかつた勇の一味

111

[1

01

茜の陣羽織

......

......

押借り

風邪加減の八郎

......

川

】回

屋

赤羽橋の暗殺

……

石坂周造

……

六

首をかくす山岡鐵舟

.....

IP 粗屋敷を包圍

一八

新

徵

組

一九 天敵を討たる

Oli

敵討異説

......

......

......

......

......

......

......

......

....

......

......

......

......

......

......

......

......

......

....

......

……

……

……

……

……

……

……

……

中

♦

八七

九六

BO

五

录

中

次

八

六 五

新選組始末記

目次

......

......

......

......

.....

......

......

......

......

11

K

111

11111 -

11K

1110

=

寛

昭和三年七月廿二日

つて、私の始末記は、飽迄も私の始末記であり、全く前者とは同名異本である。

のがある。時に史料の参考とせられるが私はこの書に信じ得られぬ多數の點を見る。

伊東甲子太郎武明は「きね」と読むのは普通だが、 篠原翁の遺文の中に特に「かし」と

振假名をしたものがあるので、私は「かし」と読むことにしてゐる。

「永倉新八」の永にも「長」の字を用ひたのがあり「島田魁」の魁に「甲斐」を書いてあ

るものが相當にある。 中西登を昇と書き、内海二郎を次郎と書く位の事は、本人自身が

平氣でやつてゐるのだから、どうも甚だ困らせられる。

男が池田屋で使った「虎徹」の話。 佐久間象山の一子で、敵を討つために勝安房守が新

選組に依賴してあった三浦啓之助の話。 篠崎愼八郎が後ちに佐原八郎となつて暗殺され

る話。 吉村貫一郎が進退立場に困って切腹する話など、書き去り書き来れば、殆んど盡

くるところを知らない。

世上すでに明治廿二年七月九日に脱稿したといふ西村氏の「新選組始末記」なるも

ಔ

近藤勇は「いさみ」と読む。これは「いさむ」といふのは間違つてゐる。名の「昌宜」

も昌宣と書いたり、板橋にある永倉翁の建てた碑などはこれを上下にして宜昌などし

てゐるが、昌宜が正しい。剣法の神文帳などにも宜の字を書いてあるが、あれは男の眞

筆ではなく筆生の書き違ひである。

隊士の名前にも、昔は同じたが全く別な字を用ひられてゐるものが多く、時に別人かと

さへ思はせる。鈴木三樹三郎の如き「三木」と書いたものが相當に多いが、これは後ち

に三樹三郎氏が、篠原泰之進の蓄像に「末弟三樹三郎」と署名したものを見たので、私

は三樹を用ひた。

便に嘗めて、自分の書きやすい便利な字を書いたやうなところがある。

2

T

三井文庫

歴史を書くつもりなどはない。たゞ新選組に就ての說漫談或は史實を、極くこだはら

ない氣持で纏めたに過ぎない。

しかし近藤勇といふ人物には、ちょっと面白いところがあると思つた。SA、わるいは

別として、本償に憎めたり、本當に泣いてやつたりの出来る人間である。

ことしの春、私は私の仕事の上で「戊辰物語」といふ書の一部分を書いた。その時にも

矢張り、この新選組の話だけは、本氣になつて書けたものである。

新選組の「選」の字が、選を用ふべきか、撰を用ふべきかについては、私はどちらでも

と解釋した。肝心の近藤さへが、時に選を用ひ、時に撰を用ひてゐる。組の総代と

して公式に會津侯へ差出した書面には撰の字を用ひてあるのが多いが、その會津侯が組

へ賜る諸書状は、大てい選の字が使ってある。この時代のこうした生活の人達はたゞ音

東103672

3379

1733

新選組始末記

子母澤寛著 萬里閣書房

新選組始末記

子母澤寛著 萬里閣書房

|文庫|

UNIVERSIT

3

OF THE

SEAL

HER

1868

LIGH

FORNIA

THE LIBRARY

OF

HHH